内藤鳴雪研究

―子規と歩んだ俳句活動―

同志社女子大学大学院文学研究科博士課程（後期）
学籍番号９Ｎ１１１０１　黒川悦子

A Study on Meisetsu naito:

His haiku activities with Shiki

KUROKAWA Etsuko

目次

序論　5
研究史　6
第一部　子規と歩んだ鳴雪の俳句活動前期　9
第一章　鳴雪と子規　9
第一節　常盤会　9
⑴　常盤会創設　9
⑵　常盤会寄宿舎開設　10
⑶　言志会　10
第二節　新聞「日本」　14
⑴　新聞「日本」に初登場の鳴雪　15
⑵　運座の隆盛　17
⑶　新聞「日本」の俳句欄　19
第三節　新聞「小日本」　23
⑴　新聞「小日本」俳句応募欄　25
⑵　鳴雪の「老梅居漫筆」　26
第四節　子規の鳴雪句評価　29
⑴　子規の「文学」評　29
⑵　子規の俳句選集からみた鳴雪句の評価　30
第二章　鳴雪と凡兆　35
第一節　明治時代に刊行された『猿蓑』　35
⑴　『猿蓑』の注釈書　36
⑵　『芭蕉全集』の中の「猿蓑」　37
第二節　碧梧桐の『俳句評釈』　38
⑴　子規の「俳句評釈を読む」　39
⑵　鳴雪の「碧子の俳句評釈」　41
第三節　鳴雪句の『猿蓑』からの影響　43
⑴　『猿蓑』に出合う前後の鳴雪　43
⑵　子規句の『猿蓑』からの影響　46

⑶　鳴雪の凡兆句評　52
第三章　鳴雪と蕪村　57
第一節　『蕪村句集』の探索　57
⑴　『蕪村句集』発見者への懸賞　58
⑵　霽月の『蕪村句集』借用　60
⑶　『蕪村句集』上下揃う　62
第二節　鳴雪の蕪村句評価　66
⑴　鳴雪の俳句評価の基準　66
⑵　明治二十五年・二十六年の子規の蕪村句評価　68
⑶　『蕪村句集』探索の評判　70
第三節　鳴雪と子規の蕪村句評価　73
⑴　地図的観念と絵画的観念　73
⑵　王子紀行　74
⑶　鳴雪と子規の句評合戦　77
第二部　子規と歩んだ鳴雪の俳句活動後期　79
第一章　新旧交代　79
第一節　鳴雪と虚子　80
⑴　鳴雪と虚子の出会い　80
⑵　新調の俳句　82
⑶　新調の特徴　84
第二節　長老と若者　87
⑴　鳴雪の活動　87
⑵　虚子の活動　89
⑶　鳴雪の休業　90
第二章　鳴雪と松山版「ほとゝぎす」　93
第一節　松山版「ほとゝぎす」　93
⑴　「ほとゝぎす」創刊　94
⑵　「ほとゝぎす」第一号　96
⑶　「ほとゝぎす」第四号　97
第二節　明治三十年の「ほとゝぎす」消息欄の鳴雪　100

⑴　「ほとゝぎす」第四号から第十二号　100
⑵　明治三十年の新聞「日本」俳句欄　103
⑶　鳴雪の俳句会復帰　105
第三節　東京版「ホトトギス」　107
⑴　「ホトトギス」東遷　108
⑵　「ホトトギス」第二巻第一号　110
⑶　「ホトトギス」第六巻第一号　112
第三章　鳴雪と「蕪村句集講義」　114
第一節　『蕪村句集』　114
⑴　「蕪村句集講義」とは　114
⑵　「蕪村句集講義」のテキスト　117
第二節　「蕪村句集講義」の記録の文体　118
⑴　第一回・二回・第三回「蕪村句集講義」　120
⑵　「めさまし草」の「三人冗語」　122
⑶　虚子の言文一致体　124
第三節　「蕪村句集講義」冬の部　126
⑴　鳴雪と子規の相違　127
⑵　子規の「蕪村句集講義」　129
⑶　「蕪村句集講義」の発言と記録　130
第三部　子規没後の鳴雪の俳句活動　131
第一章　鳴雪と「文庫」　131
第一節　「文庫」の俳句欄　131
⑴　「文庫」の歴史　132
⑵　「文庫」の俳句欄の選者　133
⑶　「文庫」の松風会　135
第二節　鳴雪の「文庫」俳句欄の選評　136
⑴　「文庫」第十五巻第三号　137
⑵　鳴雪の「文庫」俳句欄の選句基準　139
⑶　鳴雪の『俳句選』・『新俳句選』刊行　142
第三節　「文庫」の終刊　145

⑴　編集依頼の広告　145
⑵　俳句専門雑誌となる「文庫」　147
⑶　「文庫俳壇」の行方　151
第二章　鳴雪と「俳諧草紙」　153
第一節　「俳諧草紙」での活動　153
⑴　「俳諧草紙」創刊号　154
⑵　鳴雪の俳論・俳話　155
第二節　「俳諧草紙」の中の虚子の批評　155
⑴　虚子の「談理と句作の空間充填策」　156
⑵　鳴雪の「虚子氏の説話に就て」　158
⑶　俳壇批評　160
第三章　鳴雪と「南柯」　163
第一節　南柯吟社　163
⑴　南柯吟社の創設　164
⑵　「南柯」の創刊　165
⑶　「南柯」の俳句　166
第二節「南柯」での俳句活動　168
⑴　「南柯講義」　169
⑵　「鳴雪俳句評釈」　171
⑶　鳴雪辞世の句　172
結論　175
資料
表1　177
表2　178
「老梅居漫筆」校異　179
参考文献　189
年表（別紙）

序論

内藤鳴雪は弘化四（一八四七）年四月、正岡子規は慶応三（一八六七）年九月に生まれた。父はともに松山藩士であるが、二人の年齢差は二十歳もある。従って鳴雪は幕末・明治維新を通り抜け、子規は明治時代の発展とともに成長していったといえる。日本の伝統文化と西洋文化との対立構造の中で自身の考えを深めていったといえるだろう。

鳴雪が本格的に俳句を始めるようになったのは明治二十五（一八九二）年、四十五歳のときである。これは、松山出身子弟の東京宿舎である常盤会寄宿舎の監督をしていた鳴雪が、舎生の子規に俳句の指導を受けるようになったのが契機となっている。爾来、大正十五（一九二六）年二月、八十歳で没するまで鳴雪の人生は常に俳句と共にあったと言っても過言ではない。

従来、子規の俳句革新運動の担い手としては、高浜虚子や河東碧梧桐が注目されてきた。鳴雪には多くの功績があるにもかかわらず、これまで鳴雪の果たした役割について言及されている研究は少ない。そこで、本研究の目的は、子規とともに歩んだ鳴雪の俳句活動を中心に調査研究し、鳴雪の果たした役割を検討することによって子規の俳句革新運動の新たな側面を明らかにすることである。本論は全体を三部にわけ、鳴雪の子規と歩んだ俳句活動を考察する。

第一部第一章では、鳴雪と子規の常盤会での出会いと鳴雪の俳句活動の始まりについて論じる。また、子規が新聞「日本」に入社して俳句活動の場を得た後の鳴雪の俳句活動を始める契機となった常盤会創設と寄宿舎開設、あるいは、寄宿舎の監督として子規と出会いの場の重要性を検証する。

また、今まであまり論じられていない新聞「小日本」での鳴雪の俳句活動に言及する。さらに、子規の鳴雪句評を中心にして鳴雪句の特徴を考察する。

第二章では、鳴雪が『猿蓑』の特に凡兆に注目して、凡兆の句から客観を学んだことを検証する。また、明治時代は『猿蓑』の刊行の少ないことを指摘し、鳴雪句と子規句の『猿蓑』の影響の有無を考察する。

第三章では、鳴雪の『蕪村句集』探索の過程と『蕪村句集』入手後の鳴雪について考察する。また、村上霽月宛て鳴雪書簡から窺える鳴雪の蕪村観を論じる。

第二部第一章では、鳴雪と虚子を中心に、長老と若者の世代交代を模索する鳴雪とその背景を検討する。さらに、一見俳事を絶ったかに見える鳴雪が、活動を続けていたことを

指摘する。

第二章では、鳴雪と松山版「ほとゝぎす」および東京版「ホトトギス」を検討する。「ほとゝぎす」創刊や「ホトトギス」東遷に関する先行研究は多くあるが、鳴雪にとっては重要事項であるため、先行研究を踏まえた上で鳴雪の活動を検討する。

第三章では、鳴雪と「蕪村句集講義」について考察する。蕪村は鳴雪や周辺の俳人にとって、新しい明治の俳句に資する存在である。また「蕪村句集講義」は毎月「ホトトギス」掲載のため記録されているが、記録者によって文体が異なる点を考察する。

第三部第一章では、鳴雪と「文庫」について検討する。「文庫」俳句欄の選者をつとめる鳴雪の評言の好評ぶりを論じ、鳴雪独自の漢語や口語体を自在に使った点について論じる。

第二章では、鳴雪は各俳誌との関係が深い。選者をつとめ、俳論俳話を多くの俳誌に掲載している。本項ではあまり言及されていない「俳諧草紙」などの俳誌にみられる鳴雪の俳句活動を検討する。

第三章では、鳴雪が死の直前まで寄稿していた俳誌「南柯」での活動を検討する。鳴雪最後の評論「鳴雪俳句評釈」は自句自解であり、読者も楽しみにしていたことと思われる。

以上のような考察を行い、これまであまり論じられてこなかった鳴雪が子規とともに歩んだ俳句活動を検討する。またこの研究によって、子規の俳句活動の新たな側面も明らかにしたい。

研究史

これまでの研究史の中で、内藤鳴雪研究が最も緻密に、また、総合的になされているのは、昭和女子大学近代文学研究所編『近代文学研究叢書２５』（昭和女子大学　昭和四十五年九月二十五日）といえる。そこでは鳴雪の生涯、著作年譜、業績、資料年表の四部に分けて論じられている。細かく資料一つ一つを調査されており大変参考になるが、本論で言及する新聞「小日本」や俳誌「南柯」「俳諧草紙」の調査は、それが稀覯本のためか全くなされておらず、触れられてもいない。また、新聞「日本」俳句欄掲載句も明治三十三年一月三日までしか掲げておらず、明治三十五年六月十七日、「次の葉へ渡らんとする毛虫かな」「絵馬堂の額縁を這ふ毛虫かな」などの資料が漏れている。

鳴雪の評伝及び研究で注目されるのは、畠中淳編著『内藤鳴雪』（松山子規会叢書第１７巻　松山子規会　昭和六十年十月十九日）と松井幸子氏「内藤鳴雪の半生」（俳句文学館紀要６・平成二年年十月）である。畠中氏は、鳴雪の略伝、鳴雪の「国民新聞」「文章世界」

『俳句のちか道』などから抜粋した資料紹介、松山版「ほとゝぎす」、東京版「ホトトギス」を中心にして鳴雪の文学観・俳句観の論述、各俳誌や新聞の鳴雪追悼記事の紹介など、広範に研究されていて参考にすべきことが多い。しかし、本論で取り上げる新聞「日本」や「小日本」、また「ホトトギス」以外の俳誌からの見解は含まれていない。

松井氏は、幕末から維新での松山藩とその時代に生きた鳴雪のこと、次に、版籍奉還後の藩政改革と鳴雪の携わった教育行政について、さらに、文部省役人としての鳴雪の教育行政について、最後に、文部省辞任後の常盤会寄宿舎監督の鳴雪について論じられている。また、文部省辞任の理由を政府が公布した官吏任用の規則制定からも考察されている。松井氏の論考は、鳴雪の携わった教育行政とその立場に焦点があるといえる。

鳴雪の評伝に関する資料は、鳴雪口述筆記の『鳴雪自叙伝』(岡村書店　大正十一年六月二十五日)があり、多くの研究に参照されている。『鳴雪自叙伝』は鳴雪自身が七十六歳までの生涯を語ったもので、自身のことのみならず江戸時代の武士の風俗習慣や幕末から明治にかけての動乱、あるいは明治・大正時代の豊かな見聞体験に言及しているところは高く評価されている(注1)。なお、本書は昭和五十一年十二月に青葉図書から復刻版が、平成十四年七月十六日に岩波書店から文庫本としてそれぞれ刊行されている。

鳴雪の俳句を鑑賞したものに、武田鶯塘編『鳴雪俳句研究』(交蘭社　昭和九年十二月五日)がある。これは鳴雪の俳句、新年十四句、春三十七句、夏三十四句、秋三十四句、冬十四句、合計百三十三句を八十人がそれぞれ数句ずつ解釈鑑賞をしたものである。鑑賞者の中には、鳴雪と一緒に活躍した五百木瓢亭や中村楽天、また、刊行当時隆盛となった女性俳人の阿部みどり女や長谷川かな女、など多彩な顔触れである(俳人が多い)。鳴雪と面識があり、鳴雪句の背景を知る人々の鑑賞には貴重な証言もある。例えば、翠葉(注2)の記述で鳴雪句「初冬の竹みどりなり詩仙堂」に対して、

> このお句、翁はまだ詩仙堂の実際を御存じなくてお作りになり、竹のみどりが気になつて選方ない、果して詩仙堂には竹があるかどうかと大分お気を揉まれたが、其後美しい竹藪のあることを慥められて安心されたときいて居ます。

と、鳴雪の句作過程を説いている。

研究論文では、和田茂樹氏の「子規と蕪村―霽月・鳴雪の『蕪村句集』発見をめぐって―」『正岡子規　資料と研究4』(愛媛大学子規研究会　昭和四十九年三月十九日)があげられる。和田氏の論述は、子規一派が蕪村句に注目した時期や『蕪村句集』の探求から発見、さらにその顛末を村上霽月宛て鳴雪書簡で検証されており、すぐれた鳴雪論といえる。

ただし、子規研究に主眼がおかれているため、鳴雪書簡中にある鳴雪の蕪村観などに言及されていない点が惜しまれる。

青木亮人氏の「正岡子規一派の蕪村調と『俳句らしさ』―内藤鳴雪『秋の水湛然として日午なり』について―」（同志社国文学第８１号　平成二十六年十一月二十日）は、鳴雪句の「秋の水」に注目して旧派俳人と捉え方の違いや「日午なり」の鳴雪の措辞の用い方についての考察がなされている。旧派への目配の行き届いた論考といえる。

小林祐代氏の「明治大正新派俳句の大功労者内藤鳴雪」（虚子記念文学館報２５　平成二十五年四月）は、鳴雪の評伝とともに虚子記念文学館所蔵の鳴雪書簡や鳴雪戯画を提示しながら論述されている。同記念館には鳴雪参加の未公開の句会稿が多く収蔵されており、今後、その句会稿からも句会参加者の動向や鳴雪の新たな俳句が発見できるものと期待される。筆者がその一部（明治二十八年二月十七日から明治四十二年十一月三日まで）二百余りに目を通したところ、虚子庵例会、本所弥勒寺内徳上院例会、札之辻汐湯楼例会、浅草白泉寺例会など数多く参加していることがわかった。

以上、主要な研究史について述べてきたが、まず全体的に研究が少ないことがあげられる。また鳴雪研究でまだ着手されていない、あるいは遅れているところは次の五点である。一つ目は、鳴雪が『猿蓑』の中でも凡兆の客観句に影響を受けて俳句に開眼したこと。二つ目は、子規一派が「蕪村派」と呼称されるほど蕪村に傾倒した鳴雪の蕪村観。三つ目は、子規と共に歩んだ新聞「日本」、特に新聞「小日本」での俳句活動。四つ目は、鳴雪が深く関わった俳誌「俳諧草紙」「文庫」「千代田」「南柯」における俳句活動。五つ目は、鳴雪の句集は類題別が多く制作年代が不明であること、以上である。

そこで、本論では、従来の研究史を踏まえることはもちろん、子規の活動を視野に入れつつ、前にあげた一つ目から五つ目までについて留意し、鳴雪の総合的な俳句活動を論じた。本論により鳴雪研究を拡大するだけでなく、従来の研究を大きく前進させたい。

（注）

1　宗像和重『鳴雪自叙伝』（岩波書店・平成十四年）解説で「著者その人の閲歴を語りつゝ、その背景をなす時代の動きが、誠に明瞭に生き〳〵と描きだされている」と評家の言葉を引用している。

2　巻末の評家略歴によれば、「石倉翠葉・本名重継　別号花笠庵　俳諧誠道新聞社主　明治七年七月生」とある。

第一部　子規と歩んだ鳴雪の俳句活動前期

第一章　鳴雪と子規

第一節　常盤会

はじめに

常盤会は在京の旧松山藩士子弟の学資援助をする目的で創設された組織である。また、常盤会寄宿舎はその子弟たちのための宿舎である。鳴雪は、この常盤会創設や寄宿舎開設にも関わり、なお且つ、監督まで務めている。

鳴雪が常盤会寄宿舎の監督をつとめなければ子規と出会うこともなかっただろう。また、俳句活動をはじめることもなかっただろう、と思われる。常盤会および常盤会寄宿舎について既に研究がなされていて重複する部分もあるが（注1）、このような存在の常盤会での鳴雪の活動を論じる必要がある。そこで、本項では常盤会創設と常盤会開設について簡単に述べ、最後に鳴雪と子規の初期の文学活動「言志会」について検討し、鳴雪が如何にして俳句への道を進むようになったかを考察する。

⑴　常盤会創設

常盤会は明治十六年六月、旧松山藩主久松家による在京の旧藩士子弟の学資援助をする目的で創設された組織である。この創設にあたり、鳴雪は同郷出身者の服部嘉陳、池田謙蔵、重松清水、内藤克家と共に組織上の調査を託され、「常盤会規則」（注２）を作成し、東京世話掛に任命された。その規則によれば、東京世話掛は「毎月一回相談会を久松邸に開き、学資給與並に学生の監督等に係る、一切の事務を協議すべし」とある。この常盤会創設と同時期に子規は念願の上京を果たし、更に定員十名の第一回給費生に選ばれているので、鳴雪は当然給費生としての子規の世話していたことになる。給費生には月額七円（大学生は十円）と教科書代が支給され、明治維新後の混乱期にあって青雲の志を立てた苦学生にとって、どれほど心強い制度であったかは想像に難くない。子規もその喜びを「安心して学問出来ざりし其時に此許しを得た」と明治二十一年「筆まか勢」（注３）の中で述べている。

⑵　常盤会寄宿舎開設

明治二十年十一月、給費生や在京の旧松山藩出身者の便宜をはかるため、本郷区真砂町十八番地の坪内逍遥の私塾を買収して常盤会寄宿舎が開設された。建物は久松家不用の長屋を移築して建添えたもので、敷地は約一〇三坪、舎室は十二、他に食堂や賄所などがある。定員は三十名だが、まず二十名を入舎させてその初代監督に服部嘉陳が就任した。この寄宿舎に子規は明治二十一年九月から明治二十四年十二月までの約三年余り入っている。鳴雪と子規がこの寄宿舎で文学上の交流を始めるのは、明治二十二年四月末に服部嘉陳が病のため監督を辞任し、その後任に鳴雪が就いてからである。

しかし、それまで鳴雪と子規の交流が全くなかったわけではない。子規の漢詩稿明治十六年の項に「南塘云意想自天外來」、「南塘曰古意」、「南塘云新奇」（注４）などと記入されていて、上京まもない子規が鳴雪に漢詩の指導を受けていたことがわかる。また鳴雪も、「松山の書生がよく漢詩の添削を乞ひに来ることがあつて、居士も其中の一人であつた」と、その頃の様子を「老梅雑記」（「ホトトギス」明治三十五年十二月号）で回想している。なお、南塘とは鳴雪の漢詩の号、居士とは子規のことである。

⑶　言志会

「言志会は」明治二十二年十一月、鳴雪、子規、竹村黄塔の三人で漢詩、連歌、連句などを作る目的で結成された会である。子規の明治二十二年の漢詩稿に「十一月七日南塘先生宅小集盖言志会第一会也」と鳴雪宅で「言志会」が初めて開かれた月日の記録がある。この会は明治二十四年三月まで開催されているが、黄塔は子規が「敬友」と名付けて兄事した河東静渓の三男で河東碧梧桐の兄である。また、静渓は子規が松山中学校へ通っていた頃に漢詩文の指導を受けた師である。静渓の日記には明治二十二年十二月三十日の条に「午前正岡常規来談、在東京同内藤南塘兒鍛月一回相会賦詩及十七言」と記されている。これは子規が明治二十二年十二月に従弟の藤野古白とともに帰郷した折りに「言志会」の報告をしたのであろう。

鳴雪はこの「言志会」について『鳴雪自叙伝』の中で、次のように述べている。

寄宿舎に居る生徒は各々自分の目的に従つて学校へ通つて居たので、法律や政治や経済や又文学などと各方面の生徒も居たのだが、正岡子規氏とか河東碧梧桐氏の実兄竹村黄塔氏とかは文学専門であつて、猶漢学も修めて居たから、私は時々此二人と共に漢詩を作り合ふ事もあつた。又同行して郊外へ散歩する事もあつて、此際は漢詩の他、七五体の新体詩見たやうなものを互に附け合ふやうな事もして、暢気な遊びをした。これは言志集と云つて、今も数冊残つて居る。(『鳴雪自叙伝』復刻版　青葉図書　昭和五十一年十二月二十日　二一四頁)

続けて鳴雪は「子規氏は其少し以前から俳句を作り始めて居たので、黄塔氏や私も其真似をする事になつて、今で見れば変なものだが、連句見たようなものを作つた事もある」と述べ、この連句の中では鳴雪は破蕉、黄塔は其十、子規は盗花と号している。なお、鳴雪のいう「言志集」は残念ながら現在伝わっていない。ただ子規の「筆まかせ」第二編・第三編・第四編と、鳴雪の「老梅居雑話（四）」（「ホトトギス」明治三十八年十月号）などに記録が数編ある。

また「筆まかせ」の中で、「言志会」のメンバーで散策した記述がある。散歩を日課としていた鳴雪が、東京市地図にその歩いた道だけ赤く塗っていっていたことに触れて次のような俳句を紹介している。

先生一日竹村稽三郎　正岡升二人を携へて深川の郊外を歩す　行く〳〵一句を賦して曰く

小春日や野道をぶらり〳〵行く

升　戯れに一句を擬して曰く

小春日や赤すじすらり〳〵引く

と　三人相見て笑ふ

(『子規全集』第十巻「常磐豪傑譚」六一七・六一八頁)

ここに出ている稽三郎は黄塔、升は子規のことであるが、鳴雪の句は何の技巧もない素直な表現で、散策の楽しさが伝わってくるようだ。そこへ子規が戯れて当意即妙な句で応えた、といえる。鳴雪は子規が「先生まづものになつてゐる」といって初めて認めてくれた句である、とその喜びを述べている。この鳴雪句はどの鳴雪の句集にも収められていな

いが「案山子集」に採録されており、渡辺水巴が「内藤鳴雪の追憶」（注５）の中で明治二十三年の作である、と紹介している。「案山子集」は明治二十三年頃から明治二十五年までの常盤会寄宿舎生と虚子や碧梧桐も加わった俳句の選集で、新海非風清書、子規書入れの原稿が現存しているが、出版されなかった。何か事情があったのであろうが、この選集は鳴雪や子規のみならず、やがて日本派俳人として活躍する虚子・碧梧桐・古白・瓢亭・明庵などの俳人たちの初期の俳句選集であり、子規や鳴雪の俳句の出発点を知る資料として価値あるものといえる。

ところで、鳴雪は子規、黄塔と「言志会」を結成したことにより、監督と舎生、漢詩の師弟という関係から二十歳という年齢差を超えた文学愛好の同志へと移行していったといえるだろう。

以上のように、鳴雪が常盤会寄宿舎監督に就任してすぐに子規から俳句の手ほどきを受けたということではなく、漢詩を中心とした詩歌の交わりから出発しているといえる。鳴雪は「鳴雪翁の俳句閲歴及逸話（一）」（「ホトトギス」大正十四年五月号）で初めて俳句を作ったときのことを次のように述べている。

ある時はじめて日光に参詣しました。その時は久松家の家令であつた池内氏と荊妻とを伴つたのでありますが、その時十七字形のものも出たらめに作つて、歸つて子規居士に見せたら居士が大分修正を加へた。それは今でも手許にありますが、只十七字のみで季がない。それで居士は俳句には季がなくてはいけぬといつて季を入れてくれて居た。これが明治二十一年頃のことで、私のはじめて俳句を作つた時です。

（「ホトトギス」大正十四年五月号　十頁）

この内容は、明治四十二年一月に俳書堂から出版された『鳴雪句集』を編集した渡辺水巴が以下のように「内藤鳴雪の追憶」の中で述べていることとも合致する。

此の句集は、明治廿五年から卅九年までの詠草を材料として翁の自選になつたものである。が、稿本には其の以前の句がある。それらの句は知らぬ人も多からうし、又、たま〳〵知つてゐる人があつても其の作の年代別まで承知してゐることは殆稀れであらうと思ふから茲に挙げておかう。

明治廿一年　華厳の瀧

大瀧や其古の盧遮那佛

（『俳句講座』第八巻　改造社　三一〇頁）

鳴雪によると、子規が季を入れて添削したのは上五の「大瀧や」と思われる。原句はわからないが、「大瀧」とすることによって壮観な景を表わすことができている。この句は、仏教経典の一つである華厳経からつけたといわれる瀧の名と、華厳経の説く絶対的な仏である盧遮那佛とを配していて、やや観念的といえるだろう。いずれにしても「大瀧や」が現在知ることのできる鳴雪の初めての句、ということになる。また、鳴雪は子規が俳句を作っていることを知っていて、明治二十一年には互いに俳句の話をしていたことがわかるのである。

なお、この「言志会」と並んで常盤会寄宿舎では、明治二十三年二月に子規を中心に五百木飄亭や藤野古白ら八人で組織した「紅葉会」という漢詩や俳句は言うに及ばず端唄などまで詠む会があったが、鳴雪は参加していない。

おわりに

以上のように、常盤会は鳴雪の文学活動の母体のようなものといえるだろう。また、初期常盤会寄宿舎時代の鳴雪にとって、子規・黄塔と結成した「言志会」の果たした役割は大きい。それは、二十歳の年齢差を超えて文学愛好の同志として子規らと学び、やがて漢詩から俳句へと導かれていったからである。鳴雪は常盤会寄宿舎の監督という立場を文学の場には持ち込まず、謙譲の精神で年少の子規たちと俳句に励む素直な鳴雪の姿が浮き彫りになった。また、寄宿舎の監督に専任するようになってからは句作に励むようになる。

（注）

1　松山市立子規記念博物館『子規と常盤会寄宿舎の仲間たち』（平成五年四月二十七日）や和田茂樹氏『子規の素顔』（愛媛県文化振興財団　平成十年三月三十一日等がある。

2　『子規全集』第十巻　「常盤会規則」　七〇八頁から七一二頁　講談社　昭和五十年五月二十日

3　『子規全集』第十巻　「半生の喜悲」　四十六頁　講談社　昭和五十年五月二十日

4　『子規全集』第八巻　「漢詩稿」七十三・七十四頁　講談社　昭和五十一年七月二十

日

5　『俳句講座』第八巻　「内藤鳴雪の追憶」　改造社　昭和七年十二月二十日　三一一頁

第二節　新聞「日本」

はじめに

新聞「日本」は陸羯南によって明治二十二年二月十一日、帝国憲法発布の日に第一号が発行された。羯南はその「創刊の趣旨」で新聞「日本」の性格を「新聞紙たるものは政権を争ふの機関にあらざれば即ち私利を射るの商品たり」と新聞の独立を述べ、現在の日本の情勢を「基本領を失ひ自ら固有の事物を棄るの極、殆ど全国民を挙げて泰西に帰化せん」としているとして政府主導の欧化主義一辺倒を嘆いている。そして、この現状を救うために「先づ日本の一旦亡失せる『国民精神』を回復し」且つ之を発揚せんことを以て自らを任ず」として新聞「日本」の理念をしめしたのである。

このように新聞「日本」は政治色濃厚な新聞であるが、子規の文学との係わりはどうであろうか。子規の新聞「日本」入社は、叔父加藤拓川（恒忠）の紹介で羯南に会ったのがその契機となっている。その入社に際して子規を面接した古島一雄は、今日の堕落した俳句を改革したいという子規の発言に「丁度その頃、新聞は国粋保存を唱え、欧化主義に反対している時だから、こういう復古的の精神を鼓吹することは面白そうだと考えた」（『一老政治家の回想』四十・四一頁　中央公論社　昭和二十六年五月五日）と述べている（注1）。子規は、新聞「日本」の「国民精神の回復」というスローガンと「俳句分類」の研究を通して得た俳句を文学的に捉えるという態度とを重ね合わせ、そこに時流に乗るという機会を得たといえる。ここに子規が俳句革新に乗り出す手段としての新聞「日本」の役割を見出すことでき、また、子規の俳句革新運動の拠点がこの時できたといってよいだろう。

子規は明治二十五年六月に新聞「日本」に「獺祭書屋俳話」を連載し始め、十二月には同社に入社、明治二十七年二月には新聞「日本」と同じ経営母体の新聞「小日本」の編集責任者になった。新聞「小日本」は百三十号、五カ月で廃刊となったが、子規は再び新聞「日本」で活動し、明治三十五年九月に亡くなるまで日本新聞社社員であったことはよく知られている。

そこで本項では、鳴雪が子規と共に歩んだ明治二十五年から明治二十七年二月十一日に新聞「小日本」が創刊されるまでの鳴雪の俳句活動を考察する。この時期は鳴雪が俳句に取り組んで熱中する時代でもある。子規に導かれ、且つまた、子規を補佐する鳴雪である。

(1) 新聞「日本」に初登場の鳴雪

明治二十五年十月二十九日、子規は鳴雪を日光の紅葉狩に誘った。鳴雪は体調が思わしなかったにもかかわらず、喜び勇んでその誘いにのった。この紀行を子規は「日光の紅葉」と題して同年十一月十一日の新聞「日本」に掲載している。上野から汽車に乗り、宇都宮の白木屋に一泊。その夜のことを子規は次のように記している。

翁は腹痛みて終夜眠り給はざりしとて暁に余を呼び醒まし
若人をゆり起したる夜長かな　　鳴雪
など戯れ給ふ。

この鳴雪の句は、前書きに、腹痛のため終夜眠られずついに夜明けになって子規を呼び醒ましたと書き、夜が長いので若人を揺り起こしたよ、言う意味の句である。子規の紀行文の中で初めて見られる作品である。子規は「日光の紅葉」以前に新聞「日本」に「かけはしの記」を明治二十五年五月二十七日から六回、「大磯の月見」を同年十月十日、「旅の旅の旅」を同年十月三十一日から四回、それぞれ寄稿している。しかし、これらの中で子規以外の人物の句が見られるのは一度だけである。それは「かけはしの記」の第一回・送別の場面で、次の三句である。

卯の花を雪と見てこよ木曾の旅　　古白
山路をり〳〵悲しかるへき五月哉　　同
五月雨や木曾は一段の碓氷嶽　　碧梧桐

藤野古白も河東碧梧桐も子規に同行しているのではない。したがって、同行者の句が新聞「日本」紙上に掲載されるのは「日光の紅葉」の鳴雪が初めてということになる。同時に、これが鳴雪の新聞「日本」初登場である。しかも登場の仕方は「鳴雪翁」であり、子

規の句の中では「先生の草履も見たり紅葉狩」と「先生」である。新聞「日本」の読者には、鳴雪翁、あるいは鳴雪先生として印象づけられたに違いない。鳴雪の句は前述の「若人を」の他に八句ある。

露吹くや小藪の中の芋畑　　鳴雪

この句について子規は、「雅淡にして幽趣あり。元禄以後の作とは見えず」と評し、華厳の瀧の壮観さと紅葉の美しさに圧倒されて子規自身句が浮かばないときの

雲間より瀧の落ちくる紅葉かな　　鳴雪
湖を瀧におとすやむら紅葉　　同

の句については、「ものされたる翁の筆力また恐ろし」などと述べながら二泊三日の旅を終えている。鳴雪の句は、後述するが、叙景に富んだ『猿蓑』を熟読した結果がここにも出ているといえるのではないだろうか。この紀行文の中には子規の句が二十五句ある。例えば、鳴雪の前掲句の後に次の三句がある。

紅葉見え瀧見える茶屋の床几かな　　子規
紅葉出て落ちこむ瀧や霧の中　　同
秋の山瀧を残して紅葉かな　　同

両者とも紅葉と瀧を詠んだ句であるが、鳴雪の句のほうが視点が定まっており、写実の力強さが感じられる。前述の「露吹くや」の子規評にみえるように子規は元禄の句、つまり芭蕉句を念頭に批評をしているといえる。

ところで、子規は再び鳴雪を誘って十二月七日から一泊二日の武州高尾方面への旅をしている。この時も鳴雪は「風邪の鼻すゝりながら俳道修行に出でん事本望なり」と言って同行している。鳴雪は体調が優れなくても子規の旅心、句心をくじくことなく、吟行の楽しさを分かち合ったのである。この旅は早速「馬糞紀行」（注2）と題して新聞「日本」に十二月十一日・十四日と二回にわたって掲載されているが、鳴雪は十九句、子規は三十一句、この文中にある。これは、前回の「日光の紅葉」と比較すると鳴雪句の占める割合は

二倍となっていて、鳴雪に寄せてゆく子規の信頼の厚さがみてとれる。また子規は次のように述懐して、この時に写実的態度を一歩すすめたとしている。

冬の始に鳴雪翁と高尾の紅葉見に行た時は天然の景色を詠み込む事が稍々自在になつた。

麦蒔きや束ねあげたる桑の枝

松杉や枯野の中の不動堂

などいふ句は此時出来たので平凡な景、平凡な句であるけれども、斯ういふ景をつかまへて斯ういふ句にするといふ事がこれ迄気の附かなかつた事であつた。

（「獺祭書屋俳句帖抄上巻を出版するに就きて思ひつきたる所をいふ」「ホトトギス」明治三十五年二月　一六・一七頁）

これはおそらく、議論好きの鳴雪と道中俳句を談じながら旅をした成果であろう。

なお、この二回の旅の切符は新聞「日本」の社長陸羯南が入手して鳴雪との旅を勧めており、子規への慰労と新聞「日本」への寄稿を促す意味がこめられていたものと思われる。加えていえば、羯南は鳴雪を信頼して子規を託しているようにもみえる。

⑵　運座の隆盛

「馬糞紀行」から帰京の二日後、明治二十五年十二月十日に子規は伊藤松宇を訪い、誘われていた石川桂山宅での句会に出席した。子規は徹夜で句会をするのだが、この句会で現在では普通に行われている座中の共通選という運座形式をはじめて経験したのであった。この時の様子を鳴雪は自著（『鳴雪自叙伝』）で次のように述べている。

其翌年の一月であつた、子規氏が私の宅へ来て、昨夜は非常に面白かつた。それは椎の友会と云ふへ行つて運座をやつて、遂に徹夜したとのことである。そこで聞くと、椎の友会は伊藤松宇、森猿男、片山桃雨、石川桂山、石井得中の五氏の顔触れで、月並家の運座には、宗匠のみが選者となるを改めて、座中の共選と云ふ事にして居るさうだ。而して私にも次回には出席せぬかと勧めるので、私も直ちに承諾してそれへ出席した。（『鳴雪自叙伝』復刻版　青葉図書　昭和五十一年十二月二十日　二一六頁）

鳴雪は自叙伝の中で明治二十六年の一月のこととして述べているが、これは明治二十五年の十二月の誤りであろう。

子規の「獺祭書屋日記」によると、徹夜して朝に帰宅したその日、子規は青山竜巌寺での句会で夜まで吟詠し、鳴雪とともに帰っている。この竜巌寺の句会参加者は鳴雪、子規の他に、五百木飄亭、新海非風、仙田木同、佐藤肋骨、古白の七名で、やがて子規を取り巻く有力俳人となる人々である。座中では子規の経験した運座形式の話題で持ち切りとなったに違いないし、また、早速この形式で句会も開かれたことだろう。この十二月の運座を皮切りに、鳴雪や子規たちは益々夢中になって句会を開き、「椎の友社」の俳人とも親しく句会を共にするのである。十二月の句会稿の記録は見当たらないが、翌年一月からの句会稿は『子規全集』に収録されている。

明治二十六年一月の句会稿をみると、三日、八日、十五日、二十二日、三十日、とあるが、「獺祭書屋日記」には七日、十二日も句会をした記録がある。みな課題句での句会である。例えば十五日子規の家で開かれた句会では、参加者六名で三回の運座、合計三十六もの課題で詠んでいる。また、三十日に鳴雪の家で開かれた句会では、参加者十三名で二回の運座、合計二十七の課題で詠んでいる。

この三十日の第一回運座での最高点は次の鳴雪の句で、古白以外の十一名が選んでいる。

陽炎や河原にかわくさらし布　　鳴雪

ところが、面白いことに鳴雪が特に高点として選んだのは次の古白の句で、他に四名が選んでいる。

陽炎を背中に牛の眠り哉　　古白

第二回運座の最高点句も鳴雪で、次の句である。

大佛に雪のなだるゝ旭かな　　鳴雪

この「大佛に」は雪の課題句であるが、「鎌倉大仏」の名で親しまれている高徳院の大仏であろうか、露坐の大仏に降り積もった雪が朝日に融けて、大きな頭や肩をすべって崩落ちて行く様子を「雪のなだるゝ」と大きく捉えたところがいかにも大仏らしい。ただ「なだるゝ」と大げさに表現したところには少し技巧を感じる。雪の課題の子規句は三名が選び、

杉の雪一町奥に仁王門　　子規

である。子規の句は淡々とした叙景であるが、「一町奥に」がやや説明的で理屈を述べてい

るといえる。

この様に鳴雪が熱心に句会に参加し、写実的態度で句作する様は参会者にも必ずや影響を与えたことだろう（注３）。

一月に子規が鳴雪を訪問した日、あるいは鳴雪が子規を訪問した日を調べると、十四日間ある。そのうち子規が鳴雪を訪ねたのは十日間と圧倒的に多い。日本新聞社へ出社する前に訪問することもあり、その用件まで全てはわからないが、子規は鳴雪を頼りにしていたようが窺え、また、その交流の深さをこの訪問日数は物語っているといえる（「獺祭書屋日記」（『子規全集』第十四巻　三一四から三三三頁））。

＊

⑶　新聞「日本」の俳句欄

明治二十六年二月三日の新聞「日本」の文苑に初めて俳句欄が設けられた。記念すべき第一回は次に示すようにわずか十行の小さな俳句欄である。しかし、やがて日本派といわれる子規一派の新しい俳句の進出の場となるのである。上司の古島一雄は「正岡のために二十行与えるから、自分の仲間の俳句を載せろ、そこは治外法権で俺は干渉しない」（古島一雄『一老政治家の回想』中央公論社　昭和二十六年五月五日　四一頁）と新聞「日本」に二十行の仲間の俳句欄を許可したのである。

春興

我王の二月に春は立ちにけり　　子規
酒もすき餅もすきなり今朝の春　　虚子
野も山も神の灯ともる睦月かな　　非風

閑居

我庵は粥の薄きを鶯を　　碧梧桐
初夢を語りあふ家人に対して
初夢やわれには語る夢もなし　　十湖
古河黙阿弥其水翁を悼む
其水のもとにかへりし氷かな　　弘美

子規の俳句は、『春秋左氏伝』の春秋の筆法で、「春、王の正月」という暦から書き始め

ることに倣ったものと考えられる。いかにも漢籍の造詣の深さが現れた子規の俳句といえるが、やや観念的である。子規にとっての「我が王」は明治天皇と考えてよかろう。

虚子の俳句は、「今朝の春」という新年を詠んだ作品であるが、明治二十六年一月三日、子規宛て虚子書簡（『子規全集』別巻一　三六〇・三六一頁）の中にある俳句で、「お酒もめぐりたる様なるが餅ハと問ハれてゆがんでも大きひ方がと表の西の宮に答へさせて」という前書きがあって「餅もすき」の俳句があるのである。『子規全集』の注に、松山地方では昭和初年までお多福面をかぶって「西の宮からお福のお礼（中略）おかちんはいがんでも大きいのがよろし」といって廻る門付がいた、とある。この門付けのことを承知していなければ、新年に餅と酒では話題の転換性がない。

碧梧桐の俳句は、薄い粥を啜るほど貧しくても鶯を聞きながら風流なわび住まいですよ、というような句意であろう。

子規は、一月三日の虚子から書簡（『子規全集』別巻一　三六〇頁）にあった次の句に対して二月二日の虚子宛て書簡（『子規全集』第十八巻　四〇一頁）の中で、

酒もすき餅もすき也けさの春　　虚子

「面白く候故明日之紙上に載せ候申送候」と記し、碧梧桐や非風ら六人とともに三日の俳句欄に掲載している。虚子の句が面白いので新聞紙上へ掲載するというのだが、この頃の子規は盛んに「面白し」という俳句評をしている。例えば、「近来諸兄の句中々さびがつき候て面白く相成候」（碧梧桐宛て子規書簡　明治二十五年三月二十五日『子規全集』第十八巻　二九〇頁）、「四句ハ面白くハ候へども皆少々づゝ句調悪し」（虚子宛て子規書簡　明治二十五年五月四日『子規全集』第十八巻　三〇三頁）、「初の句と終の句ハ如何やと存候中のハ面白く候」（伊藤松宇宛て子規書簡　明治二十五年十月九日『子規全集』第十八巻　三六二頁）、「大兄及旭渓子の俳句皆々面白く感服仕候」（碧梧桐宛て子規書簡　明治二十六年一月三十一日『子規全集』第十八巻　三九八頁）等である。子規の選評の基準に「面白し」が大きな位置を占めていた、といえる。

また二月二日の虚子宛て書簡で、子規は運座で面白かった句として十二名・十五句を紹介して、東京の新しい息吹を伝えている。鳴雪は次の二句が紹介されている。

梅散て鶴の子寒き二月哉　　鳴雪
夕月や納屋も厩も梅の影　　同

「梅散て」の句は一月三十日、「夕月や」の句は一月二十二日の運座での作品である。鳴雪が新聞「日本」の俳句欄に初登場するのはこの「梅散て」の句で三月五日である。この句からは、鶴と梅を愛して隠遁した林和靖を思い出させるが（注４）、何故この記念すべき第一回に鳴雪の俳句を掲載しなかったのか不思議に思う。

明治二十六年一月の句会稿（『子規全集』第十五巻　百頁から一三七頁）で鳴雪が参加しているのは、一月三日、十五日、二十二日、三十日があり、子規は多くの鳴雪句を選んでいる。また他に、子規の「獺祭書屋日記」（『子規全集』第十四巻　三一五頁）には、一月七日、九日、十二日、と鳴雪と運座をした記録がある。このように共に盛んに運座に同席していながら、鳴雪句がないのである。明快な答えを得る資料がまだ発見できないが、子規の句の観念的なことからして子規の選句眼の古さがその一因とも考えられる。

ところで、鳴雪の「梅散りて」の句は一月三十日、鳴雪居での第一回運座の題「武蔵野の春」での作品。会者は子規をはじめとして、古白、瓢亭、松宇、猿男、桃雨等十三名である。松宇、猿男、桃雨は「椎の友社」会員であり、この時期は運座をともにし、また、新聞「日本」俳句欄にも度々俳句を掲載しており、その交流の一端を窺うことができる。「夕月や」の句は一月二十二日の運座で高得点の句である。この会もやはり「椎の友社」の松宇、猿男、桃雨等が同座しており、子規にはまだ後に呼称される日本派というような意識はあまりみられないように見受けられる。

この隔てのなさ、あるいは俳句に対する意気投合などが、三月二十三日の「俳諧」創刊へと発展してゆくのである。この「俳諧」は二号で廃刊となってしまうが、子規はその両号に、「古鏡」として芭蕉、許六、蕪村などの句、「新選佳調」として鳴雪、猿男、古白などの句をそれぞれ季題別に掲載している。因みに「新選佳調」に掲載されている鳴雪の句を挙げると次の通りである。

「俳諧」第壹号（明治二十六年三月二十三日）

夕月や納屋も厩も梅の影　　鳴雪

水そよ〳〵池の萍生初めぬ　　同

花散りて杉の木の間の胡蝶かな　　同

「夕月や」の句は一月二十二日、中根岸の汁粉屋「岡野」で開催された運座での高得点句。

「俳諧」第貳号（明治二十六年五月四日）

明樽のつゝじさびしや二百文　　鳴雪

東雲のほがら〳〵と山さくら　　同

「東雲の」の句（注5）は四月四日の第三回運座での作であるが、「東雲のほがら〳〵と朝櫻」と初出の下五は「朝櫻」である。子規はこの句を「天」位として選んでいるが、「俳諧」掲載時に「山さくら」と添削したのであろうか。ところが、大正十四年に松山の東雲神社に句碑が建立される際に、「山さくら」は「初櫻」となっている。松山城下にある東雲神社は山とは言えず、鳴雪はその場所にふさわしいように再び推敲したものと思われる。

おわりに

子規は明治二十五年六月に新聞「日本」に「獺祭書屋俳話」を連載し始め、十二月には同社に入社した。新聞「日本」という俳句革新運動の拠点を得た子規は、同紙に俳論、紀行文、仲間の俳句を掲載してゆく。子規の仲間は常盤会寄宿舎生を中心とした所謂書生である。その中にあって鳴雪は寄宿舎の監督であり、また、文部省に勤務していた元高官である。このような鳴雪は社会的にみれば重い存在であり子規たちの社会的信用の助けになったものと思われる。それを証明するかの如く、鳴雪が新聞「日本」に鳴雪の俳句とともに初登場するのが明治二十五年十一月十一日の子規の紀行文中であり、敬称も「翁」「先生」である。また、鳴雪は羯南の信頼も厚い。鳴雪は体調が優れなくて子規の旅を支え、共に句作している。子規はこの旅を通して叙景がやや自在になった、と述懐していることからも鳴雪の果たした役割の大きさがわかる。

子規が運座を紹介すると鳴雪は熱心に取り組み、その熱心さは他の子規の仲間人も巻き込まれ日本派を形成していく礎が出来て行ったといえる。鳴雪と子規の頻繁な往来は、子規の鳴雪に寄せる信頼と期待がうかがわれる。

（注）

1　古島一雄はまた「当時の日本は所謂欧化主義時代で、滔々として外物崇拝であり、此の風潮に対抗して立つたのが『日本新聞』で、全紙悉く国粋主義の発揮並に宣伝といふのであつたから、正岡が古い俳句を復興して、之に新生命を吹き込むといふ意気に共鳴し彼を用ひることゝなつたのだ」とも述べている（『『日本新聞』時代の子規」、「日

本及日本人」昭和三年九月号　百頁）。

2　「馬糞紀行」は『増補再版　獺祭書屋俳話』に収められる際に「高尾紀行」と改題されている。

3　和田茂樹氏は講談社版『子規全集』第十五巻解題で、「幕末以来の教養人であり、江戸の風俗をも平安古典や中国の典籍に典拠を持つ言葉や影像を自在に詠みこむ能力のあつた鳴雪は、根岸句会に一生面をひらく上で大きな寄与をしたとかへつて言はねばならぬのではなからうか」と説いておられる（八五九・八六〇頁）。

4　芭蕉にも林和靖を思わせる「梅白し昨日ふや鶴を盗まし」の句がある。

5　『古今和歌集』によみ人しらずとして「しのゝめのほがら〳〵とあけゆけば　をのがきぬ〴〵なるぞかなしき」（六三七）がある。

第三節　新聞「小日本」

はじめに

新聞「小日本」は明治二十七年二月十一日に創刊された総ルビ、挿絵入りの家庭向け小新聞である。政府の政策批判によって度々発行停止となる新聞「日本」の代替新聞として新聞「小日本」は発行されるようになったのである。この新聞「小日本」の編集主任に入社して僅か一年余りの子規が大抜擢された。当時新聞「日本」にいた古島一雄は、危ぶまれながらスタートした子規の編集結果を「其作る所の新聞が、ブマの事や間の抜けた事がありはしないかと私かに心配して居つた。處が其新聞が出来て見ると、誠に小ぢんまりとした、だれ気味のないさうして品のよいものが出来て来た」（「日本新聞に於ける正岡子規君」『子規言行録』百頁　昭和十二年一月二日　天泉社）と期待以上であったと、その手腕を認めた。

子規が水を得た魚のようにいきいきと新聞「小日本」の編集に携わったことは、その紙面からも十分読み取ることができる。子規は小説、俳論なども執筆しているが、第一面の下方隅に子規周辺の俳人の俳句を掲載した。この俳句欄は新聞「日本」から移したものであるが、そもそもお堅い大新聞の新聞「日本」に初めて俳句欄を設けたのは明治二十六年二月三日で、子規、虚子、非風、碧梧桐、十湖、弘美の六人の六句を掲載した。以後、盛んに子規周辺の俳人の句を掲載してゆくのであるが、これは新聞俳壇の草分けといえるも

のである。これまでの新聞の文苑欄は漢詩と和歌ばかりであったのだが、子規は新聞というメディアを通していち早く明治の新しい俳句を発信したのである。また、新聞「小日本」で始めた子規選の募集俳句も特筆すべきものであった。これまでの旧派の俳句募集は懸賞付きで入り花料（投句料）が必要であったが、新聞「小日本」は入り花料を必要とせず、入賞者には新聞贈呈というものだった。新聞読者の参加しやすいこの募集俳句の方法は多くの読者、とくに若者に受け入れられたようだ。第一回目は二月二十五日投句締切、三月一日から入賞句を紙上に発表していっている。因みに新聞「小日本」よりも早く俳句募集を行った角田竹冷・尾崎紅葉選の「読売新聞」を見てみると、こちらも入り花料なし・投句締切一月二十日、入賞句の発表は三月九日からである。入賞者の発表の掲載が終わると小説・脚本を募集し、以後、明治二十七年の「読売新聞」には俳句欄がない。こうしてみると、両者には俳句の取り組み方に大きな違いがあることがわかる。さらに、子規は早々とこの募集俳句の秀句と俳句欄の句を集めて『俳句二葉集春の部』を五月三十日新聞「小日本」の付録として刊行している。子規の俳句に対する熱意とメディアを有効に活用した手際のよさをうかがうことができ、俳句欄が句集という形になったことは意義深いと思われる。新聞「小日本」の俳句欄はなかなかの人気で、次第に子規を中心としたいわゆる「日本派」の基礎が築かれていったのである。この子規の活動に対して鳴雪が助言や忠告をしていたことが次の言葉から推察される。

小日本の如きは君の担当ゐられる限りは純粋に文学のみを鼓吹されたいと思ふのに、時々政事の問題抔に渡つた記事の見えるのは好ましくないと言つたら、居士の答には新聞もだん〳〵と社会に勢力を得るに従つてはさうは参らぬ、自然と政事的野心を有つことになるのもその勢ぢやといつた。これは単に陸羯南氏を弁護したのでなく、居士が前途の抱負をも予め弁護したのであるらしい。

（『柿二つ』について」「ホトトギス」第十八巻第十二号　大正四年九月一日　四六頁）

また、鳴雪は新聞紙上の活動を文学専一にと助言したが、子規は政事方面へも関心を持っていたことのわかる一文といえる。

新聞「小日本」は本家の新聞「日本」の経営悪化から七月十五日、三百号（五カ月）という短命で廃刊してしまうが、この子規を側面から助けた鳴雪の存在は頼もしいものであったといえる。

これまで、鳴雪の新聞「小日本」での俳句活動については論じられていない。昭和女子大学近代文学研究所編『近代文学研究叢書２５』や畠中淳編『内藤鳴雪』（松山子規会叢書１７）でも新聞「小日本」に言及していない。

そこで、本項では新聞「小日本」における鳴雪の俳句活動を検討する。

⑴　新聞「小日本」俳句応募欄

子規は新聞「小日本」の第一面に自作の小説「月の都」を連載し、鳴雪や虚子の俳句を掲げ、また、募集俳句も始めたのである。この募集俳句は日本各地から応募があり、子規の目指す俳句が全国に及んで行くための一翼を担うことになる。この応募俳句から選抜した優秀な句と子規周辺の有力俳人、つまり常盤会寄宿舎の仲間、「椎の友社」の俳友、東京での学生仲間、などの句を編集したのが『俳句二葉集　春の部』なのである。

鳴雪の句は、

此春は凧とばしたる人もなし
苗代に夕風わたる緑かな
雀子や走りなれたる鬼瓦
若菜摘み若菜摘み京の日は暮れぬ

など二十五句採録されている。表１（一七七頁参照）の子規選集句数に示すごとく、鳴雪の占める割合は虚子（二十五句）や碧梧桐（二十六句）とほぼ同じである。目につくのは、子規が明治二十二年に「折々は俳句をものせむと試」みた最初の仲間、非風の占める割合が減少していることである。非風は早くから優れた天分を示しながら、結核の病で中途身をあやまり、零落のうちに明治三十四年、三十二歳で亡くなった人物である。虚子の小説『俳諧師』の五十嵐十風は非風がモデルといわれている。

ところで、鳴雪の句の中に新聞「小日本」募集俳句に右山の号で入選した作品がある。それは次の三句である。

四月八日　二点句
伐り出だす木曾の檜の日永かな　　右山

四月十一日　秀逸十五章句

永き日や花の初瀬の堂めぐり　　右山

四月十一日　人位句

陽炎に牛の皮剥ぐ河原かな　　右山

鳴雪は子規を応援するつもりで右山という変名で応募したにちがいない。四月十一日以降は右山の名の句は見当たらないところをみると、『俳句二葉集　春の部』編集のさいに、鳴雪が右山と判明したのであろう。それにしてもこのことは、鳴雪の子規を思う優しさが伝わってくる逸話ではないだろうか。また、変名で入選した鳴雪の実力というのもわかるのである。

新聞「小日本」の売れ行きはよかったようであるが、親である新聞「日本」の経営が思わしくなかったのであろう、同年七月十五日で廃刊となってしまう。そのため、春の部以降は出版されていない。

(2)　鳴雪の「老梅居漫筆」

鳴雪の「老梅居漫筆」といえば、明治三十年一月の「ほとゝぎす」創刊号の巻頭文が直ぐに思い浮かぶ。しかし、「ほとゝぎす」の文は新聞「小日本」に連載した「老梅居漫筆」の一部を再掲載したものである。新聞「小日本」には明治二十七年六月二十七日から七月十三日までの七回と新聞「日本」七月十六日の合計八回の連載である。その主な内容は俳句の基本についての解説である。全て一つ書きで訓示めいているが、初心者に分かりやすく説いているといえる。一例を示そう。新聞「小日本」掲載文は総ルビであるが、ここでは省略する。なお、参考のために本項の終りに「ほとゝぎす」との異同を資料に付す（一七九頁参照）。

一　和歌は古言に限り詩は漢語に限る俳句は二の者を兼用ひ更に俚語に及ぶ其廣くして自在なる所以なり然るに後世の人は概ね俳句を俚語に局し徒に自ら窮屈を取る笑ふべきなり

鳴雪は冒頭で、和歌は和語、漢詩は漢語、俳句は和語と漢語と俚語（俗語）を用いて詠

むという特徴を述べ、更に後世の人の俳句は俚語に偏りすぎている、と指摘している。この文は鳴雪の俳句の基本的理念といえる。最後は、

一　人をして面白いと呼び成程と感ぜしむるの句は未だ好句と云ふべからず必ず之に風雅分子を加へて始て好句ともなるなり然れども元来面白いと呼び成程と感ずるものには概ね俗気を含む之を好句に作るは極て難きものなり

と、俗気に溢れた安易な句作を諫めている。

この「老梅居漫筆」は、子規の「俳諧大要」（新聞「日本」明治二十八年十月二十二日から十二月三十一日　二十七回）を鳴雪の視点で捉えて読者へ示したものといえそうだ。例えば、「俳諧大要」の、

一　俳諧は滑稽なりとて滑稽ならざるは俳句にあらずといふ人あり局量の小なる一笑するに堪へたり是れ己れ偶々滑稽よりして俳諧に入りしかばしか言ふのみ濁酒を好む馬士の清酒を飲んで酒に非ずといひたらんが如し　（十一月十一日　七）

という右の子規の文章に対して鳴雪の「老梅居漫筆」は次の通りである。

一　俳諧の名あるが故に或人は今も俳句を以て多少滑稽の意味を具へざるべからざるものと為し強て元禄以前の小天地に閉籠らんとせり此輩の如きはいわしやの医療器械を売りあまざけやの呉服商たることを説くも到底信ぜざるべし呵々

もともと俳諧という語は『日本国語大辞典』によると、「たわむれ。おどけ。滑稽。諧謔」という意味がある。子規・鳴雪ともに、俳句はこの意味に拘泥してはいけない、と述べているのである。

鳴雪の前掲の最後の「一　人をして面白いと呼び」の項は、「俳諧大要」の次の箇所と呼応していると考えられる。

一　俳句は只己れに面白からんやうにものすべし己れに面白からずとも人に面白かれと思ふは宗匠門下の景物連の心がけなり縮緬一匹金時計一個を目あてにして作りたる

者は縮緬と時計とを取り外したるあとにて見る可し我ながら拙し卑しと驚く程の句なるべし

（新聞「日本」明治二十八年十一月十一日　七）

この項目では、他人が面白いと評価する句は俗気を含むことが多いことを指摘し、作句の心構えを説いている。

一俳句は十七字の小説なり

一詞簡なるものは意味長し俳句は詩歌に比するに詞最も簡なり故に其意味尤も長し

一旨玄にして詞優に余韻限りなきものは凡兆の句なり猿簑集を繙き細かに諷吟する者は徐く之を知らん

一屈強の力と洒脱の気象を以て縦横自在を逞ふするものは蕪村の句なり天明の元禄に光ある此人の功多し

一蕪村は好んで行春、短夜、立秋、秋暮等の無形なる大題目を咏じ皆妙を極む又歴史の俤を写すの句多し是れ俳眼高きものに非ざれば能はざる所なり

（新聞「小日本」明治二十七年七月三日）

この七月三日の文では、鳴雪は次のようなことを示唆しているといえる。技巧や細工をほどこさない短い言葉が実はその意味することは長い文に相当するということ。凡兆の句は意味が奥深く余韻があるので『猿簑』に学ぶことを勧めるということ。

さらに蕪村の句の特徴について、蕪村の句は力強くて嫌みがなく趣があること。蕪村は好んで形のない行春や立秋など題目（季題）を詠んで其の作品は素晴らしいこと。また多くの優れた詠史句があることを述べている。

明治二十五年から本格的に俳句に取り組んだ鳴雪が、僅か二年後の二十七年には子規の片腕となって明治の新しい俳句の有り様について新聞「小日本」に堂々とその論を展開しているのである。蕪村についての教養の深さにも子規は驚いたに違いない。

鳴雪に前後して子規は新聞「小日本」に「俳諧一口話」を明治二十七年四月二十六日から発行廃止となる七月十五日まで、三十六回連載している。この「俳諧一口話」は俳諧の歴史を踏まえつつ晩春、植物、素堂の譬喩、与謝蕪村、久村暁臺、連歌と蕉風、等について簡単に述べたもの。鳴雪が総論ならば子規は各論といった感がある。いずれにしても、鳴雪の「老梅居漫筆」と子規の「俳諧一口話」が二本立てとなって俳句革新運動を推進し

ているといえる。

おわりに

三百号で廃刊となった新聞「小日本」ではあるが、子規は編集責任者に抜擢され、思う存分その力を嬉々として発揮し、鳴雪も蔭になり日向になり応援していたことが確認できた。また、子規の俳論に呼応して鳴雪も俳論を書くほど短期間で力をつけ、子規と一緒に活動をしたといえる。

第四節　子規の鳴雪句評価

はじめに

鳴雪は熱心に運座に参加し、また、自宅で運座を開くこともある。このような鳴雪の俳句を子規はどのように評価していたのであろうか。本項では、雑誌「日本人」第二十七号（明治二十九年九月二十日）に掲載した子規による鳴雪俳句評と、子規の俳句選集からその動向を検討する。俳句選集については鳴雪のみならず他の有力俳人も同時にその入選句数を調べた表１（一七七頁参照）も活用する。

⑴　子規の「文学」評

子規は越智處之助の名で雑誌「日本人」第二十七号（明治二十九年九月二十日）に「文学」の題のもと、俳句、漢詩、和歌、新体詩の時評を行っている。その俳句の項で鳴雪の俳句評をおこなった。この鳴雪の部分は「ほとゝぎす」第三号（明治三十年三月十五日　九・十頁）（本稿では、松山から発行された俳誌を「ほとゝぎす」、東京から発行された俳誌を「ホトトギス」と記す）に転載されている。子規はこの中で先ず冒頭に「内藤鳴雪は新派俳人中の老将なり」（「日本人」第二十七号　四三頁）と鳴雪を多年の経験を積んだ新派俳人の老将と公言し、さらに続けて鳴雪句の特徴を述べ、鳴雪を世に紹介しているといってよいだろう。

鳴雪の句の特徴を、凡兆を研究したことによる純客観で幽寂な句、清婉で典麗な句、宮

中や大宮人のような『源氏物語』の世界を好み雅言を用いた句、おぼろげな恋の句、滑稽な句等と子規は批評している。最後に鳴雪の次の二句を七言絶句の漢詩に詠み込んだ作品を紹介している。

初雪や松の梢の天守閣　　鳴雪
古道に梅一枝の餘寒かな　　同

初雪松梢天守閣。餘寒古道一枝梅。依然格調学元禄。却自天明着想来。

子規は「鳴雪自ら元禄を尚ぶと称す。其句法の平易なりしは或は似たるべし。而して其趣向の清婉なる処は元禄よりも天明に似たり」（同前「日本人」四四頁）といい、漢詩の起承に鳴雪句を、転結にはこの文章を用いているのである。これらの子規評と、明治二十六年八月九日の霽月宛て鳴雪書簡の中の鳴雪の自己分析を比較すると、ほぼ同様であるが、子規は鳴雪の漢詩・漢語については言及していない。鳴雪は次のように記している。

一種和歌調ヲ好ムト云フコト雅言ヲ好ムト云フコト漢詩メキタル趣向ヲ好ムト云フコト漢語ヲ好ムト云フコト武士学者風ノ趣ヲ好ムト云フコト荒蕩ニシテ老荘家ノ如キ趣味ヲ好ムト云フコト奇抜ニシテ人意ノ表ニ出ツルガ如キモノヲ好ムト云フコト語ノ時トシテハ朴実質素詰屈贅牙ナルヲ好ムト云フコト

鳴雪は明治二十六年八月には自身の俳句の傾向を把握し、それをよしとして進んできたのであろう。明治二十九年の子規評が鳴雪の自己分析と一致していることからも窺うことができる。

⑵　子規の俳句選集からみた鳴雪句の評価

鳴雪句の子規の評価を知る手段の一つに子規の選集がある。そこで、講談社版『子規全集』第十六巻・二十一巻および松山市立子規記念博物館発行の「なじみ集」翻刻版から子規の選集を明治二十六年から三十三年までのもの、『俳句二葉集』、『増補再版　獺祭書屋俳話』、「なじみ集」、『新俳句』「承露盤」を中心に考察をすすめる。また他に、「案山子集」や「俳諧十六家」「一家二十句」なども視野に入れて行う。

まず、明治二十六年の「俳諧十六家」を調べる。この選集は作者別で、大原其戎、鳴雪、片山桃雨、伊藤松宇、新海非風、五百木飄亭、藤野古白、高浜虚子、河東碧梧桐など、子規の俳句の師、「椎の友社」の俳友、同郷諸氏十六名で構成されている。子規は各々春夏秋冬この時期の代表句を一句ずつ合計四句選び、下村為山筆の肖像画とともに採録している。鳴雪の句は次の通りである。

夕月や納屋も馬屋も梅の影
船の蚊のうかれ女送る夜明哉
行く秋や不破の関屋のうすの音
荻窪や野は枯れはてゝ牛の聲

「夕月や」の句は『俳諧』壹号や次に述べる「一家二十句」にも採録されていることからして、鳴雪生涯の代表句と考えてよいだろう。「行く秋や」の句は、藤原良経の「人住まぬ不破の関屋の板庇あれにし後はただ秋の風」（『新古今和歌集』一六〇一）の和歌、また、芭蕉がこの和歌をふまえて詠んだ「秋風や藪も畠も不破の関」を念頭に詠んだことは明白で、古典や漢籍に親しんでいる鳴雪の得意とするところの句といってよい。

次に、子規の古俳句の研究と合わせて一俳人の秀句二十句を選んだ「一家二十句」を調べる。『子規全集』第二十一巻の解題（七三三頁）によると、この選集は二十五年春にはほぼ選出し、その後四年間増補されていった選集とある。

足利尊氏にはじまり、宗祇、宗鑑、といった俳諧の祖、芭蕉、蕪村など近世の俳人を中心に合計五九三名が記録されており、そのうち近代俳人は鳴雪、石井得中、松宇、森猿男、子規、勝田明庵、非風、飄亭、古白、碧梧桐、虚子の十一名である。この十一名に子規は、当時の代表的な俳人として将来を嘱望し、また、その俳句を認めていたのであろう。

鳴雪の句は四季別に、前述の「夕月や」「行く秋や」「荻窪の」の句や、

古柳只四五寸の緑かな
夏山の大木倒す木玉かな

など新聞「小日本」俳句欄の句、

から〳〵と日は吹き暮れつ冬木立
行年や机に殘る墨のたけ

など、明治二十三年から明治二十五年まで初期の選句集「案山子集」の句も採録されている。このことからしても、「一家二十句」は鳴雪初期の代表句が収められているといえる。

ここで、選句時期がやや前後するが「案山子集」の採録数を調べると、表1（一七七頁参照）に示すごとく飄亭、子規、非風の三人が非常に多く、鳴雪はこの三人の四割弱の句数である。これは子規初期の選句集で、鳴雪が俳句に携わる以前の作品が多く含まれているためと考えられる。

新聞「小日本」の選集『俳句二葉集　春の部』と同じころ選集されたと思われるものに、『増補再版獺祭書屋俳話』附録俳句選句集がある。刊行されたのは明治二十八年九月五日であるが、この増補序の日付は明治二十七年四月三十日となっているため、ここでは明治二十七年の選集として考える。採録されている句は新聞「日本」の俳句欄に掲載された句が中心で、鳴雪は三十八句採録されており、これは子規、飄亭に次ぐ多さである（一七七頁参照）。「椎の友社」の松宇や桃雨の句数もやや増加している。鳴雪の句は、

流れ木のだぶり〳〵と春の川
夕畦や捨てし早苗の二把三把
湖を抱て近江の小春かな

など、視覚的・写実的な作品がある一方で、

為朝の弓弦はづす春の雨
雁なくや須磨の浦人藻汐焚く

など、軍記物語や和歌をふまえた作品もある。因みに、源為朝は強弓の使い手で知られた人物であり、「須磨の藻汐」といえば藤原経衡の「立ちのぼる藻塩のけぶり絶えねせば空にもしるき須磨の浦かな」（『後拾遺和歌集』一〇五四）や慈円の「藻汐焼く煙も霧にうづもれぬ須磨の関屋の秋の夕暮」（『捨玉集』五四三）の和歌が思い出される。

『猿蓑』を愛し、凡兆を好み、七部集を学んで写実的俳句で周囲の若い俳人に模範を示した鳴雪であるが、従来の漢籍・古典の素養を活かした俳句にも子規は高い評価をしていたといえる。

次に、その存在は知られていたものの行方が久しく不明だったが、平成二十一年に出現して現在は松山市立子規記念博物館に所蔵されている資料「なじみ集」について検討する。「なじみ集」には明治二十四年から明治二十八年まで、九十八名・四三七八句が収録されている。そのうち鳴雪句は五八三句とずば抜けて多い。これまでみてきた「俳諧十六家」、『増補再版獺祭書屋俳話』、『俳句二葉集』の鳴雪句との重複も多く、明治二十六年と明治二十七年の句が約八割を占めている。これは、現在「なじみ集」の最も新しい収録句が明治二十八年二月十二日に日清戦争の戦線で死亡した関谷大尉への鳴雪の悼句「梅散て其たそかれの人寒し」と推定されており、明治二十八年の収録数は極端に少ないのは当然の結果といえる。「なじみ集」の中には、

初花や東坡先生妹あり
竹婦人瀟湘の雨を聞く夜哉

など、漢籍から題材をとった句がある。「初花や」の句は、「的対」(『東坡居士仏印禅師語録問答』上海古籍出版社　出版年不明　十四頁)に「東坡之妹少游之妻也」とあることからの連想だろう。「竹婦人」の句は「瀟湘八景」の一つ「瀟湘夜雨」を詠み込んだ句である。因みに、「瀟湘八景」とは「中国湖南省の瀟水と湘水の合流点付近にある、八つの佳景とされるもの。すなわち平沙落雁、遠浦帰帆、山市晴嵐、江天暮雪、洞庭秋月、瀟湘夜雨、煙寺晩鐘、漁村夕照の八景。北宋の宋迪がこれを描いて、八景の画としたところからいう。日本でも、近江八景など、これにならって選ばれた名勝がある」(『日本国語大辞典』)ということである。

また、明治二十六年と明治二十七年の収録数と子規の評点数の割合を比較すると、明治二十六年二五九句中評点四三句(一六・六%)、明治二十七年二一七句中評点七十句(三二・三%)と、明治二十七年の方が約二倍の評点がある。これは、子規が鳴雪の句を明治二十六年より明治二十七年を高く評価していたといえる。

なお、「なじみ集」には古白の句が収録されていない。古白は子規の従弟で、「俳諧一六家」や「一家二十句」にも採録されている感受性の強い文学青年であり、子規に重んぜられた人物である。明治二十八年四月にピストル自殺をして亡くなり、明治三十年五月に『古白遺稿』が出版されているが、その折に何らかの理由で紛失してしまったのかも知れないと、和田克司氏は推察している(注1)。

最後に、明治二十八年、二十九年の子規選集「承露盤」について検討する。「承露盤」は明治二十八年から明治三十三年まで、募集俳句の高得点句や子規宛書簡、あるいは各種句稿などから収録された、言わば子規の佳句選抜控え帳のような選集である。そして「なじみ集」などの選集とともに日本派総合句集が生れてくる基となるのである。

さて、「承露盤」の鳴雪収録句数の占める割合は表１（一七七頁参照）に示す如く減少傾向にある。その理由としては、子規が明治二十八年、病を推して日清戦争に従軍した、ということが考えられる。子規は三月三日に東京を離れるのであるが、留守中の新聞「日本」俳句欄掲載句は、虚子と碧梧桐に共選として任し、なおかつ鳴雪の校閲を経て掲載するようにしたのである。子規がいかに鳴雪に厚い信頼を寄せていたかがわかる。また、鳴雪は鳴雪で留守部隊長としての責を果たすのである。その様子は、古白の事件を子規に知らせる碧梧桐の明治二十八年四月十四日書簡（『子規全集』別巻一、二三六頁から二四一頁）の中でも確認できる。鳴雪の篤厚なさまがよく表れている書簡である。

内藤先生のかけつけられし時ハ息もはか〳〵しからず最早落命せしかと思はるゝ許なりしとぞ何をいふても親身の人とては独もなく皆ニ冷視せられて誰一人主となりて働く人もなけれバ内藤翁はすぐ様自ら主となりて直ちに大学の第一医院へ入院なさしめ玉ひぬ（中略）此度の事につきてハ内藤先生の尽力ハ非常なるものにて夜伽ハせられぬかハり朝ハ早朝より暮ハおそく迄大方つめきりにて何かに気をつけ玉ひぬ　其労其煩　先生の御心も哀れに覚えぬ棺中に投ずるの句あり

何事ぞ櫻をあとに拾笠　　鳴雪

花の春夕に死する可ならんか　　五州

さびしさハ花ちる頃の夕哉　　虚子

ちる櫻君が枕のつめたきに　　碧桐

これ丈なりき　内藤先生の発起にて古白子病床雑事あり　訪問者より其他の事一切もらさず様々の人の手に様々の文もてかかれぬ（四月十四日子規宛碧梧桐書簡）

ところで、子規は遼東半島へ出陣したが、明治二十八年四月十七日に日清講和条約が結ばれたため、戦争には直面していない。しかし、帰国途上の船中で再喀血し、五月二十三日、神戸病院に入院する。詳細は省略するが、快方して松山の漱石寓居・愚陀仏庵で療養するのが八月二十七日から十月十日までの約一月半。この間に柳原極堂や野間叟柳ら「松

風会」の句会が連日行われ、表１（一七七頁参照）には記入していないが、この会員の句が多数収録されている。また漱石も初めて句会に参加し、子規帰京後は書簡にて句稿を頻繁に送るなど熱心に作句をしている。そのため、漱石の収録句数は鳴雪よりも多くなっている。また、飄亭は日清戦争に従軍したため、非風は病のため自暴自棄となり俳句から遠ざかったため激減している。

明治二十九年の「承露盤」では、子規が帰京したことにより収録総句数は大幅に増加している。鳴雪の収録数の割合は前年に比してやや増加、虚子も碧梧桐も増加している。特筆すべきは、佐藤紅緑、福田把栗、石井露月という新しい俳人が台頭してきていることである。

おわりに

鳴雪の俳句を学ぶ熱心さは他の追随を許さず、また、古典や漢籍の素養に裏打ちされた俳論は、子規の俳句革新運動に大きく寄与したことは間違いない。当初は凡兆の客観句を学び、素直な写生句を詠んでいたが、次第に本来の好みの王朝文化の雅語、中国文化の漢語をも用い、子規の批評には係わらず、新旧合わせ持つ鳴雪独自の句境を築いていっているといえる。

（注）

1　和田克司　「なじみ集」編集とその問題点　『なじみ集』復刻版解説　松山市立子規記念博物館　平成二十四年三月三十一日

第二章　鳴雪と凡兆

第一節　明治時代に刊行された『猿蓑』

はじめに

明治二十五年に鳴雪が『猿蓑』を読んで凡兆の句から写生を学んだということは従来から指摘があり、また、「近代における凡兆の評価は内藤鳴雪に始まる。」（注１）という論述も見られるが、具体的に鳴雪の凡兆評価やその影響について論じたものは少ない。

そこで本項ではまず、明治時代に刊行された『猿蓑』およびその注釈書の刊行について検討する。そして、埋もれがちな鳴雪の功績を契機として広がった明治時代の『猿蓑』及び凡兆の受容について考えていきたい。

⑴『猿蓑』の注釈書

『猿蓑』の注釈書を調べるのに際しては久富哲雄監修『芭蕉研究資料集成明治篇』（平成四年　クレス出版）・国立図書館整理部編『国立国会図書館所蔵明治期刊行図書目録』（昭和四十八年　国立国会図書館）・天理図書館編『綿屋文庫連歌俳諧書目録』（昭和六十一年　天理大学出版部）を参照した。

子規が「俳諧三佳書序」（注２）で「凡兆を特に抜き出して誉めた事は昔から聞かぬ」と述べているように明治二十年代までは次に示すように『猿蓑』の連句（注３）についての注釈が多い。

主な注釈書に、桃支庵指直纂述・其角堂永機校正『俳諧猿蓑付合注解』（明治二十年七月　矢部楨藏）、楠蔭波鷗著『俳諧七部集講義付初懐紙』（明治二十六年十二月　米田ヒナ）などがある。前書は主として連句の付合の注解をしたもの、後書は七部集中の連句と『初懐紙』の百韻に注釈をしたものである。連句の注釈書が多いことは、俳句が盛んになったとはいえ、まだまだ連句の需要が高かったことを示しているといえるだろう。

また、凡兆の評伝や作品を紹介したものに籾山鈞著『俳諧名家列伝』（明治二十六年三月　博文館）がある。これは芭蕉を巻頭に略伝と俳句を掲載したものである。凡兆については「氏名は詳にせず」（同書　九十頁）として「妻羽紅と共に蕉門に遊び後年猿蓑集の選に加はる」が、悪人と交わり獄に入ったりもしたが「何時しか亡命して終に其往くところを知らず」（同書　九一頁）と略記している。俳句は三十句収録され、その大半は『猿蓑』の句であるが、『類題発句集』や『荒小田』からも数句収められている。同時期、子規も近世俳人を中心に、各俳家の代表句二十句を「一家二十句」（注４）として選んでいる。凡兆は二十一句あるが、そのうち二十句は『猿蓑』、残りの一句は『荒小田』（『小柑子』にも収める）からである。因みに、両者の選んだ句の重複は十六句である。

明治時代には『猿蓑』のみを取り上げた注釈書は河東碧梧桐『俳句評釈』（明治三十二年五月十七日　新声社）『続俳句評釈』明治三十二年十一月　新声社）があり、碧梧桐以後明治時代には『猿蓑』のみを取り上げた評釈書は見あたらない。鳴雪の『七部集俳句評釈』

（明治三十八年六月　大学館）のごとく、七部集の評釈の中において『猿蓑』を取り上げているのがある。

⑵『芭蕉全集』の中の「猿蓑」

明治三十年代になると芭蕉全集が編まれ、老鼠堂永機・阿心庵雪人校訂『俳諧文庫第一編芭蕉全集』（明治三十年九月　博文館）などがある。この書の中には「猿蓑集」や内田魯庵著「芭蕉庵桃青伝」が収録されている。魯庵著は明治時代最初の長編芭蕉伝記書であるが、凡兆については「凡兆は金沢の人にして京に住し医を業とす。妻羽紅と共に才名高く一代の佳句頗る多し」（同書　二九一頁）と簡単に触れたのみである。他に、沼波瓊音著『近代文学叢書蕉風』（明治三十八年五月　金港堂書籍株式会社）などもあるが、芭蕉とその門人の略伝と作品を掲載したものが多い。

因みに、沼波著の凡兆の章には、伝記として次のように記されている（同書三二三から三三一頁）。

凡兆（俳林小伝に初号加生）は加州金沢の人、都に出で医を業とす、壮歳より蕉翁に就て後猿蓑の撰に加はる、云々何れの頃にや罪ある人と交り、己も俱に獄をつながる、云々、かくて身のあかし立ちて縲絏の苦を免がる、されども此世をあさましとや思ひけむ、果は亡命して終る所を知らず

続いて、凡兆、芭蕉、去来三人による連句、発句として春十句、夏十二句、秋十五句、冬十一句、文章として「柴売説」が掲載されている。現在伝えられて凡兆の句の総数は百四十九句（注５）であるから、三割強の句数である。

おわりに

以上、明治時代の『猿蓑』に関した刊行書は少ないように思う。その理由として次の二つのことが考えられる。

一つ目は、凡兆が「蕉門十哲」に入っていないことである。鳴雪も「世に唱へる蕉門十哲に凡兆の洩れて居るが不平でたまらず」と残念がっている。去来とともに『猿蓑』を編

纂し、しかも集中に一番多く俳句が採録されている凡兆が洩れていることへの鳴雪の不平も頷ける。また、高木蒼梧はその著『評釈凡兆俳句全集』（大正十五年九月十五日　資文堂書店）で「鳴雪翁嘗て芭蕉十哲の像に賛して曰く、此まとゐ凡兆の居ぬ寒さかな　と」と、凡兆が蕉門十哲に入っていないことを詠んだ鳴雪句を伝えている。鳴雪がいかに凡兆に力を注いでいたかがわかるエピソードであろう。

二つ目は、この章では触れずに後述するが、子規一派が「蕪村派」と呼称されるほど蕪村に熱中し蕪村ブームを起こしたことで、明治俳壇の関心が次第に蕪村へと傾いていったことが考えられる。とりわけ明治三十年前後には蕪村関連の書物が多く刊行されている。

（注）

1　小室義弘『俳人凡兆の研究』一九九三年十二月有精堂出版

2　『俳諧三佳書』の序文は出版（明治三十二年十二月二十日ほとゝぎす発行所刊）に先立って明治三十二年十二月十日発行の「ホトトギス」に掲載されている。因みに、三佳書は去来・凡兆編『猿蓑』（元禄四年刊）、几董編『続明烏』（安永五年刊）、維駒編『五車反古』（天明三年刊）である。

3　連句の名称は江戸時代にも、発句と区別した意味でかなり広く用いられていたが、当時は俳諧、正しくは俳諧之連歌の名で呼ばれるのが一般的であった。（『俳文学大辞典』）連句が定着するのは明治三十年代であるが、本稿では連句で統一する。

4　子規が俳句分類と同時に近世の俳人を中心に「一家二十句」として各俳人の代表句二十句を選んだもの。初稿本は明治二十五年夏、再稿本はその後四年間かけて四四〇余名を追加。なお、同様のものに近世俳人百三十三名収録した「俳家全集」があり、凡兆句は六十二句収録されている。（『子規全集』第二十一巻　講談社・『子規全集』第十二巻　アルス）

5　注1に同じ。

第二節　碧梧桐の『俳句評釈』

はじめに

明治三十年代で特筆すべきことは、明治三十二年に碧梧桐が『猿蓑』のみ取り上げ全句

を評釈した『俳句評釈』（新声社　明治三十二年五月十七日）『続俳句評釈』明治三十二年十一月　新声社）が刊行されたことである。『俳句評釈』は『猿蓑』の冬と夏の部（本項では、『俳句評釈』金尾文淵堂　明治四十年七月二十一日再販を用いた）である。これは明治時代において最初の『猿蓑』の俳句を全句評釈したものである。碧梧桐の『俳句評釈』が出るや否や子規は同年の「ほとゝぎす」六月号（第二巻第九号）から八月号（第二巻第十一号）までの三回・四十六句について、鳴雪も同年の「ほとゝぎす」七月号（第二巻第十号）から十二月号（第三巻第三号）までの六回・百三句について、『俳句評釈』の批評を行っている。

この碧梧桐の『俳句評釈』についての研究は復本一郎氏の「子規の愛した『猿蓑』」（『国文学解釈と鑑賞』七十五　至文堂　平成二十二年十一月）がある。復本氏は『俳句評釈』の書誌情報、『猿蓑』の書誌情報、碧梧桐が使用したテキストなどを明らかにされたうえで、この『俳句評釈』が子規の逆鱗に触れたことについて考察されている。復本氏の論考は子規に主眼が置かれているため、鳴雪については、ただ、鳴雪も明治三十二年の「ほとゝぎす」に六回にわたって「碧子の俳句評釈」と題した碧梧桐の『俳句評釈』の批評をしている、とのみ指摘されているだけである。

そこで本項では、復本氏の研究を踏まえながら碧梧桐の『俳句評釈』の批評を「ほとゝぎす」誌上で六回行った鳴雪評と子規評とを比較しながら検討する。

⑴　子規の「俳句評釈を読む」

子規は「ほとゝぎす」第二巻第九号（明治三十二年六月二十日）の一頁に「俳句評釈を読む」と題して、「一遍通り読んで感じた事が色々あるが先づ第一に感じた事は自分が嘗て思ふて居つたのとまるでまるで違つて思ひもよらぬ評の多い事である」と、先ず、子規とは違う評釈であると言っている。その理由として、子規は芭蕉の七部集とくに『猿蓑』で俳句開眼をしたのであるが、碧梧桐は蕪村や几董から出発しているため蕪村の時代である天明を基準にして評釈をしている。碧梧桐は元禄時代と天明時代の俳風の違いを理解していないと先ず、その前文で酷評しているのである。

また、碧梧桐は俳諧史を知らず、元禄の特色を理解していない。談林の後の蕉風は、地口洒落を退け、趣味の上に俳句を置いたことを知らない、と手厳しい論調である。

子規は碧梧桐の評釈から四十六句について取り上げている。その例を少しあげる。

碧梧桐の評釈　（『俳句評釈』金尾文淵堂　明治四十年七月二十一日再販　六四頁）

茶湯とてつめたき日にも稽古かな　江戸　亀翁

（釈）「つめたき」にて冬の季を現はす、茶湯とは抹茶、濃茶等茶礼の事で、此句は茶といひ湯といふ字義の暖かいにも係らず、つめたい日にも稽古するといふ、文字上のかけ合せの句である。所謂檀（ママ）林派の遺調である。

（評）文字の地口に過ぎないで、さらに句意の妙がない。宗因が「小家なれど膝をゆるりの火燵かな」など詠じたのと同じで、一向とるに足らない。

この碧梧桐の評釈にたいして、子規は次のように述べている（「ほとゝぎす」九号　四頁）。

此句を解釈して『茶と云ひ湯といふ字義の暖いにも拘らず、つめたい日にも稽古するといふ文字上のかけあはせの句である所謂談林派の遺調である』とあるは大に誤つて居る。屢々言ふ如くかけあはせの句又は談林派の遺調といふものは猿蓑には全く無い。子規は、『猿蓑』には掛詞や言葉の語呂合わせのような談林派の遺調が蕉風に残っていることは断じてないと、碧梧桐が元禄を理解していないことを批判しているのである。これは、子規が冒頭に述べたこと同様の内容である。

もう一例みてみよう。

碧梧桐の評釈　（『俳句評釈』金尾文淵堂　明治四十年七月二十一日再販　一二一・一二二頁）

やりくれて又やさむしろ歳の暮　其角

（釈）「やりくれて」は俗にやりくるなどといふ、活計の不足をあれこれとくり廻し補ふ意、「さむしろ」は小さな狭い筵のこと、歳暮であるから種々金策もしないではなかつたが、借りを払ひ、掛けをやりては、又たもとの狭筵一枚になつたといふのである。

（評）斯く言ひ了せても何等の趣味もない。況して未だ充分言ひ了せて居ないので、之を解するには非常の智識を要するのであるから元来何の事だか解らないといふも憚らない句である。凡て元禄の俳人は「歳暮」といふに向て、たゞ金にこまるとか明日

が元日であるとかいふ事より外に趣味を見出し得なかつた、之は技術が進まなかつた證拠で、斯る先づ理性を動かすものに対しては、矢張陳套な趣味を脱し得なかつたといふ事が判然する。

この碧梧桐の評釈にたいして子規は、次のように論じている(「ほとゝぎす」十号　六頁)。

此句の解『やりくれて俗にやりくるなどといふ、活計の不足をあれこれと廻し補ふ意』とあるは『狭筵』と撞著して居る。『やりくれて』は俗に『ぐれる』といふ事にて物の齟齬するをいふならん。さうでなくては『又や狭筵』が利かぬ。

子規は「やりくれて」の語を、碧梧桐が家計のやりくり、と解したことに異を唱え、借りを払い、掛け買いも払ったのであれば「狭筵」と矛盾する、と論じているのである。子規は「やりくれて」は「ぐれる」つまり、見込みがはずれて齟齬が生じた、としている。そうしなければ「又や狭筵」の効果がない、と説いている。「やりくれる」の俗語「ぐれる」の確認が出来なかったが、碧梧桐の解釈は、年末にやりくりをして支払いを終えたら元の狭筵一枚の寝床になってしまった、子規の解釈は見込みがはずれて元の「狭筵」で寝ることになった、というものである。子規と碧梧桐の「やりくれて」の捉え方の違いから生じた批判といえるだろう。

(2)　鳴雪の「碧子の俳句評釈」

鳴雪は子規が「俳句評釈を読む」を「ホトトギス」第二巻第十号（明治三十二年六月二十日）に発表した翌月号の「ホトトギス」第二巻第十一号（明治三十二年七月二十日）に一頁から五頁上段まで「碧子の俳句評釈」と題した評論を掲載している。冒頭で、鳴雪の俳句入門の手引き書は『猿蓑』であったと述べ、それ故に碧梧桐の『猿蓑』の評釈本の評論をするのだ、とその理由を記している。

鳴雪は碧梧桐の『俳句評釈』から百三句選んで評釈し、そのうち子規が批評した句と重複しているのは四十六句のうち三十六句である。これは、鳴雪よりも子規が一か月早く評論掲載を始めたため、鳴雪は子規評に目を通しつつ意見を述べているのである。

前述した碧梧桐と子規の評釈句「茶湯とてつめたき日にも稽古かな　　江戸亀翁」に

対して、鳴雪は次のように述べている。

子規子の言もあるが、故さらに『つめたき日』と云つた処は、多少裏面に掛け合せの意もあるかのようで、碧子の説も全く捨てられない。

（「ホトトギス」第二巻第十一号　十六頁）

鳴雪は、子規が『猿蓑』には掛け合せは全くないと断じていたことに異論を唱え、碧梧桐の解釈に少し賛同しているのである。

鳴雪は先述の「やりくれて又やさむしろ歳の暮　　其角」の碧梧桐と子規の俳句評釈について、次のよう述べて掛け合せ（掛詞）について言及している。

両子の説共に僕の意を獲ない。僕の考えでは、『くれて』『さむし』は皆掛け詞と見るので、遣り繰りしてそして日が暮れて、又もや寒き庵の狭筵上に寝ることか我が年のくれと、口合ひのように吐き散らしたのだ。格別好い句とも思はないが、其角が面目は躍然と現はれてゐるようだ。

（「ホトトギス」第三巻第一号　四頁）

鳴雪は、「やりくれて」の解釈を子規と碧梧桐とは違う別の説を唱えているのである。碧梧桐はその著『俳句評釈』の中で、「やりくれて」は生計の遣り繰りと捉え、子規は見込みがはずれて齟齬が生じた、と捉えていた。しかし、鳴雪は碧梧桐と同じ遣り繰りと捉えた上で、さらに◎印をつけて、「くれて」を「繰り」と「暮れ」、「さむし」を「寒き」と「狭筵」の掛詞と捉えて解釈しているのである。鳴雪は、『猿蓑』に掛詞は全くないという子規の説には反対しているといえる。

もう一例、違う面の例をみてみると、鳴雪は、「我妹子が爪紅粉のこす雪まろげ　　探丸」の碧梧桐と子規の俳句評釈について、次のよう述べている。

碧子は『恋の句だ』と云はれ、子規子は『恋でなくてもよい』と弁せられた。成程深く恋するとまで云ふにも及ぶまいが、雪まろげに爪紅粉の跡を見て、その人を懐かしく思つてゐるには相違ない。僕はいつも之を恋味と云つてゐる。この恋味は即ち風雅の一材料だ。

（「ホトトギス」第二巻第十二号　明治三十二年九月十日　三頁）

鳴雪は、碧梧桐が「恋の句」とするのを子規が「恋でなくてもよい」と評したことにたいして、ほのかな恋は風雅の材料である、と恋味を説いている。

このことは、明治二十九年の「日本人」第二十七号で子規が鳴雪を「恋の句を好む。恋の句とはいへど其実、表に現はれたる恋よりも、寧ろ恋すべき人の有様を何となくおぼめかしが善きなり。」（四三頁）と評した所以であろう。

おわりに

碧梧桐が明治三十二年五月に『猿蓑』の冬の部・夏の部の俳句について評釈した『俳句評釈』（新声社　明治三十二年五月十七日）を刊行した。

碧梧桐は「はしがき」の付記に「此書の脱稿した後一応先輩の人々に校閲して貰ふ筈であつたが、時日の切逼の為めそれも出来なかつた」と記しているので、子規や鳴雪の校閲を経ないままの出版だったのだろう。その分、子規の批判も強まったものと思われる。「ほとゝぎす」に掲載された子規と鳴雪の批評は、碧梧桐との違いを論じるという趣旨のもとに述べられているので、碧梧桐の評釈に高い評価はしていない。

鳴雪と子規の『俳句評釈』にたいする評価や批評の違いを検討したことによって、鳴雪の掛詞容認やほのかな恋は風雅の材料だ、とするような独自性が明らかになった。

第三節　鳴雪句の『猿蓑』からの影響

はじめに

これまであまり論じられてこなかった鳴雪と凡兆について考察する。本項ではまず、鳴雪が凡兆を知る前後の鳴雪句の変化はどうであったか、具体的に鳴雪句を確認していく。次に子規の場合はどうであったかその俳句を確認し、最後に鳴雪の凡兆俳句観を検討する。

⑴　『猿蓑』に出合う前後の鳴雪

明治二十二年五月、鳴雪は文部省に勤めながら常盤会寄宿舎の監督に就任したのであるが、明治二十四年四月には文部省を辞して（注１）監督を専らの職務とするようになる。

不眠症に罹るほど苦しんだ仕事から解放された鳴雪は、前書付の次のような句を詠んでいる。

官を罷て

帰りなんいざ花も見ん月も見ん　　鳴雪

（渡辺水巴「内藤鳴雪の追憶」『俳句講座』第八巻　改造社　昭和七年十二月二十日　三一一頁）

全体的に弾むようなリズムと「帰りなん」「いざ」「花も見ん」「月も見ん」と畳み込むどのフレーズにも強い意志や希望が現れ出ている。また、「帰りなんいざ」は、陶淵明の「帰去来の辞」の冒頭の部分であるが、この辞は官を辞して帰郷する決意と喜び、そして晴耕雨読の田園生活の自由な心境がうたわれている作品である。まさに鳴雪の心境でもあるわけで、漢籍を修得している鳴雪らしい喜びに溢れた句といえる。

さて、官を辞して身体的にも時間的にも余裕が生れた鳴雪は、時々俳句を作っては子規に見せるが、子規は一向に褒めない。それでも二十五年一月に作った二句を漸く褒めたという（「ほとゝぎす」第二巻第十号　明治三十二年七月　一頁）。その二句とは次に示す作品で、この頃の鳴雪は芭蕉をもじった「破蕉」の号を用いている。

元日や佛になるもこの心

四十五の夢をさまして初日出

さらに続けて「どうかして一番諸子の意表に出る進歩」を目指して『猿蓑』を研究し、次のような句を作り子規に見せた、という。

①山寺は松より暮るゝ時雨かな

②しぐるゝや母屋の小窓は薄月夜

③初霜をいただき連れて黒木売

④から〳〵と日は吹き暮れつ冬木立

⑤吹きはづす板戸の上を霰かな

句意は省くが、一月の二句は、「仏になるもこの心」あるいは「夢をさまして」と主観を

表出させ、また、「仏心」を詠み込んで機知を働かせたり、旧態然とした句といえる。

では、鳴雪が熟読したという『猿蓑』にはどのような句があるのであろうか。鳴雪に影響を及ぼしたと思われる句を少し「冬」の部からあげる。

まず①の句に対しては、

鵲の橋よりこぼす霰かな　　禾峰

が考えられる。「松より暮るゝ」と「橋よりこぼす」は、「松より」「橋より」という物言いから「暮るゝ」「こぼす」という動詞を用いた場面設定の類似、それに呼応する「時雨かな」と「霰かな」という切字で詠嘆を表し情景を描写しているところにその影響が確認できる。

②の句に対しては、

しぐるゝや黒木つむ屋の窓明り　　凡兆

が考えられる。「しぐるゝや」と「窓」いう同じ語句を用いているところに、また、「窓明り」と「薄月夜」という明りの場面の類似、あるいは、「しぐれ」と「明り」の対比表現など、鳴雪句への影響が確認できる。

③の句に対しては、

襟巻に引首入て冬の月　　杉風

が考えられる。「いただき連れて」と「引首入て」という語調の類似、「黒木売」と「冬の月」という名詞止め、寒そうな人物設定などの構図からその影響を確認できる。

④の句に対しては、

なか〳〵と川一筋や雪の原　　凡兆

が考えられる。「から〳〵と」と「なか〳〵と」という副詞を用いた情景描写や語調、「冬木立」と「雪の原」と名詞止めにした語順、また、俯瞰的な視野にその影響を確認できる。

⑤の句に対しては、

下京や雪つむうへの夜の雨　　凡兆

が考えられる。「板戸の上」と「雪つむうへ」という「上」、その上には「霰」と「雨」という類似の場面描写、しかも「霰」「雨」へと焦点を絞ってゆくところなどに影響が確認できる。

こうしてみると、鳴雪は主観をあらわす言葉を用いず視覚的な描写をしていることがわかる。凡兆の俳句が叙景描写にすぐれているといことは既に先学の指摘するところであるが、鳴雪は『猿蓑』から、場面・語句・語調・語順などを学びながら客観句に目覚めたのである。こうして見ると凡兆の影響が判然とする。

鳴雪は「僕が俳句入門の手引は猿蓑だ」といい、また、「七部集中の純客観句は凡兆一人で其半ばを占め居ることを勘定した」（注２）とも述べているが、これは、鳴雪が熱心に凡兆句を研究していたことを窺わせるものである。

鳴雪の凡兆研究はこの後も続いており、明治四十一年三月、四月の「文章世界」（第三巻第四号・第五号）に「『猿蓑』の客観の句」「『猿蓑』の主観の句」を発表したりしている。明治時代に『猿蓑』全句の評釈書は碧梧桐の『俳句評釈』のみであるが、鳴雪が先頭にたって凡兆研究をしていたことは、時代は下るが、芥川龍之介が鳴雪の追悼文に次のように述べていることからも推察することができる。

> ずゐぶん以前に鳴雪句集を拝見し、又鳴雪翁の文章から凡兆を読んだことを考へると、何か鳴雪翁の没せられたのは明治の俳諧の終つたやうに感ぜられ、妙にはかない心もちがします。　（「枯野」第六巻第四号　大正十五年四月号）

鳴雪は明治俳壇が蕪村ブームに沸く中にあって、『猿蓑』とりわけ凡兆の研究と顕彰に力を注いでいた稀有な存在であったといえるだろう。

⑵　子規句の『猿蓑』からの影響

鳴雪が凡兆の「純客観句」に注目し始めたのは明治二十五年秋から冬にかけてのことと思われる。では、鳴雪の俳句の師である子規は『猿蓑』や凡兆をどのように捉えていたのであろうか。

子規は「俳諧三佳書序（「ホトトギス」第三巻第三号　明治三十二年十二月十日　一頁）で、俳句分類の行程が『猿蓑』になって「始めて俳句の趣味を自分に感じた」（六頁」と述べている。また、同様のことを「獺祭書屋俳句帖抄上巻を出版するに就きて思ひつきたる所をいふ」（注３）の序文で『猿蓑』との出会いを明治二十四年のこととして「はじめて『猿蓑』を繙いた時には一句々々皆面白いやうに思はれ」たと記し、さらに「二十五年頃は、猿蓑の寂にかぶれて居つて他を知らなかつた」（注４）と当時のことを述懐している。

とりわけ子規は去来に注目していたようで、「城南評論」（明治二十五年四月二十一日・『子規全集』第四巻　講談社）に「向井去来」を発表している。その中で子規は、去来の句が「平易凡庸」なところがよく、そのよさについては次のように評している。

其句の妙処に到つては或は天籟の如く或は神工の如く或は実境を践んで其情景に接するが如く或は名手の絵画を見て無限の余韻を感ずるが如し(『子規全集』第四巻十四頁)

つまり、去来の句は調べがよく、詠まれた情景が感じられ、なお且つ余韻のあるすぐれた句、と誉めているのである。子規の「実境を践んで其情景に接するが如く」よい、要するにありのままがよい、という評言は写生論への序奏と言えないだろうか。

では、子規はどのような俳句を詠んでいたのであろうか。また、子規が鳴雪のように客観を意識するようになったのはいつ頃だろうか。客観・主観の観点から少しみてゆくこととする。因みに、客観・主観という語は明治時代になって西周が作った新しい訳語である。ここで私なりに客観と主観を村治能就編『哲学用語辞典』(平成三年三月十一版)と廣松渉他編『岩波哲学・思想事典』(平成十年三月)を参考にして定義しておく。客観とは主観の立場で捉えられた限りにおける対象のこと、主観とは人間の感情、情意、意欲、知覚、などの認識機能の担い手のこと、である。

さて、明治二十五年十月、鳴雪とともに日光への旅をした子規の「日光の紅葉」(注5)には、つぎに揚げるように華厳の風景を見ながら馬返しまで行き、茶屋で休憩した折の句がある。

①岩山やさけめ〳〵の薄紅葉　　鳴雪
②すがりつく蔦もかづらも紅葉かな　　同
③面白や一尺の木も櫨紅葉　　子規
④日光に紅葉せぬ木はなかりけり　　同

鳴雪の①②の句「さけめ」「すがりつく」は主観ではあるが、これに対して子規の③④は「面白や」「紅葉せぬ木はなかりけり」の表現は鳴雪より強い主観といえる。

もう一例見てみよう。新聞「日本」に掲載された子規の「根岸庵小集の記」(明治二十六年一月十八日)の一節に「いでや難題に遇はずんば誰か我腕のさび栞を知らん」と「さび栞」を強調しながら、鞴の句をあげている。

あかゞりや塩売りありく父なし子　　鳴雪

あかゞりやまだ新嫁のきのふけふ　　子規

「あかゞり」とはあかぎれの古語であるが、子規句の「まだ」という副詞は主観を含んでいる。ここではまだ子規に客観の意識がはっきりとは見られない。むしろ鳴雪の方が客観的といえる。子規はどの時期に客観を意識するのようになったのだろうか。子規の俳論を年代順に調べる。

子規の俳論で初めて主観・客観の語を用いて論述されているのは、次の⑤「俳諧麓の栞の評」(『獺祭書屋俳話』と思われる。「獺祭書屋俳話」は、明治二十五年六月二十六日から同年十月二十日まで三十八回新聞「日本」に連載された。その主な内容は、先ず俳諧史をたどりながら其角、嵐雪、千代女、芭蕉などの作品評価をし、後半には旧派宗匠の撫松庵兎裘と其角堂機一の著書の批評をしたものである。

その撫松庵兎裘著『俳諧麓廼栞』を批評した一文が⑤である。『俳諧麓廼栞』は明治二十五年七月十六日、同楽堂から刊行された俳諧文法についての著書で、子規は刊行されたばかりの著書の批評を行っているのである。

⑤明治二十五年九月十三日「俳諧麓の栞の評」(『獺祭書屋俳話』新聞「日本」)

第五頁に「通常ノ句体ニ於テ切字ヲ用ヰルハ無形ナル風情ヲ以テ有形ナル風姿ヲ判断センガ為ニシテ詩ニハ之ヲ実虚ト称ヘ無形ヲ以テ有形ヲ裁制ケリ」云々とあるが如きは説き得て甚だ容易なるが如きを覚ゆと雖余は再三再四読み返して猶ほ其の何事なるやを解する能はず。徒に神文を読み読経を聴くの感あり。無形の風情とは主観的観念の如く有形の風姿とは客観的万象の如し。然れども切字なる一虚語が此主客両観の間に立ちて何程の功用を為すかを怪まざるを得ざるなり。

子規のいう第五頁とは、「句法大意」の章で兎裘が切字について説いた箇所で、子規はこの兎裘の切字論を批評した際に主観的・客観的という語を用いているのである(注6)。またこの一文から、子規の考える主観は観念であり、客観は万象であるといえる。

次に⑥「我邦に短篇韻文の起りし所以を論ず」をみてみる。

⑥明治二十五年十月三十日、「我邦に短篇韻文の起りし所以を論ず」(「早稲田文学」第二十六号)

吾人々間が主観的に有りて善悪混淆する無数の観念の分析、又は其観念が表発して外部に生じたる客観的の事実関係等を以て材料となさずして偏に山光水色若しくは花木竹草の如き幾多の長時間に微妙の変動を成就する客観的の万象が直接に吾人の心裡に生じたる表象を取りて、これに極めて僅少の理想を加へ以て一首の韻文を構造するに過ぎざりしを以てなり

これは、日本の韻文が叙事よりも叙情を、叙情よりも叙景を主とするということを、主観的・客観的という語を用いて叙景のあり様を説いたものである。叙景が主となるのは「人間社会の現象を模写」せず、「簡単にして静黙なる天然(ネーチェア)を模写」するためとし、その模写の姿勢に主観的・客観的の語を用いて韻文の特色を述べたものである。従って、ここでの論は俳句評ではない（注7）。

次の⑦「芭蕉雑談」は、明治二十六年十一月十三日より明治二十七年一月二十二日まで「日本新聞」に二十五回連載された。その主な内容は、芭蕉句の批評を行いながら芭蕉を神格化した旧派宗匠を批判したものといえる。

⑦明治二十六年十一月二十二日、「芭蕉雑談」新聞「日本」

眼に由りて観来る者は常に複雑に、耳に由りて聞き得る者は多く簡単なり。古池の句は単に聴官より感じ来たれる知覚神経の報告に過ぎずして其間毫も自家の主観的思想、形体的運動を雑へざるのみならず而も此知覚の作用は一瞬時一刹那に止まりしを似て此句は殆んど空間の延長をも時間の継続をも有せざるなり。

この文中で、子規は「古池や蛙飛びこむ水の音」の芭蕉句は単に聴覚による報告の句であり、「主観的思想」がないと評している。ここでの主観的思想がないとは、子規によれば「妄想を絶ち名利を斥け可否に関せず巧拙を顧みず心を虚にし懐を平にし佳句を得んと執着することを無く」すということらしい。

子規の主観的という語の用い方は、俳句評というよりは作句態度、あるいは作句の発想の仕方についての論といえ、この時期はまだ哲学的な視点であるといえる。また、子規は続けて「古池の句は実に其ありの儘を詠ぜり、否ありのまゝが句となりたるならん」と芭蕉の句を「ありのまゝ」という観点から解明しているところは注目すべき点である。

次の⑧「地図的観念と絵画的観念」は、蕪村句「春の水山なき国を流れけり」の解釈を

巡ってなされた子規と鳴雪の議論が発端となって論述されたもので、子規はその中で「「山なき国」とは文学的客観の景象に非ずして地理学的主観の抽象に似たるなり」（明治二十七年八月六日　新聞「日本」）と述べている。子規は「文学的客観」を「景象」、「地理学的主観」を「抽象」として論じている。つまり、客観を景色のさまや物事のありさまと捉え、主観を現実から離れて具体性に欠けているさまとして捉えているといえる。

ここで注目されることは、子規が蕪村句を絵画的観念という視点でみている点と、蕪村句の解釈の違いによって導き出されて客観・主観という概念で論述していることである（注8）。この絵画的というところは、中村不折との出会いが影響しているだろう。子規は不折との出会いを、「当時余は頑固なる日本画崇拝者の一人」であったが、「不折君に逢ふ毎に其画談を聴きながら時に弁難攻撃をこゝみ其度毎に発明する事少からず。遂には君の説く所を以て今迄自分の専攻したる俳句の上に比較して其一致を見るに及んでいよ〳〵悟る所多く」（「墨汁一滴」新聞「日本」明治三十四年六月二十五日　『子規全集』第十一巻　二一九頁）と、不折と議論してゆくうちに、西洋画の写生を理解していったことを述懐している。また、「日本の画というてもずつと昔金岡とか少し下つて住吉土佐の起つた頃の画は、矢張写生であつたので、其写生が今日の西洋派の写生と違ふて居るのは、ことさらに違へたのでは無く、思ふやうに写生が出来なかつたのである」（「文学美術評論　写生、写実」「ホトトギス」明治三十一年十二月号　四三頁）と写生の技術を日本画は理論的に知らなかった、という経緯をしめして、子規は、日本画の写生の眼から西洋画の写生の眼へ転換したといえる。

次の⑨「俳諧大要」は、明治二十八年十月二十二日から十二月三十一日まで新聞「日本」に二十七回連載された子規の目指す新しい俳句を指南した論である。

⑨明治二十八年十月二十四日、「俳諧大要」新聞「日本」

意匠に主観的なるあり客観的なるあり主観的とは心中の状況を詠じ客観的とは心象に写り来りし客観的の事物を其侭に詠ずるなり

子規はまず「俳句は文学の一部なり文学は美術の一部なり」と述べた後、「俳句の種類」の項目で⑨のように主観的とは「心中の状況を詠じ」、客観的とは「心象に写った事物そのままに詠じ」（注9）ると定義しているのである。また続けて、作句上においては実景を写すこと、ありのまゝの事物をありのまゝにつらねること、とも説いている。

「俳諧大要」で主観・客観の語は用いられているが、俳句評とはいい難く、ここでの子規の視点は写実に重きがおかれているといえる。

次の⑩「我が俳句」は、明治二十九年七月二十五日と八月二十五日の二回「世界之日本」の掲載されたもので、第一回では自身の経験をもとに美を嗜好（子規によれば、各自の美と感ずる所の活動）として哲学的に「美の客観的観察」と「美の主観的観察」について論じている。第二回には次のよう述べている。

⑩明治二十九年八月二十五日、「我が俳句」「世界之日本　第三号」

初めは主観的なりし者漸く変じて客観的に傾けり。更に詳に言へば初めは自己の美と感じたる事物を現さんとすると共に自己の感じたる結果をも現さんとしたるを終には自己の感じたる結果を現すことの蛇足なるを知り単に美と感ぜしめたる客観の事物許りを現すに至りたるなり。

ここでは、主観的なものが俳句の上達に従って客観的になっていく、ということを説いている。つまり、自己が美と感じたものではなく、美と感じさせられたものを現す、というのが客観的であるという。子規の俳論に写実とともに客観的の語が用いられるようになってきている。

次の⑪「明治二十九年の俳句界」は、明治三十年一月二日から同年三月二十一日まで「日本新聞」に二十四回連載されたものである。先ず、明治二十九年一年間の俳句界の特徴を述べた後、碧梧桐と虚子の俳句を十五回にわたって論じている。次に、内藤鳴雪や石井露月、夏目漱石等日本派の俳人を評したものである。

⑪明治三十年一月四日、「明治二十九年の俳句界」　新聞「日本」

碧梧桐の特色とすべき処は極めて印象の明瞭なる句を作るに在り。印象明瞭とは其句を誦する者をして眼前に実物実景を観るが如く感ぜしむるを謂ふ。故に其人を感ぜしむる処恰も写生的絵画の小幅を見ると略々同じ。同じく十七八字の俳句なり而して特に其印象をして明瞭ならしめんとせば其詠ずる事物は純客観にして且つ客観中小景を択ばざるべからず。例

赤い椿白い椿と落ちにけり　　碧梧桐（等八句）

ここで子規は、写実ではなく写生の語を用いて、印象明瞭なる句は写生的絵画と同じで、その詠まれる事物は「純客観」で小規模な風景画である、と論じている。つまり、写生的絵画は「純客観」であり、写生絵画的俳句は「純客観」である、と論じているのである。子規は、この碧梧桐の俳句によってその作品に現れている特質を客観的という語によって見極め、俳句評を行っているといえる。

最後に⑫の「俳人蕪村」をみてみる。「俳人蕪村」は、明治三十年四月十三日から十一月二十九日まで「日本新聞」に「俳人蕪村拾遺」二回を含めて十九回連載された。この論の前半は、子規が「積極的美」「客観的美」「人事的美」「理想的美」等の項目ごとにその観点から蕪村句の特徴を述べ、後半は「用語」「句法」「句調」等の項目で蕪村句の表現を分析したものである。

⑫明治三十年五月二十八日、「俳人蕪村」　新聞「日本」

芭蕉の俳句は古来の和歌に比して客観的美を現すこと多し。しかも猶蕪村の客観的なるには及ばず。極度の客観的美は絵画と同じ。蕪村の句は直ちに以て絵画となし得べき者少からず。

これは、「客観的美」についての一文で、上世には主観的美、後世は客観的美の文学が多い。つまり、上世は自己の感情を直叙し、後世は感情を直叙せずその原因たる客観の事物を描写する、としているのである。そして右の引用箇所で、芭蕉に比して蕪村の俳句が圧倒的に客観句が多い、また、絵画となる俳句が多いと述べている。⑫の俳句評を蕪村句にも関係づけて論じているといえる。

以上みてきたように、子規の俳論における主観・客観の視点の推移は、明治二十五年の当初は切字論や韻文の特色におかれ、明治二十六年、二十七年は作句の発想や作り方におかれ、理論的哲学的である。明治二十八年の「俳諧大要」では実景を写すことにも視点を転じ、明治二十九年の「我が俳句」では写実と客観に視点を移している。そして「明治二十九年の俳句界」で碧梧桐の印象明瞭な俳句によって、子規の視点は写生的絵画と客観となっている。明治三十年の「俳人蕪村」では、蕪村句に絵画となる客観句が多いことを指摘し、子規の俳句評に於いても視点は絵画と客観におかれている（注１０）。

⑶　鳴雪の凡兆句評

これまで鳴雪が凡兆の句を「純客観」と評した以外あまり論じられてこなかった鳴雪の凡兆句評について考察する。鳴雪が凡兆句をどのように解釈し批評しているのか、見ていきたい。その前に少し蕪村と鳴雪・子規のことに触れておく必要があるだろう。子規を中心とした運座の席上で蕪村句がうまいという評判から鳴雪の発案で賞金をかけて「蕪村句集」を探索した。この賞金をかけたことや、鳴雪が「蕪村句集」を二円で購入したことなどが大きな話題となった。これは明治二十六年のことである。

子規は、明治二十六年一月五日の新聞「日本」に発表した「歳旦閑話（四）」の中で、蕪村は明和・天明期の俳諧再興に力のあった俳人の一人として称賛したのを皮切りに、同年十二月の「芭蕉雑談」では「佳句が最も多きは蕪村」、あるいは、二十七年五月の「俳諧一口話」、翌年の「俳諧と武事」、二十八年十月の「俳諧大要」などで蕪村を称揚し、三十年四月からは新聞「日本」に「俳人蕪村」の連載を開始した。子規以外でも、二十九年七月に三森松江編『蕪村句文集』が明倫社から（序文で暗に子規たちの蕪村熱を批判）、同年十二月に松窓乙二注釈『増訂蕪翁句集』が万巻堂から、三十年一月に秋声会校訂『頭註蕪翁句集拾遺』が万巻堂からそれぞれ刊行されている。さらに、子規が「俳人蕪村」連載中の三十年九月に大野洒竹著『与謝蕪村』が春陽堂から、同年十月に阿心庵雪人編『校註蕪村全集』が上田屋書店から刊行された。こうしてみると、明治三十年前後の俳壇は蕪村に力を注いでいたことがわかる。

このような蕪村ブームの中で鳴雪が新聞「小日本」に発表した「老梅居漫筆」は注目に値する。第一章第三節でも述べたが、この「老梅居漫筆」は明治二十七年六月二十七日から七月十三日まで七回、新聞「日本」の七月十六日に一回合計八回連載された鳴雪の俳論である。

これは、俳句とは何か、また、よい俳句とは何かということを中心に、歴史や美学や文学的立場に立って簡潔な文で説いた俳論といえる。鳴雪老人の号で七月三日に発表した中に次のような一節がある。

一旨玄にして詞優に余韻限りなきものは凡兆の句なり猿蓑集を繙き細かに諷吟する者は徐く之を細に知らん

よい俳句を作るために『猿蓑』を読むように勧めているのだが、鳴雪は凡兆の句の特徴

を「客観」の他に「旨玄」「詞優」「余韻」と捉えているのである。つまり凡兆の句は趣深く言葉も優雅で余韻がある、と分析しているとも言える。

次に、先述した鳴雪の「碧子の俳句評釈」から鳴雪の凡兆評を少しみてゆく。

時雨るゝや黒木積む家の窓明り　　凡兆

この句の「窓明り」を室内から見た景とする碧梧桐に対して先ず鳴雪は「何処までも外見」と碧梧桐に反対している。碧梧桐は「窓の灯」を「窓明り」と解するのは難しいから室内から、としているのである。「窓明り」を室内から見た景とする説と、戸外からながめた景とする説は従来からあるが、鳴雪は室内から詠んだとすると「黒木積む家」に無理が生じる点をついている。そして、この句は「純客観とするに欠点が多くなる」、「純客観の句として疵がつけたくない」とまで述べている。恐らく初めて鳴雪が「純客観句」としてみた句がこの凡兆の句ではないだろうか。また、この句は「幽玄に適した趣」のある句とも評している。鳴雪はこの句を「純客観」と「幽玄」と評しているのである（注１１）。

禅寺の松の落葉や神無月　　凡兆

鳴雪は「碧子此句の解は大いに僕の心を獲た」と碧梧桐には何も反対せず、「此句は何処となく言はれぬ点に趣があつて。玄之又玄」と評している。奥深く深遠な趣のある句、としているのである。ところが子規は、凡兆の句は材料の取合せにはいつも密接な関係があるのにこの句には「是非十月でなければならぬとの点が何処にもない甚だばつとしてゐる」と評していたという。しかし、鳴雪はその「ばつとした処を却て取つて」子規の解にはやや理屈があり、子規には服さなかったと述べている。この場合の「ばつ」とはつじつまのことだろう。ともあれ、鳴雪はこの凡兆の句に対しても「趣」と「玄」の語を用い、これらが鳴雪の評価判断の語であったことがわかる。

長々と川一筋や雪の原　　凡兆

鳴雪は「碧子の俳句評釈」で、碧梧桐の「此句は実に元禄の精髄で、又た古今を通じての名句である。」という評に「碧子の非常の称賛は実に有難い」と述べて、「蕪村の俳聖であつて矢張一言も凡兆を称さないのは不審である」（「ほとゝぎす」第二巻第十二号　三頁）と評を結んでいる。鳴雪はここで凡兆の句評はしていないが、鳴雪著『俳句評釈』（忠誠堂大正十四年九月二十八日）の中で同句を次のように評している。

原中一面が白い雪で埋もれてゐて、其中に一筋丈緑した川が流れてゐる。其の配合の景色が趣きある眺めに成つてゐると言ふのである。これも例の客観的の一幅の画図を

描いたものであつて凡兆得意の意匠である。また言は簡潔にしてさら〳〵と述べられてはあれど、如何にも旷々とした趣きが想像されて冬の消極的の景色の中にも一種の積極的な延々とした精神が表はれてゐる（一〇三・一〇四頁）。

鳴雪は、凡兆の句の配合には趣があり、客観的で一幅の絵画である。詠んでいる言葉も簡潔でさらさらとしているが、想像させる力がある、と述べている。

これら凡兆句にたいする評語を具体的に検討するには、村上霽月に宛てた書簡（明治二十六年八月二十三日）が参考になる。鳴雪はその書簡の中で、雅俗を次のように分類している。

雅　高尚、古、旧キ、少キ、淡泊、簡単、疎撲、軽清、稀有、貧賤、野、田舎、疎漏、拙、負ケ、珍キ、おどけ、悲、間接、失望、逆境、其他、類推

俗　卑下、今、新キ、多キ、原濃、繁盛、文飾、重濁、通常、富貴、市朝、都、緻密、巧、勝、慣レル、まじめ、楽、直接、得意、順境、其他、類推、

鳴雪の分類した「雅」の項が幽玄であり趣があるということである。鳴雪の凡兆句評には純客観とともに幽玄・玄・趣などに重きをおいていたと思われる。

以上みてきたように、鳴雪は子規たちが蕪村に熱中しているときでも『猿蓑』を高評価し、また、凡兆の「純客観」句を称揚していたといえる。子規は鳴雪によって「「我々は凡兆の特色を知り得たるのみならず略純客観句の占領区域を知る事が出来た」（『俳諧三佳書序』）と述べ、鳴雪が近代的な目で凡兆の俳句が客観句であることにいち早く気がついた俳人であることを指摘している（注１２）。そして、鳴雪は明治時代になって翻訳された新しい哲学・心理学用語である客観・主観の概念を凡兆句によって示したことは、この後虚子が唱える「客観写生」にも大きな影響を与えたことが推察できる。

おわりに

鳴雪が明治二十五年の秋、「僕が俳句入門の手引は猿蓑だ」といい、また、「七部集中の純客観句は凡兆一人で其半ばを占め居ることを勘定した」と、盛んに『猿蓑』から客観句を学び、客観的な俳句を詠み始めたにも係らず、子規は「二十五年頃は、猿蓑の寂にかぶ

れて居つて他を知らなかつた」と『猿蓑』から「寂」を学んだと述懐している通り、子規の俳論をみてもまだ主観・客観の意識を俳句実作には応用していない。

子規が初めて用いた主観的・客観的という語は明治二十五年九月の「俳諧麓の栞の評」であるが、これは切字論の中で用いられたものである。鳴雪の凡兆客観句説に子規はあまり影響されることなく、理論的・哲学的視点で主観・客観をとらえていたといえるだろう。松井利彦氏は『正岡子規の研究　下』(明治書院　昭和五十一年六月二十五日)で、凡兆と子規の俳句を比較して「厳密に言えば微妙な違いをもつ二つの作風の存在を『猿蓑』の中に認めていた消息は、明治二十四年から明治二十七年頃までの子規の句に芭蕉の句と同想の句が存在している」と、『『猿蓑』とが全く無縁であったのではなく」と論述しているが、子規の視点が俳句へ大きく向いたのは「明治二十九年の俳句界」の碧梧桐の印象明瞭な俳句に出合ったためと考えられる。

この印象明瞭な俳句は写生的絵画的であり純客観であるという。また子規は、明治三十年の「俳人蕪村」で蕪村句は絵画となる客観句が多いと指摘したが、これは子規たちが共有した蕪村論となったものと考えられる。

(注)

1　松井幸子氏は「内藤鳴雪の半生」(俳文学館紀要6平成二年十月)で鳴雪の文部省辞職の大きな要因として佐幕派、新しい大学教育を受けていないことなどを挙げている。鳴雪自身も英語が不得意のままだった、と述べている(鳴雪翁の俳句閲歴及び逸話「ホトトギス」大正十四年六月号)。

2　鳴雪「碧子の俳句評釈」(「ほとゝぎす」第二巻第十号　明治三十二年七月)

3　子規の自選俳句集『獺祭書屋俳句の帖抄上巻』(明治三十五年四月十五日　俳書堂・金尾文淵堂)の序文や、『俳諧三佳書』(明治三十二年十二月二十日ほとゝぎす発行所刊)の序文に記述がある。

4　子規の「寂」については復本一郎の「子規の愛した『猿蓑』」(『国文学解釈と鑑賞』平成二十二年十一月号　至文堂)にも指摘がある。

5　子規と鳴雪は明治二十五年十月二十九日から三十一日まで日光への旅をした。その紀行文を子規は十一月十一日の新聞「日本」に「日光の紅葉」と題して発表した。

6　復本一郎氏は「兎裘の『俳諧　麓廼栞』と子規の『獺祭書屋俳話』」(「麒麟」十三　平成十六年三月二十五日　神奈川大学)に兎裘と子規の切字論について論じられている。

復本氏は本論と同じ箇所の引用をなされているが、氏の論点は切字にあり、主観・客観については触れておられない。

7　この子規の論が発表された時を同じくして、山田武太郎による「日本音調論」（『日本大辞書付録』明治二十六年十二月十九日、日本大辞書発行所）が刊行されている。その中で主観的・客観的の語の使用例がある。この例は、ある同一個体種間の音調は主観的、他種の影響下の音調は客観的としていて、子規の論とは観点が違う。

8　因みに、明治二十七年二月十一日に創刊された新聞「小日本」の編集責任者となった子規が俳句募集をし、優秀句を新聞に掲載して秀逸句に選評をしているが、その選評には主観・客観の語はみあたらない。しかし、「茂る木を離れて高き社かな」の秀逸句にたいして、「清奇画の如し」と絵画に譬えている。

9　心象とは「想像力の働きによって心に描く具体的な情景」（『日本国語大辞典』）であり、子規が初めて「獺祭書屋俳話」で用いた。

10　この論述ののち、子規は明治三十一年五月五日、「蕪村句集講義」の「水鳥や枯木の中に駕二挺」の句の輪読の際、画になるならば「油画的に即ち純客観的に見ねばならぬので、東洋流の主観主義では困る」と蕪村句を西洋画のそれも油絵とみなして評している。

11　鳴雪「碧子の俳句評釈」（「ほとゝぎす」第二巻第十号　明治三十二年七月）にある。

12　小室義弘氏の著『俳人凡兆の研究』昭和四十六年十二月有精堂出版）にも指摘がある。

第三章　鳴雪と蕪村

第一節　『蕪村句集』の探索

はじめに

『蕪村句集』の探索についての研究は、和田茂樹氏の「子規と蕪村―霽月・鳴雪の『蕪村句集』発見をめぐって―」（正岡子規資料と研究４・昭和四十九年三月）や足立修平氏の「書簡から見た鳴雪の俳論」（子規会誌十七号　昭和五十八年四月十九日）がある。和田氏の論述は、子規一派が蕪村句に注目して『蕪村句集』を発見したこと、また、その顛末を村上霽月宛て鳴雪書簡で検証されている。ただ、子規研究に主眼がおかれているため、鳴

雪の蕪村観などには言及されていない。一方、足立氏は、鳴雪の霽月宛て書簡四通から鳴雪の俳句観と霽月の俳句評等を紹介されている。本項では、このような先行研究を踏まえた上で新たな資料を加えて鳴雪の『蕪村句集』入手の経緯を明らかにし、鳴雪書簡から窺える鳴雪の蕪村観を検討する。

⑴『蕪村句集』発見者へ懸賞

明治二十六年に入ると、鳴雪や子規を中心に「椎の友社」（注1）の伊藤松宇や片山桃雨などとも交わりながら盛んに運座が開かれる。この熱中ぶりについては前に触れたが、運座の隆盛は自ずと俳句革新へと繋がって行く。また、座中で蕪村の句が「甘（う）まい」ということで話題になり、当時なかなか入手できなかった『蕪村句集』の探索が始まった。このことを鳴雪は次のように述懐している。

> 古人の句に就ても段々と研究を始めて、子規居士が去来を推重すれば、僕も凡兆の肩を持つ。松宇氏は何、其他は何々、と此仰揚褒貶にも随分ヤッキとなって争ったものである。而して或る日、蕪村の句が提出さるゝに至て、不思議にも衆口一致して実に甘まいと云ふことに帰した。けれども、其時蕪村の句として知られたのは、俳諧題叢等一二の類集本にある丈で、此他にもまだ佳句が如何に多からうと想へば想ふ程、『蕪村句集』が見たくなつて来た。然るに当時の世間は、画に於てこそ蕪村を知つて居たれ（ママ）、俳句の蕪村は殆ど忘れられて居たのだから、何れの書肆にもそれが無く、無いと云へば愈々見たくて耐まらない。そこで一同申合せて、此後吾々仲間にどこかに『蕪村句集』を発見し、此席上へ提出した者は、「椎の友会」の名を以て一廉の商品を付与すべしと、此の如く懸賞の約が立つたので、一層己々熱心に捜索することゝなつたが、遂に片山桃雨氏の手に由つて一部の古い写本を提出さるゝに至つた。（鳴雪『俳句のちか道』大正五年六月　廣文堂書店　三〇一から三〇三頁）

この鳴雪の記述からはいつ蕪村句の話題が出たかは不明である。また、子規は「俳人蕪村」（新聞「日本」　明治三十年四月十三日）のなかで明治二十六年のこととして、次のように述べているが、詳細な月日はやはり不明である。

余等の俳句を学ぶや類題集中蕪村の句の散在せるを見て稍其非凡なるを認め之を尊敬すること深し。ある時小集の席上にて鳴雪氏いふ、蕪村集を得来りし者には賞を與へんと。是れ固と一場の戯言なりとはいへども、此戯言は之を欲するの念切なるより出でし者にして其裏面には強ちに戯言ならざる者ありき。

鳴雪や子規の述懐にある『蕪村句集』発見者への賞品は硯であった。賞品を得たのは椎の友の片山桃雨で、同じ椎の友の伊藤松宇は「蕪村句集を懸賞で手に入れて各自が写し取たのは明治廿六年の春頃で、其時の賞を得たのは友人片山桃雨氏で、其懸賞を贈るの文章が今尚残て居る。」(『松宇家集』南陽堂本店　大正十五年一月一日　二十四頁)と鳴雪や子規と同様のことを語っている。この桃雨に贈呈された硯の添え状には「贈硯辞」として次のように記されている。(『子規全集』第四巻　五十九頁)

贈硯辞

賞を懸けて蕪村句集を求む一呼してこれに應するもの桃雨君となす志斯道に篤きこと知るべし賞なからんか約にそむく也賞あらんか射利に近し乃ち小硯一枚を贈りて其貴を塞くとしかいふ

行春や硯にならぶ蕪村集

鳴雪松宇二氏に代わり　　子規識　　(『子規全集』第四巻　五十九頁)

この添え状には約束通り蕪村句集の提出者の桃雨に硯を贈ることが記されている。また最後の「子規識」で子規が、鳴雪と「椎の友社」の伊藤松宇の代わりに書いたものであることがわかる。添え状をつつんだ表の紙に、明治二十六年四月十三日という日付が書かれているので、桃雨の提出したおよその月日もわかってくる。

鳴雪が桃雨や松宇等とはじめて句会を行ったのは明治二十六年一月十五日と思われる(『子規全集』第十五巻　一五頁)。従って、蕪村句がうまい、あるいは『蕪村句集』発見者の懸賞を贈るという話題とその発見は、一月十五日から四月十三日の間の三ヵ月の出来事ということになる。ただ、桃雨が発見した『蕪村句集』は「蕪村の句の僅かばかり書き集めた写本」(『鳴雪自叙伝』復刻版二二一頁)の端本であった。

子規の「獺祭書屋日記」(『子規全集』第十四巻　三一四から三三三頁)には頻りに鳴雪、桃雨、松宇等との往来が記してあるが、『蕪村句集』の記述はない。この年の三月には松宇

や猿男等と「俳諧」(注2)を創刊しているので、自ずと往来も多くなったものと思われる。

⑵　霽月の『蕪村句集』借用

前述した片山桃雨が発見した『蕪村句集』は端本で、後に大野洒竹から借りたことが判明するのであるが、端本で満足するような鳴雪ではない(『鳴雪自叙伝』復刻版二二一頁)。

鳴雪の村上霽月宛て書簡を見る機会を得たので、この鳴雪書簡から霽月の『蕪村句集』を借りるまでの経過を述べる。

まず、鳴雪は明治二十六年七月三十日から八月二日、八月五日、八月九日、八月十四日、八月十六日、八月二十三日、九月七日、九月十五日、それぞれの書簡本文の冒頭に第一号から第十号までの番号を入れている。これは、頻繁な書簡のやり取りに内容の混乱を避けるためと、霽月と俳論を交わすという鳴雪にとって特別な意味合いがあったものと思われる。

第一号、明治二十六年七月三十日、霽月宛て鳴雪書簡、鳴雪は霽月へ百韻を送ったのであろう。この一号の書簡に、

小生ノ百韻ニ付キ蕪村ニ似タルモノ多シトノ御評、小生自己ハ必ズシモ左様思ハサリシガ御気付ノ由ヲ小生モ成程ト思フ点多シ。実ハ其頃俳諧題叢中ヨリ蕪村ノ句ヲ三百句アマリ抜抄シタリ。之カ為メ自然伝染セシ疑、且小生モ蕪村ハ其当時ノ儕輩中ニテハ第一ニ置ク事ハ兼テモ申上タル通リニテ、少々真似モ致度思フ処ナリシ故旁似タル事ナラン。併シ斯ク七部方似タリト迄ハ思ハザリシガ傍観ノ御評今更当レリト覚フ

と、鳴雪の送った百韻が蕪村句に七部似ているという霽月の指摘に驚きながら納得し、蕪村句に似た理由を、『俳諧発句題叢』(注3)中の蕪村句を三百余り、その殆んどを抜き書きして学んでいたと説明している。

鳴雪と霽月はお互いに良いと思う古人の句を掲げてはそれにたいする批評をしているが、その蕪村句批評については後述する。

第四号、八月九日の鳴雪書簡には次のようにある。

将又兄ハ蕪村ノ句ハ如何ニモ沢山ニ御承知ナリ。定テ蕪村句集ヲ御所持ナル歟。小生

ニ於テハ実ハ未ニ全集ヲ見ズ、只題叢ノ中ヨリ三百四、五十句抜タ其中ニテ甲乙ヲ品スルコトヲ得タルノミ也。故ニ蕪村ノ特色ノ句ハ極テ所見少ナシ。既ニ兄来示ノ句々ニモコンナ句ガ蕪村ニアリシカト度々思ヒシコトアリキ

鳴雪は、霽月の示す蕪村句に未見の句が度々あり、霽月が『蕪村句集』を所持していのではないかと気づき、それを問い合せた書簡である。

第六号、八月十五日の鳴雪書簡には次のように有る。

一蕪村句集御所蔵ノ由実ニ羨ニ堪ヘス。小生ハ近日京都府ノ知人ヘデモ頼ミ彼地ニテ尋ネテ貰ハント思ヘリ

一京都ニ住スル一巴庵宗伯ハ芹舎門ニテ、松山ノ旧菓子屋錦雲舎ト称セルモノニテ小生ノ旧知人ナリ。久シク音信セザリシガ近日偶然東上シテ俳談ヲナセシヨリ俳句上ノ交ヲ再撞仕候。尤俳句論ハセズ……兄ハ御知人ナリヤ如何

この書簡は、鳴雪が第四号で『蕪村句集』所蔵の有無を霽月に問い合わせた答が「有り」であったことを示している。又、鳴雪は東京では捜し出せない『蕪村句集』を京都在住の知人（注４）に依頼するというものである。霽月の『蕪村句集』入手の月日については、霽月の手帳から明らかにされた和田氏の論考「子規と蕪村―霽月・鳴雪の『蕪村句集』発見をめぐって―」（正岡子規資料と研究４・昭和四十九年三月　八十頁）によれば、明治二十六年四月十八日である。鳴雪たちが『蕪村句集』発見者に懸賞の硯を贈与した四月十三日とほぼ同時期といえる。しかし、霽月の入手したのも端本（上巻のみ）であった。

第八号、八月二十三日の書簡は「本日十八日ノ貴書昨日相達シ同十九日ノ貴書本日相達シ拝見先以御安康大慶ノ至ニ奉存候」と冒頭に霽月からの書簡落手のことを述べ、俳句趣味について論じ、『蕪村句集』には触れていない。

第九号、九月七日の書簡は、「拝啓八月二十八日ノ御状拝見来示ノ件々就テハ最早別段必要トシテ申上ベキ程ノ事ナシ九月二日ノ御状拝見芭蕉翁ノ句批評ハ面白シ」とここでも霽月書簡落手のことを述べているが、『蕪村句集』には触れていない。

第十号、九月十五日の書簡は、「拝復御佳勝奉賀候〇蕉翁句評再事ニ依テ小生ト兄トノ適ノ異句愈明ニナリタリ」と芭蕉句評の違いを述べているが、『蕪村句集』には触れていない。

以上、第八号～十号まで『蕪村句集』に触れていない。そのため次に示す『蕪村句集』

借用願いがいずれの書簡の追伸なのかは不明である。

二白

蕪村ハ小生ノ最好ム所ナレドモ未ダ全集ヲ見ズ。之ヲ索メテ当市中ヨリ遂ニ京阪ニ迄モ及ビタレドモ未手ニ入ラズ。就テハ御所蔵ノ本ヲ暫時御貸付被下候儀ハ出来申間敷歟。若シ御許容被下候ハバ披キ封第四種郵便ニテ参リ候間此ニテ御送方相整申候（御費用ハ跡ヨリ償フ）何分ニモ奉願上候也

鳴雪は、東京は勿論のこと京阪でも『蕪村句集』を見出せないので霽月所持の本の借用願いをしている。次の十月五日の鳴雪書簡で、「客月十八日付ノ貴書、同廿日相達シ難有拝見仕候其節早速御返事可仕ノ処折節種々人事差湊ヒ奔走モ多ク加フルニ其前後ヨリ少々不快ナリシガ遂ニ臥褥スル」と多忙と病臥のため、九月二十日以後は霽月へ書簡を出していないことがわかる。鳴雪は「『蕪村句集』到着を五日の書簡で次のように報じている。

昨四日ニ至ル処郵便一冊子ヲ投ズ披ケバ則チ蕪村集也兼テ熱望ノ書手ニ達シ是ヨリ指ヲ鼎ニ染メント思ヘバ心地愉々脳病モ幾分ヲ忘ルヽガ如シ

霽月からの『蕪村句集』が四日に到着したこと、熱望していた句集を手にした喜びを語っている。鳴雪や子規たちは順にこの『蕪村句集』を書写するが、鳴雪の『蕪村句集』探索はその後も続けられる。では、いつ鳴雪は『蕪村句集』上下巻を入手したのであろうか。次項で検討する。

⑶　『蕪村句集』上下巻揃う

鳴雪は明治二十六年十月四日に熱望していた『蕪村句集』を霽月から借用した。鳴雪は『蕪村句集』上下二巻を入手したときのことを次のように述懐している。

誰かが告げるに、芝の日影町の村幸店に、蕪村句集の上下揃ったものがあるとの事であった。私は聞くと其侭人力を雇って駆け付けたが、途中でも若しそれが人手に渡りはせぬかと気遣ひながら、其店へ行って聞くとまだあると云ったので、実に天へも登

る嬉しさであつた。価も其頃では奮発であつたが、二円で買ひ取つて、帰ると直に披読し、其日に子規氏へも報知する、又椎の友会へも段々と告げて、我々一同が茲に始めて久渇を医したのであつた。(『鳴雪自叙伝』復刻版　二二二頁)

では、鳴雪はいつこの上下揃った『蕪村句集』の刊本を入手したのであろうか。次の鳴雪の子規宛て書簡から検討する。

着直チニ一巴叟ヲ訪ヒ一談一酌　夜四条辺リニ散ス書肆ニ掘出物ナシ　唯于店ニ也有句集一部ヲ獲タリ　(明治二十六年十一月十五日、(『子規全集』別巻一　四四一頁)

この書簡は、鳴雪が松山旧藩主の久松伯爵家から旧藩事蹟取調べを嘱託され、松山へ赴いた帰りに立ち寄った京都からの書簡である。鳴雪はこの文中で、前述した一巴庵宗伯の元を訪れた帰りに書肆に寄り也有句集を購入したことを報知している。「掘出物ナシ」という記述には『蕪村句集』はない、と知らせていると思われる。また、翌日の子規宛て書簡でも「京中ニテ獲タル書ハ士朗句集、続七部集(此度ハとなみ山洩レず)也有句集也」(『子規全集』別巻一　四四二頁)と、入手した句集を知らせている。これらの文面から、鳴雪が書肆を巡って『蕪村句集』を捜し求めていることが推察される。

東京帰着ははっきりしないが、明治二十六年十一月二十六日の大原恒徳宛て子規書簡に「乍憚別紙内藤素行先生へ御伝へ被下度奉願候　御住所不明故困り申候」(『子規全集』第十八巻　四五一頁)と、松山の叔父へ宛てた書簡から、まだ帰京していないことがわかる。また、十一月三十日の竹村鍛宛て子規書簡に「内藤翁御帰郷し近頃貴宅へ御一泊之由久しぶり御快談の事と存候」(『子規全集』第十八巻　四五二頁)と記し、まだ帰京していない。しかし、十二月下旬の虚子宛て子規書簡には「鳴雪翁御帰京後大兄等之御近況委細承りうれしく存居候」(『子規全集』第十八巻　四五三頁)と記している。従って、鳴雪は十二月上旬に帰京したと思われる。

ところで、子規は新聞「日本」に「芭蕉雑談」を連載中であったが、明治二十六年十二月二十三日の「芭蕉雑談」の「鶏声馬蹄」で次の句を前書き付けで掲載している。

笠着て草鞋はきながら
芭蕉去て其後未だ年暮れず　(明治二十六年十二月二十三日)(二六一頁)

当時子規や鳴雪が参照していた『俳諧発句題叢』にはこの句が掲載されておらず、『蕪村句集』には前書き付きで掲載されていることから、「鶏声馬蹄」を発表した十二月二十三日には子規が『蕪村句集』を目にしていた可能性がある。

ところで、翌年一月二十五日の霽月宛て書簡では、次のように『蕪村句集』のことについて述べている。

明治二十七年一月二十五日、鳴雪の霽月宛て書簡

蕪村句集多忙ニテ未ダ写取ル遑アラズ何レ出来候ハヾ御覧ニ入レ可申候也

去年以来如何ニモ御蕪音真平御宥免奉願候分疏スレバ皈京后モ不在中差置タル塵事蝟集シ加フルニ歳末ニテ日々奔走狼狽歳首ニワ御祝詞ト共ニ深々相伺フベクト存タルニ少々眼病是モ年内ノ多用ノ為メ寒風ヲ冒シ護養ニ得ザリシニ因ルモノニシテ為メニ年礼モ相延ベ数日経テ稍快ク相成始テ当地ノ回礼ヤラ諸方ノ端書扨ハ帰松中ノ挨拶書ト執筆事沢山相湊ヒ因テ先ヅ簡短ナルモノヲ発シ長文ハ跡廻シトセリヨリ次第次第ニ相後レ今日ト相成タル儀ニ有候

鳴雪は『蕪村句集』を入手し、霽月へそれを書写して送ると言ったのであろうが、多忙のため果たせずにいることを、多忙の理由を述べて詫びているのである。おそらくこの書簡の前に『蕪村句集』を二円で購入したことを霽月に報知しているものと思われる。

以上のことから、鳴雪が『蕪村句集』上下巻を入手したのは、明治二十六年十二月、帰京して間もなくから十二月二十三日以前と考えられる。従来は、この鳴雪の書簡から翌年一月中旬までと考えられてきた。和田茂樹氏は「子規と蕪村―霽月・鳴雪の『蕪村句集』発見をめぐって―」（正岡子規資料と研究4・昭和四十九年三月十九日）の論文の中で「鳴雪が村幸で上下揃本を買って大得意になったのは、二十七年一月初中旬ではないであろうか」（八四頁）とされている。また、山下一海『俳句で読む正岡子規の生涯』永田書房　平成四年三月二十日　一三一頁）や柴田奈美『正岡子規と俳句分類』思文閣　平成十三年十二月二十日　七六頁）も明治二十七年一月とされている。それが一ヶ月早かったとしたい。

おわりに

本項は鳴雪の村上霽月宛て書簡を中心に、『蕪村句集』探索の経緯を検証した。明治二十六年、鳴雪や子規を中心に「椎の友社」の伊藤松宇や片山桃雨などとも交わりながら盛んに開かれた運座の席で蕪村の句がうまいという話題からこの『蕪村句集』の探索ははじまった。鳴雪は霽月と書簡を交わすうちに、霽月の蕪村句評から霽月が『蕪村句集』を所蔵していることに気づき、その借用の過程を書簡で確認した。鳴雪と霽月の句評の往復書簡は当時の熱中ぶりを今に伝えている。また、鳴雪が『蕪村句集』上下巻を入手した時期について検討した結果、明治二十六年十二月、鳴雪が帰京して間もなくから十二月二十三日以前の可能性を指摘した。従来は、明治二十七年一月とされていたが、それが一ヶ月早まったことになる。

（注）

1　俳諧会派。明治二十四年春、東京日本橋区浜町の伊藤松宇が森猿男・片山桃雨・石山桂山・石井得中らと運座の互選会を開き、芭蕉を宗匠として結成したもの。（『俳文学大辞典』）

2　明治二十四年春、伊藤松宇が森猿男、片山桃雨、石山桂山、石井得中と結成した会。この会では旧来の運座式を改良した互選による会を開いた。（『松宇家集』年譜・『俳文学大辞典』）

3　俳諧句集。前編、中四。太笻(たきょう)編。文政三（一八二〇）年三月江戸上総屋利兵衛刊。鵬齋序。いはこもるあるじ序。成美跋。文化文政期（一八〇四～一八三〇）を代表する類題句集。はじめに作者名（二〇七二人）を国別に示し、宝暦（一七五一～一七六四）ころから当時の作まで約一万二八〇〇句を四季別に上中下に分け、季題別に編集したもの。後編（中四）は梅室の序、一具の跋を付し、文政六年六月に同じく上総屋利兵衛ほか一軒から刊行された。作者約一〇五〇人、約四七〇〇句。（『俳文学大辞典』）

4　『鳴雪自序伝』（復刻版二二〇頁）に京在住の知人について、以下の記述がある。同郷の俳人で岩崎宗白氏と云ふを訪ねる為であつた。此人は松山城下で錦雲舎と云ふ菓子屋の主人であつたが、茶事も裏千家の高弟で、又俳句は大阪の芹舎の門人であつたので、廃藩後は京都へ住居して水力応用の紡績機械を販売する、傍ら茶と俳諧の宗匠をも兼ねる事になつた。そして此春頃東京へ来た際私の家には藩の頃出入した関係もあり、殊に俳句を始めた事を聞込だので、訪ねて来て、又私も其旅宿へ行つた。さ

うして俳句に就いても談話を交したのみならず此頃迄連句と云ふ事は、私共の仲間でも余りせなかつたのを、此宗白氏の口授で其方式を知り、終に席上で両吟をした事がある。

第二節　鳴雪の蕪村句評価

はじめに

運座の席で蕪村の句がうまいという評判になり、鳴雪は何とか蕪村句集を入手しようと奮闘するのであるが、句集の無い間も蕪村研究は怠らなかった。

次に示す書簡は、鳴雪が子規の留守の間に盛んに村上霽月と俳句について論じあった書簡群の一部である。子規の留守というのは、子規が明治二十六年七月十九日から八月二十日まで東北地方を旅した、いわゆる紀行文「はてしらずの記」として残っている子規の旅による留守である。

本項では、明治二十六年の村上霽月宛て鳴雪書簡の文中に表出している鳴雪の蕪村観について考察する。

⑴　鳴雪の俳句評価の基準

前述した第一号の（明治二十六年七月三十日）霽月宛て鳴雪書簡に、鳴雪は俳句の評価基準について次のように述べている。

小生ガ発句ヲ批評スルニハ先ズ第一ニ此句ハ風雅ノ精神ヲ具スルヤ否ヤヲ考ヘ具セサルモノハ無論之ヲ捨テ具スルモノヲバ更ニ進テ下ノ標準ニ問フテ判別スル事トス

一、姿情共ニ自然ニ出テ、且余意アリ余韻アルモノヲ最優等ノ句トナス

一、之ニ反シテ姿情ノ細工ヲ加ヘ理屈ヲ交ヘ且言尽シテ余意ナク余韻ナキモノヲ最劣等ノ句トナス

一、此両点ノ間ニ在ルモノハ優項ト劣項トノ多寡深浅ノ比重斟酌シテ句ノ等位を次第ス

第一号書簡で鳴雪は、俳句の評価を先ず、「風雅ノ精神」が備わっているかどうかで判断する、ということを明確に打ち出している。さらに、「風雅ノ精神」が備わっていて姿情、即ち句の外形と内容が自然で余韻のあるものを最も優れている句とする、としている。反対に、細工・技巧を凝らし理屈くさくて余韻のないものを最下等の句とする、というのである。この判断基準の下に、霽月の示した蕪村の句を次のように後半で記述している。

蕪村翁ノ句モ小生ノ標準上ヨリ云ヘバ其最優等ノ句は中々多シト云フヲ得ズ来示中蕪村ノ特色トアル若干句ノ如キハ多ク小生ノ適ニ非ズ（去リナガラ俗気ハ少ナク卑ム所ハナシアマリ奇僻ナリト云フノミ）小生蕪村ニ在テハ

春の水山なき國を流れけり
行春や重たき琵琶の抱き心
行春の白き花見ゆ垣のひま
春の海ひねもすのたり〳〵哉
秋立や白湯香しき施薬院
凩や何に世渡る家五軒
ノ如キヲ先ズ上乗トス

鳴雪は、蕪村の句といえども最優等の句は少なく、鳴雪の評価基準から云えば右掲の六句が最優等の句である、としているのである。蕪村の句に惹かれながらも最優等の句が少ない、とするのは、この時点に於いて鳴雪はまだ『蕪村句集』を入手しておらず、『俳諧発句題叢』(注1）などから蕪村の句を三百余り抜き出したという一部の句からの評価であることも関係しているといえよう。また、蕪村の句は俗気や卑しいところはないが奇僻である、つまりひどく偏ったところがある、としている。この奇僻については、次に示す第五号（明治二十六年八月十四日）の霽月宛て鳴雪書簡でも言及している。

小生ハ此蕪村ノ僻処ハ固ヨリ僻処ナレドモ八張剛ト硬トニ傾キタルモノニシテイヤミト認メズ之ヲ柔ト軟トノモノニ比スルニ取ルベキコト万々也ツマリ蕪村の僻ハ所謂佳僻ト認メ強テ取レバ皆デモ取テ可也

鳴雪は、蕪村の奇僻はよい意味での偏りであるから、取ろうと思えば全部の句を取るこ

とも出来る、というのである。第一号、第五号の書簡からは、鳴雪が蕪村は最優等の句は少ないが皆よい句である、と考えていたことがわかる。

なお、月日が前後するが、第三号八月五日の霽月宛て書簡では次のように述べている。

一、蕪村御示五句中
春の海ひねもすのたり〳〵哉
ヲ取申候。「伽羅臭き仮寝」モ悪キニ非ザレドモ、此叟ニハマダ他ニ句アレバ取ラズ。
又
雨乞にくもる国主の涙哉
ハ、小生大不ノ字也。全ク後世俗句ノ類ト存候。蕪村ニハ珍シキ程ノ句屑ト存候。

この記述からすると、霽月が蕪村句を五句示したのであろう。その中で、「春の海ひねもすのたり〳〵哉」が良く、「伽羅臭き人の仮寝や朧月」も悪くはない。しかし、「雨乞にくもる国主の涙哉」は不出来な俗な句で蕪村にして珍しい屑の句である、と手厳しい批評をしている。鳴雪は不出来なことを具体的に言っていないが、技巧を凝らして理屈くさいのを最下等とする鳴雪の評価に従えば、「雨乞に」の句は、「雨」「くもる」「涙」を配した技巧や「国主の涙」の理屈を批判したものと思われる。

⑵　明治二十五年・二十六年の子規の蕪村句評価

子規たち周辺で蕪村句が話題に上った明治二十五年、二十六年、子規はどのような蕪村句を取り上げていたのであろうか。『子規全集』第四巻の「俳論俳話一」から子規の採用している蕪村句を調べると、次の通りである。

柳散り清水かれ石ところ〳〵　（明治二十五年八月十三日）　（二一一頁）
ところてんさかしまに銀河三千丈　（明治二十五年九月十一日）　（一六四頁）
兎角して一把になりぬ女郎花　（明治二十五年九月二十四日）　（二〇一頁）
腰ぬけの妻うつくしき火燵かな　（明治二十五年十二月二十二日）（二七二頁）
花に表太雪に君ありはちたゝき　（明治二十五年十二月二十六日）（二七八頁）
たらちねのつまゝでありや雛の鼻　（明治二十六年三月三日）　（三〇二頁）

箱を出る顔忘れめや雛二対　（同）　（三〇二頁）

笠着て草鞋はきながら

芭蕉去て其後未だ年暮れず　（明治二十六年十二月二十三日）（二六一頁）

「柳散り」の句は、「獺祭書屋俳話」の「発句作法指南の評」の項にある。其角堂機一著『発句作法指南』の書評で、機一が字余りの例として挙げている芭蕉、其角、蕪村の句にたいして、句調の善悪は必ずしも字数のみではない、と句調の視点で捉えている。

「ところてん」の句は、同じく「獺祭書屋俳話」の「字余りの俳句」の項でその例として杉風、芭蕉、嵐雪等十八句掲げた中の一句である。

「兎角して」の句は、これも「獺祭書屋俳話」の「女郎花」の項でその例として芭蕉、士朗、一茶等十四句掲げた中の一句である。

「腰抜けの」の句は、「歳晩閑話」の「巨燵」の項でなまめいた炬燵の句の例として掲げられた句である。

「花に表」の句は、「歳晩閑話」の「鉢叩」の項で鉢叩のあわれさを詠んだ句の例として掲げている。

「たらちねの」と「箱を出る」の二句は、新聞「日本」に「雛祭り」と題して士朗、千代女、其角等の雛の句を二十句掲げたうちの二句である。「たらちにね」は擬人法の例として、「箱を出る」は娘の子に成り代って詠んだ句の例として掲げられている。

「芭蕉去て」の句は、「芭蕉雑談」の「鶏声馬蹄」の項で、芭蕉漂泊の生涯を次のように語り、その中で蕪村句を引き合いに出しているのである。

芭蕉死後曽て漂泊の境涯に安んじたる俳人を見ず。其意志に於て蕪村稍之に近しと雖も芭蕉の如く山河を跋歩し天然を楽みたる者に非ざるなり。（『子規全集』第四巻二六一頁）

以上、明治二十五年・二十六年の子規の取り上げている蕪村句をみてきたが、俳句の類題上の好例句として採用していることが多く、鳴雪ほど蕪村に注目しているとはいえないだろう。ただし、子規は俳句分類を勧めながら明治二十五年頃に作成した「俳家全集」（百三十三人）と「一家二十句」（初稿本百五十人）に蕪村句が収録されている（『子規全集』第二十一巻　七三二・七三四頁）。

⑶　『蕪村句集』探索の評判

鳴雪が『蕪村句集』の探索に奔走し、その結果二円で入手したことが次第に俳句界で知られることとなったようだ。子規も「俳人蕪村」の中で次のように当時のことを振り返っている。

余等の俳句を学ぶや類題集中蕪村の句の散在せるを見て稍其非凡なるを認め之を尊敬すること深し。ある時小集の席上にて鳴雪氏いふ、蕪村集を得来りし者には賞を與へんと。是れ固と一場の戯言なりとはいへども、此戯言は之を欲するの念切なるより出でし者にして其裏面には強ちに戯言ならざる者ありき。果して此戯言は同氏をして蕪村句集を得せしめ、余等亦之を借て覧て大に発明する所ありたり。死馬の骨を五百金に買ひたる喩も思ひ出されてをかしかりき。是れ実に数年前（明治二十六年か）の事なり。而して此談一たび世に伝はるや、俳人としての蕪村は多少の名誉を以て迎へられ、余等亦蕪村派と目せらるゝに至れり。今は俳名再び画名を圧せんとす。

（新聞「日本」　明治三十年四月十三日）

子規はユーモアを交えながら『蕪村句集』捜索のことを述べているが、鳴雪の思いを「此戯言は之を欲するの念切なるより出でし者にして其裏面には強ちに戯言ならざる者ありき」と看破している。

また、文中の「死馬の骨を五百金に買ひたる喩」は「死馬の骨を買う」という中国の『戦国策』の故事にならって、鳴雪が、人力を雇って大枚二円で購入した『蕪村句集』の噂によって価値ある本が自然と集まってくるだろう、というのである。前述した通り、桃雨の提出した『蕪村句集』は不完全なものであったため、鳴雪はなおも『蕪村句集』探索を続けるのである。

この様に鳴雪が『蕪村句集』に賞を懸けて捜索したことや二円で購入したことが世間の話題となり、子規一派は蕪村派とも呼称されるようになるのである。

このあたりの事情を、岡野知十は「毎日新聞」で次のように述べている。なお、知十は万延元年（一八六〇）蝦夷（北海道）日高に生まれ、明治二十八年「毎日新聞」に「俳諧風聞記」を、『女学雑誌』に「俳諧又聞記」を連載して注目された俳人である。

日本派が『蕪村句集』捜索の手は、如何なる縁よりしてか、遂に洒竹が書棚の上に及べり、こゝに『蕪村句集』の写本の一部は保存されしが、日本派の人々が蕪村句集に接したるは正に此時にありしと伝ふ。さらに又風聞の事実に問ふべし、曰く洒竹が写本蕪村句集出し後、鳴雪は猶八方を捜索し、遂に蕪村句集刊本一部をえたりと、価格金二円、西鶴の一代女が六円なりき、同大矢数が五円なりきといへる価格より論ずれば蕪村句集一部二円敢て不審にあらざるべしと雖も、一時書肆はこれが爲、蕪村もの捜索の熱を生ぜしといへば、非常の価格たりしには違ひなしとの説ありき、懸賞して蕪村句集をもとむ、高価を憚らず同集を購ふと称するも未だ以て蕪村調なり、蕪村崇拝なりと速断しがたきものあり、書巻を購求すると崇拝とは自ずから別あるべければなり、之を決するは其句体と俳論を点検するより可なるはなかるべし。

（知十「俳諧風聞記」「毎日新聞」明治二十八年九月二十八日）

知十は、懸賞を出して入手した『蕪村句集』は大野洒竹が所蔵していた写本だったこと、鳴雪が八方手を尽くして二円で購入した『蕪村句集』は高くはないが、当時の俳書にしては高価であることを述べている。そして、このような行動が即ち蕪村調・蕪村崇拝とはいえない、俳句や俳論から判断するべきだ、と理に適った指摘をしている。

さらに翌二十九日の「俳諧風聞記」では、次のように述べている。

此新派を代表するは、勿論正岡子規なり、然れども一説に憑れば、派内に在りては内藤鳴雪頗る推重さると。其機関は勿論新聞日本の文苑、これが神聖なる俳壇に供されたり、故に此派を一に『日本派』又は『日本調』と稱するに至れり。鳴雪の日本派に於る位置は、試みに芭蕉をもつて子規に擬さば鳴雪は素堂なり、曉台を以て子規に比さば鳴雪は蕪村なるべきは確評なるべし、蓋しその位置に於るのみならず、鳴雪の蕪村に於る心酔傾倒啻ならずといふ、日本派が蕪村調の称あるは或はこれによれるにあらずやと。

この知十の文によると、子規は曉台、鳴雪は蕪村という相対関係は俳風ではなく、鳴雪の俳壇に於ける位置を示したものと断っている。その一方で、子規の俳風を子細に吟味すると決して蕪村調ではない、ともいっている。つまり、日本派が蕪村調と称されるのはひ

とえに鳴雪によるもの、というのである。

また、知十の述べるところの「鳴雪の蕪村に於る心酔傾倒」と同様のことを子規は「文学」（『日本人』明治二十九年九月二十日）で、鳴雪が蕪村の好んで使う句材の雅言を使うと述べ、次の句を例に掲げている。

紅梅や左府の大臣の牛車　　鳴雪
春雨や葎の宿の白拍子　　同
短夜の水干かけし几帳かな　　同
催馬楽の節おもしろき扇かな　　同
わいへんはとばり持ちたり星こよひ　　同

四句目の「催馬楽」とは古代歌謡の一つで、平安初期に上代の民謡などが雅楽に取り入れられて歌われるようになったもの。笏拍子、箏、笙、竜笛、篳篥、琵琶などで伴奏された。最後の句の「わいへん」は「わがいへ」の転で、催馬楽の呂歌「我家」にあり一節「わいへは、帷帳も垂れたるを　大君来ませ婿にせむ」を踏まえていて、現代ではやや難解な句である。なお、この知十の記事によって子規一派を「日本派」と呼称するようになったのである。

おわりに

鳴雪の蕪村への只ならぬ傾倒振りが俳壇に広まり、その結果、蕪村が再認識される一因になったともいえる。子規はこの様に世間に注目され始めた蕪村について、新聞「日本」に明治三十年四月十三日から十一月十五日まで「俳人蕪村」と題して二十八回連載している。この「俳人蕪村」連載中の九月に、大野洒竹が春陽堂から『与謝蕪村』を出版した。蕪村派を自認していた子規にとっては、出し抜かれたような思いがしたのではないだろうか。

子規は新聞「日本」に十一月十九日から二十一日まで三回、「『与謝蕪村』を評す」という書評を連載した。この中で子規は、「俳諧年表を初に揚げたるは極めて好し」とまずその編輯を褒めている。しかし、その後内容については、「何とも訳の分らぬ書き方なり」「意義曖昧にして極めていぶかしき筋多し」「引例には不当と思はるゝもの多し」「杜撰なる注

解をつくりて無学者を欺くに至りて其害少からず」と酷評の文ばかりが続いている。

第三節　鳴雪と子規の蕪村句評価

はじめに

鳴雪と子規はよく議論をした。お互いの見解の違いを議論によって解決したのである。この議論がどのようなものであったのか、三つの例を示したい。

一つ目は、明治二十七年八月六日、八日の新聞「日本」に掲載された子規の「地図的観念と絵画的観念」である。二つ目は明治二十七年年八月二十八日の新聞「日本」に掲載された子規の「王子紀行」である。三つ目は、明治二十八年四月三日の鳴雪宛子規書簡である。

⑴　地図的観念と絵画的観念

明治二十七年八月六日、八日の新聞「日本」に掲載された「地図的観念と絵画的観念」には次のような一文がある。

一夜閑を偸んで鳴雪翁を炭団阪上に訪ふ。談直ちに俳句に入る。翁詰り余対へ余問ひ翁弁ず。論難批評数時間に渉りて猶倦まず。終に話題は

春の水山なき国を流れけり　　蕪村

と云ふ句に及べり。余翁と俳句を論ずるに常に極微に入り些細に渉る。（略）蕪村の此一句に就きて特に衝突するは何故なるか毫も知るべからざるを以て此夜は論弁難詰一時間を経て始めて其原因を知る事を得たり。原因とは何ぞ。蓋し鳴雪翁は地図的観念を以て此句を視、余は絵画的観念を以て之を視るなり。

これは、鳴雪はこの蕪村句を秀逸とし、子規は一、二等下に置くと評価したことから起こった議論であった。その違いは、句中の「山なき国」の解釈にあった。そこで、子規は鳴雪と単なる意見の相違とは見ず、相違を来す原因を「地図的観念は万物を下に見、絵画的観念は万物を横に見る」からであるからだと突き止めていったのである。子規がこの絵

画的俳句ということに着目したことは先述（四九から五〇頁参照）したが、不折は子規とのことを「余と子規は絵画と俳句と其立脚地が異なつて居るにも拘らず、常に其主義主張が一致していた（略）絵と俳句との関係を論じた事もあるし、余が絵をかいては子規は讃をし、子規が俳句を作つては余は其れに対する絵を書いたりして、兎に角研究を忘れなかつた」（「子規追想」「ホトトギス」明治四一年九月号　五〇～五一頁）と、互いに研鑽していたことを述懐している。

これまでの子規は、「最簡単ノ文章ハ最良ノ文章ナリ」（「筆まかせ」明治二十三年）と短い文章は最良の文学と位置付けて俳句という最短の文章の詩の価値を定め、さらに同文で「桃紅に麦緑なるは補色（complementary colors）なり　空青く菜の黄なるもまた補色に近し　天然の色の配合実に其宜しきを得たり」と西洋画法に関心を寄せていた。また、「我邦の韻文は叙事よりも叙情」「叙情よりも叙景を主とせり」それは「錯雑にして変化多き人間社会の現象を模写せずして専ら簡単にして静黙なる天然を模写せうがため」（「早稲田文学」明治二十五年十月）と「天然の模写」という考え方をしていた。ここに不折の絵画的という要素が加わり、後の評論「明治二十九年の俳句界」（新聞「日本」明治三十年一月四日『子規全集』第四巻　五〇四頁）で河東碧梧桐の句「赤い椿白い椿と落ちにけり」を「印象明瞭」即ち「写生的絵画の小幅を見ると略々同じ」と評したことにつながっていったと考えられる。久保田正文氏は、子規の「地図的観念と絵画的観念」を、「わがくに近代リアリズム認識方法発達史とでもいうべきものの視野のうちにおいても注目すべきもの」（『子規全集』第四巻　八四七頁）と解説されているが、鳴雪もその一翼を担ったといえるのではないだろうか。

この様に子規は新たな見解を導き出し、俳句への理解と論理を深めていったのである。

⑵　王子紀行

明治二十七年年八月十三日の新聞「日本」に「王子神社の田楽」という祭の記事がある。この記事には、田楽は十三日に行われる「府下祭典中最も古雅なるもの」で、午後四時ころより神職はじめ花笠を被った舞童や六尺余りの大太刀七腰帯びた珍しい武者などの行列、田楽十二番、更に午後六時ころの終りには舞童の花笠を見物人に抛やり大変賑わう、とその行列の挿絵とともに紹介されている。

鳴雪はこの記事を読んで早速子規を誘ったものと思われる。鳴雪の持ち前の好奇心と、

新聞「小日本」が廃刊になって気落ちしている子規の励ましの為もあったことと思われる。子規は鳴雪に誘われて同日、午後四時ころから王子の祭見物に行っているが、同行者は画家の中村不折である。

紀行文によると、次のような道中と思われる。鳴雪ら三人は上野から汽車で向かったのである。上野から王子まで一駅で、所要時間は十分から十三分である（当時の時刻表『廿七年改正汽車時刻表』駸々堂　明治二十七年二月十三日）。思い立てばすぐに行くことのできる距離である。その道中、子規は不折に対して戯れに「今日の遊び畫と俳句と腕を競べん」と言い、不折はこの申し出を受けた。

しかし、王子に着くと露店が並び子どもらが戯れていて祭の雰囲気はあるものの、その日は田楽が行われていなかったのである。社殿にある花笠が面影を残しているばかりであったという。そこで三人は滝野川沿いの金剛寺崖下の岩屋弁天などを散策しながら句作に耽り、不折は写生をするのである。ここでも鳴雪と子規は俳句の大議論をしている。その様子は、子規によると「口に泡を吹き肩に山を聳えしむ。議論数時間に渉り弁舌山神を驚かす」ほどで、ただ一人不折は欄に凭れて写生していたという。鳴雪と子規の議論の内容については記録されていないが、不折の説く西洋画法の写生についても議論したことだろう。この時の様子を不折は「俳句の議論を始めて、なか〳〵果てしがつかない。僕はその間外を向いて写生してゐた」（『子規言行録』天泉社　昭和十二年一月二十五日　八十六頁）と述懐している。

飛鳥山の麓に帰路を取ったところで不折は画を論じたという。どの様な画論を説いたのか不明であるが、子規は紀行文中で「見渡せば遠近濃淡天然の好畫なりと不折賞して已まず。我等畫中に在りて往来するの思ひあり」と述べている。恐らく翌十四日に新聞「日本」に掲載された不折の絵「不忍十景」の中の画論、「写生は真景を写すの意なれども去りとて畫趣を具へざる真景を写して何の面白き事かあらん。故に写生術と画境発見とは両者相俟て始めて完全なる絵画を為す」といった様な内容ではないだろうか。

この頃、子規は鳴雪とは俳句を、不折とは画をしばしば議論するようになっていた。このことは、子規の明治二十七年年七月の五百木飄亭宛書簡（『子規全集』第十八巻　四七八頁）に「時々鳴雪老をとひ中村画伯と放談するなど此頃の快事に御座候」という一文からもこの頃の三人の様子を窺うことができる。

この十三日の王子行きは八月二十八日の新聞「日本」に子規子の「王子紀行」として掲載されている。「王子紀行」には、

初秋の食に魚なし京の町　　鳴雪
蜩や杉の葉重ね路凹し　　鳴雪
初秋の石壇高し杉木立　　子規
祭見に狐も尾花かざし来よ　　子規
月高く樹にあり下は水の音　　子規

など鳴雪二句、子規の句十六句、不折の絵一枚が掲載されている。

画と俳句の腕競べの結果について子規は、「数日を経て不折一巻を携へ来りて余に示す。披き見れば王子紀行なり。絵画数十枚いづれか面白からぬは無し。余瞠若一語を発する能はず。不折頻りに余の俳句を見ん事を覓む。余固と一句なし」と説明し「俳句畫に輸けたり」と述べている。

「王子紀行」で体験した不折の自然の景の捉え方とその表現法は子規にとっての新たな俳句へ結びついていったにちがいない。

ここで不折の西洋画の写生の内容を確認しておく。不折は慶応二年七月、江戸京橋に生まれた。本名は鉾太郎。子規より一歳年長である。明治三年に一家で信州高遠に移り、父は代書人となった。不折は家計の都合で呉服屋に勤めたり、小学校助教員をしたりした。不折はこの信州で真壁雲郷に南画を習ったが、洋画は独習であった（注1）。明治二十年に上京し、十一会研究所（後の不同舎）に入塾して小山正太郎、浅井忠に洋画を学んだ。小山・浅井はともに明治九年に開校された工部美術学校の出身で、イタリア人画家アントニオ・フォンタネージに西洋の美術学校に倣った教育を受けた。ここで注目されるのは、明治政府は欧化政策の一つとして西洋画を導入し、芸術性よりも実用性を重視し、工部省管轄として設立した点である。このことは「工部美術学校諸規則」の「学校ノ目的」の第一条に「欧州近世ノ技術ヲ以テ我国日本旧来ノ職風ニ移シ、百工ノ補助トナサンガタ爲」と明記されていることからわかる。また、ここでの教育の主軸が「真写」であり、風景画中心であった点は、学課の画学は「山水艸禽獣真写法・草花動物ヲ形容模写スル法」と定められていることからもわかる（注2）。フォンタネージは講義で、自然を描くときは自然をそのまま描くのではなく、絵の中心として焦点を絞り、また自然の中から描くものを取捨選択して構図を考えて描く、といったことを述べている。これに加えて風景の中にないものを加える、つまり自然を改変することは諫めている（注3）。この理念は小山・浅井から

不折へ、そして子規へと流れていったと思われる。不折は浅井の紹介により子規を知り、子規は新聞「小日本」の挿絵を担当するようになった不折と交流を持つようになったのである。不折は当時を次のように回想している。

浅井先生から私に話があつて、一つ新聞挿絵をかいてはどうかと言はれた。私は生れてから、ずつと貧乏で育ち、当時は油絵の方は一応卒業したことになつてゐたが、金を取つて暮しを立てねばならぬ場合だつたので、「小日本」へ這入ることゝなつた。這入つて正岡と話してみると所謂意気投合したといふのか話が好く合ふので、日一日と互に親しくなつた。当時の新聞には、小説の挿絵はあつたが、記事に就いてのものや、独立した美術的な挿絵といふものはなかつた。そこで、私はいろ〳〵な事柄を描いたり、所々方面を変へて写生したものを揚げたりした。

（「子規君のこと」「日本及日本人」昭和三年九月号　一〇五から一〇六頁）

この文から不折が即時性を踏まえたジャーナリステックな挿絵を心がけていたことが窺われる。ここに子規との共通点を認めることができる。

不折に出会ってからの子規は、次第に不折の説く西洋画論が俳句にも相通じるところを悟り、写生を俳句に応用してゆく。鳴雪、子規、不折の三人が揃って議論したこの「王子紀行」は、その重要な契機の一つではないだろうか。

(3)　鳴雪と子規の句評合戦

明治二十八年四月三日の鳴雪宛子規書簡（『子規全集』第十八巻　五三八頁）は、鳴雪の句に対して子規が批評をし、その子規の批評に対して鳴雪が答弁、さらにその鳴雪の答弁に対して子規が再び付箋をつけて批評した書簡である。お互いに納得するまで議論をするという姿勢の現れた書簡といえる。その一部である三例を次に示し、鳴雪と子規の論点を検討する。

先ず、冒頭に「御句に付て愚評乍失礼左に」と断って批評を始めている。

御句に付て愚評乍失礼左に

土佐か画の小松ちらバら春の水

ちらバら気に入らず候　其外ハ面白く候

（鳴雪）小生自モ同感也　唯換ハル詞ニ困ミ申候　御一考ヲ願フ

鳴雪の句「土佐か画の」に対して、子規は「ちらバら」の語が気に入らない、つまりこの句に不満足な語である、とする。これに対して鳴雪は、自分もそのように思うが他にいい語がなく苦しんでいる、と弁解しながらもこの句に対するほのかな自信を覗かせているように見受けられる。

けさの春暗きはものゝなつかしき

句法ハ巧者なれとも趣向の上に於テ私ハ好かぬ様ニ覚え候

（鳴雪）小生ハ感シ好キ方也　此句ハ霽月ノ元朝や暗きハものゝなつかしきトアリシヲ半記半忘シテ連ネシナリ　因テ取消申候

（付箋）けさの春よりハ元朝やといふ方少しまされり　併し何れにしても曉台ノ暗きより人あらハるゝなどの糟粕かと存候

鳴雪の「けさの春」の句にたいして、子規は句法の巧みさは認めつつも趣向に異議を唱えているのである。句の構想である「けさの春」という明るくてめでたい気分に「暗きは」という取合せをしたことを問題にしたのであろう。

鳴雪はこの子規評にたいして、「小生ハ感シ好キ」と反論しつつ霽月の句「元朝や暗きハものゝなつかしき」似たていることを思い出し、この句を取り下げている。

鳴雪が霽月の句に触れたことに関して子規は、「けさの春」より「元朝や」の方がよいが、曉台に「元日や暗きより人見はるゝ」の句があり、いづれにしても糟粕の句でたいしたことはない、と評しているのである。「けさの春」「元朝」「元日」に「暗き」という語の不調和を指摘していると思われる。

飯蛸や鬼一口に悪太郎

先生旧態之句今更此句を見んとは思ひかけず候　御再考被成候てハ如何ニ候や

（鳴雪）斯ク御叱アラントハ兼テノ覚悟　只兄ヲいやがらさん迚一句挿ミ置申候　尤兄程小生ハいやニナシ

（付箋）いやがらせとありては申様も無御座候　鬼一口といへば悪太郎はいはずもが

なと思ふ如何

鳴雪の「蛸飯や」の句にたいして、「鬼一口」といえば『伊勢物語』第六段の女が鬼に一口で食われる説話を想起させ、いかにも旧態然とした知に訴えた句であると批評している。

この子規評にたいして、鳴雪は子規の非難は覚悟の上、少し子規に嫌がらせをしたのだという。しかし、子規ほどこの句は嫌いではない、と述べている。むしろ鳴雪はこの古典の世界を題材に句作するのを好むのである。

この鳴雪の弁明にたいして、子規は付箋で、鬼の同義語の「悪太郎」の不必要を説いている。

おわりに

以上のように、全体的に子規は鳴雪に敬意を払いつつも指摘すべき点は指摘し、また鳴雪もユーモアも交えながら反駁している。鳴雪のひそかに自説を貫く態度も窺うことができるこの書簡からは、両者の遣り取りが臨場感をもって伝わってくる。

（注）

1　中村不折　「僕の歩いた道」「中央美術」中央美術社　大正一六年一月一日　一四一～一五九頁　十一会研究所入所までの経歴を参考にした。

2　青木茂・酒井忠康校注　『美術』「日本近代思想体系」一七　岩波書店　平成元年六月二二日　四二九～四三一頁　フォンタネージの講義はフランス語で行われ、武村本五郎が通訳、藤雅三が記録、それを川路新吉郎が筆写したものが講義録とされている。カリキュラムには、幾何学・遠近法・解剖学などの基礎理論と徹底した実技のトレーニングが組まれていた。

3　同前　二一七頁

第二部　子規と歩んだ俳句活動後期

第一章　新旧交代

第一節　鳴雪と虚子

はじめに

本項は、これまであまり論じられることのなかった内藤鳴雪と高浜虚子の関係を検討しながら、明治二十九年に虚子が新調の俳句を作り出した頃から、鳴雪と虚子の新旧の意見対立が著しくなったことを中心に考察する。

虚子は明治七年二月二十二日、松山市で生まれた。鳴雪は虚子よりも二十七歳年長である。しかし、正岡子規の指導のもと、俳句を始めたのはほぼ同時期のため、鳴雪と虚子は俳句の上では同輩の交わりをしていたといえる。ともに俳句を作り、その批評をしあい、研鑽を積んでゆくのであるが、やがて二人は俳句上のことで度々見解の相違を来たし、ややともすれば疎遠になってゆく。その理由としては凡そ次の三つの相違点が考えられる。

一つ目は新調について、二つ目は選句について、三つ目は連句についてである。本項では新調を中心に検討する。

(1)　鳴雪と虚子の出会い

鳴雪と虚子が初めて出会ったのは、虚子が京都第三高等中学校の春休みを利用して、京都より上京した明治二十六年である。

この頃の鳴雪は、文部省を辞任して常盤会寄宿舎の監督となって二年目、子規とともに「椎の友社」の伊藤松宇、森猿雄、片山桃雨、石井得中らと盛んに運座を開いて俳句に熱中していた時期である。また、この運座で話題になった蕪村の俳句に注目し始めた時期でもある。さらに、この時期は子規が、和歌や漢詩ばかりだった新聞「日本」の文苑欄に俳句欄を設けて明治の新しい俳句を唱道し、松宇らと「俳諧」を創刊する、といったように活発な動きをしていた頃と重なる。いわば、日本派俳人輩出の揺籃期といってよいだろう。

子規が虚子に宛てた明治二十六年三月二十四日の書簡には、「当地発句会中々盛んにして一週間に一度位ハどこぞに大会小会有之奔命ニつかるゝ程に御座候」、あるいは「御承知之如く此頃「日本」の文苑を拡張して俳句なども拾ひこむ様になり候へば大兄も少し御恵投被下度奉願候」等と認められているが、これを読んだ虚子は矢も盾もたまらず突然上京したくなったのであろう。ともあれ、東京に憧れて上京した虚子は、この活気溢れる雰囲気

を満喫したに違いない。

子規の「獺祭書屋日記」(『子規全集』第十四巻　三三〇頁から三三二頁)より鳴雪と虚子に関係した部分を抜粋すると次の通りである。

三月三十日　小川、高浜二氏来、高浜氏留、

三月三十一日　與虚子観上野博物館

四月一日　出社、訪鳴雪翁

四月三日　與虚子古白見上野美術展覧会、共見芳原、遊向嶋、登凌雲閣。

四月四日　小会、鳴雪松宇二氏来、紫影爛腸二氏亦来

四月八日　非風来、出社、訪鳴雪翁　送虚子帰京都

三月三十日、虚子と小川尚義が子規庵を訪問し、虚子はそのまま逗留。三十一日、子規と虚子は上野博物館見学。四月一日、子規は日本新聞社に出社。また、鳴雪を訪問しているが虚子が同行したかどうかは記録にない。三日、子規、虚子、藤野古白の三人は上野美術展覧会へ行き、吉原を見学し、向嶋で遊び、浅草の凌雲閣に登る。四日、句会。鳴雪、松宇、藤井紫影、田岡爛腸が来る。八日、新海非風来る。出社。鳴雪訪問。子規は京都へ帰る虚子を送る。

この子規の「獺祭書屋日記」にある四月四日の句会稿(『子規全集』第十五巻　一五二頁)によると、会場は「子規亭小集午後三時ヨリ十二時迄」、会者は子規、鳴雪、松宇、虚子、爛腸、紫影の六名。三回の運座と、花吹雪、日永、弥生、春の山、朝桜、遅日等三十一の兼題で、九時間に及ぶ句会が行われている。

子規が河東碧梧桐に宛てた同年四月十四日の書簡には、「高浜は春休みにとて出京致し候。東海道をせらるゝ筈の貴兄は来られずして思ひ掛なき虚子が来り候。」(『子規全集』第十八巻　四一八頁)とあり、続いて、「先日虚子滞在中一会相催候ひしが虚子中々にふるひ申候」として、次の虚子の三句を掲げている。

猫の恋落花の雪に迷ひけり

菅笠の花ちる中を上り行

京女花に狂はぬ罪深し

この三句は四月四日の句会稿には記録されていないので、四日以外にも句会が催されたことが推察される。

因みに、鳴雪に四日の第三回運座での作

東雲のほがら〳〵と朝櫻

があり、この句は「俳諧」第二号に掲載され、また、大正十四年に松山の東雲神社に句碑が建立されている。

いずれにせよ、子規の日記や句会稿、あるいは、虚子が「鳴雪翁の俳句閲歴及び逸話(二)」(「ホトトギス」第二十八巻第十一号　大正十四年八月号　十頁)で「二十六年の春休みに私は徒歩旅行をして東京へひとりで出かけた。」「その時子規居士の家ではじめて鳴雪翁に会つた」と述べていることや、『年代順　虚子俳句全集』第一巻の明治二十六年に、「春。春期休暇を利用して東上。はじめて鳴雪、松宇と会す。数日、子規の上根岸八十八番地の居に寓す」と記していることなどから、月日は特定できないが、明治二十六年の春に始めて鳴雪と虚子は出会った、といえるだろう。子規の年譜によれば、三月三十日に「虚子京都より突然来て滞在」(『子規全集』第二十二巻　二一四頁)とある。四月四日、「鳴雪　来宅。虚子を交え六人で」とあるから、二人の出会いはこの五日間に絞られる。

鳴雪と虚子の初対面の印象について、両人は何も述べていない。しかし、碧梧桐は鳴雪のことを「痩せた鶴のやうな人だが、声だけは大きな人」(「鳴雪翁の俳句閲歴及び逸話(一)」「ホトトギス」第二十八巻第八号　大正十四年五月号　一七頁)と、また寒川鼠骨は、「文部省の高官吏といふのだから、鹿爪らしい顔」を想像していたが「如何にも砕けた態度」と言葉遣いで緊張がほぐれた、と述べている。この態度は誰にたいしても変わらなかったとあるので、おそらく虚子も同様の印象をもったものと思われる。

この出会いを契機に、鳴雪と虚子との交友がはじまったのである。

(2)　新調の俳句

明治二十九年冬から三十年春にかけて虚子や碧梧桐は多くの破調の俳句を詠んでいる。『子規全集』第十五巻の句会稿をみると次のような句群がある。

煙草の煙吹きかけて蓮の実飛ぶ　　虚子（明治二十九年一月）
豊年もトすべく新酒も醸すべく　　虚子（明治二十九年秋）
大なる瓶に水仙を活けて梅を得ざる　　虚子（明治二十九年冬）
鹿を見つ草三尺にして末枯るゝ　　碧梧桐（明治二十九年秋）
物干に星冴えて遠き火の手消えたる　　碧梧桐（明治二十九年冬）
新らしき火鉢を得つ新らしき灰を愛す　　碧梧桐（明治三十年一月）

虚子の一句目は明治二十九年十月二十六日、目黒不動前茶店福嶋やで行われた石井露月送別会での句（『子規全集』第十五巻　四五六頁）で、七五六の十八音となっていて五七五の定型から逸れた句。二句目は明治二十九年秋の句（同　四九九頁）で、五九五の十九音であり、また蕪村風の「べく」の語を多用した句。三句目は、明治二十九年冬の句（同　五四八頁）で、八八六と大幅に十七音を超えた二十二音の長い句。いずれの句もどこで切るかは難しいが、十七音以上の長い句である。

碧梧桐の一句目は明治二十九年秋の句（同　五〇六頁）で、五九五の十九音。二句目は明治二十九年冬の句（同　五四七頁）で、五五十の二十音。三句目は明治三十年一月の句（同　五五三頁）で、五六十一の二十二音。

虚子や碧梧桐がこのような乱れた調子の俳句を何故詠むようになったのか。碧梧桐は「所謂新調」（「ほとゝぎす」第三号　明治三十年三月十五日　六・七頁）で「所謂新調は虚子之を創め」たといい、「虚子の新調に於ける始め殆んど無意識の境界に在りき」と無意識に虚子が始めたのだ、と述べている。しかし、当時の虚子の俳論からそうは受け取れない。虚子は、「日本人」（第十一号　明治二十八年十二月五日　二十八頁）「俳檀（ママ）雑感」で十七字に拘泥せず新たな詩形を求めて、次のように述べている。

文学者にして俳人たるたるものは独り十七字の小閣に籠居せんとするか進んで旧歌人の城を乗取り旧詩人と鋒を交へあらゆる詩形を打破して渾然として一小天地を家とし新たなる形を需むるものは誰ぞや十七字に於て養はれたる観察の眼と修辞の技量とは明治文界に在て空しく朽ちざるべし。

虚子はまた、「日本人」（第二十九号　明治二十九年十月二十日　四十六頁）「曼殊沙華」で、十七字は一楼閣で終生を委托すべきところではない、と次のように述べている。

真の詩人たるべき俳人は、決して十七字を以て其終生を依托すべき城閣なりと心得べからず。十七字は其感情を宿すべき一の楼閣なることは固より然り、然れども終生其外に出づ可からざる唯一の楼閣には非るなり。

そして、翌月の「日本人」（第三十号　明治二十九年十一月五日　四十九頁）では「俳句としてこの佶屈なる形は果して喜ぶべきものなりや。抑亦佶屈なる形を脱して十七字の屋外に立ち出づべきか」と十七字を脱することについて論じているのである。この虚子の論の背景に日清戦争後の文学にたいする待望論があったことを田部知季氏は「明治三十年前後の虚子俳論」（『日本近代文学』第九十六集）で「当時の文壇では国民の『理想』を描く「大文学」の登場が待望されていた」と指摘している。このように虚子の論述をみてくると、碧梧桐のいう「無意識の境界」ではないだろう。

この虚子や碧梧桐の破調の俳句を、鳴雪はいち早く難じている。佐藤紅緑は、明治二十九年四月一日の「俳三年」（『子規全集』第五巻）で鳴雪の新調について「碧君は只だ新風新調を好みて一切旧套を打破せんと試み、鳴雪翁は之に反して醇雅余韵を尚びて絶対に新調を難ず」と、鳴雪が新調に反対の立場であったことを述べている。

また、同「俳三年」の四月十三日には「当時新らしければ取るべからずとは鳴雪翁の主義なりし」ともある。

(3)　新調の特徴

子規は虚子の俳句の特徴を「文学」（「日本人」第三十一巻　明治二十九年十一月二十日『子規全集』第十四巻　一八〇から一九〇頁）の中で述べながら新調の俳句の特徴を述べている。

句法の勁健奇抜なる処は多く蕪村より出づ、而して更に蕪村を拡張したる者なり。「つ」といふ止めは去来に一二句あれとも元禄前後に多く見ず。蕪村には五六句あり。「べく」といふ語は蕪村に二三句あり。之をはじめとなすか（「べし」といふ語は其角用ゐたり。其他にも多からん。「べう」といふ語は去来に一句あり）「あはれむ」「なつかしむ」も蕪村の用ゐはじめたるか。「な」「たる」といふ止め、「旅にして」といふ如き語、古句

にありやなしや知らず。たとひありたりとするも極めて珍しき語なり。

これは子規が虚子の次のような俳句の特徴を述べているのである。

蚊帳ごしに薬煮る母を悲みつ
青薄萩の若葉を圧すべく
子供多き寡あはれむ田植かな
帰省して書斎なつかしむ渋団扇
短夜を隣の女房早起な
短夜や遊女の顔の馬鹿げたる
旅にして低き下駄なり五月雨

この虚子の語の用い方従来の俳句に比して意匠や句法が異なり、これが新調である、虚子の句は従来にない意匠や句法のあるところが新調である、と容認しているといえる。また子規は、「明治二十九年の俳句界」（注1）で、虚子の新調について詳述し、新調の特色として、「五七五の調を破りたること」、「十七字以上の句を作ること」、「漢語を用ゐ又は漢文直訳の句法を用うること」、「助辞少くして名詞形容詞多きこと」の四点を挙げている。その原因としては、「古来ありふれたる五七五調に飽きて新調を得んと欲したること」、「複雑なる趣向を詠ぜんとしたること」、「印象を明瞭ならしめんとしたること」、「新事物を詠ぜんとしたること」、の四点を挙げている。子規のこの分析は、虚子の新調の原因とその結果を端的に述べているものであるが、明治の新しい俳句を目指した虚子の意気込みも推察される。子規は同文で、「碧梧桐虚子が新調を成して後の弊害は新調に僻するに在り」と、新調に偏ることの批判をして、その「二人と反対の位置に立つ者を鳴雪」と位置づけている。子規も新調を全面的に支持していたわけではないのである。

鳴雪は当時のことを「碧虚二氏が一旦のやうに変調を主張し、根底より俳句を改革しやうと勇往した頃などは、僕も随分居士の前に二氏と励（ママ）しい議論をしたこともあつた」と、新調に対して大議論をしたことを述懐し、また、子規は双方をなだめて、鳴雪に「俳事進運の前途は是非少壮者に託して種々の研究を試みしめねばならぬ」（「追悼雑記」『ホトトギス』第六巻第四号　明治三十五年十二月二十七日　七頁）と説いて虚子碧梧桐を見守っていた、とも述べている。子規は、新調は俳句発達上の一過程と見なしていたのであろう。

なお、鳴雪は新事物を俳句に取り入れることにも消極的であったようだ。先述の「俳三年」で紅緑は「体操、手品遣、本箱とビール、一銭蒸汽、妾宅、巡査、料理屋等は当時に在て新らし過ぎたるものを用ひて得意とせるものから鳴雪翁の詰責を受けたる点少なからざりき」と、鳴雪が新事物を詠むことに反対していたことをのべている。

また、子規も新題について述べた「松羅玉液」の文中で「夏帽十句と聞きて先づ題ばかりにてはや面白しと喜びたるは碧梧桐なり。題ばかり聞きて鋭気当るべからずと嘲笑せられたるは鳴雪翁なり」（明治二十九年八月二十四日）と、鳴雪の新事物を詠むことに消極的な態度について述べているのである。

しかし、紅緑や子規がいうように鳴雪が全ての新調や新事物詠を否定していたわけではなさそうだ。先に揚げた虚子の「一畝の」の句は運座で鳴雪も子規とともに選んでいるし、明治二十九年冬には「冴ゆる夜や一番汽車の煙吐く」と「汽車」という新事物を詠んでいる。また、明治三十年には「俳句盛運」の前書きをして「百年にして天明二百年にして明治の初日影」という二十八音の長い新調の句を詠んでいるのである（注2）。ただ、鳴雪が先頭に立って反対していたことには間違いないように思われる。

おわりに

以上のように、鳴雪は俳句に於ける新しい意匠や題材に対しては慎重な態度で取り組んでいたことがわかる。ハイカラで洋食好みの反面、俳句に対してはその歴史を重んじる立場をとっていたのである。これは鳴雪が古典や漢籍の素養が深かったことや、江戸時代（弘化四年）生まれの武士であったこととも深い関係があるだろう。そして、自国の歴史的な面に目を向けず西洋趣味に走る若者へ暗に警告を発していたとも思われる。

（注）

1　子規は『日本人』第三十一号（『日本人』明治二十九年九月二十日）に「文学」を掲載し、虚子の俳句の変遷について二十五年から二十九年までを論じている。『ほとゝぎす』第一巻第二号に転載。また、子規は「明治二十九年の俳諧」と題して新聞『日本』に三十年一月二日から三月十五日まで二十三回連載し、三月二十一日に附記を掲載している。

2　『新俳句』（明治三十一年三月　民友社）の序句である。

第二節　長老と若者

はじめに

鳴雪は弘化四年（一八四七）四月十五日生まれ、正岡子規は慶応三年（一八六七）九月十七日生まれ、高浜虚子は明治七年（一八七四）二月二十二日生まれである。鳴雪と子規は二十歳、鳴雪と虚子は二十六歳の年齢差である。鳴雪が文部省を辞任して常盤会寄宿舎監督に専任したのは明治二十四年である。また、鳴雪は漢詩の先生でもある。このような状況下であるから、子規や虚子が鳴雪のことを先生あるいは翁と呼称するのは自然であろう。碧梧桐が明治二十五年十二月三日に子規に宛てた書簡に「鳴雪翁とハ誰人に候ぞ」と問い、明治二十六年一月五日の子規宛て書簡で「鳴雪翁とは内藤先生なるよしきゝおよび候」と認めている。この碧梧桐の書簡からも「内藤先生」と呼ばれていたことがわかる。

このような立場にある鳴雪が、子規に俳句の指導を本格的に受けるようになったのは明治二十五年春頃と思われる（注1）。虚子の方が半年余り早い。明治二十四年の夏に松山へ帰省した子規から俳句の指導を受け、九月二十二日の子規宛て虚子書簡には、虚子が子規に俳号の命名を依頼している。そのような鳴雪と虚子の俳句活動を通して、次第に台頭してくる若者に鳴雪がどのように対処してゆくのか検討する。

(1)　鳴雪の活動

鳴雪が本格的に俳句を始めるようになったのは、明治二十五年春頃、常盤会寄宿舎監督時代である。鳴雪は寄宿生の子規等若者に交じって活動するのである。鳴雪と虚子の最初の出会いについては先述したが、上京後の虚子と交流の深まっていく様子を調べる。

明治二十七年一月、虚子は文学者を夢みて京都第三高等中学校退学を決意して上京し、常盤会寄宿舎に入舎する（注2）。寄宿舎の監督は鳴雪であるから、二人は監督と舎生という関係が当然生じたと思われる。しかし、二月には子規から虚子へ同宿の勧誘があり、三月に子規居へ移っているので舎生の期間は短い。

尤も、虚子は復学のため六月に京都へ帰っているので、東京に居たのは約二百日である。この間、虚子は鳴雪居で開催された運座に参加した記録がある（注3）。講談社版『子規全

集』には日付不詳句会稿として、老梅居で開催された運座の記録がある。この記録は虚子が明治二十八年一月十日に整理したものであるが、会者は十五名で五五八句が記録されている。この中で最高点は鳴雪の「年々や菜の花山を咲上る」の句で、子規など六名が選び、虚子は人位としている。この句は菜の花の題で詠まれているが、虚子も「菜の花や蝶むれ渡る大井川」の句で鳴雪他二名から選ばれている。鳴雪は毎年菜の花が麓から咲いて行く様子を詠み、虚子は菜の花の咲いている大井川を蝶が群れながら渡って行く様子を詠んだものであるが、双方とも「年々や」「菜の花や」と上五に詠嘆の切字を用いているため感動の焦点がややずれているように思われる。まだ写生が身についていない時期であることがわかる。

ところで、虚子の東京滞在中は、日本新聞社に入社して一年余りの子規が新聞「小日本」の編集責任者に大抜擢された時期とも重なる。子規は他の新聞に魁けて新聞「小日本」紙上で一般人を対象に俳句募集をし、五月には日本派初めての選句集『俳句二葉集』春の部を刊行して精力的に明治時代の新しい俳句を鼓吹しているのである。鳴雪は、この俳句募集に右山という号で投句し、「永き日や花の初瀬の堂めぐり」や「陽炎に牛の皮剥ぐ河原かな」などの句が、子規選の秀逸や天位に入選し、『俳句二葉集』に鳴雪句として採録されている。このことは、鳴雪の子規を応援する優しい気持や俳句も優れていたことがわかるエピソードといえるだろう。

さらに、子規は同紙に「俳諧一口話」を連載し（注４）、宗因や其角など古人の俳句を藤の花や幟などの季題別にあげてその特長を述べ、また蕪村や白雄の特色などを主とした俳諧史を論じている。その一方で、鳴雪は新聞「小日本」に「老梅居漫筆」を連載し、「和歌は古言に限り詩は漢語に限る俳句は二の者を兼ね用ひ更に俚語に及ぶ」、或いは「景色を叙するものはたとひ好句とならざるも無味と平凡とに帰するのみ卑俗と嫌やみとは此種の句に少なし」や「俳句は十七字の小説なり」など子規とは違う角度から俳句の基本を説き、子規と鳴雪はそれぞれ紙上に俳句論を展開しているのである。明治二十五年に本格的に俳句を始めた鳴雪が二十七年には新聞紙上に俳句論を連載するほどの進歩を見せたのは、鳴雪自身が持っている素養とたゆまぬ努力の賜物であろう。

この頃の鳴雪の活動振りについて子規は「鳴雪翁は不相変健在俳境いよ〳〵進歩の有様に御座候」と、森猿男宛て書簡（注５）に記しているが、この書簡からも鳴雪の人一倍努力する姿が浮かんでくる。

ところで、この様に子規とともに鳴雪の活躍する中で、虚子は確固たる目標を定めるこ

とが出来ず復学するのである。鳴雪と虚子の交友が深まるのは虚子二度目の退学、即ち、二七年十一月四日の子規宛書簡で決意を語っているように「十九世紀文学者」を任じて、仙台の第二高等中学を碧梧桐と共に退学した時からといえる。

2　虚子の活動

明治二十八年二月、子規は虚子の俳句が「近来虚子碧梧とも発句上達也殊ニ虚子ハ尤上達せり」（注6）と評価するが、反対に鳴雪の俳句は「鳴雪先生百題の内数句を示さる多くはこれ凡調俗声これは何としたもの」（注7）と、これまで凡兆や蕪村の俳句から学んで他を牽引してきた鳴雪に対する評とは思えないようなことを指摘している。どうもこの頃から鳴雪の俳句は古い、陳腐だと批判されるようになったと思われる。中には佐藤紅緑の如く「小生近頃碧虚二兄よりも鳴雪先生の什の秀逸あるに感し入り申候　鳴雪先生決して陳腐にあらすと確信仕り猶ほ小生も陳腐は取らすと自信致し候」（注8）と鳴雪句の陳腐さを否定しているが、これは陳腐という声が多かったことを反映しているともいえるだろう。

さて、子規は同年八月九日の虚子宛書簡で、「鳴雪翁と文学談ありし事及び其大意ハ御書面ニよりて承知致候」と、鳴雪と虚子との間で議論があったことを述べている。これに対して虚子は、八月三十日の子規宛書簡で「殊に鳴雪先生に対しての愚論を慥め得大に満足いたし申候」と、鳴雪との議論に於いて自身の論を子規に認められた喜びの返信を認めている。鳴雪と虚子との間に闘わされた議論の内容についての記述は書簡中にないが、先の子規書簡から音楽・絵画・小説・美などがテーマだったことが推察される。

虚子の八月二十八日の「朝貌日記」（注9）には「鳴雪先生を訪ふ。牛伴松山より来りて席に在り。俳談」とあり、鳴雪と虚子は度々議論をしていた様子をうかがうことができるが、鳴雪は九月四日の子規宛書簡でこの議論に触れたのであろう、「虚子ノ学識材能益進歩敬服ノ至リ　老兄ノ西行以来俳句其ノ他文学ノ学理談老耳ヲ洗フモノ無之候処今ヤ虚子在リ屢驚醒ヲ被フリ申候」と、虚子の著しい進歩とその論談ぶりを称賛している。鳴雪は虚子の活躍に期待をしているのであるが、論敵相手を誉める鳴雪の懐の大きさの表れている書簡ともいえる。これに加えて、碧梧桐は俳句の趣味や造詣に於いては虚子と差はないが学理談は一向に出来ず惜しいことだ、と虚子と碧梧桐との違いも指摘しており、鳴雪の洞察力がわかる。鳴雪が指摘した虚子の碧梧桐よりも学理談が優れているということは、子規が虚子を自分の後継者とした理由の一つと考えられるのではないだろうか。

⑶　鳴雪の休業

「ほとゝぎす」第四号（明治三十年四月）の裏表紙に「脳部ノ宿疾相勝レス候ニ付当分俳事ノ評選及贈答ヲ謝シ静養仕候此段辱知ノ諸君ニ謹告ス　内藤鳴雪」という告知文が掲載されている。また、同号の高田屋客（碧梧桐）の消息にも「鳴雪翁が俗事の脳痛の爲に一切俳事の通信往復等を断たれしは俳壇にとつての一変事と覚え候。あるは此際種々なる憶測を逞ふして、翁の子規子始め其他の人に飽き足らぬにや、時勢を慷慨してにやなど言ふ人もあれど、そは根も葉もなきことに候」とある。鳴雪が俗事と脳痛のために一切の俳事を断ってしまったというものである。鳴雪はこの告知文以外はなにも俳事を断つことに言及していないが、「日本人」第四十五号（明治三十年六月二十日）に掲載した文章「一話一言」の前書きに次のような一文がある。

記者云、驢背居主人は知名の士なり、自ら謂、高官に仕へて高官に安んせす、陋巷に所して陋巷に安んせす、我生涯芴々として常に驢背に在るが如しと。

驢背居主人とは鳴雪のことである。この文は、鳴雪自身がいうには、文部省参事官という役職を辞し、俗世間に身を置いているが自身の心は行方定まらず、我が生涯は驢馬の背に乗って詩を吟じる中国の文人のようなものだ、と。およそこの様な意味であろう。鳴雪の失意の様が見て取れる。この前書きに鳴雪が一時俳壇から退いた一番の理由が籠められているのではないだろうか。

鳴雪は子規の片腕として活躍していたのであるが、虚子と碧梧桐が第二高等中学校を退学して子規の元で研鑽するようになると次第に鳴雪は若者へその道を譲ろうとして身を引いて行ったと考えられる。子規の方も当然の成り行きとして、若い虚子と碧梧桐の二人を嘱望するのである。

この子規が鳴雪から虚子や碧梧桐の俳句に注目していくさまは、子規の選集の採録数をみてもわかる。表１（一七七頁参照）に示すように、鳴雪の採録数は、明治二十八年の「なじみ集」の一三・三％を最高に徐々に減少し、俳壇から一時退いた明治三十年から明治三十一年にかけての大幅に減少していることがわかる。一方虚子は、明治二十七年、二十八年と徐々に増加して行き、明治二十九年には鳴雪の二・三％に対して四・三％とその採録

数が逆転している。碧梧桐も同様に明治二十九年で鳴雪と逆転している。表全体を見ると、子規と明治二十三年に漢詩や俳句の回覧雑誌「つゞれの錦」を企画した五百木瓢亭は日清戦争後には政治へ関心が移り、子規の従兄弟の藤野古白は明治二十八年にピストル自殺をして、両者とも明治二十九年には殆ど採録されていない。このように消えて行く人に対して、明治二十八年に初めて採録された佐藤紅緑や石井露月、明治二十九年に初めて採録された福田把栗が台頭してきていることがわかる。

ともあれこの表から、明治二十九年は明治二十八年までとは違う虚子や碧梧桐を中心に新たな俳人が出てきた変わり目の年といえるだろう。明治二十九年は先述したように（八二から八六頁参照）、虚子が新調を発表して一世を風靡し、鳴雪が新調を難じた年である。

しかし、鳴雪は新調を難じながらも、子規が明治の新しい俳句を作るためには新調のように思い切ったことを試みるのもよいと考えていることを理解していたと思われる。鳴雪は、子規が「僕に向つては俳事進運の前途は是非少壮者に託して種々の研究を試みしめねばならぬ」と説いたと述べ、また、鳴雪の立場を「碧梧桐虚子両氏の如き人々が郷里より出で来つて、居士が左右に立つて相共に俳国を開拓経営するということになつたので、僕等は其勢ひ上羊裘を着て釣を垂れねばならぬ位置」（「追懐雑記」「ホトトギス」第六巻第四号　明治三十五年十二月二十七日　七頁）と述べている。それ故に、虚子や碧梧桐を子規の側近とし、鳴雪はやや身を退いたのであろう。

鳴雪は子規とともに日本派のリーダーとして明治三十二年の「太陽」の「明治十二俳仙」（注１０）に選ばれるほど活躍していたのであるが、自身の立場を弁別し、虚子や碧梧桐は俳句の大学の先生、鳴雪は幼稚園や小学校の先生であると公言しながら俳句初心者に対して日本の古典や漢籍などを視野に入れた指導をする。

また鳴雪は、俳句は美を詠う十七字の詩形であるという観点に立つと人間の或団体である各派に囚われる必要はない（注１１）、という考えから、虚子とは違って派閥に囚われない立場で俳句初心者の指導に力を注ぐのである。

おわりに

鳴雪と虚子は子規の元に於いてほぼ同時期に俳句を始めたのであるが、その出発点には違いがある。

鳴雪の場合、江戸時代に生まれて武士として暮らし、幼い頃から身についている古典や

漢詩、所謂古い東洋趣味がある。かたや虚子の場合、明治維新後の新しい時代に生まれ、個人尊重の西洋趣味がある。

この二人の根本的な違いは、虚子が俳人として成長して行くほどに表面化していったといえる。虚子が明治二十九年に新調の俳句を発表するやいなや議論好きの鳴雪は猛然と異論を唱えるのである。そして新しければよい、という風潮に対して、鳴雪は日本古来のよさを尊重する立場を明確にするのである。この明治二十九年は、子規の選集の採録数を検討してみると新旧交代の一つの変わり目となっていることがわかる。

なお、鳴雪は、虚子のよいところはよいと認めながら議論を闘わせるが、この正面切って議論する鳴雪の存在は重要で、議論によって虚子は多くのことを学ぶ機会が生じたと思われる。

鳴雪と虚子はそれぞれの立場で俳句を広めていく。また、鳴雪の俳句及びその選句は東洋趣味で平凡陳腐という批判の声が揚がる中、鳴雪は東洋歴史を保存してゆく上での批判は「鳴雪の鳴雪たる所だ」と得意に思いながら俳句促進に力を注ぐのである。

（注）

1　鳴雪は「鳴雪翁の俳句閲歴及び逸話（一）」（「ホトトギス」第二十八巻第八号　大正四年五月号　十頁）や『鳴雪自叙伝』（復刻版　二一四頁）などで述べている。

2　明治二月二十六日の子規の虚子宛て書簡、虚子の住所は常盤会寄宿舎内である。また、「常盤会及常盤会寄宿舎史」の舎友名簿に（『子規全集』第十巻　七二八頁　講談社）に虚子の在舎期間は二十七年一月から三月とある。

3　『年代順　虚子俳句全集』第一巻　（昭和十五年二月二十八日　新潮社）に、「春。老梅居運座の一」・「春。老梅居運座の二」・「春。老梅居運座の三」・「夏。老梅居運座の四」・「夏。老梅居運座の五」（四一頁から四三頁）の記録がある。

4　新聞「小日本」に明治二十七年四月二十六日から七月十五日まで三十六回連載。

5　子規書簡　森猿男宛　明治二十七年八月一日　（『子規全集』第十八巻　四八三頁）

6　子規書簡　五百木良三宛　明治二十八年二月二十八日（『子規全集』第十八巻　五二六頁）

7　子規書簡　碧梧桐・虚子宛　明治二十八年三月三十日（『子規全集』第十八巻　五三四頁）

8　佐藤紅緑書簡　子規宛　明治二十九年九月十三日（『子規全集』別巻一　二八〇頁）

9　虚子は「朝貌日記」と題して明治二十八年八月の出来事を俳句と短文との日記を記している。（注）3と同じ、九九頁

10『太陽』第五巻第十三号「明治の十二傑」のうち「十二俳仙」として老鼠堂永機宗匠・桂花園桂花宗匠・幸堂得知宗匠・内藤鳴雪先生・正岡子規先生・大野洒竹先生・春秋庵幹雄宗匠・雪中庵雀志宗匠・花の木聴秋宗匠・楽天居小波先生・十千万堂紅葉先生・聴南窓竹冷先生の十二名を掲載

11鳴雪「俳句の流派」四三・四四頁（『俳句独習』明治三十六年十二月三十一日　大学館）

第二章　鳴雪と松山版「ほとゝぎす」

第一節　松山版「ほとゝぎす」

はじめに

俳誌「ほとゝぎす」は明治三十年一月十五日に創刊号が発行された。奥付には、「発行兼編輯人柳原正之、印刷人田中七三郎、印刷所海南新聞株式会社、発行所松山市大字立花町五十番戸ほとゝぎす発行所」と記されている（本稿では、松山から発行された俳誌を「ほとゝぎす」、東京から発行された俳誌を「ホトトギス」と記す）。

柳原正之とは極堂のことで、松山藩士の父正義と母トシの長男で子規と同年である。極堂も青雲の志を抱いて明治十六年に上京し、共立学校や東京英語学校へ通うが勉強に難渋し、終に明治二十二年海南新聞入社のために帰郷するのである。

郷里での極堂は新聞の編集や政治活動に多忙を窮したが、子規が帰省するたび訪問しては俳句に触れ、子規も極堂にやる気を起こさせようとした。明治二十八年八月、子規は日清戦争の従軍記者として大陸に渡ったが、帰路の船中で喀血して神戸病院や須磨保養院で療養したのち漱石の下宿「愚陀仏庵」に寄寓した。極堂は早速子規を見舞い、松風会の俳句指導を頼み快諾を得るのである。愚陀仏庵における五十日あまりの俳句三昧は、極堂の俳句人生の中で最も充実した日々だったに違いない。

明治二十八年十月に子規が帰京した後の松山は急に寂しくなり、松風会の活気も次第に失せていったが、極堂は伊予に広まりつつある日本派の芽を育ててゆきたいと考え、「ほとゝぎす」の創刊となるのである（『友人子規』二四四頁）。

鳴雪と松山版「ほとゝぎす」の研究に畠中淳『内藤鳴雪』があり、畠中氏は「ほとゝぎす」の鳴雪掲載記事を丁寧に検討されている。二神将氏の『子規の文友　柳原極堂の生涯』は海南新聞や地元の資料を緻密に調査していて参考になる。本項ではこのような先行研究を踏まえた上で、新聞「日本」の俳句欄や雑誌「日本人」の資料も加えて検討していく。

極堂に『友人子規』（前田書房　昭和十八年二月二十日）という子規の足跡をたどり、子規顕彰に努めた著書があるように、「ほとゝぎす」は子規のために創刊したといっても過言ではないだろう。本項では、松山で誕生した俳誌「ほとゝぎす」と鳴雪の俳句活動の関係を考察する。先行研究に柳原正春氏の『父極堂』、子規博「柳原極堂―子規と共に―」や二神将『子規の文友柳原極堂の生涯』などある。

⑴　「ほとゝぎす」創刊

明治年三十年一月十五日、日本派初の俳誌「ほとゝぎす」が創刊された。創刊した極堂によると「自分の関係してゐた海南新聞の印刷部に、新派俳句の流をくむ河図、金波など称する青年があったので、彼等と相談して雑誌の印刷も製本も皆其手を煩はすことゝなし、用紙は新聞社のザラ紙を分けて貰う」と、経費節減に努めて作ったという。河図というのは本名は田中七三郎といい、明治七年生まれの海南新聞記者で、のち編集長となった人物である。七三郎はほとゝぎす発行時代の思い出を「むかしばな誌（四）」で次のように述べている。

東京に於ける俳壇は子規先生を不動明王に見立てる碧虚両氏が其お脇立の倶梨伽羅、勢多加二童子の如きものであるが如くに「ほとゝぎす」創刊事業の不動様は極堂氏で私と当時海南新聞社の職工長であった松川金波君とが差しづめ其の両お脇立を勤めた訳である。即ち発行兼編輯人には柳原氏自らが当り私が其印刷人になり松川君と三人かゝりで編輯、文選、植字、印刷、製本、配達に至るまですべて三人以外の手を借らないで仕上げて居たものである。尤も其原稿は殆ど悉く一応子規先生の手を経て纏めて送つて頂いて居たもので、其発行毎に先生から極めて親切な緻密な批評を受けこゞとを頂戴することも屢次であつた、第一号は其表紙をトキ色のネリ絹で夜業までして綴ぢたのであつたが、先生から其色合が面白くないと云はれ第二号は水色の練絹を使つて見たりしたこともあるがドウも感心されないので遂に之をやめてしまつた

（『伊予史談』第九十七号　伊予史談会　昭和十三年十月二十五日　七一・七二頁）

「ほとゝぎす」はこうした三人の手作りの下に発刊されたのである。極堂には、松風会と伊予に増えつつある日本派の俳人たちを「ほとゝぎす」に結集して子規を後援する、という目的があった。（松風会は松山高等小学校教員が中心となって発足し、愚陀仏庵で熱心に子規の指導を受けた日本派初期のグループ）そこで子規の方では、七三郎が述べている如く原稿の采配を担当するのであるが、こういう場合に子規が頼りにしたのは鳴雪であった。次の書簡は創刊準備相談の内容で、子規が極堂へ宛てたものである。

募集の分だけ鳴雪翁に御依頼ありては如何（同翁にハまだ此事不申出）雑誌の事ハいよ〳〵出すならいつ出すといふ事至急御申越願候

（明治二十九年十二月十日　子規の極堂宛書簡『子規全集』第十九巻　九二頁）

極堂は子規の助言を受けて上京し、各俳人に原稿依頼をしたことについて、『友人子規』に「二十九年の暮予は東京へ出かけて行き、子規はじめ虚、碧、鳴、飄等諸子にも逢つて依頼もし打合せもしたのであつた」（二四五頁）と述懐している。そして、いよいよ発行し始めると原稿の入手は困難だったらしく、子規は再び

文章か俳句かをしつかり集める用意なかるべからず　碧虚飄はじめそれ〳〵へ貴兄よりきびしく御請求あるべく候　鳴雪翁と僕とハ黙つてゐても送る

（明治三十年一月二十一日　子規の極堂宛書簡『子規全集』第十九巻　一一〇頁）

と助言している。この書簡からは、碧梧桐や虚子や瓢亭に比べて鳴雪が極めて協力的であったことがわかる。

全国に魁けたこの日本派の俳誌の創刊を最も喜んだのが鳴雪だ、といわれている。その鳴雪の喜び様を、子規は「鳴雪翁のうれしさは恰も情郎の情婦におけるが如く親の子におけるが如くにて、体裁も不体裁もなく只むやみやたらに嬉しき也」（同書簡　一一一頁）と極堂に知らせている。

「ほとゝぎす」は二十号まで松山から発行されるが、明治三十一年十月からは東京の高浜虚子が引き継いで発行することになる。子規をはじめとして、鳴雪も「ほとゝぎす」の

発行に協力を惜しまず、また、その発展に力を注いだのである。

⑵　「ほとゝぎす」第一号

「ほとゝぎす」第一号の口絵は蕪村の句「ほとゝぎす平安城をすちかひに」と、この句にちなんだ中村不折の作品で、一頁目の巻頭の文章は鳴雪の「老梅居漫筆」である。この「老梅居漫筆」は、前述した明治二十七年の新聞「小日本」掲載文の後半二回分を削除して転載したものである。その異同は巻末（一七九頁参照）に掲げているが、内容に大きな変化はないが最後の二回分は削除している。

ひとつ書きにして二十項目からなる鳴雪の論述は、俳句のあるべき姿について述べている。鳴雪は先ず、和歌は和語、漢詩は漢語、俳句は和語と漢語と俚語（俗語）を用いて詠む、ということを述べているが、俳句の特徴を簡明に述べたところには、鳴雪の俳句観がよく現れているといえる。また、創刊号に相応しく俳句のあり方と心得とを述べている。

なお、「老梅居漫筆」の文末に「ほとゝぎすの発行ありと聞きて」という前書きとともに、次の句を掲げている。

故郷に嬉しきものゝ初音かな　　鳴雪

この句の「故郷」は勿論松山で、鳴雪の素直な詠みぶりは読者にも十分その嬉しさが伝わってくるように思う。

七頁に子規の「ほとゝぎすの発刊を祝す」があり、その文末に「新年や鶯啼いてほとゝぎす　子規」の句がある。

九頁に「ほとゝぎす発刊祝句」十二名の句があり、その一番目は鳴雪の「ほとゝぎす画に鳴け年の新なる　鳴雪」の句である。

十頁の次に朱色の挟み込み紙に極堂の「ほとゝぎす発刊の辞」、十一頁から子規の募集俳句選句、二十頁から鳴雪の募集俳句選句となっている。因みに子規と鳴雪の入選句の中から人地天の三句を次に示す。

正岡子規宗匠選

人　合客のふとん引はるぞ小賢き　　極堂

地　寺に寝て法話にふくるふとん哉　　青簑
天　俳優の馬に着けゆくふとんかな　　岬雲

内藤鳴雪宗匠選

人　ちとり鳴く大川尻の月夜かな　　鹽梅
地　朝川やふとん捧て渡る人　　眞女
天　小夜しくれ終には松の風と成ぬ　　美馬

第一号は、時雨・千鳥・布団の兼題で募集されたのであるが、子規は偶然なのか布団の句ばかり、鳴雪はバランスよく三つの兼題で選んでいる。

こうして第一号全体を眺めてみると、巻頭の文章といい祝句といい、また子規と二人で募集句選者を勤めたなどから、鳴雪の存在の重さを推測することができる。

なお、鳴雪は常盤会寄宿舎の監督であり、子規より二十歳年上の漢詩の師であり、またかつて松山藩の小姓だったことでもわかるように家柄もよい、というような点でも特に松山という地では敬重された存在であったとも考えられる。

(3)　「ほとゝぎす」第四號

「ほとゝぎす」第四號は明治三十年四月三十日に発行された。この号では殆ど鳴雪の名が見当たらない。巻頭は高浜虚子の「俳運」で、俳諧専門雑誌の必要という副題のもと、中央と地方の俳人相互の作句心得について述べた文章が掲載されている。

第二号・三号の巻頭は鳴雪の「粛山公遺吟」「粛山公俳事」と題した松山藩旧藩主松平隠岐守定直公（粛山）の俳句を顕彰する鳴雪の文章であり、第三号には雑誌「日本人」第二十七号から子規の「内藤鳴雪」も転載されていたので、第四号で鳴雪の名がないのはいかにも寂しい。

また、第三号で鳴雪と告知されていた課題句選者が四号では碧梧桐に変更されている。

第二号の「消息　東都　淡路町人（虚子）」には、

鳴雪は俗事蝟集倉忙の中にも「太陽」「海南新聞」「ほとゝぎす」の句の撰抜等には眼鏡を拭ふて苟くもせす、若し人の訪ふものありて十七字詩の談評に移る時は老梅居樓上風生雲起常に髯を染むるの餘勇を示し候

と、鳴雪の活躍ぶりが紹介され、また、同号の「二月消息　東都　高田屋客（碧梧桐）」には、

○二月十八日大坂より露石氏上京。直ちに根岸庵に小会を催し候。此夜鳴雪子規両氏の議論相衝突し、龍撃虎擲殆んど相容れざるもの時余、爲に夜大闌けて大雪到り申候。

○内藤鳴雪翁はこの度新に「曙」といへる雑誌を生捕へられ吾党の俳句を載すべき出店を得たりと喜ばれ候、翁が新調を排して独り幽玄朦朧説を布き給ふ事、後世迄の語り草に候

と、鳴雪と子規の大議論や新調に同調しない鳴雪の様子が語られ、鳴雪についての記載や作品は多いのである。

ところが、先述したように第四号には鳴雪の文章や俳句はなく、「消息　東都　高田屋客」として次のような記事がある。

一、鳴雪翁が俗事の脳痛の爲に一切俳事の通信往復等を断たれしは俳壇にとつての一変事と覚え候。あるは此際種々なる憶測を逞ふして、翁の子規子始め其他の人に飽き足らぬにや、時勢を慷慨してにやなど言ふ人もあれど、そは根も葉もなきことに候。翁には決して他意あることなくたゞ一身上の都合より此たびの決果に及びたるものにて、決して長く久しく打ち絶たるゝものには無之候。翁の俳壇に於ける功績今更言ふ迄も無之諸君子の已に御領承相成る処、そを今日断然御廃棄になること尤も惜しみても余りあることと我らは再び翁の出馬あらんこと一日も早からんを希望すると共に、翁の心事も亦た考へ察すべきことかと愚考仕候。尤も翁も全く俳事を抛れたるにはあらず、興に乗じては会にも臨み自作他評は敢て辞する処にあらずとの事に候へば此こと聊か我等の情を慰するに足るべきかと存じ候。

鳴雪が俗事と脳痛の爲に一切の俳事を断ってしまった、とその動静を伝えるものである。長老で重鎮の鳴雪の俳壇引退ともとれるような行動は、この「消息」にもあるようにいろいろな憶測を呼んだようである。しかし、鳴雪自身は只、「ほとゝぎす」第四号の裏表紙に「脳部ノ宿疾相勝レス候ニ付当分俳事ノ評選及贈答ヲ謝シ静養仕候此段辱知ノ諸君ニ謹告

ス　内藤鳴雪」と告知しているのみである。

鳴雪はすっかり俳壇から退いてしまったのであろうか。「ほとゝぎす」を調べると、第五号や七号・八号・九号などに掲載されている碧梧桐による「席上錄」には、鳴雪も子規や虚子とともに俳句評を活発にしている。

また、先述した雑誌「日本人」に鳴雪の「一話一言」と題した文の前書きには、鳴雪の失意の様が見て取れるが、漢詩は人生を憂えるのがお決まりでもあるので、ここは少し差し引いて考えたい。「一話一言」の本文は、堕胎・胎児の問題について、雑司谷の鬼子母神のこと、幾度行っても厭かぬ所、月見のこと、芝居のこと、東京に地蔵のこと等を、二頁に渡って綴った短文である。

鳴雪の「一話一言」を読んだ子規は、明治三十年六月二十二日早速、鳴雪に書簡を送っている。その内容は、「謹啓　ふりミふらすみの時節御脳痛如何や」に始まり、「本日日本人の一話一言を拝見す　前日拝見したるものなれと今更のやうに面白く覚候まゝ少し申上候」として縷々評を認めている。例えば「驢背居の字尤妙」、鳴雪の「鬼子母神堂に詣でしに」や「路を農夫に問ひしに」のような文に対して「御文中『しに』の字多くために文章たるみたるやうに覚ゆ」、「雑司谷、郊野散行の二章尤悪きやうに覚候」など、評価すべきは評価する一方で、相変わらず遠慮なく手厳しい批評をしている。鳴雪と子規の関係に変わりはないようである。

この俳事を断つ誘因は二月十八日の句会に於ける子規との激論とする説、三月二十日の令嬢結婚とする説、常盤会寄宿舎内共同文庫にある「新小説」や「ほとゝぎす」を非難した騒動を監督として責任をとって謹慎したとする説、虚子や碧梧桐の新調・乱調の俳句に対する不和とする説、あるいは持病ともいえる不眠症とする説等がある。これらの説には決定的な確証がなく、鳴雪は「私は中途で俳句の作をやめて居た事もあつたが、間もなく死灰再び燃えて相替らず作る事になつた」と『鳴雪自叙伝』で述懐しているのみである。しかしそうは言っても、その実、鳴雪は子規や虚子とともに俳句評をしたり、雑誌「日本人」（第四十五号　明治三十年六月二十日）に寄稿したりと、活動を以前程ではないが続けていたのである。

おわりに

日本派初の俳誌「ほとゝぎす」が松山から創刊されると、鳴雪が最も喜び、また、協力

に力を惜しまなかったのであるが、突然ともいえる休業宣言をして俳壇を驚かせた。その理由を「ほとゝぎす」掲載記事から考察すると、新旧交代の影が見える。

第二節　明治三十年の「ほとゝぎす」消息欄の鳴雪

はじめに

明治三十年一月十五日に第一号が発刊された「ほとゝぎす」には、毎号のように東京の俳壇状況や子規、鳴雪、虚子、碧梧桐など主要俳人の動向が「当地近頃の俳況」・「東都通信」・「消息」などと題して掲載されている。中央から遠く離れた松山の俳人にとって、この最先端の情報は貴重だったにちがいない。

本項では、この消息欄を月日を追ってみていき、鳴雪の動向から俳事を絶ったといわれる理由を明らかにし、またその俳壇復帰について検討する。

⑴　「ほとゝぎす」第四号から第十二号

前述したように、「ほとゝぎす」第四号の「消息」や裏表紙に鳴雪の俳事を断つことが記されている。第四号に引き続き第五号の虚子の「消息」（淡路町人）には、

老梅居を叩き其の意見を窺ひしは別に深意あるに非ず、必竟昨今俳句を弄ぶの趣味薄らぎ却つて俳事に於ける責任多くなりし爲めいはゞ嘗て冠を掛けて閑散の詩的天地を撰び玉ひしと同様又暫くは五月蠅き俳事の天地を退いて徐ろに風月其物（ママ）と楽まんの希望に出たる趣に御座候（「ほとゝぎす」第五号　明治三十年五月三十日　一三頁）

と、俳事を断つ理由を「五月蠅き俳事の天地を退いて徐ろに風月其物と楽まんの希望」とし、単なる俳事の忙しさから身を引くのだ、と述べている。

第六号の「思ふことども」（駿台隠士）には、

この頃詩に興がのりて発句は一向に出ませんと鳴雪翁申さるゝ、蓋し翁の詩眼は俳句によつて開かれたるものなれば十七字は暫らく遠（ママ）からるゝも俳想は更に遠かる事無

かるべし　　（「ほとゝぎす」第六号明治三十年六月三十日　いの七頁）

と、その理由を「この頃詩に興がのりて発句は一向に出ません」と漢詩の方に興味が移っていることを述べている。

第七号の「消息」（淡路町人）では、

去月下旬子規子の病俄に重り一同喫驚、鳴雪翁はじめ飄亭肋骨小生等膝を集めて旅に在る碧梧桐にも急電を発せんかなど打ち騒ぎ申候、此事は御地松風会員諸君も既に御承知の事、諸君より夫を生等へ当てゝ御見舞状被下候御懇情一同感銘致し居り候専に御座候　（略）鳴雪翁は唐詩選など繙き忙裡の閑を愉み居られ候

（「ほとゝぎす」第七号明治三十年七月三十日　一三頁）

と、子規の病状悪化の際にはやはり鳴雪を中心にその対策をとっていることを述べ、さらに鳴雪は「唐詩選など繙」いていて、やはり漢詩に興味がある様を伝えている。

これら第六号・第七号からわかるように、鳴雪についての消息は、俳句をやめて漢詩に興じている、と受け取ることが出来る。この有様について鳴雪は、村上霽月宛書簡で次のように述べている。

拝復　俳事ヲ廃候よりハ自然御疎隔ニ至奉謝候。先以益御雅健奉賀候。扨来示ニ小生近来詩三昧云々右ハ全ク伝フル者ノ誤ニテ、敗脳ハ詩ニモ亦堪フル所ニ非ズ。但酒飲ヲ禁ズルトキハ少し取菓子ヲ喰ヒ出シタ様ト申ス如ク俳句ヲ断テ見ルト、何ヤラ物淋しキ折ナキニ非ズ、因テ昔玩ビ候詩ヲ思出シ粋吟シテ見ル位ノコトハ有之ヲ仰山ニ伝フル者ノアリマスコトハ存候。詩俳本一、既ニ俳ニ備ルヽ者と詩ニ奮フコトヲ得シヤ。来僅二十首斗ハ出来申候。是モ人ト応酬ノ吟ニ過ギズ。

（霽月宛鳴雪書簡　明治三十年九月二十八日）

鳴雪はこの書簡の中で決して詩三昧の暮らしではなく、俳句を作らない淋しさを覚えた折りに漢詩を詠むのだ、と霽月に返事を認めているのである。

第十二号の「東都通信」（日暮里人）では、

我が根岸会も月に一度は必ず開け本年末迄は第一土曜と限られ居り候ひしが明年よりは第二土曜に改まり申候（略）鳴雪翁は俳句は作られねど我等も時々談論だけは伺ひゐることに候飄亭亦俳句を作らねど小説に筆を染むるの意あり其の健筆はいづれ日本新聞紙上貴族院の傍聴筆記に見られ可申候

（「ほとゝぎす」第十二号明治三十年十二月三十日　十頁）

と述べ、子規庵で行われている定例句会のことや、鳴雪は「俳句は作られねど我等も時々談論だけは伺ひゐる」と伝えている。

ではこの時期、鳴雪は全く俳句を作っていなかったのであろうか。明治三十年の鳴雪にはどのような俳句作品があるのか、『子規全集』（講談社）の句会稿を調べると、一月、二月十八日、五月一日、七月十八日、八月二十二日、九月四日、十月二日、十二月二十四日、春、春、夏、冬、の十二回の句会稿がある。これらの中で会者として鳴雪の名があるのは、二月十八日のみで、

此頃は女畑打つ軍哉　　鳴雪

の句が一句高得点を獲得してある。この句は「承露盤」にも採録されている。二月十八日の句会は鳴雪と子規が激しく意見を戦わした日で、まだ「俳事ヲ謝ス」と告知する前である。以後、句会稿の会者に鳴雪の名はない。

ただ、十二月二十四日の句会は蕪村忌で、句会稿には鳴雪の名も俳句もないが、第十三号には「蕪村忌」の記事とともに「手向の句」の中に次の鳴雪句が掲載されている。

大蕪小蕪さては赤蕪吾老矣　　鳴雪

この蕪村忌の様子は先の第十二号「東都通信」でも紹介されているが、河東碧梧桐の記した『子規の回想』に当日の雰囲気がよく表れているので、少し長いが引用する。

子規「今日は是非先生に、久しぶりで我々の句の御評を願ひたいと思ひますが。

鳴雪「イエ滅相な、今日は又た相憎約束がありましてな。

如何にも仰々しく膝を揺がして、なめし革で包んだ帯の時計を出したり入れたり。

鳴雪「さア、折角参会しながら、一句なしといふのも、鳴雪刀の手前、敵にうしろを見せたと言はれて……サア、何かやりますかな、イエ実を言ふと、孕句、アツハ、、、、、ちやアんと途々考へて来ましてな、そこらにぬかりはないでやして。

坐を立つて座敷の出口の方に席をとり、そこに出してあつた半紙を、イヤといふ程唾

液をつけて一枚めくり、硯の中の筆をとつて口に持つて行くのも、眼もとまらぬ迅さ。
大蕪小蕪さては赤蕪吾老矣
と墨べた〳〵、例の細かい筆の操り方。
鳴雪「虚子君〳〵。
と野放図もない大きな声。
鳴雪「さては赤蕪吾老いたり矣」鳴雪近頃新調になりましてな。アハ、アハ、アツハツハ、、、。かう見えても、鳴雪なか〳〵隅に置けません、アハアハ、アツハ、、、。
四隣に響くやうな例の爆笑で、ツツツツと立つて、姿はもうそこに無かつた。
久しぶりでのユーモリスト鳴雪の一ナンセンス、こんなことで蕪村忌第一回は閉幕された。これに魅入られたのか、あと十八人の参会者も庵主も、何ぞといふと鳴雪張りの声色、軽口、駄洒落、一時は忘年にふさはしい笑ひの会のやうだつた。
（碧梧桐『子規の回想』　昭南書房　昭和十九年六月十日　三一六から三一七頁）

鳴雪の快活さや性急さがユーモアに溢れた会話体で書かれている。しかし、ここには手向句を用意する鳴雪の心遣いとともに、鳴雪の老いたることの寂寞感も漂っているように思う。

以上のように、「ほとゝぎす」の消息から、鳴雪は句会に参加しないが句評をしたり、漢詩を詠んだりしていたことがわかる。

なお、明治三十年の子規の「病牀手記」には「八月五日　晴　朝内藤鳴雪先生訪ハル」、「八月卅日　曇　午後内藤鳴雪氏訪ハル」、「十月十一日　快晴　鳴雪翁訪ハル」、とあり、鳴雪は子規の見舞いに訪れていたようだ。運座の盛んに行われていた明治二十六、七年には頻繁に往来していたことを思うと隔世の感がある。

⑵　明治三十年の新聞「日本」俳句欄

新聞「日本」の俳句欄は、明治二十六年二月三日に子規が新設して以来、所謂日本派俳人の拠り所といってよい。

この「日本」の俳句欄は、子規の選抜による日本派有力俳人の秀句が掲載されてきている。鳴雪も常連の一人であるが、「俳事ヲ謝ス」と告知した後はどうであろうか。明治三十年五月から十二月までの月日と句数の一覧表を次に示す。

明治30年　月日	句数
5月18日	3句
6月　6日	1句
13日	2句
22日	2句
29日	2句
7月　3日	1句
6日	1句
10日	1句
19日	1句
8月15日	3句
22日	3句
9月　9日	3句
10月9日	3句
11月20日	3句
12月11日	3句

右の表から、俳句欄掲載日数の減少がわかる。ではこの俳句欄の鳴雪句はどのような作品であろうか。六月二十九日の二句、八月二十二日の三句、十月九日の三句を次に示すこととする。

六月二十九日

夕立や石吹き落す六合目

短夜や飯粒踏みし台所

八月二十二日

墓道古りぬ首洗ひたる秋の水

いたいけに嵐の中の三日の月

草深く虫取る人の小雪洞

十月九日

目薬に涼しく秋を知る日かな

浅茅生の末枯るゝ中に赤き花

菊に文戸に物申す女の童

これらの俳句を子規の秀句控え帳ともいえる「承露盤」で調べてみると、明治三十年の作と二十九年の作がまじっている。六月二十九日の俳句は二句とも三十年、八月二十二日の俳句は三句とも二十九年、十月九日の俳句は、「目薬に」が三十年、「浅茅生の」と「菊に文」が二十九年、とそれぞれの「承露盤」に採録されている。従って、子規は新聞「日本」に掲載する季節を考慮しながら「承露盤」の古い作品からも掲載しているといえる。

次に、子規選集句数一覧表（表1）（一七七頁参照）を示す。これは明治二十五年から明治三十三年までの子規選集採録数を示した一覧表である。

表1から、明治三十年・三十一年の鳴雪句採録数が極端に減少していることがわかる。

子規は「明治三十年の俳句（下）」（新聞「日本」明治三十一年一月四日）で「鳴雪俳壇を退き墨水亦多くは俗事に礙げらる」と述べ、「明治三十一年の俳句界」（「ホトトギス」二巻四号　明治三十二年一月十日）では「東京にては先輩鳴雪再び俳壇に出で後進を誘導す。太だ人意を強うす。其蕪村句集輪講に於ける解説の如き其力を籍る者もつとも多し」と述べ、鳴雪の復帰を歓迎している。しかし、明治三十一年の「承露盤」採録数は零である。

(3)　鳴雪の俳句会復帰

子規は明治三十一年一月十三日の新聞「日本」の「閒人閒語」で次のように述べている。

鳴雪翁俗多きに堪へず、終に俳壇を退く。俳句界此老将を失ふ。惜むべし。翁、人に教ふる懇切にして一句一字を説く猶数百言を費す。他の我意を会得するを俟つて後に已む。後進を益すること尠からず。しかも斯の若き人の長く俳壇に駆馳するを許さず。人世意の如くならざる概ね此類なり。翁の俳句会に臨むや亦俳句を評すること極めて詳密、苟も人の之に服せざる者ある時は弁難駁撃余力を遺さず、声響屋を揺かし口角沫を飛ばす。疾風起り毛髪竪つの勢あり、少壮の者且つ其勢に恐れて逡巡す。爾来俳句会は猶絶えざるも、翁の声を聞かず、冬枯の感無きにあらず。

侃々も諤々も聞かず冬篭　　（新聞「日本」「閒人閒語」）

前年十二月二十四日の蕪村忌に顔を出した鳴雪ではあるが、明治三十一年一月はまだ「俳壇を退」いたままである。鳴雪不在の句会を「冬枯の感」と子規は表現し、その淋しさを述べているのである。

ところで、「ほとゝぎす」第十二号「東都通信」（日暮里人）で「近日また俳句の研究会を開き古人の句集等の輪講を試むる筈に有之候」と告知されていた輪講の第一回が、明治三十一年一月十五日に開催されている。参加者は子規・虚子・碧梧桐の三人である。この輪講の記録は「ほとゝぎす」第十四号に「輪講摘録」の題（九回以後は「蕪村句集講義」と改題）で掲載されているが、子規が鳴雪に質問したのであろうか、「子規附けていふ、鳴

雪翁いふ、此句の烏帽子の主は昔五位六位の官人の類なるべしと」などと鳴雪のコメントが追加されている。そして第二回からは鳴雪も輪講に加わり、以後、先頭を切って発言をし、古典や漢籍に通じている実力を発揮するのである。一例を示そう。蕪村の「牙寒き梁の月の鼠かな」の句に対して鳴雪は、

漢書の方の出所を二つ考へ出しました。一つは杜甫の五言古詩に夢李白といふがある、其内に落月満屋梁、猶疑見顔色といふ名高い句がある、それの事で、梁の月といふは此句から出たのでせう。今一つは詩経にある詩で相鼠有歯、人而無止、不死何俟。相鼠有体、人而無体、人而無礼、人而無礼、胡不遄死、とある、これから牙寒きといふたのではあるまいか（「ホトトギス」第二巻第一号　明治三十一年十月十日　一二頁）

と解説し、子規は「落月屋梁の事は気が付きませんでした」と述べている。

この輪講は子規没後の明治三十六年四月六日第六十三回で終了し、記録は「ホトトギス」に毎月掲載されてゆく。また、これらの記録は順次単行本として刊行されるが、この「蕪村句集講義」については、次章で述べる。

この輪講に参加した鳴雪について「ほとゝぎす」第十八号（明治三十一年六月三十日）の「東都消息」（森々）では「鳴雪翁は輪講の時のみ出られ候が、絶えて御句作ありとは承らず候」とあり、まだ句作をしていない様子が述べられている。例えば、五月五日の「日本」の俳句欄に次の鳴雪句が掲載されているが、

青嵐云ふ師は薬を探り去ると
大妓小妓起き出でゝ牡丹日午なり
日は峰に夕立つ杉の谷間かな

これらの句、「青嵐」と「大妓小妓」は明治二十九年の「承露盤」、「日は峰に」は明治二十八年の「承露盤」に採録されている作品で、明治三十一年作ではない。

鳴雪が句会に参加した記録は『子規全集』（講談社）の句会稿にはないが、『年代順虚子俳句全集』（昭和十五年二月二十八日　新潮社）の明治三十一年の項に「八月二十八日。小庵に集まるもの、鳴雪、碧梧桐、把栗、墨水、世南」（二五五頁）とある。鳴雪句は記録されておらず不明であるが、虚子庵の句会に参加したことが記されているのである。

また、「九月。「ホトトギス」を東京に移し、主宰す。発行所を神田錦町一丁目十二番地に置く。九月二十五日。ホトトギス発行所樓上に於て俳句会。会者、世南、四方太、五城、麗水、楽天、鳴雪、把栗、碧梧桐、牛伴、墨水、秋竹」（二五八頁）とあり、鳴雪がホトトギス発行所での句会に参加したことがわかる。さらに、十月二十三日、十月二十五日、十一月二十五日、十二月二十四日の句会の会者にも鳴雪の名が連ねてある。

以上のことから考えて、鳴雪が句会に再び参加し始めたのは遅くとも明治三十一年八月二十八日の虚子庵での句会と思われる。

おわりに

「ほとゝぎす」第四号（明治三十年四月三十日）に突然鳴雪が「俳事ヲ謝ス」と告知した理由を、「ほとゝぎす」の「消息」を中心にして検討してきた。その理由はいろいろ考えられるが、第一は脳痛であろうか。明治二十四年四月に文部省参事官を辞任したときの理由の一つが脳痛や不眠症であったこともあり、俳事の忙しさから脳痛が起こったと思われる。柳原極堂のいう常盤会寄宿舎の共同文庫の雑誌騒動の責任をとって謹慎（『友人子規』昭和十八年二月二十日　前田書房）ということも、責任感の強い鳴雪らしい行動と思われる。いずれにしても確定できることではないようだ。

また、「俳事ヲ謝ス」という内容について検討したところ、鳴雪は句会に参加していない間でも、談論したり子規を見舞ったり、と交友は断っていなかったことがわかった。そして、明治三十一年一月十五日から始まった「蕪村句集講義」には率先して参加・発言し、句会には遅くとも明治三十一年八月二十八日の虚子庵句会に参加していることがわかった。

なお、新聞「日本」の俳句欄に掲載されている鳴雪の句は、子規が「承露盤」の中から季節に合わせて選んだ明治二十八年・二十九年の俳句を明治三十年や明治三十一年の俳句欄に掲載していることを指摘した。

第三節　東京版「ホトトギス」

はじめに

虚子が極堂から松山版「ほとゝぎす」を譲渡され、東京で発行することに関する先行研

究は多い。資料も極堂著『友人子規』が用いられることが多い。本項ではそれらのことを踏まえた上で、新しい視点から「ホトトギス」東遷を捉えなおしたい。

また、極堂から虚子へ譲渡された「ホトトギス」の経緯を検討し、東京から発行することになった意義も考えたい。「ホトトギス」には多くの新企画が盛り込まれていることを指摘する。また、「ホトトギス」東遷にあたり、碧梧桐が疎外感をもっていることに気がついた鳴雪の取った行動についても言及する。更に、子規没後の「ホトトギス」読者に子規の精神の継承発展と結束を訴えた鳴雪ならではの行動についても明らかにする。

(1) 「ホトトギス」東遷

松山版「ほとゝぎす」の「風交」欄を見ると、第五号・六号で読者はすでに北は仙台から南は台湾まで及んでいる。子規の原稿は新聞「日本」からの転載記事も含まれてをり全てが新鮮ではないが、「課題句選」や「俳諧反故籠」「或問」などは地方読者の向学心を誘う的を得た企画といえる。「ほとゝぎす」は一歩ずつ充実発展していったが、その資金繰りは大変なものだったようだ。第五号から定価六銭を六銭五厘に値上げしたが焼石に水だった。その最大の原因は誌代回収率の低さにあったようだ。第八号の「発行所広告」(後一二頁)に、

当発行処資金手薄にて会計係困難致候兼有之申上兼候へども代金御払込みに成り居らざる方々は至急是迄御入手相成候部数に就て御勘定の上代金御送付被下度候

と大きく広告を出している。この窮状を察してか鳴雪が一円寄付した謝辞が第十三号の「発行所謹告」にある。また、新聞社の機材や人を使って俳誌を発行することに新聞社内部から批判が出て来たらしい(注1)。

ところで、第十四号の「謹告」には「発行人極堂已むを得ざる事故のため目(ママ)今紛忙を極め居り充分編輯に尽す能はず」、第十五号には「本誌主任極堂障る事ありて本誌当号の校正に中る能はず」と極堂の多忙を告げ編集校正の不完全さを告げている。これは、極堂が関西青年自由会と自由党愛媛支部の幹事に選出され、政治活動が忙しくなったためである。資金面でも時間の面でも身動きのとれない手詰まり状態は早くも俳壇の知るところとなったようだ。「帝国文学」(第三巻第十号　明治三十年十月十日)には「伊予に『ほとゝぎす』

なる雑誌あり号を重ぬること殆んど十に及ぶ。近時聞く所に依れば改めて発行所を東京に移し、日本派俳句の機関雑誌とせん計画ありと」と「ほとゝぎす」東遷の噂話を掲載している。

極堂は子規に資金のことや編集上の困難さを訴えたのであろう。極堂に答えた次のよう子規の書簡がある（明治三十年十二月十八日　極堂宛て子規書簡　『子規全集』　第十九巻　二二二頁）。

編集上尤も面倒なるは募集句清書ならんと存候　せめてはこれだけにても御手を助けんと存此度は小生清書致し俳巻に添え置候　今後も出来さへすれば清書可致候（略）小生金はなけれども場合によりては救済の手段も可有之と存居候　定価の事は可成しば〳〵変更せぬこそよけれと存候

子規の「ほとゝぎす」存続を願う気持ちが強く表れた書簡である。この子規の書簡で再び「ほとゝぎす」発行に従事するのであるが、極堂は既に創刊当初の情熱を失っていたようだ。「ほとゝぎす」から遁避しようと企てていた、と『友人子規』（二五四頁）で述べている。

一方東京では、虚子が俳誌発行の計画を子規に語り、反対する子規を説き伏せていた。子規は「今度若しやるなら臍を固めてやりたまへ　小生ひとりひとり必死でやるのに貴兄が存外冷淡であつたり疲労して寝てしまつたりせられては困る」（明治三十一年七月一日虚子宛て子規書簡　『子規全集』第十九巻　二〇三頁）と釘を刺した。それに答えて虚子は、「自ら顧み自ら戒め更に大兄の御決心に対して小生の決心も譲るまじと深く心に誓ふた。然り大兄と両人でやる、大兄が御病気の時は小生独りでやる」と、その覚悟のほどを示したのである。

「ほとゝぎす」東遷の話が急に煮詰まったのは明治三十一年七月と思われ、極堂は『友人子規』（二五八頁）の中で次のように述べている。

七月に入つて虚子が愈々決意したから予て話して置いた通り「ほとゝぎす」を譲つてくれ、又虚子は当時松山に帰省してゐるから直接会つて其手続を取つてくれ、自分は今「ほとゝぎす発行所を東京に遷す事」と題する原稿を草してゐるから次便に送る。之を八月号に掲げてそれで松山のほとゝぎすは打ち切ることにしてくれ、といふやう

なことを子規が言つてよこした。

極堂は「海南新聞」の明治三十一年七月十五日、十六日に「本誌愛読者諸君の中代金滞りの分は二三日中に必ず御送金被下度目下印刷所に対する総勘定期にして会計上右御依頼仕候次第に御座候也」という広告を出し、誌代の清算に取りかかっている。

虚子は、子規の「ほとゝぎす」引継ぎの要項を記した書簡（明治三十一年七月二十一日『子規全集』第十九巻　三〇八頁）を携えて極堂の元を訪れている。その書簡には「前金で来て居る金ハホトヽギスの負債にあてる事」とあるが、極堂は「発行所には別に負債らしい負債も無ければ財産もないから別に引きつぐものもない。唯これだけを差し上げるといつて読者名簿一冊を虚子氏に渡して引つぎは簡単に終了した」（『友人子規』二五九頁）と述べている。この引継ぎはぞんざいなやり方ともとれるし、淡泊な様でもある。引継ぎがいとも簡単に終わったのは、虚子が五月から母親の看病のため帰郷していたことにもよるだろう。日野正寛氏は「極堂虚子の間で、子規に知らせないまま『ほととぎす』譲渡の話が進展したであろう」（「墓碑銘は何故書かれたか―博物館屋的一考察―」『愛文』　第三十二号　平成九年三月　一七頁）と推察しているが、十分考えらえることであろう。

このようにして、松山版「ほとゝぎす」は第二十号を以て終り、東京の虚子へ引き継がれたのである。

⑵　「ホトトギス」第二巻第一号

明治三十一年十月十日、「ホトトギス」第二巻第一号が虚子によって東京市神田区錦町一丁目十二番地から発行された。この住所は発行所と虚子住居を兼ねている。松山時代と著しく違うのは次のような点である。表紙は今までの白無地から石版色刷の満月の画、口絵は下村為山と中村不折、従来の「輪講摘録」を「蕪村句集講義」と改める、子規の「小園の記」と虚子の「浅草寺のくさ〴〵」という写生文の始まりといわれる文を加えたこと、「文学美術漫評」、新体詩と和歌を加えたこと、定価一冊九銭にしたことなどである。

第一頁には祝詞と題した鳴雪の次のような句が掲載されている。

祝詞　　鳴雪

ほとゝぎすの遷喬して東京に発行せらるゝは俳運進兆喜ふへし。されと炭俵は猿蓑よ

り進て却て雅趣に遠かる。吾人今日三思を要す。

横雲やいさよふ月の芝の海

鳴雪は「ホトトギス」東遷を栄転と俳句の幸運を喜ぶ。しかし、東京版の新しい「ホトトギス」を『炭俵』に、松山版「ほとゝぎす」を『猿蓑』に暗に見立てて、気を引き締めるよう忠告しているように思われる。『炭俵』は元禄七年（一六九四）刊、『猿蓑』は元禄四年（一六九一）刊、どちらも芭蕉の指導の下に編纂されているが、鳴雪によると『炭俵』は「元禄の盛時を過ぎて、業に一種のよくない傾きを有つて来た」もの、『猿蓑』は「芭蕉の事業の最も成功したもの」（注2）、であるという。そして、『猿蓑』の雅趣から『炭俵』は遠ざかっているという。このような理由で、今後の「ホトトギス」の未来を思うのだ、といっているのである。俳句は雲の少し隠れた満月の表紙絵に呼応したものと考えられるが、「いさようふ月」は「十六夜の月」のことであるが、「出そうで出ない月」という意味もあり、松山版「ほとゝぎす」創刊号の祝句、

ほとゝぎすの発行ありと聞きて

故郷に嬉しきものゝ初音かな

とは随分その雰囲気が違い、祝句らしからぬ一面があるように思う。

この理由の一つに碧梧桐のことが考えられる。東遷に関して傍観的立場にあった碧梧桐は『子規の回想』の中で次のように述べている。（『子規の回想』三六一から三六三頁）

さう言へば、ほとゝぎすを東京へ移すに就て、当然編集事務手伝ひに、当然私が指名さるべき俳歴と貫禄を持つてゐた。どうか宜しくお願ひしますと辞を卑うして招請さるべき資格を持つたもの、私の外には無かつた。私は当時新聞記者としていくらか地歩を占めてゐたから、別に自薦運動などはしなかつたが、一言御挨拶位あつてもいゝ位の腹はあつた。イヤ、左様に改つた御挨拶はなくとも、当然これは三人の仕事として発表さるべきではないかとも思つてゐた。それが、遂に梨の礫であり、選句寄稿は前からの慣例で、租税を納める義務扱ひでもあつた。この華々しい中央への発展に際して、と私は少々面白くもなかつた。（略）其の後時経つて、誰からであつたか、どうも子規や虚子でなく、鳴雪あたりの妙な方向であつたと思うふが、移転当時、私のこ

とも問題になつて、虚子から話も出たのであつたが、年齢、俳歴、技倆、相伯仲する者は、両雄並び立たずで、きつと衝突する、殊に兄弟のやうな二人の間には、不測の葛藤が起り易い、といふ理由で、子規が首肯しなかつた話を聞かされた。

京都三高、仙台の二高、そして東京と常に行動を共にしていた碧梧桐の疎外感を察した鳴雪が碧梧桐に話をしたに違いない。

⑶　「ホトトギス」第六巻第一号

明治三十五年九月十九日、子規は脊椎カリエスの苦痛の中に、三十六歳という若さでその生涯を閉じた。その短い一生に、俳句革新、短歌革新、写生文の提唱など、近代文学の基礎を築いたのである。

「病牀六尺、これが我世界である」で始まり、明治三十五年五月五日から九月十七日まで新聞「日本」に連載された子規最後の随筆「病牀六尺」、また、明治三十四年九月二日から途中何度か途切れながらも明治三十五年七月二十九日まで、日記、絵画、俳句、和歌、メモ雑記が記された子規最後の病床日記「仰臥漫録」、あるいは、「ホトトギス」第五巻第七号（明治三十五年四月二十日）及び第八号に掲載された子規の「病牀苦語」などから、子規の闘病ぶりがわかる。

子規最後の文章「九月十四日の朝」が「ホトトギス」第五巻第十一号（明治三十五年九月二十日）に掲載された。死を目前にして訪れた不思議な静かな時間を次のように述べている。

余は病気になつて以来今朝程安らかな頭を持て静かに此庭を眺めた事はない。嗽ひをする。虚子と話をする。（略）虚子と共に須磨に居た朝の事などを話しながら外を眺めて居ると、たまに露でも落ちたかと思ふやうに、糸瓜の葉が一枚二枚だけひら〳〵と動く、其度に秋の涼しさは膚に浸み込む様に思ふて何ともいへぬよい心持であつた。何だか苦痛極つて暫く病気を感じ無いやうなのも不思議に思はれたので、文章に書いて見度くなつて余は口で綴る、虚子に頼んで其を記してもらうた。筆記し了へた処へ母が来て、ソツプは来て居るのぞなといふた。

子規は淡々と客観的に写生して述べ、最後は母の言葉で結んでいる。子規の安らかで澄んだ心が伝わってくる一文である。

明治三十五年九月十八日、死の前日に子規は次の糸瓜の辞世句を、妹律が唐紙を張って渡した画板に認めた。

糸瓜咲て痰のつまりし仏かな
痰一斗糸瓜の水も間にあはず
をとゝひのへちまの水も取らざりき

翌月の「ホトトギス」第六巻第一号（明治三十五年十月二十五日）に、鳴雪は「ホトトギス六巻一号のはじめに」と題し、次のように述べている。

本誌第五巻までは子規子といふ統督者があつたが此巻からはそれが居ない。頻子索寞悲颯の感に堪へない。併しよく思ふと、子規子は決して死なぬ。死んだのは其身体だ。其精神は依然として存して居る。それは何処か、即ち四方太君の身体である。碧梧桐君の身体である。虚子君の身体である。紅緑君の身体である。（略）決して諸君の解散を許さぬ。分裂を許さぬ。必ず之を協同せしめ、之を親和せしめて、其精神の存在を安固にせねば止むまい。

子規の精神の継承発展と、子規亡きあとの結束を訴えた、このような発言のできる人物は鳴雪以外にいないだろう。

おわりに

本項では、日本派初めての俳誌、松山版「ほとゝぎす」と、東京版「ホトトギス」での鳴雪の活動を検討した。松山版「ほとゝぎす」の窮地には原稿や資金面でも手を差しのべる人情味あふれる面を浮き彫りにした。また、「ホトトギス」東遷に関する碧梧桐の疎外感に触れ、その碧梧桐を子規や虚子に代わって諭すという鳴雪の人間性に言及した。子規を中心に虚子と碧梧桐が活躍している中にあって、鳴雪は陰になり日向になりながら人間関係の調整役としての大事な存在であったことが明らかになった。

また、子規没直後は、「ホトトギス」読者の動揺をおさえ、子規の精神継承と結束を強く訴えて「ホトトギス」の平定を図ったことを指摘した。

（注）

1　二神將『子規の文友柳原極堂の生涯』（一二二頁　平成九年二月二十日　松山子規会）

2　内藤鳴雪　『猿蓑』の客観句」（一一八から一一九頁　「文章世界」第三巻第四号　明治四十一年三月十五日）

第三章　鳴雪と「蕪村句集講義」

第一節　『蕪村句集』

はじめに

「椎の友社」の俳人と運座を共にして、座中で『蕪村句集』が話題になっていらい、蕪村は日本派の象徴的な存在になったといえる。その『蕪村句集』を輪講し、その記録を「ホトトギス」に漸次掲載していくという企画は魅力的である。年齢差を越えた鑑賞批評で、各人が遠慮なく意見延べ、実名で掲載して近代的である。

蕪村句を評釈するうえで、子規たちはややもすると明治時代のこととして捉える傾向があり、江戸時代を生きて来た鳴雪の経験はそうした子規たちの解釈の手引きになったものと考えられる。輪講で鳴雪の果たす役割には大きなものがあることを本項では考察する。

⑴　蕪村句集講義」とは

「蕪村句集講義」は子規・鳴雪・虚子・碧梧桐らが原則毎月一回『蕪村句集』の一丁ずつ全句を輪講・合評していった記録である。管見では『蕪村句集』の句を全て輪講・合評したのは子規たちが初めてである。その第一回は明治三十一年一月十五日、子規庵にて開催され、その記録は「ほとゝぎす」第十四号（明治三十一年二月二十八日発行）に「輪講摘録」の表題で掲載された。第三回は「輪講摘録」、九回以後は「蕪村句集講義」と改題して

連載されていったのである。（本稿では「蕪村句集講義」で統一し、以後、「講義」と略記する）。この「講義」は子規生存中に五十六回、没後に七回、合計六十三回が明治三十六年四月六日まで続けられた。最終回の第六十三回の記録は「ホトトギス」第六巻第八号（明治三十六年四月十五日発行）に掲載されている。

第一回目が冬であったことから「講義」は先ず『蕪村句集』の冬の部から始められた。虚子はこの「講義」の開始にあたって日暮里人の名で「ほとゝぎす」第十二号（明治三十年十二月三十日　十一頁）の「東都通信」で次のように告知している。

先月来根岸にて根岸会の外に小説会を開き碧梧桐、瓢亭、小生に主人公四人の会合に有之候ひしが近日また俳句の研究会を開き古人の句集等の輪講を試むる筈に有之候、一応解せりと思ふ故人の句も親しく講義せんと思へば不審の件々続出するものにてこれは些かならぬ利益をお互に受くることゝ存じ候、其の筆記様のものは可成「ほとゝぎす」に出し度く存じをり候

この告知によると、根岸の子規庵での俳句例会（石井露月の日記には十二月二日開催とある『石井露月日記』平成八年九月十八日、露月日記刊行会　一〇八頁）と小説会の折に「講義」の話が決定されたことがわかる。子規の「病床手記」には、明治三十年十月三十日の条に「碧梧桐虚子来ル　晩餐、小説会ヲ開ク」とあり、また、同年十一月二十八日の子規宛虚子書簡には「先夜河東まゐり明日は愈小説会との由聞き及び」とあり、小説会が毎月開催されていたことがわかる。この時期、子規は「曼珠沙華」「月見草」「花枕」（注１）など次々と小説の執筆をしているので、熱のこもった小説会が開催されていたのであろう。

テキストに『蕪村句集』を選んだ動機について碧梧桐は『子規の回想』（昭和十九年六月十日　昭南書房　三三六頁）の中で次のように述べている。

蕪村句集を輪講の最初に選んだのは、当時の蕪村崇拝にもよるが、講義してゐて、イヤな句に出喰はす場合が少い、といふのも他の理由の一つ。それに故事成語俗諺等考證穿鑿の累はしさも比較的稀れだらう、といふ予想もあつた。もとは「ほとゝぎす」の誌面を埋める材料として、余り手間のかゝらない、さうして永つゞきのするもの、其の上読者にとつても、幾分の興味と参考になるもの、さういふ条件がついてゐた。

碧梧桐によると、「ほとゝぎす」誌面のための新しい企画から考えられた輪講で、蕪村崇拝に加え、良い句が多く輪講しやすいと思われる『蕪村句集』を選んだのだ、ということである。さらに碧梧桐は、「下調べもせず、虚子と懐ろ手で出掛けた」と続けていて、呑気な研究態度だったことを述べている。

下調べをせずに輪講に臨むということはあまり考えられないが、鳴雪も同様のことを「此輪講は矢張り互に句作すると同じやうな興味主義で遣るのだから、普通の輪講などの如く予め下調べなどをせない」(『鳴雪自叙伝』復刻版　二三一頁)と述べている。さらに鳴雪は子規の意向でそうしたのだとも述べている。つまり下調べをすると他人の考えに影響されるので、自分自身の新鮮な目で俳句をみるためである、というのだ。これは如何にも個を尊重する新しい考えの子規らしいといえる。

「講義」は先ず冬の部から始めて、冬の部の次に春の部、そして夏の部、最後が秋の部と「講義」が進められている。冬の季節に冬の部から始めたことは、「ほとゝぎす」読者にも受け入れ易かったのではないだろうか。読者を想定した工夫をうかがうことができる。「講義」の回数(表２　一七八頁参照)を季節別にみると、冬の部は十四回、春の部は十六回、夏の部は十七回、秋の部は十六回である。蕪村の句全八六八句を五年十一ヶ月の長きにわたって共同研究したのである。これらの記録はそれぞれの季節が終わると順次単行本として刊行されている。

冬の部は明治三十一年一月十五日から三十二年二月七日まで、十四回・一九四句の輪講である。第一回の参加者は子規、虚子、碧梧桐の三人。後で鳴雪の意見もきき、「ほとゝぎす」には「子規附けていふ、鳴雪翁いふ此句の(略)」という形で掲載されている。

十四回の輪講のうち、鳴雪の欠席は第一回、第三回、第四回(終日雨)、第六回(暴風雨のため郵便輪講)、第十回、と合計五回ある。春の部十六回・二二四句の輪講、夏の部十七回・二三三句の輪講、秋の部十六回・二一七句の輪講、これら合計四十九回の輪講には全て出席している鳴雪と比較すると、天候不良を考慮しても冬の部の欠席回数は多い。

特に第一回・第三回の欠席は「ほとゝぎす」第四号の裏表紙に掲載した「「脳部ノ宿疾相勝レス候ニ付当分俳事ノ評選及贈答ヲ謝シ静養仕候此段辱知ノ諸君ニ謹告ス」といったことがまだ尾を引いていたとも考えられる。

輪講の会場は全て子規庵で、記録は子規が六回、虚子が五回、碧梧桐が二回、石井露月が一回となっており、鳴雪は長老のためか記録者には一回もなっていない。輪講で口火を切るのは鳴雪である場合が多く、発言回数も鳴雪と子規が多い。

⑵　「蕪村句集講義」のテキスト

子規たちが「講義」に用いていたテキストについては、既に長谷川孝士（『子規全集』第十七巻「解題」昭和五十一年二月　講談社）や佐藤勝明（『蕪村句集講義３』「解題」平成二十二年二月　平凡社）が指摘しているが、「獺祭書屋図書」の蔵書印が捺された『増訂蕪翁句集』（東都書林万巻堂蔵版『蕪村句集』跋文「明治二十九年十二月末つかた　飯人しるす」）と思われる。これは、几董編『蕪村句集』（天明四年刊）と同一内容で、松窓乙二の注が付してある。

例えば、冬の部の「講義」第六回の子規記録には、冒頭に「輪講は例によりて蕪村句集冬の部の続き、下廿二丁の裏より始まる」、あるいは、第十一回の虚子記録には「蕪村句集下巻廿七丁裏より」とあり、各丁の表裏所収の句の順序や数を調べても几董編『蕪村句集』と合致し、他の「講義」でも丁数や句の順序が合致している。「講義」冬の部の第五回中の句、「炭団法師火桶の穴より窺ひけり」を几董編『蕪村句集』で調べると「講義」と同一であるが、

炭団法師火桶の穴より窺ひけり　　『蕪村句集』
炭団法師火桶の窓より除き引けり　　「蕪村自筆句帳」
炭団法師火桶の窓から窺けり　　『俳諧新選』
炭団法師火桶の窓かより覗レけり　　『落日庵句集』

と、『蕪村自筆句帳』『俳諧新選』『落日庵句集』（注２）とでは異同がある。『蕪村句集』だけが「火桶の穴」となっており、このことからも「講義」のテキストが几董編『蕪村句集』であることが確認される。

おわりに

「ほとゝぎす」の新企画として始められた「蕪村句集講義」であるが、鳴雪と子規は熱心に参加している様子が見て取れる。順次「ほとゝぎす」に掲載されている講義記録は、次第に読者の関心を得ることになる。テキストについては先行研究で既に指摘されているが、一応掲げた。

（注）

1　『子規遺稿第三篇子規小説集』（明治三十九年九月二十日　俳書堂刊）の凡例に虚子が「花枕」は明治三十年三月春陽堂の請に応じて作ったものである。「月見草」も同時の作である、とある。「曼珠沙華」は明治三十年九月十月にに草稿を書き、十月下旬に清書したといわれている。

2　『蕪村自筆句帳』は門人佳棠方から天明三年春刊行予定で同二年ごろ起稿した自選句集。『俳諧新選』小二、蕭山、太祇編、安永年刊。同時代の諸流の俳句を類題別に配した句集。『落日庵句集』は蕪村の発句を四季別に収録したもの。元文以降明和の作を中心に天明三年に至る。各季とも安永二年までを田福、以下を百池が筆録。

第二節　「蕪村句集講義」記録の文体

はじめに

子規たちが「蕪村派」と呼称された、その集大成ともいえるものに「蕪村句集講義」がある。この「蕪村句集講義」は『蕪村句集』の俳句を一句ずつもれなく全ての句を輪講・合評していった記録なのである。その記録を、明治三十一年二月に発行された「ほとゝぎす」第十四号に第一回として掲載し、以後、三十六年四月まで六十三回分を毎号掲載していったのである。この記録を担当したのは、主として虚子と碧梧桐である（子規六回・虚子三十一回・碧梧桐二十三回・松瀬青々二回・石井露月一回）。子規が記録担当したのは、第二回・六回・七回・八回・九回・十回の初期に限られている（（表２　一七八頁参照）。

本項では文体を検討するのに初出の「ホトトギス」を用いることとする。後述するように、単行本にする際には、訂正や改正が行われているからである。段落や句読点を確認すため文の形式を「ホトトギス」掲載文のままとした。

なお、文体の定義や分類をしておきたいと思うが、いまだ言語学者などにおいても諸説あり一定していないので（注１）、本稿では、文体の分類を山本正秀の『近代文体発生の史的研究』で論述されている分類方法を参照し適宜用いることとする（注２）。

その分類は、まず日本語教育振興会発行『現代敬語法（三宅武郎著昭和十九年刊）』によるもので、日本語の文体を文語体（例　これは本なり）と口語体の二大別する。次に、口語体を口語文体（例　これは本である）と口頭口語体の二大別する。次に、口頭口語体を

講演体（例　これは本であります）と会話体の二大別する。会話体を平話体（例　これは本だ）と敬語体に二大別する。さらに敬語体を普通敬語体（例　これは本です）と積極敬体の二大別する。最後に積極敬体を謙遜体（例　これは本でございます）と尊敬体（例　先生でいらっしやいますか）の二大別する。以上のように、文体全体を七つに分類したものをあげている。

さらに、山本は口語体を口語常体と口語敬体に二大別し、口語常体を「である調（筆述体）」と「だ調」に、口語敬体を「です調」「であります調」「でございます調」「でござる調」の四つに大別し、口語常体の「だ調」と口語敬体を談話体とする分類を示している。

そもそも言文一致の発生は、前島密の『漢字御廃止之議』建白（慶応二年）や福沢諭吉の『西洋事情』（慶応二年）などにみられ、明治五年の『学制』発布により小学校教科書に口語文を採用、明治七年には文明開化の啓蒙書が流行して一般向きの「でござる」「でございます」の談話体の書物が出版されている。しかし、明治十二年前後から自由民権運動に対して政府の復古調の抑圧政策により、文語体が再び多く用いられるようになる。

明治十七年頃からは鹿鳴館時代となり、欧風主義を背景に再び言文一致運度が盛んになり、国字改良運動もおこる。また、田鎖綱紀によって考案された日本速記法により、演説・講演・講談・落語等が口演のままの文で新聞や雑誌、あるいは単行本となって世に出るが、中でも明治十七年七月に出版された三遊亭円朝口演・若林玵蔵速記の『怪談牡丹燈籠』は写実と描写に優れており、坪内逍遥を感嘆させ、二葉亭四迷や山田美妙の言文一致小説に影響を与えたといわれている。

明治二十年になると、四迷の『浮雲』、美妙の『風琴調一節』、二十一年の嵯峨之屋御室の『薄命のすゞ子』などが言文一致体の作品で活躍し始め、さらに明治二十八年の尾崎紅葉の『青葡萄』や二十九年の『多情多恨』の作品を合わせて、彼らの文体を「だ調の四迷」、「です調の美妙」、「であります調の嵯峨の屋おむろ」、「である調の紅葉」と併称されている。

以上のほかに、四迷や森鴎外や饗庭篁村等の言文一致体による翻訳の欧文直訳もある。文体について述べようとすると、言文一致運動の歴史に触れざるを得ないが、詳細は前掲の『近代文体発生の史的研究』などを参照していただきたい。

山本の述べる言文一致運動の第四期（明治二十八年―三十二年）第二自覚期が「蕪村句集講義」の開始された時期に該当する。

⑴　第一回・二回・三回「蕪村句集講義」

第一回の「講義」の開始された明治三十一年一月十五日の記録者は碧梧桐である。碧梧桐は全体を結論的なことばでまとめていて、それぞれ個人の発言内容がほとんどわからない。僅かに次の部分に発言者名があるというくらいである。

初時雨眉に烏帽子の雫かな
濡れたる烏帽子の雫眉に落つるさまにして当人の思ひ
及ばざる所を見つけたりといふべし、子規君曰く斯句
によりて如何なる場処と如何なる人物を想像するやと
虚子君曰く白丁宮守などの年老いたるが庭の掃除など
してありしに時雨ふり来たりたる場合眼前に浮むと
子規君曰く予は去る卑しき身分のものとは思はず神主
などの烏帽子も立烏帽子といふものにや高く大きやか
なるものを着たる心地せり濡るゝべき位置に居らぬ者
が偶然濡れたる場合なるべし、虚子君曰く然らず

碧梧桐の文は、段落がなく、句読点もほとんどなく、二か所に終止の句点を用いている。文全体は「見つけたりといふべし」や「如何なる場処」、あるいは、「然らず」など文語体であり、発言者にたいしては「曰く」という漢文訓読調を用いている。

第二回の「講義」は明治三十一年二月五日に開催され、その記録者は子規である。一部を抜粋すると、

冬こもり燈下に書すとかゝれたり
鳴雪翁曰く冬ごもりして居る人が或る書の序跋の類を
書くに「……燈下に書す、何某」などゝ認めたるに
ぞあらん、冬籠の題は動かず、
子規曰く冬籠の解いかゞ、序跋など書くは一時間か二
時間乃至は一夜位の仕事なれば冬の夜などを結ぶべき
にや、これは例へば「根岸の草庵に冬籠りしてある夜

筆を呵し寒燈の下に記す」など序跋に書けるを略して

斯く言へるにあらざるか、

鳴雪翁曰くそれにてもよし、

子規の文は、段落の意識があり、発言者がかわると行替えもしている。終止の句点のみで読点はない。文全体は「認めたるにぞあらん」や「結ぶべきにや」など文語体であり、「曰く」という漢文訓読調を用いている。

第三回の「講義」は明治三十一年三月五日に開催され、その記録者は虚子である。一部を抜粋すると、

茶の花や白にも黄にも覚束な

碧梧桐、やつぱり花の様を言つたのであらう、茶の花は心が黄で弁が白いものであるから、

子規、併し蘂が黄色であることを殊更に黄もといつたのであるまいか、

虚子、白ともつかず黄ともつがずと単に花の色を形容したのであろう、

碧梧桐、茶の花は弁が多くつて蘂が少ないから自然茶の花夫れ自身が黄色にも見えるのだが、解剖すれば蘂が黄で弁が白いのではなか、

子規、やつぱり遠方から見た景色で、此黄色といふのは、紫派（油画の一派にして近時黒田、久米諸氏に依て仏国より輸入されたるもの）が総てのものを紫にかくやうなもので、少しは仰山なのぢやないかしらん、

碧梧桐、遠方に見る景色かしらん、

子規、さう遠方ではない、花を手に取つて見るのではなく傍に立つて見て居るのであらう、

虚子の文は段落の意識があり、発言者がかわると行替えをしている。終止と句切れに句点を用いていて読点はない。碧梧桐と子規にはない句切れにも句点を用いている。発言者

に「曰く」を用いず、句点にしており、文全体は「言つたのであらう」や「仰山なのぢやないかしらん」など口語体である。

第一回の碧梧桐、第二回の子規、第三回の虚子のそれぞれの記録を比較すると、碧梧桐と子規は文語体、虚子は口語体である。「講義」を始めたばかりで、記録の形式が定まっていないこともあるだろうが、虚子が子規に倣わず積極的に口語体で記述したことは注目すべき点である。虚子の強い言文一致体への関心を示しているといえる。

表２（一七八頁参照）に「講義」の各回の記録者と文末表現を記したが、第六回で子規が「である調」を、第九回で子規が「ます調」を、第十一回で虚子が「ます調」「です調」で記述し、次第に口語体へ移行していることがわかる。

⑵「めさまし草」の「三人冗語」

子規たちが「講義」を始めたころ、森鴎外の「めさまし草」でも小説の合評が行われていた。「めさまし草」は、創刊号（明治二十九年一月）から虚子を中心に、日本派の俳句を掲載し、虚子は『七部集』の評論なども掲載している。「帝国文学」（第二巻第十一号　明治二十九年十一月十日）では、

> 人は言ふ、子規は「早稲田文学」に、虚子は「めさまし草」「日本人」に、碧梧桐は「世界の日本」に、鳴雪は「太陽」に、各俳句欄を担当す、「日本」派の光焔今日の如く盛なるはなしと。

と、虚子と「めさまし草」の関係の深さを指摘している。

明治二十八年に日清戦争に従軍した子規は、金州で森鴎外と度々会見し、二十九年の一月には子規庵での句会にも鴎外は参加している。虚子は子規の紹介により「めさまし草」に係わるようになったのである。

この「めさまし草」に「三人冗語」と題して連載された小説の合評は明治二十九年三月（まきの三）から七月（まきの七）まで森鴎外（鐘禮舎）・幸田露伴（脱天子）・斉藤緑雨（登仙坊）の三人で行った匿名形式の座談会である。三人は多くの作品を辛辣に批評したが、樋口一葉の「たけくらべ」は絶賛して一葉の文名を一躍高めたことは有名である。第一回目は田山花袋の「断流」を取り上げて合評しているので、次にその一部を掲げて文体

をみてみよう。

頭取　このところにて合評に取り掛かるは新刊の文藝倶楽部　なるが桜痴の悪因縁は未完のものなれば跡へまはし鑓持勘助は早く鷸の羽根がきに出でたれば省くことゝし先づ花袋の断流より始むべし断流は越後国魚沼郡長山村の豪商なるよし杉江真太郎が娘にて勝といふ美人一代記なり（中略）断流の筋あらまし此の如し一代記の事なれど筋を書くにも骨が折れたり　贔屓　筋を書くに骨が折るゝ位ならば作家の骨折はいかばかりぞ流石に新進作者として取り出したるは当世流行の実際種子、工女、宿場娼妓、銘酒屋の女とまで主人公をなり果てさせたれど読者の目を掩ふ程の醜態もなく黴毒の徴候なども描写極尽せざりしはおとなしき事なり

「三人冗語」では、まず、「頭取」が対象小説の概要を述べ、続いて「贔屓」が作品を肯定的に批評し、「理屈」が考証的に批判し、「むだ口」が茶かす、というふうに設定された人物に合わせた意見を述べてゆく。発言者の名の下は一マス空けて段落や句読点のない文語体の文である。「三人冗語」で俎上に乗った花袋は当時を回想して、『東京の三十年』（大正六年六月博文館）で次のように述べ、「三人冗語」が当時の文壇で注目されていたことがわかる。

「めさまし草」の新刊が雑誌屋の店頭に並んでゐのを見るのが辛かつた。見たいには見たいし、見るのもイヤだし、さうかと言つて見ぬわけにも行かぬので、店頭に立つて自分のわる口を言はれてゐるところだけを見て、顔を赤くして、腹を立てゝさつさと出て行つた

さらに「めさまし草」には、「三人冗語」の三人に加えて尾崎紅葉・饗庭篁村・依田学海・森田思軒の七名が合評した「雲中語」がある。これは「めさまし草」まきの八（明治二十九年九月二日）からまきの三十一（明治三十一年九月）まで連載されたが、まきの二十一（明治三十年八月十四日）に、紅葉が「である調」を完成させたといわれている「多情多恨」について合評されているので、次に掲げて「講義」の文体と比較してみる。なお、「めさまし草」まきの十八（明治三十年五月二十九日）には子規の「花枕」の批評もある。

頭取。鷲見柳之助妻お類を喪ひしため、悲嘆の裏に日を送る。外姑これを憂へて、類の妹お島を柳之助の許に遣り、手助けにと同居せしめしが、柳之助いたく嫌ひて罷め帰らしむ。（以下略）

無情男子。是れ他人にありては、短篇の資料とせんも、猶足らざる所ある一小話なるべきに、滔々四百紙面に瀰りて、人をして其煩を覚えざらしむ。作者の得意想ふ可し。篇中人物の性格皆瑩然として明なれど、独り柳之助に至りては、われ尚世上真個に這般の人あるべきや否やを疑ふ。

天保老人。人何ぞ嗜好なからん。飲食男女は人の大欲をなすといへり。（以下略）

この「雲中語」には、段落と句読点があるが、「帰らしむ」「べきや否や」など文語体である。「講義」よりも早く句読点を用いているが、口語体使用は「講義」のほうが早い。

(3) 虚子の言文一致体

虚子が早くから言文一致体に関心があり、「講義」の記録をいち早く口語体で記録したことを前章で述べた。虚子は、「ホトトギス」第四巻第三号（明治三十三年五月三十日）に「文学美術評論（言文一致）」で次のように自身の文体観を述べている。

美妙斎であつたか、二葉亭であつたかゞ、始めて言文一致を試みた時代を考へると、過渡期とは大概あんなものであらうが、思はず噴飯する。それは大に言文一致たらんとして甚だ言文不一致であつたことだ、殊に美妙斎の文章などゝ来ては近来書く奴でも最も癖のある、いやにひねくつた、言文不一致のものである。まして花車、胡蝶時代のを見るとたまつた者では無い、其処で多くの作者及読者は（美妙斎等所謂）言文一致に食傷して、非言文一致に傾いて暫く非言文一致時代を形作つた。露伴はもとより所謂硯友社派でも思ひ切つて言文一致を試みた作はあまり見当らなかつた。其処で此一二になつて言文一致は第二期を形作るやうになつて来て、第一期時代（美妙時代）

に比較すると非常な進歩、言を反へていふと、真正の言文一致として現はれて来た。独り記叙の文許りで無く、論文にでも伝記にでも用ひてすこしも不都合の無いことを実際的に証拠だてた。曽て言文一致は厭味なものと思つてゐた読者が決して厭味なもので無いことを合点した。曽て言文一致は男女の痴話のみを描くに適当したものと思つてゐた読者が、亦荘重なるもの高尚なるものをも写すに適することを承知した。曽て言文一致は語句の上に巧を弄するものかと疑つてゐた読者が言文一致は決して語句の上に巧を弄するもので無くて、却つて平々淡々の裡に極めて精細に極めて深刻に事実を叙することを得て、其味は表面に非ずして深き裏面に在ることを解し得た。（略）言文一致は第一期に於て失敗し第二期に於て稍成功せんとしたのである。此の上尚多少の熟練を積んだならば、余は断言する。言文一致は遠からず凡てのものを記叙する唯一の文体として普通に採用せらるゝに至ることを。

虚子は、美妙や二葉亭がもてはやされた第一期の言文一致は過渡期であったため、実は言文不一致であったという。しかし、此の一二年は言文一致の第二期を形成してきて進歩し、真正の言文一致となってきている。それ故に、論文や伝記の文章にも採用し、いやみがなくて荘重で高尚なものを写す文に適している、というのである。さらに虚子は、「多少の熟練を積んだならば、余は断言する。言文一致は遠からず凡てのものを記叙する唯一の文体として普通に採用せらるゝに至ることを」と、言文一致体にたいする虚子の強い思いを述べているのである。そして、言文一致体が記述する唯一の文体となることを確信しているのである。

この言文一致体にたいする虚子の思いと子規との間にはいささか違いがある。子規は新聞「日本」に発表した「叙事文」（明治三十三年三月十二日）で、「文体は言文一致か又はそれに近き文体が写実に適して居る」、と述べ、また、「ホトトギス」明治三十三年十二月（第四巻第三号）の「消息」では「ある事を精細に叙するには言文一致体に限り候へども多くの事を簡単に書くには言文一致体ならぬ方宜しきかと存候」と、言文一致体が虚子のいう唯一ではないのである。

この思いの違いが「講義」の記録文体にも表れているのである。

おわりに

以上のように本項では、第一回「蕪村句集講義」の記録者碧梧桐、第二回の子規、第三回の虚子それぞれ三人の記録の文体の違いを指摘した。その大きな違いには虚子の文体意識の中には言文一致体が大きく占めていたということを明らかにした。そのため、「講義」の記録をする際にも、子規や碧梧桐に先んじて言文一致体で記したのである。

比較のために同時代の「めさまし草」の「三人冗語」も検討した。「三人冗語」では「講義」よりも早く句読点を用いているが、口語体使用は「講義」のほうが早かった。表２（一七八頁参照）で示したように、虚子の春の部の第七回・八回の記録は文語体であるが、以降には文語体で記録した者はなく、子規も虚子も碧梧桐もみな「である調」の口語体が主流になってゆくのである。

虚子が言文一致体に強く関心を抱き、言文一致体が近代文学に最も適した文体であると確信した虚子の姿がここでは浮上した。

（注）

1　山本真吾は「文体」『文章と文体』において、「文体は、それ自体自明ではなく、学者の数だけ定義があるとさへ言われることがあるが、これをどのようにとらえるかによって研究方法や記述の仕方も変わってくるので、文体論という学問分野が設けられ追求されてきた。」と文体論の定義が一定していないことを指摘している。

2　山本正秀『近代文体発生の史的研究』昭和四〇年七月三一日　岩波書店

第三節　「蕪村句集講義」冬の部

はじめに

鳴雪と子規の蕪村俳句に対する評価の違いについて「蕪村句集講義」冬の部を通して考えてみたい。明治時代の蕪村の受容についての研究は青木亮人氏の「明治のもう一つの受容―其角堂永機から秋声会へ―」（「大阪俳文学研究会　「俳文学報」四〇　平成十八年十月」や佐藤勝明氏『蕪村句集講義』解説（平凡社　平成二十二年二月）があるが、それら先行研究を踏まえた上で、本項では蕪村句鑑賞の具体的な鳴雪と子規の評言を比較しながら、その評価の違いを検討する。また、この時代の子規にとっての蕪村についても言及する。

冬の部の最終「講義」掲載は明治三十二年三月十日発行の「ホトトギス」、単行本『蕪村句集講義　冬之部』は明治三十三年五月十五日にほととぎす発行所より刊行され、続いて春の部の最終掲載は明治三十三年七月三十日発行の「ホトトギス」、単行本『蕪村句集講義　春之部』は明治三十三年九月二十日にホトトギス発行所より刊行されている。夏の部の最終掲載は明治三十四年十二月十五日発行の「ホトトギス」、単行本『蕪村句集講義　夏之部』は明治三十五年一月二十五日に俳書堂・文淵堂より刊行され、秋の部の最終掲載は明治三十六年四月十十五日発行の「ホトトギス」、単行本『蕪村句集講義　秋之部』は明治三十六年六月十日、俳書堂より刊行されている。こうしてみると、冬の部以外は、「ホトトギス」最終掲載号から二か月前後で単行本化されていて、『蕪村句集講義』は読者待望の書であったことが推察できる。

(1)　鳴雪と子規の相違

では次に、蕪村句に対して鳴雪と子規の発言内容の違いを具体的にみてゆく。まず、第一回（「ほとゝぎす」第十四号　明治三十一年二月二十八日）から

初しくれ眉に烏帽子の雫かな

鳴雪翁いふ　此句の烏帽子の主は昔の五位六位々の官人の類なるべしと

子規付けていふ　余の神主と思ひしは明治の実景より起りし考なり

この句の「烏帽子」という語から、鳴雪は王朝時代を、子規は明治時代から連想し、その起点の違いをみせているといえる。但し、子規は鳴雪の連想は普通だとしている。次に、第四回（「ほとゝぎす」第十六号　明治三十一年四月三十日）から、

老女の火をふき居る画に

小野の炭匂ふ火桶のあなめかな

子規いふ　何だか面白からぬ句なり

鳴雪云　子規君面白からぬと云はるゝは例の滑稽嫌の故なり、余が如きは、這裏一種の興味を感ずるなり、但し故事にあらざれば然らず

この蕪村の句にたいして鳴雪は、小野小町の髑髏の目に芒が生えて「あなめあなめ」といったという伝説や、「秋風の吹くたびごとにあなめあなめと小野とはいはじ芒生ひけり」という古歌を踏まえ、また、小野は炭の名産地であると解説している。そして、その伝説や古歌を想起させるところがよいとしている。それに反して子規は、その踏まえ方を「面白からぬ」といっているのである。鳴雪の古典好きの一面が現れているといえるだろう。

また鳴雪は、子規の意見は「滑稽嫌の故なり」と自身との違いについて述べ、鳴雪の滑稽好きを暗に示している。次に、第五回（「ほとゝぎす」第十七号　明治三十一年五月三十日）から、

水鳥や枯木の中に駕二挺

鳴雪翁曰く　駕の中には人が乗り居て

子規君曰く　人が居ては非常の厭味を生じ詩にも画にもならぬ

子規はこの句について長々と約六頁も書いている。話題は駕の中に人が居るのか、駕舁の雲助は居るのかということに集中し、人が居れば主観的な句で厭味が生じるとしている。しかし、鳴雪は人の乗っている姿は見えないが気配を感じるのだ、と反駁して決着はついていない。木村架空は著書『蕪村夢物語』の中で「この解は鳴雪翁の説が近いやうだ」として鳴雪に軍配を挙げている。なお、「水鳥」と「枯木」の季重なりについて輪講では触れられていない。次に、第八回（「ほとゝぎす」第二十号　明治三十一年八月三十一日）から、

初雪や消れはそ又草の露

子規　初雪の少しばかり降つたのが消えて草の露となつたといふばかり少し面白味がない。（略）古歌の調を仮りたのにしてでも少しも面白く無い

鳴雪云　古調其物が即ち美の要素なればなり

この句の中七「消ればそ又」は古調にちがいない、ということから生じた相違点で、鳴雪の古典趣味がよくわかる。次に、第九回（「ホトトギス」第二巻第一号　明治三十一年十月十日）から、

几董と浪華より帰るさ

霜百里舟中に我月を領す

鳴雪氏曰く　わが月を領すといふのは月を自分の物にしたといふ事（略）月を親んでいふたのであります

子規曰く　私は、われ月を領す、と読みたいので、わが月はをかしいと思ひます

これは「我」を「わが」と読むか「われ」と読むか、その違いは「霜百里」の捉え方にあるとしている。子規は鳴雪の説明に加えて「極めて広いけしきで殊に冬枯の時」と述べると鳴雪は「成程冬枯の広い景色ですか、それでは、われ月を領すですな」と同意し、「兜をぬぎませう」と潔い。第十三回（「ホトトギス」第二巻第五号　明治三十二年二月十日）から、

寒梅を手折響や老が肘

鳴雪氏曰く　老人のからびた肘へ響いたといふので切実な感じが克（よ）く現れてゐる

子規氏曰く　句法は少し月並と違ふて居るけれど其の考へが月並的の穿ちのやうで厭な感じがする。

この句は、鳴雪は老人が寒梅を折って居るところに趣きを感じるといい、子規はその老人が殊に嫌いなので「老」が無ければいくらかよい、としている。「老」を巡っての相違点は年齢的な面もあるにちがいない。

「蕪村句集講義」冬の部から六句取り上げて、鳴雪と子規の蕪村句評価の違いをみると次のようなことがいえる。

①鳴雪は王朝時代に、子規は明治時代に当てはめて連想する傾向にある。

②鳴雪は古典文学を好み、また滑稽も好む。子規は滑稽嫌いである。

③鳴雪は古代のものの姿や味わいは美であるとし、子規は慎重な態度である。

④鳴雪は「老」に親しみを持ち、子規は「老」が嫌いである。

全部を取り上げなかったが、鳴雪の封建制度時代の実体験による解釈、あるいは漢籍を典拠とした解釈に子規たちは非常に助けられている。現代と違い当時は『蕪村全集』もなく研究も困難だった筈である。そのような時に鳴雪の果たした役割は大きい。

⑵　子規の「蕪村句集講義」

「蕪村句集講義」は、虚子や碧梧桐の呑気な取り組み方に比べて、子規はもっと緊迫した状況下にあったと思われる。

子規は、明治二十六年一月五日の新聞「日本」に発表した「歳旦閑話（四）」の中で、蕪村は明和・天明期の俳諧再興に力のあった俳人の一人として称賛したのを皮切りに、同年十二月の「芭蕉雑談」では「佳句が最も多きは蕪村」、あるいは、明治二十七年五月の「俳諧一口話」、翌年の「俳諧と武事」、明治二十八年十月の「俳諧大要」などで蕪村を称揚し、明治三十年四月からは「日本」に「俳人蕪村」の連載を開始した。このように盛んに蕪村について論述する子規であったが、明治二十九年七月に三森松江編『蕪村句文集』が明倫社から（序文で暗に子規たちの蕪村熱を批判）、同年十二月に松窓乙二注釈『増訂蕪翁句集』が万巻堂から、明治三十年一月に秋声会校訂『頭註蕪翁句集拾遺』が万巻堂からそれぞれ刊行された。さらに、子規が「俳人蕪村」連載中の明治三十年九月に大野洒竹著『与謝蕪村』が春陽堂から、同年十月に阿心庵雪人編『校註蕪村全集』が上田屋書店から刊行された。こうしてみると、蕪村派リーダーとしての自負があったであろう子規は、蕪村関連本刊行の遅れをとっていることがわかる。そこで、子規は他派のしていない蕪村研究の必要性を自覚したにちがいない。この意味においても「蕪村句集講義」の存在は大きいといえる。

⑶　「蕪村句集講義」の発言と記録

「講義」の記録は初期を除き主として虚子と碧梧桐が担当し、その形式は第二回の子規のものを踏襲している。記録文体は初期の文語体が次第に「である調」「ます調」の口語体へ移行している。表２（一七八頁参照）に「講義」の輪講日・輪講会場・句数・記録者・文末語の一覧を示したが、第三回の虚子の文体は、第二回の子規に倣わず、口語体である。明治三十三年に子規は、「あることを精細に叙するには言文一致体に限り候へども多くの事を簡単に書くには言文一致体ならぬ方宜しきかと存候」（「ホトトギス」四巻三号）と、全て言文一致体である必要性はないとしている。一方、同年虚子は、「言文一致は遠からず凡てのものを記叙する唯一の文体として普通に採用せらるゝに至る」（「ホトトギス」）と言文一致体が唯一の文体と述べ、明らかに両者は見解を異にする、その前兆をここに見ることは注目すべき点である。「講義」における参加者の忌憚のない発言は子規のリードによって

進められ、「ホトトギス」の読者も意見を寄せるほど熱気を帯びていたといえる。

会場は子規の体調の許す限り子規庵であり、子規の直接参加のない場合は一回の虚子居を除き鳴雪居である。子規は参加不能のとき、講義録を閲して所感を述べている。

ここで特筆すべきは三十三年十一月、子規庵での例会を総て中止しても「講義」は続けることを子規が希望したこと、また、三十五年四月から九月十日まで五回、死の直前まで「講義」を子規庵で開催していることである。子規の窮極の覚悟と蕪村への執念ともいえる態度をここに認めることができる。

おわりに

子規は並々ならぬ覚悟のもと「蕪村句集講義」への情熱を燃やしてきた。「講義」の参加数も最多であり、死の直前まで「講義」は枕頭で行われた。子規の発問を契機に参加者が蕪村句理解を深め、その理解を共有していったことは、「蕪村派」として大いに躍進していったといえる。

今後は、「講義」が子規たちの俳句に与えた影響についても検討する予定である。

第三部　子規没後の鳴雪の俳句活動

第一章　鳴雪と「文庫」

第一節　「文庫」俳句欄

はじめに

大別すれば、子規の俳句活動の基盤は新聞に、鳴雪の俳句活動の基盤は俳句雑誌にあったといえる。時代は新聞から雑誌へと流れていったこともある。中でも「文庫」と鳴雪は密接な関係があったと思われる。これまで鳴雪と「文庫」についてあまり論じられていない。

そこで本項ではまず、鳴雪が選者を勤めた「文庫」の歴史と俳句欄の選者の変遷について検討する。

⑴　「文庫」の歴史

「文庫」は明治二十八年八月、山県悌三郎によって創刊された投書雑誌である。創刊号は八月二十五日発行で、編輯人は大橋又四郎、発行兼印刷人は富沢大一郎、発行所は少年園でその住所は東京府下北豊島郡駒込村十九番地で、山県邸である。「文庫」創刊号の「寄稿心得」の前文に『文庫』は、中等教育程度にある全国学生の機関雑誌なり」と、読者層を学生に想定して創刊されている。「文庫」の歴史の先行研究に関肇氏の『新聞小説の時代』（新曜社　平成十九年十二月十四日）があり、本項も多くの示唆を得ている。

発行所の少年園というのは、明治二十一年十一月に山県が創刊した児童向け総合雑誌「少年園」が明治二十八年四月に廃刊した流れを引き継いでいるためである。

この明治二十一年十一月に創刊された「少年園」には「芳園」という投書欄があったが、次第に投稿が盛んになり掲載しきれなくなる。そこで、掲載しきれない投稿を収録するための雑誌「少年文庫」が明治二十二年八月に創刊されたのである。当初は不定期刊行であったが、明治二十三年二月から月刊となり、論説・詩歌・小説なども充実させながら投書中心の雑誌として一世を風靡してゆくのである。「少年文庫」の主筆記者は「少年園」の編集を担当していた山県五十雄（山県悌三郎の弟）であったが、明治二十八年二月に五十雄は田岡嶺雲と文芸雑誌「青年文」を創刊する。必然的に「少年文庫」の編集体制は手薄になり、また執筆陣も「青年文」へ移ってしまう。そこで「少年文庫」は大幅な刷新に踏み切り、半年後の明治二十八年八月には誌名を「文庫」と改題して新しく出発するのである。まず「文庫」の特徴的なことは、誌面全体が青年投書家による投稿によるもので、その作品に対して文庫記者の評が付されていることだろう。また、その文庫記者自身も投書家から抜擢されていて、「少年文庫」時代の投書家から「文庫」の記者となった瀧澤秋暁は評のことについて次のように述懐している。

> 全体此頃記者の加評文といふものは、第一寄稿家に阿らぬといふを売物にして、殆んど言ひたい放題を列べたから溜らない、血眼になつて居合腰に詰め寄せる人が、しよつちう絶間がなかつたのも鳥渡滑稽でしたが、実のところ余り手前共が傍若無人であつたので、これ等の事はいつか読不書生の名で懺悔をして置いた筈です。
>
> （『文庫』と記者」「文庫」第十七巻第六号　明治三十八年一月）

秋暁の文からは読者・投書家と編集者・記者との緊密さを知ることができる。「文庫」は、いわば青年による青年のための雑誌といえるのである。

そもそも鳴雪と青年との関わりは深い。明治三年に松山藩権少参事学校掛となった鳴雪は明教館の学則改革をして洋学を加えたり、明治五年には石鉄県学区取締となって小学校の創設に尽力したり、また明治八年には師範学校の創設にも当たる、というように青少年の教育に多く携わっている。その後、明治十三年に鳴雪は文部省へ転任して上京している。この文部省でも教育令の改正や規則の制定などに従事し、常に教育畑に身を投じていたといえるだろう。さらに、明治二十四年に文部省を退官して常磐会寄宿舎監督を主務としたのであるが、この監督もいうなれば旧松山藩子弟の教育監督業務である。

⑵　「文庫」の俳句欄選者

「文庫」の誌面は、論説の「光風霽月」、紀行文の「山紫水明」、小説の「錦心繡腸」、新体詩・俳句・和歌・漢詩の「鶯歌燕舞」、時評・雑報の「飛花落葉」の各欄投稿を中心にして構成されている。

鳴雪は言うまでもなく俳句の選評を担当している。鳴雪が担当する前は、高浜虚子、石井露月、佐藤紅緑がつとめている。因みに和歌では、与謝野鉄幹、窪田空穂らが選者となっており、「文庫」の人気とレベルの高さがわかる。北原白秋もこの和歌の欄に投稿しており、新体詩でもその名をみることができ、「文庫」が果たした役割の大きさを推測することができる。

俳句の掲載数を調べると、第一巻第一号は九句、二号は二十五句と漸次増加している。紙面の都合上第一巻、第七巻、第十一巻、第十五巻を一覧表にして次に示す。

表3

巻　号	俳句数
1巻1号	9
2号	25
3号	33
4号	29
5号	44
6号	28
7巻1号	36
2号	84
3号	19
4号	48
5号	70
6号	25

巻　号	俳句数
11巻1号	164
2号	146
3号	277
4号	181
5号	146
6号	206
15巻1号	181
2号	168
3号	244
4号	213
5号	324
6号	255

「文庫」の俳句欄の選者については七巻第四号まで明記されていない。同巻五号からは「虚子選」となっている。どういう経緯で高浜虚子が俳句欄の選者となったのか、はっきり分からない。しかし、この号の発行日が明治三十年十一月二十日ということから察するに、この頃は鳴雪が俳事を絶っていた時期と重なり、正岡子規は鳴雪へ依頼したくても依頼することが出来なかったと思われる。「虚子選」と明記されているのは十巻四号（明治三十一年九月二十日）までであるが、九巻六号（明治三十一年六月五日）には「計らざりき急電あり、故山の老母病篤きを報じ来らんとは。筆を擲つて行李に急がしき外今や何事をも弁ずべからず。」と記して虚子は五月二十九日に母の看病のため松山へ帰郷している。しばらく俳句欄に俳句掲載はあるもの選者名がないが、十一巻三号（明治三十二年一月二十日）からは石井露月が選者となっている。

露月は十二巻六号（明治三十二年八月十五日）で『文庫』の俳壇」と題して投稿者の住所や人数の分析を行っている。それによると、北海道三人、東山道三十人、東海道五十二人、北陸道六人、畿内二十四人、四国三人、山陰三十一人、山陽二十三人、九州十一人、不明二十一人、合計二〇四人となっている。また投句数は、一人二三句の少ないものから一〇〇句や一五〇句など多いものもあるが、平均三〇句から四〇句と記し、句数総計は六千句から七千句あるとし、投句者の熱心さを示している。

露月も熱心に選者を務めているように見受けられるが、露月の選も十四巻五号（明治三十三年四月一五日）で終わっている。露月は明治三十二年十月に秋田へ帰郷して開院し、さらに明治三十三年三月には島田五空、佐々木北崖と俳誌「俳星」を創刊したため多忙となり選者を降りたものと思われる。

第十四巻六号、第十五巻一号、第十五巻二号の三冊の俳句欄は佐藤紅緑と虚子の共選で

あるが、第十五巻第三号（明治三十三年七月十五日）からいよいよ鳴雪の選がはじまっている。

⑶　「文庫」の松風会

前項で、「文庫」における投書家・読者と文庫記者・編集者との誌上における緊密さについて触れた。しかし、この緊密さは誌上だけにとどまらず、直接交友する誌友会「松風会」が発足している。この松風会は「少年文庫」時代である明治二十六年六月に東京の投書家が中心となって発足し、「文庫」時代になっても受け継がれてきているのである。

発足当初は投書家と文庫記者との親睦を目的としていたのであるが、次第に演説や談話、即興の課題文作りなどが行われ、その模様が「文庫」に報告されている。そうして、この報告を読んだ地方の詩友が刺激を受け、詩友会を名古屋、京都、金沢、岡山、長崎など各地で開催してゆくこととなるのである。

この「松風会」の大きなイベントとしては、明治三十四年四月に「文庫」百号を記念する意図で開催されたものがある。鳴雪はこの会で俳句について講演しているが、当日の記録として「春期松風会の記」が第十七巻第四号に掲載され、鳴雪の活躍した様子を伝えている。

なお、当日座興の一つとして行われたアンケート結果をみると、十六歳から二十二歳までの学生や書生が多く、現今の理想の人物として正岡子規を挙げて居る人も多い。鳴雪も十の質問のうち七つの回答を寄せているが、面白いのは、短所に生計を営むこと、長所に境遇に安んずること、希望に俗累を免るゝこと、愛読書に『徒然草』などを挙げていることだ。これらは余興のアンケートであるから、多少の戯れもあるだろうが、漢詩人的要素を見せる鳴雪の心中を垣間見る思いもする。

多くの青少年が投書し、また、投書家が中心となって結成された誌友会「松風会」の存在などの背景には、およそ次の三つの理由が考えられる。

一つ目は、鳴雪も深く係わってきた学校制度・教育の普及により青少年読者層の拡大及び自己表現の場の希求。二つ目は、新聞や雑誌の発行が容易になった印刷技術の向上。三つめは、近代化された郵便制度や交通機関の拡充。このような状況の中に於いて、鳴雪は青少年の投書による文学熱によく応えていたといえるだろう。

ところで、いったい「文庫」の俳句欄への投句者数はどの位であったのだろうか。「文庫」

の発行部数や投句数はなかなか判明しないが、「文庫」創刊の明治二十八年の第一巻から翌年十二月の第三巻まではほぼ月一回の発行。明治三十年の第四巻からはほぼ月二回の発行。明治三十四年の第十七巻からは再び月一回の発行となっており、紀元節や天長節には臨時で発行している。関肇氏調査（『新聞小説の時代』新曜社　平成十九年十二月十四日　一七〇頁）の『警視庁統計書』によると明治二十八年が一号あたり二四〇三部、明治二十九年が二六二一部、明治三十年が二六二五部、明治三十一年が一二六七部、以下は不明であるが、関氏は「おそらく一〇〇〇部程度で推移した」と推測されている。

おわりに

以上の通り「文庫」は次第に青年投書家が増加し、誌面も賑わってきたことがわかる。「文庫」誌上の俳句掲載数も漸次増加し、明治二十八年が三〇句前後、明治二十九年が五〇句前後、明治三十年が七〇句前後、高浜虚子が担当した明治三十一年が一〇〇句前後、と掲載数は漸次増加し、鳴雪が担当し始めた明治三十三年は二五〇句前後となっている。明治三十三年三月十五日発行の第二十二巻第六号の広告文に「俳句は鳴雪翁の精選に係り毎月投句数三万俳壇無比の盛観」とある。この広告文によると投句数は三万ということになる。投稿規定に一人五句以上二〇句以下とはあるが、その投句者数の多さが推量できるだろう。

また、「文庫」における投書家・読者と文庫記者・編集者との誌上における緊密さから「松風会」も誕生したことを指摘した。この青少年の増加の社会背景には、教育の普及、印刷技術の向上、郵便制度の拡充、自己表現の希求などが考えられる。

第二節　鳴雪の「文庫」俳句欄の選評

はじめに

鳴雪の俳句評は好評である。口語、漢語、雅語、俚語、など場面ごとに使い分けた短評が多い。本項ではその鳴雪評を具体的に取り上げ検討していく。比較のため、虚子が「文庫」で選評したものを取り上げる。

(1)　「文庫」第十五巻第三号

鳴雪は「文庫」俳句欄の選者になった頃のことを次のように述懐している。

私が抑も最初に雑誌の選者となつたのは、文庫であつて、これには選句の中へ簡単なる評語を挾んだので、世間では頗る受けたが、余りに口合的になるので、子規氏は機嫌がよくなかつた。(『鳴雪自叙伝』復刻版　二二五頁)

では、鳴雪の撰評はどのようなものであったのか、少しみてゆくこととする。

「文庫」第十五巻三号の俳句欄で、鳴雪がはじめて選評したものである。一句一句に対して短かくはあるが愛情のこもった評が付してある。例えば、次の如くである。

○芍薬の咲きくづれたる日向かな　　梅村

芍薬詠じ難し、此句の如き稍可なるもの、日向は其眼目なり。

◎行水の上をとび行く蛍かな　　梅村

涼意掬すべし。

暖かき庭に縄なふ親子かな　　三河　豊水

原句『日当りの庭で』。

鳴雪による「文庫」の俳句評は、軽妙で核心をついていて好評を博した、と前述したが、次にその内容を具体的にみてゆくこととする。

鳴雪が「文庫」の俳句欄を担当する前は、第七巻第五号（明治三十年十一月二十日）から虚子が担当している。虚子は翌第六号で、「本号より妄評を挿むことゝ為しゝは、聊か作者諸君に対するところあらんかとてなり」として俳句の選評をしている。

○芭蕉葉に月落ちかゝる墓畔かな　　芳雨

原句は、『芭蕉の影に墓あり秋の月』なり。影には蔭になるべけれど、贅語、秋の字も芭蕉に対して重複なり。斯く改めたれど、尚ほ芭蕉、墓、月の三物が、調和面白からざるを覚ゆ。

○法華経の鶯鳴くや寺の藪　　陸奥　露泉

原句は、『鶯の声さも似たり法華経』なり。『法華経の鶯』とにては意通ぜず、その難あるべけれど、そはホケキヤウと鳴く鶯とも、法華経らしき鶯とも、又は、法華経にある鶯とも解せらるべく、而して其意義の、甚だ曖昧にして非理なるが如き係はらず、曖昧は、原句に優れるものもあるやう覚ゆるなり。

虚子の選評は懇切丁寧で真面目であるが、手厳しい。一句目、原句は「芭蕉の影に墓あり秋の月」と示しながら、影は蔭にすべき、秋は芭蕉に対しての重複、芭蕉、墓、月の三つの調和がよろしくない、と評して、「芭蕉葉に月落ちかゝる墓畔かな」と添削句を掲げている。原句に比べ、調べがよく情景も浮かぶが、大幅な添削となっている。

二句目、原句は「鶯の声さも似たり法華寺」と示し、添削句「法華経の鶯鳴くや寺の藪」の「法華経の鶯」は少し意味が曖昧ではあるが、ホケキヤウと鳴く鶯であるから趣味は原句より優れているだろう、としている。やや理屈の勝った添削であろう。

一方、第十五巻三号から担当した鳴雪の選評は明快で、優しい。一句目、芍薬は詠じ難いが此の句は良いほうだ。日向が眼目、と温かい評である。

二句目、単に「涼意掬すべし。」とのみ評して、句と響き合うような雰囲気を醸し出している。

三句目、原句が「日当りの庭で」であったことを示して他のことには言及せず、それを「暖かき庭に」に添削したことがわかるようにしている。

以上、「文庫」に登場した両者の冒頭の二三句の選評をみてみたが、鳴雪の選評からは青少年を褒めながら育ててゆこうとする姿勢を読み取ることが出来る。鳴雪と青少年との教育の係わりについても触れたように、後進の指導ということを念頭に置いて、楽しく選評しているからであろう。これには、年の功といったものも考えられる。

子規が鳴雪の句評は余りに口合的になるので、子規氏は機嫌がよくなかった。(『鳴雪自叙伝』復刻版　二二五頁)「口合的」というのは次のような選評であろうか。

丶宴会の席を抜け出て涼みかな　　長崎　琴湖
　ダンシング未だ終らず
○足の裏に砂利こそばゆき清水哉　　松山　如意坊
　ザク〳〵〳〵
丶蚊遣せし古き火鉢や杜の堂　　備前　美登里

賽も一つころがりて

○行軍に清水備ふる小村かな　　佐賀　巴　月

やさしの国民よ、国家は唯君等に憑りて立てり

（第十八巻第五号　明治三十四年十月十五日）

しかし、鳴雪自身も述べているように鳴雪の軽快な口調の選評は好評だったようだ。作者と対話しているかのようである。

⑵　鳴雪の「文庫」俳句欄の選句基準

鳴雪による「文庫」の俳句評は、軽妙で核心をついていて好評を博した、と前述したが、鳴雪は自身の選句については次のように述べている。

中には随分初心な人もあつて、一句も取りにくいことがあるが、折角出句された志に対して、直してでも取れるものは取るやうにしてゐる。然し、雑誌に依つて、添削したことを示すのもあれば示さぬのもあるが、初心者にはやはり一々明示した方が、爲めになるだらうと思ふ。（「選句談」『鳴雪俳話』明治四十年十一月二十八日　博文館）

この「選句談」は明治四十年ではあるが、三十三年も同じ態度であり、鳴雪の選評に温かみのある所以が示されているといえる。

鳴雪の選評は「文庫」の終刊、即ち、第四十巻第十二号（明治四十三年八月十五日）まで続くが、鳴雪の後進指導について、河東碧梧桐は次のように述べている。

鳴雪翁は其御多用の身を以て、益俳事に心を寄せられ、重に後進誘導に勤め居られ候。文庫、萬朝報、太陽、白虹、など翁のお引受けに掛り、毎月なか〳〵の御多忙と聞及び候。其他各地方俳諧雑誌の選者、句合の判者を勤められ、又は箇人の俳稿添削を請ふ者も多しとかにて、翁の精勤はいつもながら壮者の後に瞠若たる所に有之候。

（碧梧桐「消息」「ホトトギス」第五巻第九号　明治三十五年六月三十日）

碧梧桐は、鳴雪の多忙さと後進の指導に心を砕く様子を伝えている。この文中の「重に

後進誘導に勤め居られ候」からは、鳴雪が「文庫」における選評によって青少年指導に力を注いでいることもわかる。

次に、鳴雪の選評について「文庫」第二十二巻第五号に掲載されているので、左にその一部を掲げる。題は「鳴雪翁の俳句評」であり、筆者名は醒菩薩とある。

◎鳴雪内藤鳴雪翁の俳句、余が愛して読むものゝ一、而して余は殊に其の俳句の選評を読むを愛(このの)む、昨夜燈下臥して近刊を繙く、偶々翁の俳句評を得、玩味一番、年のこゝに暮なんとするを知らず、其四五を録し、更に蛇足を画いて其楽を仝好者に頒ちなむ。

鳩吹に鳩鳴き合す梢かな　　日本橋　華邨

『魯清密約』

醒菩薩曰。為二如是観一。童謡亦詩史。這翁於二時事一亦別有二一隻眼一。

夕浪や蘆の花ちる鱸の背呂　　京都　拾翠

『一背字、全景活す』

又曰。自レ非レ有二詩眼一。不レ能レ下二這般語一。遠思樓句曰。春水暖二魚肩一。

朝風や糸瓜相打つ長短　　長崎　田士英

『痰佛逝矣、吾人宜く閲墻(げきしょう)を戒むべし』

又曰。一読下。無二流汗三斗漢一可。蓋痰佛斥二子規子一。（後略）

（醒菩薩「鳴雪翁の俳句評」「文庫」第二十二巻第五号　明治三十六年七月十五日）

醒菩薩が挙げているように、鳴雪は漢文調の奇抜で洒落た寸評を加えることも度々ある。幼いころから素読をはじめて漢籍に親しみ、明教館では漢学を教え、子規にも漢詩の添削をしたりしていた鳴雪にとっては、極自然なことだろう。

一句目、鳩の鳴き声に似た音を出して鳩を誘い寄せると、それに合わせて梢の鳩が鳴いた、という意味の句である。この句にたいして鳴雪は、鳩吹と鳩による合い言葉へと展開し、そこから更に進めて「魯清密約」という評を付したのである。「魯清密約」とは、おそらく明治十年のロシア・イリ事件の際の「崇厚議定魯清条約」のことだろう。崇厚は中国・清の外交官で、ロシアとの国境領土割譲の条約を結んだが本国の清朝政府からは批准されず、その責任を問われたりして不遇な人生を送ったのである。このようにみてゆくと、鳴

雪の思考過程の一端がわかって興味深い。

この短い「魯清密約」の評を読んだ醒菩薩は、鳩の鳴き合わす可愛い詩から歴史を詠む詩へと展開させた鳴雪の見識に感じ入っているのである。

二句目、夕浪をみていると蘆の花が散っている、その蘆の花の水面を時折飛び跳ねる鱸の背がみえて美しい、といった意味であろうか。鳴雪は、その鱸の「背」という文字で全体の景が浮かび上がってくる、と評している。これにたいして醒菩薩は、これらの語（這般語）は漢詩のきめての文字ではない、遠思樓の漢詩を想起させるものだと述べている。遠思樓とは広瀬淡窓の漢詩集『遠思樓詩鈔』のことを指していると思われる。広瀬淡窓は江戸時代末期の儒学者で漢詩人、教育者である。その『遠思樓詩鈔』の下巻に「春初散歩」（『遠思樓詩鈔』天保七年序・出版地不明・出版社不明　八丁表・早稲田大学古典籍総合データベース）と題した次のような五言律詩がある。

春初散歩

官舎梅成レ雪　村橋柳未レ烟
晴山横二鳥背一　春水及二魚背一
為レ覚二孤行好一　姑令二少者先一
吟笻迷二径路一　往往却還前

「春水暖魚肩」と「春水及魚肩」と一文字の違いはあるが、おそらくこの詩の第四句であろう。鳴雪が「背」に着目したのは俳句の核心をついており、また、醒菩薩の漢詩に典拠を求める指摘も面白い。

三句目、朝の風に糸瓜の長いのや短いのがぶつかり合っていることよ、という意味である。鳴雪は糸瓜から直ちに子規を思い出しているのである。そうして、子規亡き後は兄弟げんかをするなかれ、と訓戒の気持ちをこめているのであろう。醒菩薩も鳴雪と同様の感を覚えたのであろうが、痰一斗ならず汗三斗を流す男ではどうだろうか、と自身の考えを述べている。

この醒菩薩にたいする鳴雪の言はない。しかし、「文庫」の鳴雪選評の人気振りを伺い知ることが出来る。

鳴雪の撰評は『俳句選』という単行本になっている。第一編が明治三十四年八月、第二編が明治三十六年四月（これは再版されている）、第三編も刊行されたようであるが（「文

庫」第二十二巻五号　明治三十六年二月に第三編刊行の広告がある）未見、というように次々と刊行されていて、その人気振りを伺い知ることが出来る。鳴雪はこの「文庫」の選者になることによって青年層の指導者としての地位を確立したともいえる。また後に、鳴雪の右腕となって「文庫」を引き受ける渡辺水巴が編集した鳴雪の『新俳句選』が三十七年に刊行される。

「文庫」の俳句選者となった鳴雪は以後、その軽妙で核心をついた評により人気を博し、その選評を纏めた『俳句選第一編』を刊行している。そこでまず、鳴雪の『俳句選』についてみてゆくこととする。

(3)　鳴雪の『俳句選』・『新俳句選』刊行

「文庫」第十五巻第三号から始まった鳴雪による俳句欄の選評は好評だったようで、一年後の明治三十四年八月には早くも内外出版協会から、内藤鳴雪選評・大塚甲山編『俳句選』という単行本となって刊行されている。その宣伝文には「鳴雪翁が『文庫』に於ける俳句の選評が、本誌独特の光彩たるは世夙に定評あり、此の書は、選評中の最奇最秀なる者を抽いて、再び、翁が丁寧なる校閲を経たるもの」とある。またこの宣伝文に続いて、『俳句選　第二編』を「来る十月中旬発行すべし」とある。第一編刊行から僅か二ヶ月後の十月に刊行予定とは、いかに鳴雪の『俳句選』の人気が高いかを示しているといえるだろう。「世夙に定評あり」というのは次に示すような記事であろう。

> 俳句選は、編者が文庫の俳句中、鳴雪翁の選にあづかりたるもの、千百三十餘句を、新年と春夏秋冬に別ちて、抄録あいたるものなり、中に佳句少なからず。鳴雪翁の評語、洒脱にして真摯、一々的中す。（「帝国文学」第七巻第九号　明治三十四年九月十日）

これは「帝国文学」第七巻第九号の雑報に「批評」という題で、刊行された書物の評がなされているものである。他には、『俳句選』と同じころ内外出版協会から刊行された『滑稽俳句集』（題字が鳴雪で紅緑編）の評もあるが、『幼年唱歌』『日本遊戯唱歌』等が評されているところなどは、「文庫」が青少年を対象としている雑誌であるという特徴の一つが現れているといえる。

第一編が刊行された後、第二編がいつなのか未見のためわからない。しかし、第二十三巻第五号（明治三十六年七月十五日）の宣伝文によると、第一編は再版され、第二編、第三編も既刊となっているので遅くとも明治三十六年七月十五日までに『俳句選』第三編までは刊行されたとみてよいだろう。第二十二巻第三号（明治三十六年一月十五日）には『『俳句選』第三編　右発行す」とあるので一月かもしれない。いずれにしても、次々と刊行されてはいるが、現代までその本が余り伝えられていないのは残念である。

『新俳句選』は『俳句選　第三編』につづくもので、これまでと同様に「文庫」の鳴雪選評を一冊の単行本にまとめたもの。明治三十七年五月二十二日、内外出版協会から刊行されているが、編集者が大塚壽助（甲山）から渡辺義（水巴）へ、という違いがある。渡辺水巴については後述する予定であるが、明治三十四年に鳴雪に師事し、「文庫」にも多くの俳句が散見する人物である。

『新俳句選』は『俳句選』と同じサイズ（縦一四・五㎝横一〇㎝）の小本である。しかし、表紙はカラフルな花が描かれていたものから表題の文字のみとなり、実質本位といった感がある。その分本文は、一一六頁から一七六頁と増加している。

なお、何れも新年の部、春の部、夏の部、秋の部、冬の部の順に季題別に俳句が収録されているが、頁数の増加に伴い収録季題数も増加している。

そこで、次に新年の部の目次だけ例示しよう。

『俳句選』元日・初日・門松・初夢・宝船・雑煮・小殿原・朝拝・年礼・書初・万歳・福引・羽子・かるた・七草・小松引・嫁が君

『新俳句選』元日・初日・初東風・御降・松の内・朝拝・門松・初荷・初夢・筆始・弾初・初卯・梯子乗・七草・水祝・年礼・年玉・遣羽子・歌かるた・万歳・初芝居・庭竈・列見・左義長・藪入・初鴉・福寿草・若菜

採り上げられている季題は一七から二八と増加している。これらの季題の中には現在あまり詠まれていないものもあり、時代の変遷の一端を知ることができる。次にその古い季題の例句と鳴雪評を少し挙げる。小殿原（ことのばら）は、干した小鰯をいう女房詞で、ごまめのこと。新年の季題である。鳴雪は、

盛込みや隅にまします小殿原　　耐雪

という句に「中七諧訣」の評を付している。

水祝は、婚姻習俗の一つで、婚礼の時、または翌年の正月に親戚・友人などが集まって新郎に水を浴びせて祝福するもの。新年の季題である。鳴雪は

後ろから前から水を祝ひけり　　両溪

という句には「情郎跋扈」の評を付している。これは、新郎はつまずき倒れるの意。

水祝ひ生憎桶の氷かな　　行々子

という句には「滹沱河劉秀に與みす」と中国の故事の評を付している。滹陀河は中国の川の名で、劉秀は後漢の光武帝のこと。光武帝の一行が逃げる時、滹陀河の流れが速くて渡れないのを、部下の王覇が一行を勇気づけるために、氷結していると偽って報告したが、一行が到着すると、実際に凍っており、渡ることができたという話。『蒙求』に「王覇氷合」の四字句があり、鳴雪は「桶の氷」から滹陀河の凍った故事を思いついたのであろう。

したゝかに水祝はれて戻りけり　　楓子

という句には「ハクション〳〵」とユーモアのある評を付している。

庭竈は、昔、一月一日から三日までの間、入口の土間に新しいかまどを築いて火をたき、家中の者や奉公人たちが集まり、餅や酒を飲食して遊んだ正月の行事。庭竈は次の一句であるが、

小太刀佩く青侍や庭竈　　華村

この句には評がない。

先述したように、鳴雪の句評はここでも漢文調の奇抜で洒脱な寸評、あるいはユーモアのある口語的な句評がみられる。

この『新俳句選』について、「帝国文学」の雑報で次のように紹介している。

鳴雪翁の俳句の選と評の忠実で、後進の誘掖に懇篤なるは多とするところである。選についてはとかういふことが出来ないけれども、評は漢詩人風のお世辞づくめでなく、歌人風のよろし、めでたし流儀でもない。恰も最も巧に出来て居る画賛のやうに、その句に籠もつて居る趣致を摘発して簡潔なる語句の中に収めてあるので、句と評と相俟ちて一種の趣が現はれて居るものが多い。その真摯なるか如く、響のやうに句に応

して奇警な評語か湧いて出る趣は格別である。初学の人は句と評と対照して習味せは、自ら俳句の趣味を会得することか出来やうと思ふ（「雑報」『帝国文学』第十巻第七号）

この記事掲載の「帝国文学」は、明治三十七年七月十日発行であるから、『新俳句』が刊行された一ヶ月半後となる。ここで指摘されているとおり、鳴雪は句の核心を突きながら句に響き合う短評を付しているといえる。また、鳴雪の「文庫」に於ける選評がいかに歓迎されていたかがわかる資料であろう。

おわりに

鳴雪による「文庫」の俳句評は、軽妙で核心をついていて好評を博した。そのため、俳句と選評をまとめた『俳句選』『新俳句選』が内外出版協会から刊行され、その人気ぶりがわかる。簡潔でユーモアのある評が喜ばれたようである。虚子評と比較したが、虚子の丁寧な選評も勉強になるが、読者は鳴雪評を好んだようだ。

第三節　「文庫」の終刊

はじめに

青少年の投書によって支えられてきた「文庫」が終刊することとなった。鳴雪の担当している俳句に減少はあまり見られないが、経営不振に陥り終刊となるのである。

「文庫」を通読すると、鳴雪の担当する俳句欄の賑わいに大きな変化はみられない。しかし、短歌や漢詩欄は減少傾向だ。特に小説は振るわない。因みに短歌の選者は、渡辺光風、与謝野鉄幹、服部躬治、尾上柴舟、窪田空穂、相馬御風らが担当している。

この鳴雪の好調振りが頼られたのであろうか、「文庫」第四十巻第三号に「「文庫」の編集に就いて」と題して、編集を鳴雪に一任するという。鳴雪は大きな責任を負わされることになるのである。

⑴　編集依頼の広告

前述したように鳴雪による「文庫」の俳句評は好評を博したが、他のジャンルは振るわない。その為、鳴雪が頼られたのであろう。次のような告知文が大きく一頁を割いて掲げられている。

本誌は昨年来本会編集局に於て之を編集して来たのであるが、現今本会刊行図書の数は三百余種の多きに上り、毎月の新版も大抵六七種を下らぬので、此等の仕事がなか〳〵繁忙を極めて自然雑誌の方へは力を注ぐことが出来ぬ。依ツて今回協議の上本誌の編集一切の事を、多年本誌と因縁浅からざる内藤鳴雪翁にお頼みすることに決した。翁は乃ち来月号以後、渡辺水巴氏其他を率ゐて本誌の面目一新を計らるゝ筈である。惟ふに翁は我が国俳壇の重鎮而して又最も広き趣味の人、其の意気、其の文章、共に壮者を凌ぐの概あるは、夙に天下の認むる所である。斯の人にして、今其の衛星とも謂ふべき諸氏を督し、多年蓄積の力を本誌の爲めに傾け尽さむとせらるゝのあるから、来月号以後の本誌は、必ずや東京の雑誌界に一異彩を添へるであらうと信ずる。

右の改革と同時に本号の定価を旧に復して十銭とする。半年分、一年分の前金並に郵税、皆曩日と同一になることゝ御承知を乞ふ。

明治四十二年十一月　内外出版協会編集局敬白（「文庫」第四十巻第三号）

この告知文には、翌月号の第四十巻第四号（明治四十二年十二月十五日）から編集一切を鳴雪に一任することが記されている。では、何故このような事態になったのであろうか。「繁忙を極めて自然雑誌の方へは力を注ぐことが出来ぬ」とあるが、その実、「文庫」の衰退があったようだ。その主な理由として次の三点が考えられる。「文庫」をリードしてきた記者の小島烏水が、自ら中心となって明治三十八年に設立した日本山岳会と三十九年四月に創刊した機関誌「山岳」の方へ力を注いだこと。また、もう一人の「文庫」の敏腕記者であった河井酔芳が辞職して明治四十年六月に詩草社を結成して雑誌「詩人」を創刊したこと。「文庫」の紙面が次第に文芸雑誌的になって投書雑誌としての精彩を欠いてきたこと。これらのことがあってか、「文庫」の第三十八号第五号（明治四十年一月一日）からは紙数と定価が半減、第四十巻第一号（明治四十二年九月十五日）からは雑誌の大きさが従来の四六倍判から菊判へ縮小している。

いよいよ鳴雪編集責任者のもと新たに出発した「文庫」は、鳴雪の「廿世紀の俳句」を巻頭文に置き、喜谷六花と岡本松濱による「選句談」、鳴雪選評の「文庫俳壇」、水巴選の

「草紙俳句」、「各地俳壇」など俳句雑誌へと変貌している。しかし、水巴らを率いて編集にあたった鳴雪の手腕は活かされることなく、第四十巻第十二号（明治四十三年八月十五日）で終刊となってしまう。「文庫」の紙面から詩や小説が消えたのは、今まで見馴れていた読者にとっては、やはり物足りないだろう。巻末に「本誌変革の予告」が掲載されて、

俳句雑誌たる内容を一変して普通雑誌となし、名を改め、（『青年の友』と称す、）主として青年の修養に益する所あり、（略）従来俳句雑誌として本誌を愛読し本誌の投句家たりし諸君の多くは之を憾みとせらるべきも図書及び雑誌の発行を事業とする本会としては、此の変革の余儀なき次第なるを諒察せられたし

と「青年之友」として再出発することを告げている。

そこで、次に鳴雪が編集を任された「文庫」第四号から第十二号の終刊号までをみてゆき、何故「文庫」が廃刊となったのか探ってゆくこととする。

⑵　俳句専門雑誌となる「文庫」

鳴雪に「文庫」の編集一切を一任するという告知文が掲載されたのは、第四十巻第三号（明治四十二年十一月二十五日）で、第四号から「文庫」は俳句雑誌として再出発している。四号には、本号以後鳴雪に一任することが記され、第五号には「俳句雑誌としての『文庫』」と題して次のような文が掲げられている。

我が国の文学雑誌中最も長き歴史を有する『文庫』は、今や新派俳壇の元老として重鎮として、全国俳を学び俳に遊ぶの青年に仰望せらるゝ内藤鳴雪翁監督の下に、俳句雑誌として一大発展の途に上れり。主として常に筆を執る者は、鳴雪翁及び水巴、松浜、六花、朱泉、匏仙等才敏気鋭の青年諸俳士にして、之を佐くるの客将又多く、毎号の誌面、必ず清新なる趣味と有益なる記事とを以て充実せむことを期す。若し夫れ鳴雪翁選評せらるゝ所の文庫俳壇は、此処に天下四方の俳句を集め、巧妙奇警なる評語と相俟ちて、趣味の豊富実に他に比ひ無し。各地俳壇は毎に東京及び各地方俳壇の状況を一目にして知るを得べく、多くの六号文字には皆俳趣味の横溢するを見る。之を要するに本誌の期し且つ望む所、今天下の俳人其の数幾万なるを知らざるを想うて、

益々大に之を本誌の上に会し、以て又大に此等幾万の人を益し且つ楽しましめむと欲するに外ならず。

この文面は、俳句雑誌として多くの青年を導いて行こうとする気概と、新機軸を打ち出して進もうという希望に満ちたものとなっている。俳句雑誌となっての出発は、鳴雪の俳論や文庫俳壇の選を中心にして渡辺水巴、岡本松浜、喜谷六花等の募集句選や俳論が誌面を賑わし、東京、横浜、紀伊、北海道、熊本など各地俳壇の句会報がその誌友の広がりを示している。

鳴雪は、「文庫」の編集一切の任を受けるにあたり、弟子の水巴に協力を要請したようだ。水巴は既に明治三十九年五月に「俳諧草紙」を創刊してその編集にもあたっていたため、「文庫」と「俳諧草紙」の二誌の編集は困難と判断したようだ。そこで二誌を合併させ、「文庫」を俳句中心の文学雑誌として編集発行するという提案をしたところ、鳴雪も文庫発行者も快諾したということだ。

因みに、「俳諧草紙」の創刊号（明治三十九年五月五日）の巻頭文は鳴雪の「俳諧草紙発刊に就て」で約二頁、二頁目の左隅に「春十五句」として鳴雪の句が七句、六花の句が八句、他に募集句の鳴雪選や句会報・消息など合計八頁の薄い俳誌である。しかし、号を重ねて第四巻第一号（明治四十一年十一月十日）になると四十六頁と付録十六頁、合わせて六十二頁という隆盛をみせていて、水巴の手腕もうかがい知ることが出来る。毎号、鳴雪も関わっていたこの「俳諧草紙」は、第四巻第十三号（明治四十二年十一月三十日）で廃刊し、「文庫」と合併することになったのである。合併して誌名を「文庫」としたのは、「文庫」の方が古い歴史があるためだ、と水巴は述べている。ただし、母体の千鳥吟社は解散せず、従前通り例会を開くとも述べている。

以上のような経過から推察すると、「文庫」が俳諧雑誌となったのは、水巴の意向が強く働いたため、といえそうだ。俳諧雑誌となった「文庫」にはこれまで余り知られていなかった鳴雪情報が点在している。

まず、第四十巻第五号（明治四十三年一月十五日）・六号・八号・十一号に水巴が「大小霰」と題して、鳴雪の俳句を明治二十一年から明治二十九年まで年代順に紹介しているのがその一つである。鳴雪の句集はどれも類題別となっていて、その作句年代の記載がない。例えば、水巴が記した明治二十六年春の項に、次の鳴雪の句がある。

朧月釣する蛋の小唄かな

この句は『子規全集』第十五巻の句会稿で調べると、二十六年二月十九日に詠まれていて、水巴の記録と一致する。同じく水巴が記した明治二十六年春の項に、次ぎの鳴雪の句がある。

牛の角すぼめて通れ花の中

この句も句会稿で調べると、明治二十六年三月四日の句合の中にある句とわかる。作者は鳴雪と藤野古白、評者は正岡子規、勝田明庵、新海非風、五百木瓢亭、西原五洲となっている。次に掲げるのは「牛の角」の句が出てくる、七番花の句合で、

規明非　左　牛の角すぼめて通れ花の中　　東野の牛かひ
五　右　馬の尾は結んで花につなぎけり　南田の馬子

と記録されている。左の「牛の角」を勝としたのは、子規、明庵、非風で、右の「馬の尾は」を勝としたのは五洲である。十番までである句合の作者名は、東山の姫君・北野の若殿、虚無僧・山伏、等様々でどの句が鳴雪かわからない。しかし、水巴の記録によって、左の「牛の角」が鳴雪の句と判明するのである。

水巴は明治四十二年一月一日に出版された『鳴雪句集』の編集を任されたこともあって、漸次『鳴雪句集』の鳴雪の句を年代順に掲げる予定であったようだ。しかし、この「文庫」も第十二号で廃刊となってしまうので、鳴雪の句は二十九年の冬まで、掲載合計数は二四〇句で終わっている。『鳴雪句集』は明治二十五年から明治三十九年まで、総掲載句数は五四七句収録されているので、四割強の句の作成年代が記録されていることになる。

余談であるが、明治四十二年一月一日に出版された『鳴雪句集』は、三月三日に直ぐさま再版されており、鳴雪の句は古典的で陳腐・月並みだという批評もある中、人気があったといえそうだ。鳴雪の選評ばかりが人気を博したのではなかったと思われる。

次に、第四十巻第四号（明治四十二年十二月十五日）・五号・六号に「雑誌新聞の俳壇と選者」と題した記事がある。当時の俳壇の様子や選者の一端がわかる興味深い資料と思われるので次に示そう。

雑誌新聞の俳壇と選者（一）

○「太陽」来春より一夏拡張。従前の通り鳴雪選。投句者は選者宛に「太陽句稿」として寄稿随時である。

○「日本及日本人」碧梧桐選、同誌会報は、碧童、乙字、六花選。

○「趣味」「「秀才文壇」「婆世」共に岡本松浜選。

○「中外商業新報」毎日掲載。「大坂新報」隔日掲載。「萬朝報」毎週掲載。「東京毎日新聞」月三回、共に鳴雪選。

○「毎日電報」毎日掲載。喜谷六花選。

○「中央公論」「東京毎日新聞」高田蝶衣選。

○「文章世界」「葉書文学」「女子文壇」「日本及日本人の課題」等鳴雪選。

雑誌新聞の俳壇と選者（二）

○「都新聞」月八回程掲載、懸賞募集なり。紅緑、幹雄選。

○「国民新聞」連日掲載、東洋城選。

○「日本新聞」連日掲載、竹冷選。

○「東京日々新聞」折り〳〵掲載さる。乙字選。

○「東京朝日新聞」銅牛選。

○「新小説」毎月一回懸賞募集なり。鳴雪、鼠骨、竹冷、松宇、知十、その他、幸田露伴、泉鏡花、幸堂得知など文士連もありて輪番選。

雑誌新聞の俳壇と選者（三）

○「日本」新聞、竹冷選の外牧野望東選の懸賞募集句あり。

○「読売新聞」殆ど連日掲載。紅緑、知十選者なり。

○「文芸倶楽部」毎月一回懸賞募集、鳴雪翁の外秋声会派旧派の諸氏選。

○「時事新報」井泉水選。以下略　　（完）

これは全てを網羅したものではないが、明治四十二年十二月、明治四十三年一月・二月の俳壇の主な雑誌新聞の選者は日本派と秋声会が担当していたといえそうだ。鳴雪が選者になっている雑誌として揚げられているのは、「太陽」「文章世界」「葉書文学」「女子文壇」

「日本及日本人の課題」「新小説」「文芸倶楽部」とある。これらの中で「文章世界」「葉書文学」「女子文壇」は「文庫」と同様投書欄が充実した雑誌であり、若者が挙って投書している。新聞の選者としては「中外商業新報」「大坂新報」「萬朝報」「東京毎日新聞」の四紙が揚げられている。

以上のような鳴雪に関する情報を得ることが出来るものの、俳諧雑誌となった「文庫」の内容は標榜されたほどの「清新なる趣味」はないように思う。鳴雪の俳論や文庫俳句選、水巴・松浜・六花等を選者とした募集俳句、各地俳壇の句会報が主なもので、どこやら「ホトトギス」とその構成が似ている。尤も鳴雪を筆頭に日本派俳人ばかりであるから、似ているのは当然かもしれない。

また、先述したように和歌や新体詩、あるいは漢詩や小説などバラエティーに富んでいた今までの「文庫」を読み慣れていた目には、俳句関係ばかりの記事は少し物足りない思いがする。

おそらく当時の読者もこの様な思いをしたのではないだろうか。経営面については不明であるが、「文庫」は再び内容を一変し、誌名も「青年之友」と改名して再々出発するのである。

(3) 「文庫俳壇」の行方

俳諧雑誌として再出発した「文庫」は、第四十巻第十二号（明治四十三年八月十五日）を以て廃刊となる。廃刊の理由を巻末の予告文で「此頃二三の事情ありて、現在の侭にて発行を続くることが本会の営業上甚だ不便なるを感ずるに至れり」と記している。「二三の事情」とは何か判然しない。さらに予告は、俳句雑誌から普通雑誌へ内容を一変し、「成るべく記事を多方面にし、材料を新たにし、所謂趣味有り、実益有」る雑誌にするというのだ。そして、「図書及び雑誌の発行を事業とする本会としては、此の変革の余議（ママ）なき次第」と続けている。この予告文から推測すると、俳句雑誌としての「文庫」の売れ行きが不調だったと思われる。

鳴雪は文庫俳壇の末尾に次のように告知している。

本誌は本号限り廃刊せらるゝを以て以後は俳句専門誌『千代田』の付録に文庫俳壇の目を設けて相変らず選評を為すの心得なれば諸君も自今同誌へ出句せられんことを希

望す。尚其他の件は本誌の末に記載せらるゝ所に依つて知得せられたし。鳴雪　謹白

鳴雪は淡々と述べているが、水巴は「一筆啓上」の欄で「誠に以て残念千万につき再び『俳諧草紙』を発行せんかと存じ候へしが、目下健康勝れざる際雑誌発刊に付随せる庶務の繁忙には到底堪へ得らるべくもあらず」と、廃刊となる無念さを吐露している。

では、文庫俳壇が移籍する「千代田」とはどのような俳誌なのであろうか。また、何故「千代田」を移籍先に選らんだのだろうか。「千代田」の母体は、角田竹冷が俳句指導をしていた会を、小泉松琴が主唱し竹冷を中心として結成された「千代田吟社」である。その発会式は明治四十一年十二月九日、神田錦町錦輝館で開催されている。機関誌「千代田」は翌四十二年に創刊発行されたようだが、創刊号は未見である。しかし、第二巻第一号が明治四十三年一月十八日に発行されているので、第一巻発行は明治四十二年中とみてよいだろう。

鳴雪はこの「千代田」にもおそらく創刊号から「鳴雪翁俳話」を連載し、また募集俳句の選者を務めるなどして大きく関わっていることが確認でき、鳴雪の派閥に拘らない一面をここでもみることができる。

文庫俳壇を何故「ホトトギス」へ移籍しなかったのだろうか、という疑問も起こるが、この時期の「ホトトギス」は写生文中心の時代であり、また、碧梧桐は新傾向の時代である。鳴雪の東洋趣味とは大いに異なっている。

文庫俳壇が移籍したと思われる第二巻第八号（明治四十三年八月）から第三巻第二号（明治四十四年二月）までの「千代田」は未見だが、第三巻第三号（明治四十四年三月十五日）には「鳴雪翁俳話」とともに「文庫俳欄」がある。この号の俳句掲載数は二四〇句で、「文庫」時代と遜色ないようである。第四号・五号は未見だが、第六号からは「文庫俳欄」の題が「鳴雪文庫」と変更され、鳴雪が前面にでてきている。

第九巻第一号（大正六年一月二十五日）の「千代田」の巻頭には鳴雪の「鳴雪翁俳話」があり、鳴雪は「今回は虚栗集の其角叙文の解をせよとの事であるから夫を試みる事にしよう」と述べている。また、同号の木星による「轍和の跡―大正五年の俳壇から―」には「鳴雪翁を戴く私達は、其論旨に接する機会が比較的豊富であるから、此際聊か付言することを許されたい」と、鳴雪を敬いながら「新味を求め得られない」と付言している。

「千代田」の発行がいつまで続いたか不明であるが、第十一巻第四号（大正八年五月十五日）までは確認できる。この号は竹冷追悼号のためか、巻頭文に鳴雪の「竹冷氏に就て」

を三頁にわたって掲載し、鳴雪の選句欄はない。

しかし、この号の予告欄には第十一巻第六号・七号の俳句の課題が掲載されおり、鳴雪選の欄の題が第六号は「鳴雪文庫」、第七号が「当季雑詠」となっていて、第七号には「文庫」の文字がない。これは次第に文庫色が消滅していることを意味している。

なお、明治四十三年八月で廃刊となった「文庫」から改名して創刊された「青年之友」はあまり資料が残っていないが、短命で終わっている。

以上みてきたように、「文庫俳壇」の移籍先である「千代田」がごく僅かしか現存しないため、「文庫俳壇」を最後まで見届けることが出来ないのは残念であるが、鳴雪が活躍していることは推察できる。

おわりに

鳴雪の俳句活動を「文庫」を通して検討してきたが、着目すべき点は鳴雪の俳句選者としての功績である。

鳴雪は、投句者の志を汲んで幅広く選句し、的を射た軽妙な選評で青少年の知識欲を増加させ、その青少年を上手く育てていったといえるのである。

さらに、日本の歴史や古典文学、あるいは漢文などの東洋趣味に立脚して選句しているため、文明開化以来の西洋趣味ばかりに陥りがちな青少年にたいして、東洋の文学の素晴らしさを伝える役目も自ずと担っていたといえる。

鳴雪は、虚子や碧梧桐は大学の俳句の先生だが、自分は小学校の先生だと自任していたのも、青少年を育てているという思いが強かったのだろう。

なお、この選句態度は文庫俳壇に限ったことではなく、多くの新聞雑誌の選句にも一貫しているので、その功績はさらに大きくなると考える。

第二章　鳴雪と「俳諧草紙」

第一節　「俳諧草紙」での活動

はじめに

「俳諧草紙」は鳴雪の弟子でもある渡辺水巴が明治三十三年五月五日に創刊した俳誌である。寺子屋に下げていくようなお習字帳のような形で少し変わっている。鳴雪も「殊に俳諧草紙といふ名は鳥渡面白く且つ其体裁を聞けば一種面白い趣向で、早く見たいと思ひます」と述べている。水巴の父親が有名な画家渡辺省亭であればその様な感覚の俳誌もできるのだろう。この「俳諧草紙」はやがて「文庫」と合併するが、鳴雪の俳句活動を検討する。

⑴「俳諧草紙」創刊号

「俳諧草紙」の創刊号は、表紙を含めて五頁の薄い俳誌である。一頁めは、鳴雪が「俳諧草紙発刊に就て」をほぼ二頁にわたって述べている。鳴雪は比較的早い時期から口述筆記のようで、この巻頭言も匏瓜筆記である。

鳴雪は「困難を排し私情私利を去り務めて共同一致を以て此雑誌を日に月に隆盛に趣かしめられんことを希望するものであります」と述べて、前途洋々たる若者に忠告や希望のエールを送っているのである。

二頁の下段の半分は鳴雪の文、残りの半分に、「春十五句」と題して鳴雪七句、六花八句がある。鳴雪の句は、

古檜葉に二月の風の戦ぎかな　鳴雪
築山の陰に秋する小竹かな
大盃落花も共に呑み干しぬ
掃き落とす門も籬も落花かな
行春や四十八関とぢあへず
行春の僧は留守なり白泉寺
行春のあじきなく喰う夕餉哉

華々しさはないが、落ち着いた雰囲気を醸し出した創刊号に相応しい句群となっている。

三頁は、「草合」の題の募集句の鳴雪による入選句と千鳥吟社例会が掲載され、この頁はすべて俳句で埋められている。

四頁は、消息、千鳥吟社社員名簿、俳句課題など事務的な内容、以上ですべての「俳諧

草紙」の創刊号である。こうしてみると、創刊号の半分以上は鳴雪による記事である。二号は一頁増え、内容も「作者小話」「俳談会」など加わっており、次第に充実させているといえるだろう。

⑵　鳴雪の俳論・俳話

「俳諧草紙」にはほぼ毎号何らかの鳴雪の文章がある。第四巻（明治四十二年）には「俳話」が連載されている。テーマは「俳句の本分」、「畏るべき芭蕉翁」、「日永の題及び選句に就て」というように、俳句に関連したものが多い。

第四巻第八・九号合併号の「俳話」では「選句論」が掲載されている。この中で鳴雪は自身の選句について次のように述べている。

俳句の選をするに、若い人達は多く厳選を好み、それを気持ちが好いと云ふ。然るに僕は之に反して寛選を好み、成るべく出句者には一句以上取り、其侭取れねば添削して取り、其侭で佳ならざるは添削して佳にし、成るべく多く取って而して出句者の名は一人も洩らさぬやうにと期して居る。

この文には鳴雪の選者としての方針が明確に述べられている。「出句者の名は一人も洩らさぬ」ということは、特に地方の人々にとって励みになるものである。毎回顔を合わせることのできない人にとって、名を残すことは存在の証となるのである。鳴雪の選句を好む人も多いものと考えられる。また、鳴雪の寛選で俳句に親しむ人が増加し、別の角度から見ると子規の目指した俳句の裾野を広めていっているのではないだろうか。

おわりに

渡辺水巴の創刊した「俳諧草紙」は鳴雪の寄稿が多く、鳴雪が助力していることを指摘した。また、鳴雪の選句は緩やかで初心者に優しい配慮がなされていることにも言及し、鳴雪の寛選により俳句人口増加に寄与したものと思われる。

第二節　「俳諧草紙」の中の虚子の批評

はじめに

鳴雪は『ホトトギス』を筆頭に多くの俳誌に関わってきた。中でも明治三十九年五月、渡辺水巴によって創刊された『俳諧草紙』は鳴雪の俳句や俳話が多く掲載されていて、鳴雪の大きな活躍の場の一つであったことがわかる。また、その一方で虚子の発言を載せていて、鳴雪との距離も感じさせられる。そこで本項では、鳴雪と虚子が俳句の批評について論じあったことを中心に考察する。

(1) 虚子の「談理と句作の空間充填策」

「俳諧草紙」第一巻第六号（明治三十九年十月）の虚子談「談理と句作の空間充填策」は巻頭に掲載されているが、これは二十行あまりの短い論である。虚子はその中で、「鳴雪翁や、四明翁が、俳諧に関する談理をやらるゝのは、結構なことだが、この談理と句作との間には大きな空間がある」から、この空間を埋めるために「厳正な批評が欲しい」と語っている。また、子規は俳句を「作るかたはら、好んで批評をやつて、能く人々の長所を見分けて、これを指導された」が、今はその人がなくて物足らない。そして、「俳句を作らぬものは、決して本当の批評など出来るものでは無く、今のところ鳥渡適当な人を見出すことが出来んのは残念である」と評している（注1）。この虚子の評から、虚子が子規を俳句の批評家として最も優れた人物とみていたことは明らかであろう。

ところで、虚子のいう「鳴雪翁や、四明翁」が盛んにする「談理」とは、凡そ次のようなことと思われる。なお、談理とは理論を語り合うことであるが、談理も空間も明治二十年代から使用されはじめた言葉である。鳴雪は「俳諧草紙」に「趣味の範囲及養成」と題して第一巻第二号・三号（明治三十九年六月・七月）において、俳人の本分として俳句の趣味範囲を拡大するために学問をする必要性がある、ということを論じている。

中川四明は「懸葵」の創刊号（明治三十七年二月）から「俳諧の美はフモールに非ざるか」（上）と題して美学の視点から俳句とユーモアの関係を論じ、虚子が言及していたころの第二巻第十二号（明治三十九年二月）では、「俳諧のデカデント」と題して西洋芸術の象徴・形式・調和などの視点から俳句を捉える試みを論じている。

両者はともに俳句実作の方法を述べたものではなく、句作に必要な感性を身につけるた

めの学問について論じているといえる。この論者と俳句実作者との隔たりを虚子は指摘したものと考えられる。また、虚子は「厳正な批評」とは「作者を益し、読者を導く」ような「重みのある中正を得た批評」である、とも述べている。

なお、批評とは『日本国語大辞典』によると、「事物の善悪・是非・美醜などを評価し論じること。長所・短所などを指摘して価値を決めること」とある。ここには、俳句作品のよさを見極め味わうことも含まれているだろう。

さて、ここでまず注目したいのは、虚子の「俳句を作らぬものは、決して本当の批評など出来るものでは無」い、という論である。俳句を作らない者には本当の俳句批評はできない、というのである。虚子のいう「本当の批評」とは前述の「厳正な批評」と相通ずるものであろう。

虚子のこの考えは案外早い時期からうかがい知ることができる。例えば、「日本人」第十一号「俳壇雑感」欄（明治二十八年十二月五日　二七頁）では次のように述べている。

俳句に重んずべきは連想にありて連想を惹起するの難易は最声調の上に存すればなり而して其一字の取捨顛倒に細心留意するものは熟練なる作家ならざる俳論家の知るところに非ず局外者の多くが不熟にして覇気多き句を喜んで良匠経営のあとを察する能はざるものは主としてこの点にあり余は一派の評論家に告げん諸君苟くも俳句を論ぜんとす少くとも先づ数百句の自作を試みざる可からずと

虚子は、俳句の詩形が短い故に連想を重用し、そのために一字の取捨顛倒がある。そのことを知らない評論家は良い句を見極めることができない。せめて数百句でも自作すれば理解することができるだろう、と論じているのである。

また、「日本人」第十六号（明治二十九年二月二十日）では、次のように述べている。

門外漢の俳句を解すること能はざる原因種々あるが中、俳句には作者と読者との間に、言ひ顕はし上特別の約束あることを知らざるもの其の多きに居るが如し。

ここでも虚子は、俳句には独特の表現方法があり、それを知らない読者は俳句の解釈ができない、と俳句を知らない読者との相違点について述べているのである。その例として、

髯奴腰黒茶碗女郎花　　可全

の句をあげ、この句には「関係詞もなく、動詞もなく、単に名詞の排列」であるが、「髯奴が腰黒茶碗で草に腰を据ゑ、飯でも食つて居る傍に、女郎花の咲きゐる景色」を想像すればよく、読者に想像力を働かせるのが俳句の約束である、と具体的に解説しているのである。

また、明治三十一年四月に少年園から刊行された『俳句入門』には次のように述べている。

句の意義を解することは、俳句の修辞上には一種特別の約束ありて、作者読者相互の間に於て、此の約束の認識されざるべからざることを知るときは、普通の句は句作を試みぬものにも解し難きに非るなり。

虚子は前述と同様、俳句には独特の約束事があり、それを認識すれば読者も俳句の解釈が可能である、と述べているのである。さらに虚子は同論で、「修辞上には一種特別の約束」があると続けて、その約束とは「文字の省略」と「文字の顚倒」である、というのである。その例として、

秋風や藪も畑も不破の関　　芭蕉

の芭蕉句を示しながら句意を「今や藪や畑になつてゐる不破の関跡扨ても物淋しく秋風の吹くことよ」として、○印で省略されている文字を表し、句意で「秋風」が上五へ倒置されていることを解説しているのである。

なお、虚子の刊行した『俳句入門』は「初学者の為の入門として簡潔に過ぐるやの感」があるという評があるものの好評のようだ（注2）。

⑵　鳴雪の「虚子氏の説話に就て」

「俳諧草紙」一巻六号に「一筆呈上」欄に「巻頭に掲載致し候虚子君談の『談理と句作の空間充填策』に就ては鳴雪翁及び四明翁の御説も有之べくと存じ只今より楽み居り候」と、

虚子の文に対する鳴雪や四明の反駁を促す記事がある。鳴雪はこの記事に早速答えて「俳諧草紙」一巻七号（明治三十九年十一月五日）に「虚子氏の説話に就て」を掲げた。

鳴雪は虚子の「厳正な批評が欲しい」という論に賛同しながら、厳正な批評をするには「一面に美的趣味を多様に玩味し感得すると共に、一面に美的理論に習熟して精細に着想と措辞との得失を分解弁説するの力を持たねばならぬ」必要があるとし、また、厳正な批評者を得るには「句作と談理とを此上にも一層奨励鼓舞せねばならぬ」と、虚子の論に補足をしている。鳴雪は「俳諧草紙」一巻二号の「趣味の範囲及養成」でも「自己が周囲の人事及び天然をよく観察すべきのみならず、古今の歴史東西の事実に渡つて学問智識を広めねばならぬ」と述べ、常に古今東西の学問をする必要性を説いている（注３）。

次に、鳴雪は虚子の論に三点疑問を投げかけている。一つ目は虚子が、批評は「己れの好むところに癖する」か「浅薄な説が多い」と述べたことに対して、鳴雪は「癖しても浅薄でも其結論に前提たる説明があつて呉れゝば、所謂他山之石以て玉を磨くべしで、まだ〳〵人の参考にもなつて好い」としながら、「談理を奨励鼓舞することが急務」だと述べている。二つ目は虚子が、「批評は概ね面倒臭くなる」と述べたことに対して、鳴雪は「一方に厳正な批評者の出ることを求めて置いて、こんな言を吐かるゝのは好くない」として、「前提を持ち出す力のない輩に口実を與へて、我も面倒だから結論許りにして置いた」ということになる恐れがある、と述べて虚子を諌めている。三つ目は虚子が、「俳句を作らぬものは、決して本当の批評など出来るものでは無」いと述べたことに対して、鳴雪は「俳人中に批評者を敢てする者を沮喪せしめ」また「前提ある談理的の智識を得る機会を失はしむる恐れ」のある意見だと難じている。さらに続けて、嘗て虚子が美的趣味はあらゆる文芸に通じて居るので俳句の趣味も義太夫の趣味も同じ（注４）、と言っていたことと矛盾する、と指摘している。何故なら、

役者ならざる者が芝居の評をして居る浄瑠璃太夫ならざる者が浄瑠璃の評をして居る。画工ならざる者が画の評をして居る。而して此等の評も氏の説から云ふと本当の批評とは云はれるので、本当の批評は単に芝居なら役者仲間、浄瑠璃なら太夫仲間、画なら画工仲間より外一切出来ぬものとなるので、果してそんなものであるや。否や。

（「虚子氏の説話に就て」「俳諧草紙」一巻七号　明治三十九年十一月五日　二頁）

と、反駁している。この鳴雪の論に対して虚子は何も述べていないが、鳴雪が理知的であ

る一方で虚子はやや感情的といえる。「月並研究会」（「ホトトギス」第十九巻第十一号　大正五年八月一日　『月並研究』大正六年十一月二十日　実業之日本社　四一から四二頁）に於いても、鳴雪は月並の標準を先ず定めて「詩美的であるか否かという事」に置きたいと述べると、虚子の標準は「私が自身頼みとして居り、自分が力として居るところのものは、自分の趣味性とか判断力とか言ふもの」と述べていることからも両者の違いがわかる。

(3)　俳壇批評

虚子が批評について言及した背景について目を転じてみたい。明治時代の新聞や雑誌は現代と違い、その記事を書いた記者と他記者との批評のやり取りが頻繁に行われている。

次に、内容には触れないがそのやり取りの例を少しあげよう。まず、新聞「日本」の「雑報」欄の記者から「帝国文学」の記者への記事である。

帝国文学記者の如きは人の尻馬に鞭打つてわけもなく噪ぎ廻るもの別に反駁の手柄も無けれど其知つた風する事の悪らしさよ、子規子が附勝の歌仙を公にすれば扨こそ子規派も烟に捲かれたりといひ、秋声会なるもの起る由をきゝては俳諧の気運刷新したりといふ根柢の事理を究めで皮想の現象にのみ駆られたる有様ただ識者の笑を貽すのみ御気の毒にこそ（「よしなしの言」似角先生　明治二十八年十一月二十九日）

新聞「日本」記者は「帝国文学」記者を名指して「人の尻馬に鞭打つてわけもなく噪ぎ廻る」と批判し、これに対して、「帝国文学」記者は次のように答える。

『日本』の似角とか云ふ男、何処の男の尻馬にはい上つてか、蝸牛の角にも似ぬ角ふり立てゝ、知つた風な空言のをかしさよ。吾人は決して御大将子規殿が、俳諧勃興の煙に捲かれたりとはいはず。只附勝の俳諧に月花の定座でも暗んぜらるれば、追付け『四歌仙』や『桃季』位は覗かるゝべく、従つて蕪村句集篇全二巻以外にも、蕪村調の特色を認めらるべしと云ふのみ。吾人は秋声会の創立を以て、俳諧の気運刷新せりなど云ひしことなし。（後略）　（「雑報」欄第一巻第十二号明治二十八年十二月）

「帝国文学」記者は新聞「日本」記者の言葉を引用しながら「似角とか云ふ男、何処の

男の尻馬にはい上つてか、蝸牛の角にも似ぬ角ふり立てゝ、知つた風な空言のをかしさよ」と反論している。

このような両者間のやり取りは続くのであるが、この様子を夏目漱石は子規に宛てた書簡で「『帝国文学』で似角先生の悪口をいひしは醒雪と申す人にや喧嘩も悪口のやりとりと成つては下落致候」（明治二十八年十二月十四日）と、低俗な悪口のやり取りとなっていることを批判している。このような批評合戦が続く中、「帝国文学」の「雑報」欄では「評家の要訣」と題して次のような一文が掲げられている。

批評は宜しく不偏なるべし、不党なるべし、細心の頭脳を以て、燃犀の眼光に照らし、一切の情弊を峻拒して厳密なる断定を行ふ（第四巻第五号　明治三十一年五月）

批評は公正中正で一方にくみするようなことはせず、注意深く見抜いて情けをかけず厳密に行う、と厳正な批評の必要性を論じている。

また同時期、「早稲田文学」の「雑報」欄にも他誌への記者批評が次のように掲載されている。

緑雨に問ふ、瑣細なあらを拾ふもいゝがナゼあら拾ひばかりをやつて居るのだ。今の文壇にはあらを拾ふより言ふべき事が無いといふのかそれともあら拾ひより外の事は為得ないのといふのか。（第七年号外明治三十一年十月）

これは、辛辣な批評家として名を馳せていた斎藤緑雨にたいしての批評であるが、このことからも、当時盛んに行われていた批評の質をうかがうことができるだろう。

さらに、「甲矢」第二巻第三号の「ウツボ」欄（明治三十八年十一月）では次のように述べている。

批評は最も公平でなければならぬ。先輩の雑誌なら障らぬ神に祟りなしと褒めソヤシて置く、後輩の雑誌なら何の恐るゝ所あらんやと随分酷評を加へる、是が雑誌記者の通弊である、然り人情の弱点である。一体に読者は冷評酷評を以て快とする風がある。記者は其弱点に乗じて曲筆の愚を学んではならぬ。

この文からも、当時、いかに公平な批評が求められていたかがわかる。このような状況の中で、虚子が「厳正な批評が欲しい」と述べたことは必然のことと思われる。

おわりに

虚子が「俳諧草紙」第一巻第六号（明治三十九年十月）の「談理と句作の空間充填策」の中で述べた「厳正な批評が欲しい」或は「俳句を作らぬものは、決して本当の批評など出来るものでは無く、今のところ鳥渡適当な人を見出すことが出来んのは残念である」という論から、虚子が早い時期から論じていたことを検証した。また、虚子のこの論に対して鳴雪は自身との同意点と相違点について言及し、鳴雪の虚子とは違う理知的な一面を指摘した。

そして、当時、盛んに行われていた新聞雑誌記者間の批評合戦から、虚子が俳句批評には俳句独特の約束事を理解していなければ本当の批評はできない、ということを機会あるごとに論じていたことを確認した。

（注）

1　鳴雪は次号で「虚子氏の説話に就て」と題して概ね虚子の論に賛同しながら、次のように反駁している。まず、厳正な批評者を得ようとするならば「其要素たる句作と談理を此上にも一層奨励鼓舞せねばならぬ」という。つまり、学問を怠るなということである。次に、虚子が「俳句を作らぬものは、決して本当の批評などが出来るものでない」というのは、「美的趣味は一ありて二なく、あらゆる文芸に通じて居る、即ち俳句の趣味も義太夫の趣味も同じである、演劇能楽其他も同じである、故に一の美の標準を以て他のあらゆるものゝ批評を為すことが出来る」とこれまで虚子が言っていたことと矛盾する、と反駁している。

2　「帝国文学」（第四巻第五号　明治三十一年五月号）「本書は初学者の為に入門として簡潔に過ぐるやの感なきにあらずと雖も、俗宗匠輩、或は独案内と名け、或は手引書と号して印行せるものに比すれば、固より日を同じくして論ずべきにあらず。我は初めて俳諧の道に入らんとする者に、此書を紹介するに躊躇せざる者なり」とあり、「早稲田文学」（第七巻第八号　明治三十一年五月）にも「此の書従来の俳論に比べて遥かに美学的、はるかに系統的、入門者によろしく而して上堂者にも興あり、文章また雅

馴れ」とある。

4　鳴雪は同様のことを「歴史を始め、種々の文学書、また文学以外の書物などを繙けば、其処の夫れ〴〵の智識を得て、古今の事情にも通ずるし、また言葉の扱ひ方なども、典故に依つて、簡略にする方法が解る（『鳴雪俳話』明治四十年十一月二十八日　博文館　一九六頁）」とも述べている。

5　虚子は「菫物語」（「ほとゝぎす」第一号　明治三十年一月十五日　三頁）「俳句は広義にいふ詩（漢詩の如き狭き義と混ずべからず）即美文学の一体なり、詩は絵画、彫刻、音楽、建築と共に美術と称せらる、美術は美を目的とする術にして、美は真と善と共に総ての学術技芸の流れては必ず朝すべき三大湖海を為すものなり」と述べている。また、「消息」（「ホトトギス」第八巻第七号　明治三十八年四月一日　八五頁）に「俳句の趣味は発達したる文学の趣味なり。発達したる美術の趣味なり」と記している。これらの論は、子規の「俳諧大要」の「俳句は文学の一部なり文学は美術の一部なり故に美の標準は文学の標準なり文学の標準は俳句の標準なり即ち絵画も彫刻も音楽も演劇も詩歌小説も皆同一の標準を以て論評し得べし」（新聞「日本」明治二十八年十月二十二日、『子規全集』第四巻　三四二頁）を継承した論といえる。

3　河東碧梧桐も「ほとゝぎす」第九号（明治三十年九月）の「席上録」で「調に不相応なる想なるが為に、読者の感納性に応ふる所のもの、作者のと軒輊なきことを得ず」と感納性の語を用いている。なお、『高浜虚子全集』第九巻（改造社・昭和九年六月）では「感応性」としている。

第三章　鳴雪と「南柯」

第一節　南柯吟社

はじめに

鳴雪は「ホトトギス」を筆頭に多くの俳誌に関わってきた。中でも明治三十九年五月、渡辺水巴によって創刊された「俳諧草紙」は鳴雪の俳句や俳話が多く掲載されており、鳴雪の大きな活躍の場の一つであったことがわかる。

しかし、四十二年十一月に「文庫」に合併すると、その後間もない、四十三年八月に「文

庫」は終刊となってしまう。「文庫」は「青年之友」と改題して再出発したが、鳴雪は「青年之友」と袂を分かち、「文庫俳壇」を「千代田」へ移すのである。

「千代田」は四十二年一月に角田竹冷が創刊した俳誌で、鳴雪はこの誌上で「文庫俳壇」の選評をし、俳話を連載する。しかし、「千代田」の軒を借りている印象は拭えない。

この様な状況の中、鳴雪が心置きなく活躍できた俳誌が「南柯」といえる。そこで、鳴雪と「南柯」の関わりを検討しながら、鳴雪の俳句や俳句観を考察する。

(1) 南柯吟社の創設

大正二年七月二十日、第一回の南柯吟社の運座会が日本橋本町の亀の屋に於いて開催された。出席者は五十人余りだった、という。これは鳴雪一周忌によせた松沢雪松の「恩師鳴雪先生を偲びて」(「南柯」第十五巻第二号　昭和二年二月一日　十三頁)という追悼文によるものであるが、七月二十日の新聞「万朝報」の「文芸消息」欄に「内藤鳴雪等の南柯吟社は昨夜日本橋亀の屋に始めて運座をやつた」とあるので、運座会は七月十九日と思われる。

この運座会に先立ち、雪松と牧野銀杏庵は鳴雪を訪ね、「なんか俳句の会を立てたい」「なんか会名を」と懇願し、鳴雪はその言葉の「なんか」をもじって「南柯」という会名をつけたのである。鳴雪は会名をつけたが、李公佐の「南柯太守伝」の「古小説」をすぐさま持ち出し「南柯の夢の五十年でさめぬやうにしてほしい」と付言することを忘れなかったらしい。

鳴雪に会名をつけてもらった雪松と銀杏庵は、巌谷小波と武田鶯塘に報告して賛助になってもらい、吉田兀愚、小倉沖外及び雪松と銀杏庵の四人が幹事となって南柯吟社を創設し、鳴雪には会長の依頼をしたのである。

こうして南柯吟社は創設されたのであるが、この南柯吟社創設の経緯について七月二十一日の「万朝報」の「文芸消息」欄に再び掲載されている。記事には「某々天狗連が内藤鳴雪を訪うて鳴雪会が起こしたいといふ、翁いふ、鳴雪会はいけない、ナンカよい名はありませんか、その南柯がよしとて起つた」とある。この記事により、雪松等は最初「鳴雪会」という名称で会を発足させようとしていたことがわかる。しかし、鳴雪は個人の名を冠した会には賛同せず、機知と教養を以て「南柯」と名付けたのである。鳴雪の思慮深さのわかるエピソードといえるだろう。

運座会で鳴雪は毎回席上俳話をし、会が三回四回と重なる頃には出席者は八十人、九十人と増加、毎回賑わったようだ。この賑わい振りから幹事等は会員の作品発表のための機関誌の必要を感じ、俳誌創刊へと繋がってゆくのである。鳴雪は俳誌創刊の相談を受けたとき、急いで俳誌を出しても継続しなければ却って信用を失いかねないので慎重を期するように、と鳴雪らしい注意を促している。

創刊号のために、鳴雪は雪松に

月高し来たれ我兄我弟　　鳴雪

癸丑十月

と巻紙に書いて渡したと前述の雪松が十四頁に述べているので、俳誌創刊の話題は十月であったことが推察される。七月に第一回の運座会を開催し、十月には俳誌創刊の骨子ができていることを考えると、南柯吟社の勢いを感じる。また。鳴雪の句も、創刊を高らかに宣言し、希望に満ちた意気軒昂たる句となっている。この運座会が回の重なる度に出席者が増加し、十二月の「南柯」創刊へと発展していったのである。

⑵　「南柯」の創刊

「南柯」は大正二年（一九一三）十二月、鳴雪を会長に請い、松沢雪松、小倉沖外、吉田兀愚、牧野銀杏庵、畑中小庵、森野北鳴子が参集して創刊した俳誌である。この創刊のメンバーについては、武田鶯塘が「南柯」第十四巻第四号（大正十五年四月）「故会長鳴雪先生を偲びまつりて」の文中で述べている。また、「南柯」では主宰とはいわず、主幹と呼称していたようだ。鶯塘は鳴雪の懇請により大正六年七月頃に主幹となった、と同文中で述べている。

これまで「南柯」については次の『俳文学大辞典』（角川書店）にあるように鳴雪が主宰した、とするのが通説であるが、厳密にいえば請われて会長に就いたといえるだろう。

南柯なんか　俳誌。大正二年（一九一三）・一二、東京で創刊。月刊、昭和五六年（一九八一）から隔月刊。主宰内藤鳴雪。師系は正岡子規。「一七音は骨格であり、季題は米の飯である」を主唱する。誌名は、鳴雪が「なんかやろう」と発言したことによる。主宰は、武田鶯塘・渡辺志豊・平田捨穂・秋山未踏と継承。途中一時休刊。平成六年

（一九九四）四月号で通巻二七七号。　（阿部誠文）（『俳文学大辞典』）

なお、「南柯」の創刊号など初期の俳誌が残っていず、調査が難航しているが、昭和九年十月発行の『俳句講座』「俳壇現勢篇」の「南柯」の項に創刊当時の幹部名が記載されているので次に示す。

会長に内藤鳴雪翁、賛助に巌谷小波・武田鶯塘の二家。幹部に、牧野銀杏庵・松沢雪松・吉田兀愚・小倉沖外・森野北鳴子・畑中小庵・浅野無腸子・渡辺壺桐・本多夏彦・北川北陸の諸氏。

また、同書の「南柯」の「目標並に主張」の欄では、「主張は左の鳴雪翁の宣言を踏習す」として、次の文を掲げ「南柯」のモットーとしている。

（前略）畢竟自然を主として自然美を歌ふは古今を一貫したる俳道であつて、剪劣僕の如きもそれに背くまいと企てつゝあるのである。されば古往今来俳道は此外にない。十七字詩形の能事は此範囲内に於て尽されるのである。若しも此範囲外を歌はんとするものは、サツサと十七字詩形を捨てゝ、他の多大なる字数の詩形をとるがよい。唯此十七字詩形を守らんとするものはそれに適したる古今一貫の俳道に遵ふ外はない。而して是こそ俳道の要訣で、又我南柯の主義である。

この鳴雪の宣言は、俳句は十七音字の定型を守ることを第一にして自然美を詠む、という俳句の基本を述べたものである。宣言の全文が掲載されていないため、正確な比較はできないが、明治二十七年七月三日の新聞「小日本」紙上の「老梅居漫筆」で「俳句は十七字の小説なり」と述べて以来、鳴雪の「俳句は十七字」という考えは一貫しているといえる。

⑶　「南柯」の俳句

「南柯」にはどの様な俳句が掲載されているのか、見てゆくこととする。

大正七年二月五日発行の初春号の「南柯」には、「午の春」と題して、会長鳴雪・主幹鶯

塘・賛助小波、亜浪の四名の俳句が掲げられているので、各人三句ずつ次に示す。

午の春

浜に置く船にも松の飾かな　　巖谷小波
初凪や松の隙なる海の色
初富士をふりさけ三保の浦端かな

氷上の小雪掻き消ゆ初雀　　臼田亜浪
飾り馬繋ぐ厩口御降れり
芋大根室替へもしつ事始

うつし世のうつゝに我も明けの春　　武田鶯塘
三和土踏めば靴底に凍響きけり
鉢の氷どさと投げ出す日南かな

初東風や湖を越え来て吾顔に　　内藤鳴雪
春場所は神も降りませ荒御魂
寒梅や断食堂に好き男

どの句も穏当で調べもよい。「南柯」のモットーに叶っているといえるだろう。ここで簡単に鶯塘、小波、亜浪三氏の略歴と鳴雪との関わりを述べておく。

鶯塘は明治四年十月五日、東京生まれ。俳句は秋声会に属した。鶯塘が鳴雪に初めて会ったのは二十八年本郷真砂町の常盤会寄宿舎の役宅であった、と鶯塘は述懐している。また、「中外商業新報」の社会部長時代、同紙に俳句欄を新設するにあたり社長から鳴雪への選者依頼の要請をうけ、その仲介をつとめたりもしている。「文芸倶楽部」「毎日新聞」の俳句選など担当し、「南柯」創刊に加わった。

小波は明治三年六月六日、東京生まれ。尾崎紅葉と硯友社を興した児童文学者であり小説家。俳句は紅葉らと紫吟社を興し、秋声会を結成したことによる。秋声会は二十九年十一月に「俳諧秋の声」を創刊し、小波は毎号俳句と文章を掲載している。この秋声会には子規や鳴雪と交友のあった伊藤松宇も属している。

亜浪は明治十二年二月一日、長野県小諸生まれ。俳句は少年期に月並俳句を作ったが、上京した後に正岡子規を知り日本派に属した。亜浪は大正四年三月に、大須賀乙字の援助を得て「石楠」を創刊していた為、「南柯」に関与していた期間は短い。

こうして「南柯」の幹部をみると、鳴雪と秋声会の繋がりが強いことがわかる。鳴雪が秋声会の連中との付き合いの多いことについて非難のあることを、増永徂春は次のように述べている。

翁は某会、某俳誌、某句会等月並臭紛々たる会合にも絶えず顔を出されて或時は宗匠連と膝を交へ或時は準宗匠格の秋声会連とも席を同じうして句作し講話迄もせられる、故に鳴雪翁も鳴雪翁ですなア…であると云ふのである。これは一応尤もの説のやうではあるが一面を見て他を顧る余裕のない人達の早計に失した詞であつて、決して鳴雪翁は老ひ込まれたのでもなければ、月並と共に作句して快を叫んで居られるのでもないのである。月並の俳人を善化せしめる事に努力して居られるのであると覧れば不思議はないのである、然かも斯うした事は現俳壇を通じて翁以外には手を染める丈の度量のある俳人が無いのである。

（増永徂春「鳴雪翁のことども」「新緑」第一巻第六号　大正六年六月十五日　一一頁）

この文は、鳴雪の派閥に囚われずに分け隔てなく付き合う態度、或いは、選者や講演の依頼があれば依頼者の立場を考えて何でも引き受けてしまうようなことについて、日本派内部から非難の声が上がっていることを述べているのであろう。徂春は、鳴雪がいろいろな会に出席するのは月並俳人を近代俳句へ導くためであり、そのような事が出来るには鳴雪をおいて他にいない、と述べているのである。

鳴雪の交友は「貧富貴賤を選まず、胸襟をひらゐてよく談じ、よく睦みたまゐぬ」と鶯塘は「南柯」（第十四巻第四号）で述べている。正しくこれが鳴雪の姿であったと思われる。

おわりに

大正二年七月、鳴雪は雪松と銀杏庵の依頼により「南柯吟社」の創設と俳誌「南柯」の創刊に助力した。鳴雪は運座会で毎回席上俳話をし、会が三回四回と重なる頃には出席者が八十人、九十人と増加し毎回賑わった。この賑わい振りから会員の作品発表のための機関誌の必要が生じ、俳誌「南柯」創刊へと繋がってゆく。鳴雪は「自然を主として自然美を歌ふ」と「十七字詩形を守る」ことを「南柯」のモットーに掲げ、このモットーは踏襲されていった。「南柯」の創刊からは鳴雪の分け隔てのない交友がみてとれる。

第二節　「南柯」での俳句活動

はじめに

現在、「南柯」の創刊号や初期三年間余りの「南柯」が見当たらないため、現存している「南柯」や回顧録などを参考に考えると、鳴雪の「南柯」に於ける主な活動は、選句、俳話、講義、の三つといえる。

大正二年十二月に創刊された俳誌「南柯」に、鳴雪は故人の句の選抜、俳句に関する寄稿をしたことが雪松の「鳴雪翁の一周忌に当たりて」（「南柯」第十五巻二月号）により推測できる。創刊の宣言については前節（一六二頁）で述べたので省略するが、鳴雪の創刊の宣言が「南柯」のモットーとして引き継がれている。創刊号は四頁の薄いものだったらしいが、号を追うごとに八頁十六頁となり、大正七年二月初春号は五十三頁となっている。

⑴　「南柯講義」

鳴雪の「南柯講義」が掲載され始めたのは大正四年一月号からと考えられる。大正七年二月号の「南柯講義」が三十七回とあり、大正六年四月号の「鳴雪翁古稀祝賀記念号」には「南柯講義」の掲載がないことなどから推察した。

「南柯講義」は大正十三年一月号（第十二巻第一号）の百回で終了し、三月号からは「鳴雪俳句論」となっている。百回に渉る「南柯講義」は故人の俳句評釈で、『猿蓑』や『五色墨』などから順次選抜し、俳句の歴史を踏まえつつ毎回一人の俳人の俳句評釈がなされている。因みに百回目に採りあげられている俳人は一茶である。

鳴雪の講義は当時の初学者を対象にして行われており、先ず人物紹介をした後に、その作者の採りあげた俳句の意味、用語解説、評価などを分かりやすく評釈しているのである。

例えば、三十七回に採りあげられている俳人は園女である。園女について簡単に述べると、園女は伊勢国山田の神官の家に寛文四（一六六四）生まれで、同地の医師で俳士である度会一有に嫁す。貞享五（一六八八）年、芭蕉が伊勢参宮した折に自宅に招き、蕉門に入門。その後、夫とともに大阪に移住し、元禄七（一六九四）年に来阪した芭蕉を再び自宅に招き、「白菊の目にたてゝ見る塵もなし」の芭蕉発句に園女が「紅葉に水をながす朝月」

と脇を付けて歌仙を巻く(『菊のちり』)。芭蕉はこの招きを受けた十日余り後に没している。夫の死後、園女は上京し基角に師事。眼科医を生業としながら俳諧を続け、やがて剃髪して智鏡と名乗り、享保十一（一七二六）年に六十三歳で没した。

鳴雪は「南柯講義」で園女について「此人は遅く入門したので七部集には句が見えぬが、翁が其家に招れた時、『白菊の目に立て見る塵もなし』と詠み其人物を称えたのに対して『紅葉に水を流す朝月』と付けた事などから、爾来世間によく知られて居る」と簡潔の述べた後、十五句の評釈をしているのであるが、次に鳴雪の評釈を四例示そう。

梅が香や慮外ながらも旅疲れ

高潔なる梅が香に対しては十分行儀正しくして居ねばならぬ筈だが、折柄の旅疲れで、其侭寝転ぶとか、足投げ出すとかする、これも余儀ない次第で、梅には慮外、即ち思はぬ無礼をするわい、と挨拶めかして云つたのである。此中七字は何処までも檀林あたりの口調だ。

鳴雪は先ず、梅の香というものは高潔だ、それ故行儀正しくなる、と花よりも香を愛でる梅の本意を語り、次に中七の「慮外ながらも」の具体例とその意味を解説し、最後に檀林風という評価をしているのである。この檀林風の特長の一つに宗因に始まる謡曲調というものがあるが、「慮外ながらも」が謡曲の口調である、と鳴雪は評価したのである。

初時雨阿仏の旅や葛籠馬

葛籠馬は所謂から尻で、それに乗つた様であらう。これは時代に構はぬ処に洒脱もあるし、又人物が十六夜日記の阿仏尼である丈に懐しみも深い。尤も口調はまだどつちかと云へば古くも思はれるが、趣味は確かに正風である。

鳴雪は、「葛籠馬」という難解語を「から尻」という当時の人に分かりやすい言葉で置き換えて説明している。葛籠馬は背中に四角な葛籠を取りつけ、人を乗せたり、また旅の荷物を運んだりする馬、はたご馬のこと。から尻は江戸時代の宿駅制度での駄賃馬で積荷量も駄賃も本馬の半分。本馬は幕府公用者や諸大名が使用する荷馬なので一般人はから尻を使用したのである。江戸時代を生きてきた鳴雪ならではの解説であろう。また、阿仏尼に懐かしみを覚えるというのにも鳴雪らしさが現れている。

そして、「時代に構わぬ処」とは、日本人であるならば古今を問わず同感できるところを指していると思われる。

鳴雪のいう「正風」は、言語遊戯がなく、句全体に漂う閑寂さのことで「蕉風」の意味が濃く、園女が蕉門となった影響を指摘しているのだろう。

凩やこぼれて昼の牛の声

此句は如何にも男勝りな強い句だ。こぼれてとは、凩が吹く昼中に、突然モーと叫んだ、それが空などから、こぼれ物でもしたやうだと云ふのである。形容の仕方も中々面白い。

この句については先ず、「凩や」と凩の堅い響きと切字による効果で強い表現となっているところや、牛という題材を男勝りという一語で解説している。つづいて、「こぼれて」とはどういうことかについても解説する。そして、最後に中々面白いと評価しているのである。

みどり子を頭巾で抱かん今朝の春

此人は晩年剃髪したと云ふから、頭巾は比丘尼頭巾であらう。従つて蕉門に入つた後の句に相違ないが、趣向の立て方が理屈に渉つて俗味を免れぬ。お婆アさんも段々と捻りが戻つたものか。

この句については先ず、「頭巾」から園女が晩年剃髪したことに触れ、芭蕉亡き後上京して其角に師事したことを思わせて園女の生涯の一端を読者に述べている。さらに、その身の上から頭巾は比丘尼頭巾であろうと、情景が浮かびやすいように解説しながら理屈の句と評価しているのである。軽妙でポイントをついた評である。千代女の俗味については、子規が『俳諧大要』で「朝顔に釣瓶取られてもらいひ水」の句を「もらひ水といふ趣向俗極まりて蛇足なり」と評したことも想起される。「お婆アさんも……」は鳴雪独特の諧謔の精神の表れで読者を楽しませているように思われる。

これら四例からも、鳴雪が各句の用語解説、俳句の着想点などを解説しながら俳句の歴史や俳句のあるべき姿、そして古人の俳句を世に伝えようとする態度をとっていることが明らかである。

⑵　「鳴雪俳句評釈」

「南柯講義」は大正十三年一月号（第十二巻第一号）の百回で終了し、同年三月号からは「鳴雪俳句論」を十八回連載している。大正十五年一月号（第十四巻一号）の第一回「鳴雪俳句評釈」が、「南柯」に於ける鳴雪最後の論評となった。表題には㈠の数字が入れられているとこらからすると、まだまだ続ける予定であったことが推察される。読者も楽しみにしていたことだろう。「鳴雪俳句評釈」は鳴雪の新年の句八句が自句自解なされている。鳴雪が最初に取り上げているのが人口に膾炙されている次の「元日や」の句である。

元日や一系の天子不二の山

此句は何時の頃であつたか、新年に当つて偶然出来たのだが、新年と改つた人の心と、万世一系の皇室と、千古美景を呈して居る不二の山とを連想して、こんな云ひ草をしたものである。だから最初は新年に当つて、文学の純一的趣味を表現したつもり

鳴雪は「万世一系の皇室と、千古美景を呈して居る不二の山とを連想」をして作り、純粋な文学的表現をしたつもりであったことを述べている。しかし、世間では次のような解釈が多いのである。

此の句は勿論翁の忠君愛国の国家主義から出たもので、会心の作と想像するのである。（宰洲　鳴雪翁の俳句閲歴及び逸話　二　大正十四年六月号）

明治の人の天皇観、国家観が、しみじみと感じられてくる。（畠中淳　『内藤鳴雪』松山子規会　昭和六十年）

鳴雪もこのあたりのことは承知していたようで、俳句は様々な観点から観察されるので一定の意見は述べないようにして居る、と述べて「皇室の下に立つ日本国民の感想」あるいは「我国唯一の名山をそれに付随せしめた」と評されることを肯っているようである。

なお、この俳句の制作年代はあまり知られていないが、村上霽月へ宛てた年賀状で明治二十八年の新年の作であることがわかっている。

⑶　鳴雪辞世の句

鳴雪の俳句は、「南柯」誌上に於いて南柯同人の「南柯吟」或いは「同人句抄」や「同人吟」という題のもとに毎号発表されている。例えば大正七年駘蕩号には、

古檜葉の日の温み知る戦ぎ哉　　鳴雪
シベリアの風を都の余寒かな

大正九年八月の第八巻八号には、

桐の花掃く小禿や寮の庭　　鳴雪
馬蠅のむつと群れ来て牧近し
欄に倚る人に新樹の雨しぶく

など、南柯同人の俳句欄をみれば鳴雪の句を知ることが出来るのである。

また、鳴雪の辞世句もこの「同人吟」に寄稿された作品となっている。鳴雪の辞世句については渡邊志豊が「鳴雪先生の最後の吟に就いて」と題して「南柯」に記しているので、少し長いが次に挙げることとする。

私は大正十四年十一月三十日夜先生の枕頭に侍し、先生の口授によつて「鳴雪俳句評釈」の第一稿を筆記した其際新年号に掲載すべき先生の同人吟を御願ひしたのである。其夜は私の筆記を先生が閲せられる為め原稿をその侭御手元へ残して辞し、翌十二月一日先生より速達郵便を以て右原稿の御送付を受けたが、同人吟に就ては何等の御書添がなかつた。それは先生が予て同人吟は直接印刷所の方へお廻し下さる例もあるので、私は強いて御催促は申し上げなかつた。然るに十二月二十一日脳溢血症を併発された際令息和行氏より南柯吟社宛にその旨の御報知と共に

南柯同人吟

病む身には昼もかゞまる蒲団かな　　鳴雪
只頼む湯婆一つの寒さかな
帰り華のそれより赤し造り花

の三句が認められてあつた。故に最後の吟としては湯婆の句のみならず、同時に三句

を詠ぜられてゐるのである（作句の順序は論せず）。（略）右三句は先生が脳溢血症を併発せられたる際、枕頭に句箋が散つて居たので、これを和行氏が態々書画に書添へられたものなのである。（略）其当時を知れる私は後世に誤り伝ふることなきやう俳壇の義務としてこの一文を草したのである。

（渡邊志豊「南柯」第十五巻二号　昭和二年二月）

鳴雪は大正十五年二月二十日、東京都麻布区笄町の自宅で亡くなるが、この文からも鳴雪は死の直前まで「鳴雪俳句評釈」の執筆と「同人吟」への俳句掲載に精魂を注いでいたことがわかる。「南柯」は鳴雪にとって俳論を掲げ俳句を発表する上で、大切な俳誌であったといえる。

おわりに

鳴雪が「南柯」で力をつくした活動は「南柯講義」であったといえる。鳴雪は、芭蕉を筆頭に古人の俳句作品をその作者の略歴とともに紹介し、評釈を行ったものである。評釈は用語解説、時代背景、作者の着想点などを分かりやすい言葉で述べ、時にはユーモアも交えて俳句の評価をくだした俳句指南といえる。

鳴雪は新しい俳句を否定したわけではない。ただ、芭蕉や蕪村、あるいはもっと古い『万葉集』や『古今集』などの和歌というような日本の歴史を知り、その古人の扱った題材にも共感できるようにしなければならない、という学ぶ姿勢の必要性を説いているのである。このことは現代でもいえることであろう。

なお、鳴雪がどのようなテキスト（版本や活字本）を用いて「南柯講義」をしたのか関心のあるところであるが、まだ資料が揃わず今後の課題とする。

内藤鳴雪には句集や選集の他にも多くの著書がある。例えば、『芭蕉俳句評釈』（明治三十七年　大学館）や『蕪村七部集俳句評釈』（明治三十九年　大学館）や『俳句評釈』大正十四年　忠誠堂）などのように俳諧史を踏まえながら俳句評釈をした書。あるいは、『俳句独習』（明治三十六年　大学館）や『俳句作法』（明治四十二年　博文館）や『俳句はいかに作りいかに味ふか』（大正九年　アルス）などのように初心者向けの俳句指導をした書。他に、俳論・俳話・俳句問答・句集講義など多岐に渉る。

鳴雪が力を尽くしたことの一つは初心者の俳句指導であるが、先に挙げた『俳句独習』

は、明治三十六年十二月が初版発行、三十七年三月に再版、十一月に三版、三十八年三月に四版、五月に五版、十一月に六版、と続々と出版され、大正十五年三月の鳴雪没直後には十七版まで版が重ねられている。出版部数は不明であるが、いかに多くの読者がいたかということは想像に難くない。

結論

以上のように、本論では内藤鳴雪が正岡子規とともに歩んだ俳句活動について考察した。

第一部第一章では、鳴雪や子規の母体ともいえる常盤会寄宿舎での活動にスポットをあて、寄宿舎監督と舎生という枠をこえた文学的交わりを述べた。年齢差を越えた交友も鳴雪の謙譲の精神と人柄にもよるだろう。また、新聞「日本」、新聞「小日本」における鳴雪が子規とともに俳句革新運動の一翼を担っていたことを指摘した。

第二章では、鳴雪が『猿蓑』所収の句、特に凡兆の句が純客観的であることに気づき、凡兆の句を学ぶことによって俳句実作ににおいて格段の進歩をしたことについて述べた。さらに、鳴雪が凡兆の客観句を称揚していた時期、子規はむしろ芭蕉の寂に関心をよせており、客観句にたいして鳴雪の方が早く取り組んでいたことを指摘した。また、明治時代に『猿蓑』の出版物の少ない要因として、凡兆が蕉門十哲に入っていないこと、弟子がいないこと等を指摘した。

なお、明治時代の唯一の『猿蓑』の全句の評釈をした碧梧桐の『俳句評釈』の批評をした鳴雪と子規の比較しながら、鳴雪独自の視点を明らかにした。

第三章では、鳴雪が当時入手困難だった『蕪村句集』の探索をしたその経緯を、村上霽月宛て鳴雪書簡を中心に検討した。霽月宛書簡は一般公開されておらず、今回、故村上剛氏と中野匡子氏に資料を提供していただいた。その結果、先行研究でまだ解明されていない部分、特に書簡に現れている明治二十六年代の鳴雪の蕪村観を考察できた。

第二部第一章では、長老の鳴雪と若い虚子とを中心に新旧交代の兆候を論じた。鳴雪はハイカラで西洋好きの一面はあるが、生れ育ったのが江戸時代で学問も漢籍や日本古典が中心だったため強く東洋趣味を貫いた。そこから生じる感性の違いは埋める術はなさそうだ。鳴雪もそれでよしとしているところがある。文部省に奉職して明治の新しい教育制度改革に尽力してきた鳴雪は、皮肉にも新しい大学制度での大学出の官僚にコンプレックスを感じることもあったようだ。鳴雪自身も英語ができなかったので困ったと、述懐してい

る。

第二章では、松山版「ほとゝぎす」と東遷後「ホトトギス」における鳴雪の活動を考察した。特に、東遷に伴う碧梧桐の疎外感を癒す配慮に為人が表れている。

第三章では、「蕪村句集講義」の中で鳴雪が果たした役割について考察した。「蕪村句集講義は、鳴雪、子規・虚子・碧梧桐らが原則毎月一回『蕪村句集』の一丁ずつ全句を輪講・合評し、その記録を「ホトトギス」に掲載していったのである。冬の部から始め、終われば直ちに単行本化され、読者待望に一書となったようである。回を重ねるごとに充実していったように見受けられる。この輪講の中で行なわれる蕪村句の解釈には、江戸時代を体験してきた鳴雪の発言は注目される。また、輪講の記録者の文体にも注目し、虚子の言文一致体への動向を「三人冗語」と比較しながら考察した。

第三部第一章では、これまであまり言及されてこなかった鳴雪と俳句雑誌について検討した。子規没後の鳴雪の俳句活動は主に雑誌に在ったように見受けられる。

まず、俳誌「文庫」から検討した。「文庫」の俳句欄で行う鳴雪の選評はユーモアがあり、漢詩、口語、雅語、俚語を自由につかいながら投句者に向けるあたたさから人気を博した。それらの選句評は単行本となって数冊刊行されているほどである。初心者にやさしい選句といえる。「文庫」が終刊後は「千代田」に俳句欄を移し、「千代田」でも選句や俳論俳話を掲載して活躍した。なお、本論では取り上げていないが、大正九年四月一日創刊の「俳諧文学」でも創刊号から「鳴雪自叙伝」「俳句に対する私の意見」をそれぞれ二十回、第二十号大正十一年一月一日まで連載していることを付け加えておく。

第二章では、「俳諧草紙」の創刊号と、第一巻第六号に掲載された虚子の「談理と句作の空間充填策」をとりあげ、当時の俳句評のあり方、又それにたいする虚子の批評について考察した。

第三章では、鳴雪が「南柯」で力をつくした活動について論じた。主なものは「南柯講義」である。鳴雪は、芭蕉を筆頭に古人の俳句評釈を行った。評釈は用語解説、時代背景、作者の着想点などを分かりやすい言葉で述べて俳句の評価をくだした俳句指南といえる。新しい俳句の否定はせず、日本の歴史を知り、その古人の扱った題材にも共感できるようにしなければならない、という学ぶ姿勢の必要性を説いた。

以上、従来の研究史を踏まえながら、子規の活動を視野に入れつつ、鳴雪の総合的な俳句活動を論じた。本論により鳴雪研究を拡大するだけでなく、従来の研究前進させた。

老梅居漫筆　鳴雪老人　鳴雪

①（新聞「小日本」明治二十七年六月二十七日）

一和歌は古言に限り詩は漢語に限る俳句は獨り二二の者を兼ね用ひ更に俚語に及ぶ其汎くして自在な廣くして

る所以なり然るに後世の俳家は概ね俳句を俚語人は

に局し徒に自ら窮屈を取る笑ふべきなり

一俳句の高致妙處は言銓を絶し理屈を離る唯情にて

感ずべし智の能く解する所にあらず然るに後世

の俳家は專ら智を以て俳句を解せんと欲し理屈人は概ね

に拘々す愈々出でゝ愈々浅薄卑汚なる所以なり

一或人曰く俳句は平民的のものなり故に多数の人何人

の解し得る所のものたらざるべからずと余は曰も

く平民的のもの亦俳句の一部なり然れども尚此

外に学者的大人君子的のものあり俳句の上品な上乗

るものは特に茲に在て存すと

一俳句は幽玄なるものあり壮大なるものあり繊巧　（この項「ほとゝぎす」なし）

なるものあり而して繊巧なるものは俗に流れ易し故に唯上手の人にして之を能くすべし

老梅居漫筆　鳴雪老人

②（新聞「小日本」明治二十七年七月一日）

一俳句は景色を叙するものあり人事を叙するものあり
而して人事を叙するものは理屈に落ち俗に流れ易し
唯老手の人にして之を能くす
一景色を叙するものはたとひ好句とならざるも無味と
平凡とに帰するのみ卑俗と嫌やみとは此種の句に少なし

一幽玄と壮大とは之を学びて或は能くせざるも只　（この項「ほとゝぎす」なし）

無味平板に帰して止むのみ卑俗と嫌みとは免るることを得ん

一俳諧の名あるが故に或る人は今も俳句を以て多　或人

少滑稽の意味を具へざるべからざるものと為し

強て元禄以前の小天地に閉ぢ籠らんとせり此輩　閉籠

の如きは「いわしや」の医療器械を売り「あまざ　「」なし

けや」の呉服商たることを説くも到底信せざる

ものなるべし呵々　べし

一滑稽も俳句の一材料たるは勿論なり殊に古風を

帯びたる滑稽は雅趣多きものなり然れども一歩

を失すれば亦幇間落語者流の語となる戒めざる

べからず

一戀も雅趣の一材料なり而して俗に陥るの恐れは

滑稽より少し　少なし

老梅居漫筆　鳴雪老人

③（新聞「小日本」明治二十七年七月二日）

一後世の俳家は本題の外他の事物を詠み込むもの　よみ込む

を謂ふて道具揃へとなし之を嫌へり然れども道　謂て

具揃へをなさゞる時は詞多からざるを得ず詞多　具揃

きは俗に流れ易し寧ろ道具揃への此患少なきに　道具揃

如かざるなり

一後世の俳家は概ね詞の敏捷にして人事の穿ちを　気の利きて

為すを務む俳句果して此の如きに止まるものな

らば川柳と何ぞ擇ばん否川柳寧ろ俳句に勝れり

と云はざるを得ず口惜しいかな

一或人は俳句に虚構あるを咎め必ず実況事実のみ　実境

を詠せしめんとせり是れ亦拘泥の甚しきものな

り余を以て之を観れば宇宙の変化人生の諸況一

として俳句に入るべからざるものなし其興至る

に及びては天外に翺翔すべし地下に蟄伏すべし　及ては

日月を懐にすべし雲夢八九を呑吐すべし或は英

雄となり或は堅子となり或は富人となり或は貧

者となり男となり女となり老となり幼となり佛

菩薩となり悪鬼羅刹となる皆不可なる所なし何

ぞ復た其虚と実とを問はんや是れ俳句の大たる所以なり俳人の洒落なる所以なり

老梅居漫筆　　鳴雪老人

④（新聞「小日本」明治二十七年七月三日）

一俳句は十七字の小説なり

一詞簡なるものは意味長し俳句は詩歌に比するに最も簡なり故に其意味尤も長し

一諺に云ふ夜目遠目笠の内と蓋し美は隠約の中に存し情は未了の間に深し俳句の好きものを作らんと欲せば先づ此訣に熟すべきなり

一旨玄にして詞優に余韻限りなきものは凡兆の句なり猿蓑集を繙き細かに諷吟する者は徐く之を知らん

一倔強の力と洒脱の気象とを以て縦横自在を逞ふ

最　其意味長し

蓋　達せざるべからず

細に

自ら

するものは蕪村の句なり天明の元禄に光ある此人の功多しとす

一蕪村は好んで行春、短夜、立秋、秋暮等の無形　　好て行春短夜立秋々暮

なる大題目を咏じ皆妙を極む又歴史の俤を写すの句多し是れ俳眼高きものに非ざれば能はざる所なり

老梅居漫筆　　鳴雪老人

⑤（新聞「小日本」明治二十七年七月五日）

一芭蕉翁曾て云ふ発句は門人にも巧者ありと而しなし）　　（この項「ほとゝぎす」

て芭蕉却て門人に劣ること多し

春の夜や籠り人ゆかし堂の隅　　翁

春の夜は誰か初瀬の堂ごもり　　曾良

其優劣如何ぞや此等は最も著きものなり

一巧を弄したる句は余韻少し余韻多き句は極めて　　極て

淡泊真率なるものなり譬へば能と芝居との如し

能は仕打簡略にして芝居は仕打煩雑緻密なり而して余韻の多きは芝居に在ずして能に在るなり　在らずして

一芝居中に於ても團十郎の技芸の如きは身を動かすこと少なくして余韻は他の優より殊に多し是れ以て俳句を作るの標準とすべし　特になすべし

老梅居漫筆　鳴雪老人

⑥（新聞「小日本」明治二十七年七月八日）

一人をして面白いと呼び成程と感ぜしむるの句は未だ好句と云ふべからず必ず之に風雅の分子を加へて始めて好句ともなるなり然れども元来面白いと呼び成程と感ずるものには概ね俗気を含む之を好句に作るは極めて難きものなり　風雅分子　極て

一或人俳句の字数少なきを患ふ余曰く俳句の尚ぶなし）　（この項「ほとゝぎす」

所は簡勁に在り最も冗語と漫調とを嫌ふ此旨を以て吟ずれば十七字猶多きに困むことあり何ぞ少なきを患へんやと

一世に点取俳句連あり昨日は甲の嗜好を窺ひ今日は乙の口調に擬し丙に丁に苟も其意に中り得意の多からん事を務め以て相競争す此輩の如きは一年三百六十日唯他家の俳句を作るを知りて未だ自家の俳句を作るを知らざるものなり何ぞ自ら居ることの卑きや

（この項「ほとゝぎす」なし）

老梅居漫筆　　鳴雪老人

⑦（新聞「小日本」明治二十七年七月十三日）（この回の文は「ほとゝぎす」なし）

一然れども点取の事一概に悪しからず花晨月夕時に俳社を会し各其好尚に投じて以て相戯る亦風流の楽事なり畢竟余の点取を卑むは終年此一事

を以て俳句を作るの目的となすものを卑むのみ

一摹倣は又修行上に益あり且つ摹倣する所其人を得ば終身茲に従事すと雖も可なり今人あり芭蕉去来凡兆等の嗜好を窺ひ蕪村曉臺蘭更等の口調に擬し以て相競争せんか余復た間然する所なし

一芭蕉翁は澹泊無我の人なり然れども時としては己が名譽の爲めに情を動かすことあり夫の蒜のまかきの鳶の句に関する自讃の如き清瀧の句と園女亭の句とに関して末期去来に語るが如きもの一にして足らず蓋し翁も亦人なり身体乾枯すと雖も猶一錢の血あれば其全く名譽心を絶たざるも怪むに足らざるなり殊に鼻動き肩羽うつと云ひ恰も子供の自慢するが如く無邪気なる處又吾執着すと明言して自ら憚らざる處は即ち天真の爛漫たるを見る是れ翁の翁たる所以歟

老梅居漫筆　　鳴雪老人

⑧（新聞「日本」明治二十七年七月十六日）（この回の文は「ほとゝぎす」なし）

一質文ち勝つものは阿羅野なり文質に勝つものは炭俵なり文質彬々たるものは猿簑なり

一文に勝てば巧に流れ俗に落つ是れ正風の炭俵に衰ふる所以なり

一猿簑の撰者に凡兆あり炭俵の撰者の野坡あり此の二子の俳句を比較すれば亦二集雅俗の分かるゝ所以を知るに足るべし

猿　簑　　凡兆の句

しぐるゝや黒木つむ家の窓明り
禪寺の松の落葉や神無月
花散るや伽藍の樞おとし行く
ある僧の嫌ひし花の都かな
初汐や鳴門の浪の飛脚舟
物の音ひとり倒るゝ案山子かな
百舌鳥啼くや入日さしこむ女松原
稲かああつく母に出迎ふうなゐかな

炭　俵　　野坡の句

長松が親の名で來る御慶かな
猫の戀初手から啼て哀れなり
はき掃除してから椿散りにけり
衣かへ十日早くば花ざかり
年の暮互ひにこすき錢づかひ
餅つきや元服さする草履取
初雪に顔で隣を教へけり
行く雲を寝て居て見るや夏座敷

一蕪村曉臺の二子炭俵以下俚俗に落ちたるを概し共
に正風の復古を企てたること其徒の書に見ゆ天明中
興の業實に偶然に非ざるなり然るに二子の没後復た
之に繼ぐものなく天下滔々として再び俗渦に巻き
らる悲きかな
一甲俳者曰く吾れ元禄を師とすと乙俳者曰く吾も亦元
禄を師とすと而して一は雅句を吐き一は俗句を吐く
余初め甚だ之に惑hり既にして悟ることあり蓋し甲
の師とする所は猿簑にして乙の師とする所は炭俵な
りき

参考文献

テキスト

正岡子規　『子規全集　第四巻』　講談社　昭和五十年十一月十八日
正岡子規　『子規全集　第十四巻』　講談社　昭和五十一年一月二十日
正岡子規　『子規全集　第十五巻』　講談社　昭和五十二年七月十八日

単行本

秋尾　敏　『子規の近代』　新曜社　平成十一年七月三十日
浅岡邦雄　『小日本と正岡子規』　大空社　平成六年一月二十三日
浅野　信　『切字の研究』　桜楓社　昭和三十七年五月二十五日
麻生義輝編　『西周哲学著作集』　岩波書店　昭和八年十月二十日
石川忠久　『日本人の漢詩』大修館書店　平成十五年三月二十日
市川一男　『近代俳句のあけぼの　第一部・第二部』　三元社　昭和五十年四月二十日
植手通有編　『陸羯南集』　筑摩書房　昭和六十二年三月三十日
江藤　淳　『リアリズムの源流』　河出書房新社　平成元年四月十日
尾形仂・森田蘭校注　『蕪村全集　第一巻』　講談社　平成四年五月二十五日
尾形仂・丸山一彦　『蕪村句集　第三巻』講談社　平成四年十二月十日
岡野敬胤　『俳諧風聞記』　白鳩社　明治三十五年十一月二十四日
沖森卓也・山本真吾編　『文章と文体』　朝倉書店　平成二十六年五月十五日

亀井俊介編　『近代日本の翻訳文化』　中央公論社　平成六年一月二十五日
柄谷行人　『日本近代文学の起源』　講談社　昭和五十五年八月二十一日
河東碧梧桐　『俳句評釈』　金尾文淵堂　明治三十二年五月十七日
河東碧梧桐編　『蕪村新十一部集』春秋社　昭和四年一月二十日
河東碧梧桐　『子規言行録』　天泉社　昭和十二年一月二十五日
河東碧梧桐　『子規の回想』昭南書房　昭和十九年六月十日
河東碧梧桐　『子規の回想』沖積舎　平成四年十一月三十日　復刻版
木坂基　『近代文章の成立に関する基礎的研究』　風間書房　昭和五一年一月一五日
北住敏夫　『写生説の研究』　角川書店　昭和二十八年三月三十日
北住敏夫　『写生俳句及び写生文の研究』　明治書院　昭和四十八年十二月十日
久保田正文　『正岡子規・その文学』　講談社　昭和五十四年　八月二十日
古島一雄　『一老政治家の回想』　中央公論社　昭和二十六年五月五日
小谷保太郎　『子規言行録』　吉川弘文館　明治三十五年十一月十五日
小西甚一　『俳句の世界』　講談社　平成七年一月十日
小室善弘　『俳人凡兆の研究』　有精堂　平成五年十二月五日
小森陽一編　『近代文学の成立』　有精堂　昭和六十一年年十二月十五日
佐藤勝明校注　『蕪村句集講義1』平成二十一年十二月十日　平凡社
佐藤勝明校注　『蕪村句集講義2』平成二十二年一月十一日　平凡社
佐藤勝明校注　『蕪村句集講義3』平成二十二年二月十日　平凡社
佐藤能丸　『明治ナショナリズムの研究』　平成十年十一月二十五日
佐藤久直　『言葉の文化と文字の文化』　東京図書出版　平成二十五年四月十二日
寒川鼠骨　『正岡子規の世界』　青蛙房　昭和三十一年十月十五日
柴田宵曲　『柴田宵曲全集　第三巻』　小澤書店　平成四年四月二十日
柴田奈美　『正岡子規と俳句分類』　思文閣　平成十三年十二月三十日
渋沢敬三編　『明治文化史』　原書房　昭和五十四年六月三十日
鈴木健二　『ナショナリズムとメディア』　岩波書店　平成九年四月十八日
関肇　『新聞小説の時代』　新曜社　平成十九年十二月十四日
高木蒼梧　『評釈凡兆俳句全集』　資文堂書店　大正十五年九月十五日
高浜虚子　『俳句入門』　内外出版協会　明治三十一年四月二十日
高浜虚子編　『蕪村句集講義　冬之部』　俳書堂・文淵堂　明治三十三年五月十五日

高浜虚子編　『蕪村句集講義　春之部』　俳書堂　明治三十三年九月三十日
高浜虚子編　『蕪村句集講義　夏之部』　俳書堂・文淵堂　明治三十五年一月二十五日
高浜虚子編　『蕪村句集講義　秋之部』　俳書堂　明治三十六年六月十日
高浜虚子編　『月並研究』　実業之日本社　大正六年十一月二十日
高浜虚子　『年代順　虚子俳句全集』第一巻　昭和十五年二月二十八日
「なじみ集」翻刻版編集会・松山市立子規記念博物館　『「なじみ集」翻刻版』松山市立子規記念博物館　平成二十四年三月三十一日
内藤鳴雪　『鳴雪俳話』　博文館　明治四十年十一月二十八日
内藤鳴雪　『俳句のちか道』　広文堂書店　大正五年六月十日
内藤鳴雪　『鳴雪自叙伝』(復刻版)愛媛文学叢書　青葉図書　昭和五十一年十二月二十日
中村不折　『画道一斑』博文館　明治三十九年十月二十二日
二神將　『子規の文友柳原極堂の生涯』　松山子規会　平成九年二月二十日
畠中淳　『内藤鳴雪』　松山子規会　昭和六十年十月十九日
早川光三郎　『蒙求　上』　明治書院　昭和四十八年八月二十五日
早川光三郎　『蒙求　下』　明治書院　昭和四十八年十月十二日
平岡敏夫　『明治文学史の周辺』　有精堂　昭和五十一年十一月十日
復本一郎　『正岡子規・革新の日々』　本阿弥書店　平成十四年六月二十日
復本一郎　『子規とその時代』　三省堂　平成二十四年七月十五日
藤田真一　『蕪村』岩波新書　平成十二年十二月二十日
藤田真一編注　『蕪村文集』　岩波文庫　平成二十八年十二月十六日
前田　愛　『幻景の明治』　朝日新聞社　昭和五十三年十一月二十日
前田　愛　『文学テクスト入門』　筑摩書房　昭和六十三年三月三十日
松井貴子　『写生の変容』　明治書院　平成十四年二月二十五日
松井利彦　「正岡子規」『日本近代文学大系』第十六巻　角川書店　昭和四十七年十二月二十日
松井利彦　『近代俳論史』　桜楓社　昭和五十年八月二十五日
松井利彦　『正岡子規の研究　上・下』　明治書院　昭和五十一年五月二十五日・昭和五十一年六月二十五日
松井利彦　『士魂の文学・正岡子規』　新典社　昭和六十一年四月十日
松田宏一郎　『陸羯南』　ミネルヴァ書房　平成二十年十一月十日

水尾比呂志　『日本美術史』　筑摩書房　昭和四十五年七月十四日
三森伊四郎　『蕪村句文集』明治三十年三月十六日校訂再刊　明倫社
宮路裕他編　『講座日本語学８』昭和五十七年二月十五日　明治書院
三好行雄・竹盛天雄編　『近代文学２』　有斐閣　昭和五十二年九月二十日
室岡和子　『子規文学論の研究』　桜楓社　昭和五十三年十一月三十日
柳田國男　『紀行文集』全　「解題」　博文館　昭和五年十月十五日
柳原極堂　『友人子規』　博文堂　昭和十八年二月十五日
柳原正春　『父極堂』　父極堂頒布会　昭和五十八年九月二十日
山下一海　『俳句で読む正岡子規の生涯』　永田書房　平成四年三月二十日
山田有策　「鴎外と口語散文」『現代詩手帳』　思潮社　昭和五十一年二月一日
山本正秀　『近代文体発生の史的研究』　岩波書店　昭和四十年七月三十一日
山本正秀編　『日本語１０文体』　岩波書店　昭和五十二年九月二十八日
山本正秀編　『近代文体形成資料集成』　桜風社　昭和五十三年三月三十一日
山本正秀　『言文一致の歴史論考　続篇』　桜風社　昭和五十六年二月二十八日
和漢比較文学会編　『俳諧と漢文学１６』汲古書院　平成六年五月三十日
和田克司　『子規の一生』子規選集　第十四巻　増進会出版社
和田茂樹　『正岡子規　資料と研究　４』　子規研究会　昭和四十九年三月十九日
和田茂樹　『子規と周辺の人々』　愛媛文化双書刊行会　昭和五十八年八月十九日
和田茂樹　『子規の素顔』　愛媛県文化振興財団　平成十年三月三十一日

雑誌・新聞・その他

青木亮人　「三森幹雄と正岡子規の『眼』」「日本近代文学」　日本近代文学会　平成二十年五月十五日
池澤一郎　「子規と芭蕉・蕪村」「国文学　解釈と鑑賞」至文堂　平成十三年十二月号
宇佐美圭司　『『山水画』に絶望を見る」「現代思想」　青土社　昭和五十二年五月号
桶谷秀昭　「正岡子規と陸羯南」「国文学　解釈と教材の研究」學燈社　昭和六十一年十月号
小倉斉　「森鴎外の作品批評」『淑徳国文』平成三年二月二十五日
尾崎紅葉校訂　『俳諧類題句集』前編　博文館　明治三十三年十二月二十八日
尾崎紅葉校訂　『俳諧類題句集』後編　博文館　明治三十四年三月三日

亀田小蛄　「新聞『日本』をめぐる日本派」「俳句研究」俳句研究社　昭和三十五年五月号
河北倫明　『日本美術入門』　社会思想社　昭和四十一年三月三十日
倉橋羊村　「正岡子規」「俳句」角川書店　平成四年七月号・十月号
佐々木丞平　「蕪村の画業」「国文学　解釈と教材の研究」　學燈社　平成八年十二月号
杉橋陽一　「子規の写生俳句とマスメディア」　「国文学　解釈と教材の研究」　學燈社
　平成十三年七月号
匠秀夫　「子規『写生論』の源流」下村爲山、中村不折との交渉について　「国文学」
　學燈社　昭和六十一年十月号
田部和季　「正岡子規における連句の位置―「変化」に対する評価を軸に―「連歌俳諧研
　究」第百三十号　俳文学会　平成二十八年三月十五日
橋本直　「正岡子規と絵」「国文学　解釈と教材の研究」　學燈社　平成十三年年十二月号
早川聞多　「絵画から俳諧へ」「国文学　解釈と教材の研究」　學燈社　平成八年十二月号
平井敏夫　「子規と自由民権運動」「国文学　解釈と教材の研究」　學燈社　昭和六十一年
　十月号
松井貴子　「子規と写生画と中村不折」「国文学　解釈と教材の研究」　學燈社　平成十六
　年三月号
松井幸子　「内藤鳴雪の半生」「俳句文学館紀要　平成二年
渡辺水巴　「内藤鳴雪の追憶」『俳句講座　現代結社編』第八巻　改造社　昭和七年十二月
　二十日
新聞「日本」復刻版第一巻　明治二十二年二月一一日～四月　ゆまに書房　昭和六十三年
　三月十日
新聞「日本」復刻版　第十二巻　明治二十五年九月～十二月　ゆまに書房　昭和六十三年
　三月十日
新聞「日本」復刻版　第十三巻　明治二六年一月～四月　ゆまに書房　昭和六十三年十一
　月十日
新聞「日本」復刻版　第十七巻　明治二十七年七月～九月　ゆまに書房　昭和六十三年十
　一月十日
新聞「小日本」　復刻版　上巻（第一号～第六十八号）　大空社　平成六年一月二十三日
新聞「小日本」　復刻版　下巻（第六九号～一三〇号）　大空社　平成六年一月二十三日
『子規全集』　第一巻～第二十二巻　別巻一～別巻三　講談社　昭和五十年十二月十八日

～昭和五十三年十月三十日

『芭蕉句集』「新潮日本古典集成」　校注今栄蔵　新潮社　昭和五十七年六月十日

『與謝蕪村集』「新潮日本古典集成」　校注清水孝之　新潮社　昭和五十七年七月三十日

『陸羯南全集』第二巻　みすず書房　昭和四十四年四月二十八日

『陸羯南全集』第四巻　みすず書房　昭和四十五年三月二十日

『俳諧歳時記』　夏の部　改造社　昭和八年七月三日

『俳諧歳時記』　冬の部　改造社　昭和八年十月二十二日

『俳諧歳時記』　春の部　改造社　昭和八年十一月二十日

『俳諧歳時記』　新年の部　改造社　昭和八年十二月二十日

『俳諧歳時記』　秋の部　改造社　昭和十二年八月二十七日

『図説俳句大歳時記』秋　角川書店　昭和三十年十二月三十日

『図説俳句大歳時記』春　角川書店　昭和三十九年四月二十日

『図説俳句大歳時記』夏　角川書店　昭和三十九年八月二十日

『図説俳句大歳時記』冬　角川書店昭和四十年六月十五日

『図説俳句大歳時記』新年　角川書店　昭和四十年十二月二十五日

「ホトトギス」明治三十年第二号　正岡子規「俳諧反故籠」

「ホトトギス」明治三十一年十二月号　正岡子規「文学美術評論」

「ホトトギス」明治三十二年三月号　五百木飄亭「夜長の欠び」

「ホトトギス」明治三十五年十二月号　内藤鳴雪「追懐雑記」

「ホトトギス」明治四十一年九月号　中村不折「子規追想」

「ホトトギス」大正十四年四月号・五月号　鳴雪・瓢亭・肋骨・碧梧桐・鼠骨・虚子・宰州（二のみ）「鳴雪翁の俳句閲歴及び逸話（一）・（二）」

「ホトトギス」大正十四年八月号　楽天・三允・浅茅・楽堂・虚子「鳴雪翁の俳句閲歴及び逸話（三）」

俳誌

ホトトギス　南柯　文庫　俳諧草紙　アカネ　枯野　俳諧文学　懸葵　俳星

初冠　卯杖　鶏頭　甲矢　千代田　俳諧評論　日本人　めさまし草　青年之友

新緑

子規選集句数一覧表　　表1

	『案山子集』明治25年	『俳句二葉集』春の部 明治27年	『獺祭書屋俳話』増補再版選句集 明治27年	「なじみ集」明治28年	「承露盤」明治28年	「承露盤」明治29年	「承露盤」明治30年	「承露盤」明治31年	『新俳句』明治31年	「承露盤」明治32年	「承露盤」明治33年
正岡子規	461句(23.7%)	32句(7.4%)	56句(11.2%)	31句(0.7%)	―	―	―	―	508句(10.5%)	―	―
内藤鳴雪	123句(6.3%)	25句(5.7%)	38句(7.6%)	583句(13.3%)	73句(0.9%)	102句(2.3%)	12句(0.7%)	0	174句(3.6%)	31句(14.8%)	19句(15.4%)
五百木飄亭	518句(26.7%)	34句(7.8%)	46句(9.2%)	380句(8.7%)	0	37句(0.8%)	1句(0.1%)	0	118句(2.4%)	0	0
新海非風	429句(22.1%)	9句(2.1%)	31句(6.2%)	137句(3.1%)	0	0					
藤野古白	135句(7.0%)	6句(1.4%)	28句(5.6%)	0	0	―	―	―	―	―	―
高浜虚子	25句(1.3%)	25句(5.7%)	13句(2.6%)	373句(8.5%)	14句(1.7%)	189句(4.3%)	71句(4.2%)	55句(7.7%)	221句(4.5%)	7句(3.3%)	0
河東碧梧桐	54句(2.8%)	26句(6.0%)	14句(2.8%)	318句(7.3%)	10句(1.2%)	217句(4.9%)	257句(15.3%)	38句(5.3%)	264句(5.4%)	6句(2.9%)	0
伊藤松宇	0	9句(2.1%)	17句(3.4%)	143句(3.3%)	1句(0.1%)	2句(0.05%)					
片山桃雨	0	9句(2.1%)	22句(4.4%)	91句(2.1%)	0	0					
夏目漱石	0	0	0	18句(0.4%)	103句(12.7%)	66句(1.5%)	76句(4.5%)	13句(1.8%)	79句(1.6%)	1句(0.5%)	0
佐藤紅緑	0	0	0	19句(0.4%)	7句(0.9%)	211句(4.8%)	77句(4.6%)	103句(14.4%)	138句(2.8%)	0	1句(0.8%)
福田把栗	0	0	0	0	0	245句(5.6%)	112句(6.7%)	14句(2.0%)	91句(1.9%)	9句(4.3%)	0
石井露月	0	0	0	0	1句(0.1%)	131句(3.0%)	31句(1.8%)	27句(3.8%)	74句(1.5%)	2句(1.0%)	0
吉野左衛門		0			0	111句(2.5%)	157句(9.4%)	7句(1.0%)	50句(1.0%)	2句(1.0%)	1句(0.8%)
竹村秋竹		1			0	45句(1.0%)	45句(2.7%)	68句(9.5%)	35句(0.7%)	13句(6.2%)	0
下村牛伴		0			36句(4%)	96句(2.2%)	23句(1.4%)	8句(1.1%)	59句(1.2%9	0	3句(2.4%)
総句数	1942句	435句	502句	4378句	811句	4413句	1679句	717句	4858句	209句	123句

「蕪村句集講義」一覧表

表2

回	輪講月日	会場	句数	記録者	文末語	回	輪講月日	会場	句数	記録者	文末語
冬1	明治31・1・15	子規	12	碧梧桐	ばし・なり	夏1	明治33・7・31	子規	13	虚子	である・だ
2	2・5	子規	13	子規	なり・か	2	8・22	子規	14	碧梧桐	である・ます・でした
3	3・5	子規	13	虚子	であらう・かしらん	3	10・4	子規	12	虚子	である・あらうか・ぢや
4	4・5	子規	13	碧梧桐	べし・なり	4	11・5	鳴雪	15	碧梧桐	である・ます
5	5・5	子規	13	露月	なり・ならむ	5	11・27	子規	15	碧梧桐	である・ます・ました
6	6・5	子規	11	子規	である	6	明治34・1・10	鳴雪	13	虚子	である・ます・でせう
7	7・5	子規	11	子規	なり	7	2・10	鳴雪	12	虚子	である・ます・でせうな
8	8・5	子規	16	子規	ぢや・なり・である	8	3・1	鳴雪	13	虚子	である・ます・た
9	9・5	子規	11	子規	ます・でせう・ました	9	3・23	鳴雪	13	碧梧桐	である・ます
10	10・5	子規	14	子規	なり・べし・たり	10	4・20	鳴雪	14	虚子	である
11	11・5	子規	15	虚子	ます・です	11	6・1	鳴雪	15	碧梧桐	である・ます
12	12・5	子規	16	虚子	なり・べし・たり	12	6・22	鳴雪	10	虚子	である・だ
13	明治32・1・5	子規	14	虚子	である・ます・だ	13	6・22	鳴雪	13	碧梧桐	ます・ました
14	2・7	子規	22	虚子	である・ます・だ	14	7・20	虚子	15	碧梧桐	である・ます
春1	3・9	子規	13	虚子	である・だ・いる	15	8・20	鳴雪	14	虚子	である・だ
2	4・6	子規	13	虚子	である・ます・だ	16	9・20	鳴雪	14	碧梧桐	である・ます
3	5・5	子規	15	碧梧桐	である・ます	17	10・20	鳴雪	18	虚子	である・ます・ました・だ
4	7・5	子規	12	碧梧桐	である・ます	秋1	12・9	鳴雪	13	碧梧桐	である・です・でした・な
5	7・29	子規	14	碧梧桐	である・ます・だ	2	明治35・1・20	鳴雪	14	虚子	である・ます
6	8・20	子規	14	碧梧桐	である・ます	3	2・21	鳴雪	15	碧梧桐	である・だな
7	9・23	子規	15	虚子	べし・なり	4	3・20	鳴雪	14	虚子	である・だ
8	10・20	子規	16	虚子	べし・なり・や・か	5	4・29	子規	15	碧梧桐	である・ます
9	11・17	子規	15	虚子	である	6	5・20	子規	13	虚子	である
10	12・20	子規	14	虚子	である	7	6・20	子規	10	碧梧桐	である
11	明治33・1・20	子規	14	青々	である・ます	8	8・5	子規	14	虚子	である
12	2・22	子規	15	虚子	である・だ	9	9・10	子規	12	碧梧桐	である
13	3・20	子規	15	虚子	である・ます・だ	10	10・3	鳴雪	12	虚子	である・だ
14	4・20	子規	11	青々	である・ます・です	11	10・20	鳴雪	15	碧梧桐	である・です
15	5・20	子規	16	碧梧桐	である・ます	12	11・20	鳴雪	15	虚子	である
16	6・20	子規	12	虚子	である	13	12・20	鳴雪	10	碧梧桐	である
						14	明治36・1・20	鳴雪	15	虚子	である・ぢや
						15	2・10	鳴雪	14	碧梧桐	である・ました
						16	4・6	鳴雪	16	虚子	である

会場	
子規宅	39
鳴雪宅	23
虚子宅	1

記録者	
子規	6
虚子	31
碧梧桐	23
青々	2
露月	1

参加回数	
子規	55
鳴雪	53＋7
虚子	50＋7
碧梧桐	45＋7
紅緑	11＋4
四方太	10
黄塔	7
青々	6
露月	4
墨水	2
修竹	1
肋骨	1
愚哉	1

子規没後の参加者は
鳴雪・虚子・碧梧桐・紅緑
（＋の回数）

冬の部	194句
春の部	224句
夏の部	233句
秋の部	217句

凡例

・本年譜は、管見にはいった鳴雪と子規の関係を中心にした事跡を、編年に配列したものである。
・新聞「日本」と新聞「小日本」掲載の鳴雪句は煩雑を厭わず掲げた。
・事跡の探索については、末尾に揚げる文献を参照した。

内藤鳴雪年譜

弘化三年（一八四六）

冬、父は江戸藩邸に住む常府を命ぜられ、松山から江戸へ引っ越す。

弘化四年（一八四七）一歳

四月十五日　江戸松山藩邸中屋敷（現在の港区三田一丁目　イタリア大使館）に生れる。父房之進同人（ともざね）母八十（やそ）の長男。幼名を助之進、実名師克（もろかつ）、素行（もとゆき）。素行は『中庸』から引用。漢詩では南塘、俳句では破蕉、鳴雪、老梅居の号を用いる。春日神社が鳴雪の産土神。

嘉永二年（一八四九）三歳

母八十が霍乱（吐いたりくだしたりする症状のものをいう。今日の急性腸カタルなどと思われる）で亡くなり、祖母・曾祖母の手で育てられる。母は芝居好きで、草双紙を愛読していた。母は死ぬ少し前に初めて猿若の大芝居を観ている。

嘉永五年（一八五二）六歳

継母が春日家より来る。一度は芝居を見せねばならぬというので、猿若二丁目の河原崎座をみせ、ついで、曾祖母・祖母にもみせ、その折に鳴雪も同行する。

嘉永六年（一八五三）七歳

ペリー来航。屋敷内で行われた様式銃隊の訓練を見る。

安政元年（一八五四）八歳

十月、安政の大地震起こる。弟・大之丞克家が生まれる。父から漢籍の素読を習い、盛衰記や保元平

治物語などの軍記物、錦絵を模写したり、草双紙などを愉しむ。日本の歴史を知った端緒の二書が盛衰記と保元平治物語である。草双紙の「女金平草紙」（種彦）の中の句を覚え、俳人となった因縁ともいえる。左句などを覚えていた。

茶の花はたてゝもにても手向かな

軒端もや扇たるきと御影堂

角二つあるのをいかに蝸牛

元日や何にたとへむ朝ぼらけ

安政二年（一八五五）九歳

裃を着て藩主にお目見えをする。以降、年賀と葬儀見送りをする。

安政四年（一八五七）十一歳

藩命により一家は松山へ。味酒村の味酒神社の持ち家に住む。鳴雪は藩校明教館にて四書五経を学ぶ。子規の外祖父大原観山にも師事する。

安政五年（一八五八）十二歳

父が京都留守居役になり、京都高倉通り下ル和久屋町に住む。京都では、芝居見物、義太夫、落語などを愉しむ。

安政六年（一八五九）十三歳

父が松山に帰藩する。堀之内に住む。明教館に入学し、小学や五経などの漢籍を学ぶ。明教館の独看席への出席を許され、蔵書を借りて読みふける。輪講や会読では活発に意見交換する。馬琴の読本や洒落本・人情本・滑稽本などを読み、江戸の粋人の暮らしを知る。

文久二年（一八六二）十六歳

半元服し、前髪を落とす。

文久四年（一八六四）十八歳

父の看病で京都へ行く。元服して助之進師克と名乗り、京都寺町の本陣で小姓勤めをする。

慶応二年（一八六六）二十歳

松山に帰り、藩主の世子定昭の小姓となる。第二次長州征伐では装束を着て、高浜港にて藩主らと甲冑をつけて軍艦に乗る。

慶応三年（一八六七）二十一歳

八月、祖母逝去。十月十四日、十五代将軍慶喜が政権返上を朝廷に申し入れ、翌日それが受け入れられた、いわゆる大政奉還。

慶応四年（一八六八）九月八日、明治に改元。

明治元年（一八六八）二十二歳

土佐藩が松山を占領したため、これまで住んでいた三の丸近くの士族屋敷から二番町（継母の里がある）に移る。父は勘定奉行、鳴雪は小姓。

六月、春日千賀子（継母の姪）と結婚。十二月、京都へ漢学修行の命が下り、薩摩藩水本保太郎の漢学塾に入門する。京都では従弟山本新三郎の旅宿（吉田神社のそば）に同居する。

明治二年（一八六九）二十三歳

昌平学校入学のため東京に移住する。愛宕下の松山藩上屋敷は朝敵となった際に没収されたが、三田の中屋敷はそのままで、留守居役や公儀人が住んでいた。版籍奉還。

明治三年（一八七〇）二十四歳

四月、西洋の学問を取り入れねばならぬとする藩の考えにより松山に帰る。鳴雪は「権少参事」に登用され、教育を担当する。父は辞職。三の丸の火事により松山藩創立以来の日記を焼失する。

明治四年（一八七一）二十五歳

五月、父の隠居により家督相続する。長女順誕生。七月、廃藩置県。

再び洋学（英学）修行のため上京する。寄席ですりに遭い実印を紛失したため「素行」と改名する。

明治五年（一八七二）二十六歳

八月三日、我が国最初の総合的教育法規である「学制」が交付される。九月、松山にて小学校敷設する学制頒布し、鳴雪は学区取締となり第三中学区を受け持つ。鳴雪は就学の督励、学校の設立、学校

の保護、学務経費のことなどに従事する。月給八円、のちに昇給する。

明治六年（一八七三）二十七歳

九月二十二日、父出張先の東京で脚気衝心のために逝去。享年五十歳。正宗寺に遺髪を葬る。

秋、子規は鳴雪が設置した五校の一つである末広小学校に入学する。翌年末に勝山小学校に移り、十二年に卒業する。勝山学校（第三中学区七番学校）は、明治八年に師範学校の付属小学校に充当され、明治十二年に閉鎖された。しかし、文部省の通達により明治十六年十月に「愛媛県師範学校付属小学校規則」を定めて付属小学校を開設した。

三月に勝山学校に併置されていた洋学科が独立して英学舎となった。この英学舎を発展させたのが、明治八年八月に設置される英学所。

明治七年（一八七四）二十八歳

松山の勝山学校内に設置された小学校教員養成機関の正則伝習所の主幹を務める。この時、鳴雪は第十五大区学区取締であった。鳴雪は県内を六区域に分け、川之江・西条・今治・大洲・宇和島にも伝習所をつくることに尽力する。堀内の屋敷を売却し、二番町の長屋に修繕を加えて弟家族とともに転居する。家禄奉還で二十石七斗の半額を公債證書で貰う。下付金は七百円。二階建て家屋を新築し、十三年まで住む。

明治八年（一八七五）二十九歳

鳴雪は学務課長心得に就任。月給五十円。旧明教館の内に英学所を設置し、慶応義塾を七月に卒業した京都府士族の草間時福（くさまときよし）を教官として迎え、同所の経営に当たらせる。翌年九年には、英学所と勝山学校課外席を統廃合し、北予変則中学校が開校、校長は草間時福。明治十二年七月の任期満了までつとめる。この変則中学校は明治十一年六月に松山中学校と改称。

明治九年（一八七六）三十歳

長男健行誕生。愛媛県師範学校を創立。師範学校長を雇うため千葉へ視察。校長には茨城県士族で東京師範学校出身の松本英忠（当時二十三歳）が就任。

明治十年（一八七七）三十一歳

大四大学区連合教育会の二、三回の議長を務める。

明治十一年（一八七八）三十二歳

明治十二年（一八七九）三十三歳

九月二十九日、政府は「学制」を廃止して「教育令」を公布し、郡単位に小学校則・教則を編成することとする。

明治十三年（一八八〇）三十四歳

愛媛県権令岩村高俊地方官会議出席に随行して上京し、再び千葉も視察。継母危篤の報に急遽帰郷するが、その夜に逝去する。岩村権令は政府から内務省の戸籍局長に任ぜられ、転任。鳴雪は学務課長を辞し、文部省に転任する。日本橋区浜町二丁目の旧藩主久松伯爵邸の長屋へ移住。年末に久松家の麻布長坂別邸に移る。月給四十円で親子五人暮らし。一里十丁ある文部省へは電車もないため徒歩で通う。教育令改革に関する施行に従事する。

十二月、改正教育令。教育令に比して、文部省及び府県の権限を強化し、学校の設置、就学の義務を強化したことなどが主要な修正点。明治十八年に再び改正される。

正岡子規が松山中学校に入学し、明治十六年に中途退学して上京する。

明治十四年（一八八一）三十五歳

次男惟行誕生。月給百円。足利学校を見学。

明治十五年（一八八二）三十六歳

明治十六年（一八八三）三十七歳

上京した子規に漢詩の指導をする。子規の漢詩稿に鳴雪による添削がある。

明治十七年（一八八四）三十八歳

二月、上六番地に家を借りて転居。長女順は小学校を終えたため、キリスト教主義の櫻井女学校に入学させる。校長は矢島楫子（やじまかじこ）。後に、母子共に洗礼を受ける。通っていた中二番町の番町教会には巌谷小波が居り、鳴雪よりも先に母子が小波との顔見知り。この頃、鳴雪はキリスト教や仏教、哲学の翻訳書を多く読む。

三月十七日、夜、子規と森知之が鳴雪を訪問し漢詩を作る。

明治十八年（一八八五）三十九歳

子規・竹村黄塔らが漢詩の添削を乞う。弟宇野兼三の求めに応じて函館の女学校に「遺愛女学校」の名称を付ける。森有礼文部大臣のもとで、奏任御用係から文部権少書記官に昇進する。

明治十九年（一八八六）四十歳

三女らく誕生。伊藤博文総理大臣のもとで文部省書記官兼任往復課長として、規則の制定改正等に従事する。

明治二十年（一八八七）四十一歳

四月十一日、らくジフテリアに罹り夭折。（「ホトトギス」大正元年十月号「ひとり言更に一箇条」）

十二月一日、常盤会寄宿舎建設。初代監督は子規・古白の伯父服部嘉陳（藤野漸の兄）。佃一予、勝田主計、子規らが入舎。

明治二十一年（一八八八）四十二歳

借家を上六番地から下六番地へ移し家賃九円五十銭だが、借金が出来る。そのため、妻・次女・次男を松山の郷里に帰す。長女順は櫻井女学校に寄宿させ、鳴雪は長男健行と神田の三崎町に下宿。従弟の天岸一順も同宿させる。順は香川師範学校勤務の山路一遊に嫁す。

明治二十二年（一八八九）四十三歳

三男、和幸誕生。

四月三十日、服部嘉陳病のため辞任し、鳴雪は五月十二日付で常盤会寄宿舎の監督に就任する。

この年、久松家の御用向諮問委員となる。またこの年、鳴雪を通じて親戚の下村為山と子規が知り合いとなる。

六月九日、東京上野の無極庵にて松山会を開催。幹事の鳴雪は開会の辞を述べる。

七月二日、勝田明庵は翌日から子規とともに松山に帰省するため、子規の帰省旅費六円二十五銭を借りる。

七月十四日、暑中休暇にて松山に帰省する。

七月十九日、鳴雪は伊予尋常中学を参観し、十年ぶりに帰郷。五月に喀血して療養のため帰郷していた子規と古代瓦の一片を得、十五日付の海難新聞に「正岡常規氏が道後植物園内にて得た古代陶器の

破片は、布目の堅牢な質のものである」と掲載される。

八月六日、文部省参事官内藤素行、第二三光丸にて東上、知己の人々三津浜まで送る。（海南新聞）

十一月、子規・竹村黄塔と漢詩・連句・連歌の会「言志会」を起こす。第一回を十一月七日、常盤会寄宿舎の鳴雪宅にて行う。この頃、鳴雪は「南塘」、黄塔は「松窓」と号す。「言志集」十冊あまり（二十三年冬頃までの作）は鳴雪が所持（「子規追悼集」の「追懐雑記」）。「老梅居雑話」（『ホトトギス』明治三十八年十月号）に「言志会」について述べている。

十二月五日、鳴雪宅で言志会を行う。

明治二十三年（一八九〇）四十四歳

この年、鳴雪は文部省参事官兼普通学務局に勤務。不眠症に悩む。

二月十一日、子規、黄塔と三人で千住に行く。漢詩や連句を作る。

三月十一日　霽月宛て鳴雪書簡

八月十九日、子規宛て鳴雪書簡。七言絶句を送る。

九月二十八日、鳴雪は子規の部屋を訪れ、言志会を変更して三人で新井薬師へ行く。道々連句を行い、十二社（じゅうにそう）へ行く（「筆まかせ」）。

十二月一日、非風が近衛砲兵に、瓢亭が近衛歩兵に入営する。

明治二十四年（一八九一）四十五歳

鳴雪は四月に文部省を辞任し、常盤会寄宿舎の監督となる。

一月十四日、子規と勝田明庵が鳴雪宅を訪問し、秘蔵の浮世絵数十巻を見る。この日、はじめて鳴雪は「田舎源氏」を説く。子規は鳴雪から合巻や読本を借りる。また、二月に鳴雪は子規に石田玉山著『玉藻談』を贈る。

三月二十四日、鳴雪は弓町一丁目の家から寄宿舎に移る。明庵がその手伝いをする。夕方小宴を開く。

二十八日に文部省参事官を辞して監督にあたることを演説。

四月十日　海南新聞に辞任した鳴雪の漢詩が掲載される。

六月二十五日、子規は松山へ帰郷する途中に木曽路を回り「かけはしの記」を書く。鳴雪は子規に軍記物や黄表紙を恵与する。子規はこの年の暮に「月の都」執筆のため常盤会寄宿舎を出て本郷区駒込追分町三十番地の下宿に転居。

十一月二十五日、子規に『絵本小栗一代記』を贈る。

明治二十五年（一八九二）四十六歳

鳴雪はこの年、子規に導かれて本格的に俳句を始める。

一月、以前作っていた俳句「元日や仏になるも此の心」「四十五の夢をさまして初日出」の二句を子規がはじめてほめてくれた（『ホトトギス』明治三十二年七月号「碧子の俳句評釈」）と鳴雪の俳歴を語る。

二月二十九日、子規は駒込から陸羯南宅の西隣の下谷区上根岸町八十八番地に移る。

三月十三日、「海南新聞」に鳴雪が常盤会寄宿舎監督として寄宿生から尊敬されている記事が載る。

三月二十四日、子規の「岐岨雑詩三十首」を批評する。

五月六日、子規宛て鳴雪書簡　「破焦」と号して「丁度来た客も連出す花見哉」等十四句を送る。

六月二十六日、竹村鍛と子規を訪れ、句会。

八月二日、鳴雪宛て子規書簡

八月九日、子規宛て鳴雪書簡　「拙稿御叱正毎句ノ御教示ハ殊ニ難有、大ニ心得ニ相成申候。」と言う。しかしこの頃、子規が自分の句をとってくれないのに憤慨するが、子規が『猿蓑』の句柄がよいと言っていたことを思い出し、『猿蓑』を熟読する。凡兆の客観句に惹かれる。

九月三日、鳴雪が子規を訪問する。

九月九日、新海非風と子規を訪問する。「唐辛子」にて一題百句をつくる。

九月二十日、子規と鍛が鳴雪を訪問し、俳話をする。

九月二十七日、子規は鳴雪を訪問し、俳諧談や身上相談をする。雅談快談止まるところを知らず、夜八時まで七時間語り続ける。

十月二日、子規は鳴雪を訪い、翌日出立の旅の話をする。

十月六日、子規宛て鳴雪書簡。大磯松林館に滞在している子規に、月四句を送る。

十月十八日、子規が鳴雪を訪れ、夜食を一緒に摂る。押しかけて余所でめしくふ秋のくれ　子規

十月二十三日、鳴雪が古白と子規を訪問する。

十月二十六日、子規が鳴雪を訪問する。

十月二十九日、鳴雪は子規に誘われ腹痛を押して日光の紅葉狩に出立する。子規は陸羯南より日光往復の汽車の切符をもらい、この旅を十一月十一日、新聞「日本」に「日光の紅葉」として掲載する。

十一月四日、鳴雪と非風が子規を訪問する。

十二月六日、子規が鳴雪を訪問する。

十二月七日、子規が鳴雪を訪い、ともに新宿から八王子へ行き、高尾山に登る。翌日、百草の松蓮寺

などを巡って帰る。子規はこの旅を十二月十一日・十四日、新聞「日本」に「馬糞紀行」として掲載（のちに「高尾紀行」と改題）。

十二月十一日、前日の十日に伊藤松宇を訪問した子規は初めて運座を知り、徹夜で句会。その興奮を鳴雪らに青山竜厳寺での句会で語る。以後、子規らにも運座熱が起こり、椎の友のメンバーと運座を頻繁にするようになる。

十二月十四日、子規が鳴雪を訪うが、不在。

明治二十六年（一八九三）四十七歳

一月二日、子規は鳴雪を訪問した後、日本新聞社へ出社する。

一月三日、高田馬場古白庵にて発会。六仙集会俳諧を行い、七時解散。

子規ら、春興の刷物（『俳句のちかみち』

元日や冠かけてはや二年

稚子の手に滴るや芹の露

君が代や有明残る初からす

一月六日　鳴雪は仙田重邦と子規を訪問する。

子規宛て鳴雪はがき。七日カルタ会の案内。

一月七日、子規とともに牛込の土居藪鶯宅の句会に参加する。「椎の友」の句会に鳴雪は初参加。

一月十一日、子規が鳴雪を訪問する。

一月十二日、子規が鳴雪を訪問する。

一月十四日、子規が鳴雪を訪問する。

一月十五日、子規庵の句会に参加。表題「根岸集」。鳴雪、子規、古白、猿男、桃雨、松宇

とし玉や老て忘れぬ孫の数

一月十七日、鳴雪は子規を訪れ、ともに西新井薬師に詣でる。

一月十九日、子規が鳴雪を訪問するが、不在。

一月二十一日、子規が鳴雪を訪問するが、不在。

一月二十二日、子規が鳴雪を訪問し、ともに中根岸の汁粉屋「岡野」の句会に参加する。会者十二名。

火事があり、句会後、子規・古白らと火事現場に近い片山桃雨・森猿男を見舞う。

夕月や納屋も馬屋も梅の影

橋立やかすみの中の松の声

一月二十四日、子規宛て鳴雪はがき。一月三十日の鳴雪宅句会の連絡。

一月二十八日、子規と非風が鳴雪を訪問するが、不在。

一月三十日、鳴雪宅で句会。表題「武蔵野の春」会者十三名。

大仏に雪のなだるゝ朝日哉

山一つ奥の梅とふ二月哉

梅散て鶴の子寒き二月哉

陽炎や河原にかわくさらし布

二月三日、子規が鳴雪を訪問する。

新聞「日本」の文苑に俳句欄を設けて日本派俳句を掲載し始める。

二月六日、子規が鳴雪を訪問する。

二月九日、子規が鳴雪を訪問する。

二月十一日、子規宛て鳴雪書簡。翌日の二宮烏雪宅句会の打合せ。しかし、子規は十二日より体調が悪くなり欠席、病臥する。

二月十六日、鳴雪が子規を訪問し見舞う。

二月十八日、鳴雪は古白と子規を訪い、病床の子規と三人で句会。

淡雪を一筋とほす朝日哉

二月十九日、牛塔軒にて句会。表題「内紫」鳴雪、藪鶯。

城門に蝶の飛びかふ日和哉

朧月釣すううううる海女の小歌かな

二月二十二日　子規宛て鳴雪はがき　十四日に子規が血痰の出たことを案じる。

二月二十三日、鳴雪が子規を訪問する。

三月一日、飯倉宅にて句会。表題「半夜鐘」鳴雪、藪鶯、烏雪改　素香。

更級や田毎の畦の花すみれ

菜の花や花嫁送る子荷駄馬

三月二日、子規宛て鳴雪書簡。三月三日の桜井静堂（庚太郎）宅の句会連絡。

三月三日、桜井静堂宅句会に出席。

三月四日、子規と古白が鳴雪を訪問する。

対円楼にて句会。表題「昼過之雨」鳴雪、古白、非風、五洲。「雨夜の句合」鳴雪、古白。

花散りて杉の木の間の胡蝶哉

杯の花押わけてながれけり

紅梅や左府のおとゞの牛車

三月八日、新聞「日本」掲載句。

　屑買ひに紙衣売りけり別れ霜

三月十一日、子規が鳴雪を訪問する。

三月十五日、「日本」掲載句。

　流れ木のたふりたふりと春の川

三月十七日、子規が鳴雪を訪問する。

三月十八日、子規が鳴雪を訪い、ともに土居藪鶯宅の句会に参加。

三月十九日、子規と非風が鳴雪を訪問し、句会。鳴雪、子規、五洲、非風、明庵。

　腹見せて水門落つる蛙哉

　行春や不破の関家の臼の音

　陀羅尼品春の日脚の傾きぬ　　この句はこの日の新聞「日本」掲載

三月二十一日、新聞「日本」に掲載句。

　さゞ波や古き都の初もろこ

三月二十二日、子規が鳴雪を訪問する。

三月二十三日、子規は松宇らと『俳諧』を創刊する。

三月二十四日、子規が鳴雪を訪問する。

三月二十八日、新聞「日本」掲載句。

　春の野に二日の月の寒さかな

三月三十日、鳴雪ははじめて虚子と面会。松宇も同席。

四月一日、子規が鳴雪を訪問する。

四月四日、鳴雪、松宇、紫影、田岡嶺雲ら子規を訪い句会、虚子も参加する。

　東雲のほがらほがらと朝櫻（この句は句碑になるが句形の変化あり）

四月六日、句会。表題「二時の吟」鳴雪、藪鶯。

　駒鳥や貴船の宮の神寂て

　橋立の折り折り絶へて風かすむ

　まだ足の水に冷し山葵掘り

四月七日、新聞「日本」掲載句。

　為朝の弓弦はづすやああ春の雨

四月八日、子規が鳴雪を訪問する。

四月十三日、写本「蕪村句集」の発見者片山桃雨に硯を贈呈。

四月十四日、子規宛て鳴雪はがき。十五日の案内。

四月十五日、子規が鳴雪を訪問し、鳴雪宅にて句会。鳴雪、子規、藪鶯、素香、牛伴、孤松。

引鶴や鳥居淋しき由比ヶ浜

山吹や石切出す鑿の音

四月十六日、子規宛て鳴雪はがき　睡眠不足のところを昨日句会に参加してくれたことへのお礼。

嗚呼老允櫻散込む薬鍋

枕にも櫻のうつる日和哉

四月十七日、新聞「日本」掲載句。

雉の子を追つまくつゝつゝじかな

四月十八日、村上霽月が大阪で『蕪村句集』上巻を入手。

四月二十一日、新聞「日本」掲載句。

はき溜の草も弥生のけしきかな

四月二十三日、句会。表題「麦の飯」鳴雪、藪鶯、晩翠。

春の月頭も腹もつやつやと

汗入るる巌の下や相模灘

青鷺の翼重たし杉の雨

四月二十四日、鳴雪が子規を訪問する。

四月二十五日、対円楼にて句会。表題「霹靂一声」鳴雪、五洲、非風、明庵。

四月二十六日、子規は鳴雪を訪れ、ともに王子の松宇新宅を訪問する。

四月二十八日、子規宛て鳴雪はがき。沙村に行き吟行する。

乞食の椀も流て桃の花

屑買ハ屑拾ひけり花の山

帋鯉の口に飛込乙鳥

たんぽゝや五百羅漢の尻の跡

時鳥火の見梯の届く程

四月二十九日、鳴雪が子規を訪れ、ともに千住、向島に行く。

○春、句会。表題「会稿」鳴雪、子規、素香、牛伴、藪鶯、孤松。

○春、句会。表題「花戻り」鳴雪ほか。評者に子規、古白、明庵、素香、孤松。

○春、句会。表題「傾蓋集」鳴雪ほか。評者に子規、古白、素香、藪鶯、五洲。

五月三日、子規が鳴雪を訪問する。

五月六日、子規宛て鳴雪書簡。この書簡で初号「破蕉」を使う）

五月七日、子規庵にて句会。表題「黄鸝村小会句稿」鳴雪、子規、藪鶯、素香、牛伴等七名。

城普請足場の侭の若葉哉

夏木立絵馬の天狗の鼻高し

鞍壺の坊主あたまや藤の花

五月八日、鳴雪が子規を訪い、ともに亀戸の藤を見に行く。その後、森猿男宅句会に参加する。

五月九日、子規宛て鳴雪はがき。題目写し忘れのため送付を願う。

五月十日、子規庵にて「一山百文」の競吟。鳴雪は評者をする。

五月十八日、子規が鳴雪を訪問する。

五月二十日、鳴雪が子規を訪い、明庵ら三人で句会。岡倉氏の土曜会に参加する。

五月二十四日、子規が鳴雪を訪問する。

五月二十八日、子規庵にて句会。表題「切り鮓」鳴雪、子規、古白、猿男、松宇、非風等十名。

五月三十一日、鳴雪が子規を訪問する。

六月一日、子規が鳴雪を訪うが、不在。

六月四日、子規が鳴雪を訪問する。鳴雪宅へ出入りしていた松山の菓子商・岩崎利平（一巴）と歌仙を巻く（「老梅居雑話」）鳴雪宅で句会。表題「二時烏鷺の戦」鳴雪、藪鶯、一巴。子規は評者。

六月八日、鳴雪が子規を訪れ、ともに今戸の鋳地蔵を尋ね、浅草で小憩して帰宅する。子規は帰宅後激しい頭痛と熱に悩まされる。

六月十三日、鳴雪は子規を見舞う。

六月二十日、子規が鳴雪を訪問する。

六月二十三日、子規と牛伴が鳴雪を訪問する。

六月二十四日、鳴雪子規を訪れ、ともに石山桂山宅句会に参加する。

六月二十五日、子規が鳴雪を訪問する。

七月四日、子規が鳴雪を訪問する。

七月七日、鳴雪が子規を訪れ、その後、子規が鳴雪を訪問する。

七月十三日、子規宛て鳴雪はがき。十五日の案内。

七月十五日、鳴雪宅にて子規や椎の友メンバーと句会。子規宛て鳴雪はがき。

七月十八日、鳴雪が子規を訪問し、その後、子規が鳴雪を訪問する。

七月十九日、子規は東北旅行へ出発。新聞「日本」掲載句。

夕畦や捨てし早苗の二把三把

七月三十日、霽月宛て鳴雪書簡（第一号）

○夏、句会。鳴雪、子規、非風、蛙泡。

○夏、句会。鳴雪、子規、素香、藪鶯、牛伴、孤松。

○夏、句会。表題「故郷の音信」鳴雪ほか。評者に子規。

八月二日、霽月宛て鳴雪書簡（第二号）

八月五日、霽月宛て鳴雪書簡（第三号）

八月九日、霽月宛て鳴雪書簡（第四号）

八月十四日、霽月宛て鳴雪書簡（第五号）

八月十五日、（霽月宛て鳴雪書簡第六号）

八月十六日、霽月宛て鳴雪書簡（第七号）

八月十九日、子規は東北旅行より帰る。

八月二十日、子規が鳴雪を訪うが、不在。

八月二十一日、鳴雪が子規を訪問する。

八月二十二日、子規が鳴雪を訪問する。

八月二十三日、霽月宛て鳴雪書簡（第八号）

八月二十七日、子規とともに王子の松宇宅の句会に参加する。

八月二十八日、子規が鳴雪を訪問する。

八月二十九日、子規庵にて句会。表題「奥州帰り」鳴雪、子規、牛伴、素香、孤松、静堂、井蛙。

九月三日、子規と東橋亭に遊ぶ。

九月七日、霽月宛て鳴雪書簡（第九号）

九月九日、子規が鳴雪を訪問する。

九月十日、鳴雪宅にて句会。鳴雪、子規、古白、非風、牛伴、素香、藪鶯、孤松等十名。

九月十三日、新聞「日本」掲載句。

　一つ家の雨の夜淋し高燈籠

九月十五日、霽月宛て鳴雪書簡（第十号）。

九月十七日、句会。表題「秋の雨」鳴雪、瓢亭、五洲、明庵。子規は評者。

九月十八日か、霽月宛て鳴雪はがき。霽月所蔵の『蕪村句集』の拝借依頼。

九月十九日、子規が鳴雪を訪問する。

九月二十三日、新聞「日本」掲載句。

　雁啼くや須磨の浦人藻汐焚く

十月五日、霽月宛て鳴雪書簡。『蕪村句集』上巻写本を送ってもらったお礼。

十月十日、新聞「日本」掲載句。

引冠る五布蒲団の野分かな

十月十八日、新聞「日本」掲載句。

人もなし砂ほる丘の秋の風

十月二十二日、子規庵にて句会。表題「後の月」鳴雪、子規、牛伴、松宇、桃雨、得中等八名。

十月二十八日、新聞「日本」掲載句。

野分して野中の古井水もなし

○秋、句会。鳴雪、瓢亭、五洲。評者に子規、素香、孤松。

十一月三日、句会。新聞「日本」掲載句。

菊分けて水汲む老女脛細し

十一月四日、新聞「日本」掲載句。

松明振て瀧のうら行く紅葉かな

十一月十一日、鳴雪は旧藩の事蹟取調べを嘱託されて松山へ発つ。新聞「日本」掲載句。

芭蕉破れて雨風多き夜となりぬ

十一月十三日、新聞「日本」掲載句。

内陣の御あかし動く落葉かな

十一月十五日、子規宛て鳴雪はがき。京都にて一巴叟（松山の菓子商であったが、京都紡績機械の販売）を訪問。はがきに掲載句。

東雲や冬田の畔の水煙

茅葺合の学校寒し冬木立　　「なじみ集」に入集。

十一月十五・十六日、子規宛て鳴雪はがき。一巴と嵐山見物。夜は竹村黄塔宅へ泊る（神戸市中山手通り七―十五）。はがき掲載句。

宗匠に杖まいらする小春かな

門前の籾を踏まるゝ小春哉

十一月十七日、岡山へ。

凩や舞子の松を押伏て

須磨寺ハ何処磯辺の友千鳥

十一月十八日、子規宛て鳴雪書簡。岡山より悪天候のため出航待機中の書簡。新聞「日本」掲載句。

湖を抱て近江の小春かな

十一月二十九日、上野養寿院で句会。表題「芭蕉忌」鳴雪、子規、瓢亭、虚子、紫影、松宇等二十名。
十一月二十二日、新聞「日本」掲載句。
菅笠の阿弥陀が駅をしぐれけり
十一月二十七日、新聞「日本」掲載句。
称名の声にしぐるゝ野寺かな
十一月二十九日　霽月宛て鳴雪書簡
十二月六日、十一月には京都で会えなかった虚子・碧梧桐に京都で会う。
十二月十二日、新聞「日本」掲載句。
冬ざれの干潟をあさる鴉かな
煤はくや我梅の檐月の窓
○冬、句会。鳴雪、子規、古白、藪鶯、松宇、得中、五洲、明庵、可全。
○冬、句会。表題「反故集」鳴雪、子規、古白、藪鶯、松宇、得中、五洲、明庵、可全。
○冬、句会。表題「天長佳節即唫集」鳴雪、明庵、五洲。評者に子規、非風。

明治二十七年（一八九四）四十八歳

一月一日、老梅居にて句会。表題「屠蘇のあひ」鳴雪、子規、素香。評者に明庵、五洲、可全。
元日や何事もなきふじの山
一月二日、老梅居にて句会。表題「産衣」鳴雪、素香、五洲。評者に子規、古白、明庵、可全。
一月十四日、上野公園養寿院にて句会。表題「準提観音」鳴雪、子規、古白、松宇、、紫影等十四名。
二月一日、子規は上根岸八十八番地から上根岸八十二番地に転居。
二月十一日、新聞「小日本」創刊。新聞「小日本」に掲載句。
若菜つみ若菜つみ京の日は暮れぬ
二月二十二日、子規宛て鳴雪はがき。子規の小説「月の都」の感想を述べる。
二月二十五日、新聞「小日本」掲載句。
暁やともし火霞む大悲閣
二月二十八日、新聞「小日本」掲載句。
古柳たゞ四五寸の緑かな
三月十一日、新聞「小日本」掲載句。
古道に梅一枝の夜寒かな
三月十四日、新聞「小日本」掲載句。

藪入の悲し子一人母一人

三月十七日、新聞「小日本」掲載句。

花大根きりかぎ畑の夕日かな

三月十八日、新聞「小日本」掲載句。

子鴉や苗代水の羽づくろひ

三月二十五日、新聞「小日本」掲載句。

ひよろひよろと岨の早蕨たけ高し

三月二十八日、新聞「小日本」掲載句。

人ちらほら浜は七里の汐干かな

三月三十日、新聞「小日本」掲載句。

小雲雀の比叡山颪立ちかぬる

四月十二日、虚子宛て鳴雪書簡。常盤会宛て虚子へ届いた東京専門学校四月分学費請求書を、鳴雪が正岡宅の虚子に送付。

四月十六日、鳴雪宅で句会。鳴雪、素香。題「田楽味噌」、評者に子規。

四月十九日、新聞「小日本」掲載句。

苗代に夕風わたる緑哉

若鮎のそれほど水は早からず

白梅は兄紅梅は姉にこそ

春の波金扇ひらりひらり哉

四月二十日、新聞「小日本」掲載句。

端籬や狐子を生む春の夕

行く春を烏鳴くなり女人堂

四月二十一日、新聞「小日本」掲載句。

此春は凧飛ばしたる人もなし

四月二十四日、新聞「小日本」掲載句。

夕月やこゆるぎもどる春の人

四月二十七日、新聞「小日本」掲載句。

春の夜の靱つくろふ女かな

○新年、句会。鳴雪、子規、藪鶯、可全。

○春、鳴雪宅で句会。子規、古白、井蛙、松民、桃雨等会者十五名。

○春、老梅居にて句会。表題「反故第三集」鳴雪、子規、古白、瓢亭、紫影、得中、虚子等十五名。
五月一日、新聞「小日本」掲載句。
　年々や菜の花山を咲き上る
五月五日、新聞「小日本」掲載句。
　「雀子や走りなれたる鬼瓦
五月六日、新聞「小日本」掲載句。
　夏山の大木倒す木玉かな
五月八日、新聞「小日本掲載句。
　大八の朝日の牡丹積み送る
五月十日、新聞「小日本」掲載句。
　大江戸を埋めて青葉若葉かな
五月十二日、新聞「小日本」掲載句。
　卯の花の闇なつかしく成にけり
五月十三日、新聞「小日本」掲載句。
　五月雨や陣屋陣屋の大篝
五月十七日、新聞「小日本」掲載句。
　蚊遣火の燃ゆる思をいぶりつゝ
五月二十四日、新聞「小日本」掲載句。
　卯の花に衣干しけり嵯峨の里
五月三十日、子規は「小日本付録」として日本派初めての選句集『俳句二葉集・春の部』を刊行。
五月二十七日、新聞「小日本」掲載句。
　珍らしき砂漠の旅の若葉かな
五月三十一日、新聞「小日本」掲載句。
　一つ消え二つ消え雨の蛍かな
六月八日、老梅居にて句会。鳴雪、子規、牛伴。
六月十四日、新聞「小日本」掲載句。
　美濃の蚊の近江へ逃る蚊遣かな
六月十六日、新聞「小日本」掲載句。
　昨日今日五月雨の京となりにけり
六月二十五日、新聞「小日本」掲載句。

夏籠りのこもりし一日二日かな

六月二十七日・七月一日・二日・三日・五日・八日・十三日まで七回、新聞「小日本」に「老梅居漫筆」を鳴雪老人の筆名で連載。第八回を八月十六日新聞「日本」に掲載。

七月十五日、新聞「小日本」廃刊。

八月五日、子規庵にて句会。表題「一日閑」鳴雪、子規、五洲、孤松、可全、洒竹、墨水。

八月十三日、午後四時過ぎ、鳴雪は子規を訪うて王子の祭りに誘う。中村不折も同行する。鳴雪と子規は俳句を論じ、不折は画を論じる。のち、子規は「王子紀行」として新聞「日本」に掲載する。

○夏、鳴雪宅で句会。鳴雪、子規、瓢亭、明庵、虚子。

○夏、鳴雪宅にて句会。鳴雪、子規、古白、虚子、可全、静堂、素香、藪鶯、得中、松宇等十二名。

○夏、鳴雪宅にて句会。表題「老梅居運座会稿」鳴雪、子規、古白、虚子、得中、松宇等十五名。

○夏、老梅居にて句会。表題「反故集第五」鳴雪、子規、瓢亭、明庵、虚子。

九月九日、子規庵にて句会。表題「虚桐送別会」鳴雪、子規、可全、虚子、碧梧桐、洒竹等十名。

○九月、句会。表題「そこらあたり　三人」子規、虚子、碧梧桐。評者に鳴雪、五洲。

○秋、句会。表題「反故集第七」鳴雪、子規、虚子、碧梧桐、五洲、可全。

○秋、句会。鳴雪、子規、五洲、素香、紫影、藪鶯、爛腸。

十一月四日、子規庵にて句会。表題「秋雨小会」鳴雪、子規、五洲、洒竹、爛腸。

○十二月、老梅居にて句会。表題「反古集第一」鳴雪、子規、虚子、碧梧桐。

十二月四日、新聞「小日本」掲載句。

　隼の物くふ音や小夜嵐

十二月七日、新聞「日本」掲載句。

　冬木立三つ四つ鴉飛んで行く

十二月十九日、新聞「日本」掲載句。

　ながながと石手の土手や冬木立

十二月二十二日、新聞「日本」掲載句。

　冬ざれの砂利道つゞく並木かな

十二月二十六日、新聞「日本」掲載句。

　人もをし人もうらめし古暦

○冬、句会。表題「三吟行」鳴雪、虚子、碧梧桐。評者に子規。

一月一日、新聞「日本」掲載句。

初東風や富士にすぢかふ凧

一月四日、新聞「日本」掲載句。

六日はや睦月は古りぬ雨と風

一月六日、新海非風宅にて句会。表題「第一会八人」鳴雪、子規、非風、虚子、碧梧桐等八名。

錦かけて棺の通る枯野かな

一月二十日、本郷龍岡下宿舎にて句会。表題「第二回八人」鳴雪、子規、、明庵、虚子等八人。

二月十二日、（悼関谷大尉）

梅散て其たそがれの人寒し

二月十七日、紀尾井坂公園にて句会。表題「第三回十二人（大会）従軍送別」句会。十二名。

○二月下旬、句会。鳴雪、子規、虚子、碧梧桐、松宇、古白、五洲、松露。

三月三日、鳴雪は子規を訪れて送別の辞を述べる。

三月八日、新聞「日本」掲載句。

悼関谷大尉　梅散て其たそがれの人寒し

三月十二日、子規庵にて句会。

三月十三日、新聞「日本」掲載句。

菜の花の行きどまりなり法隆寺

三月十四日、新聞「日本」掲載句。

痩畑や雨の夕を打つひとり

三月二十日、新聞「日本」掲載句。

吾庭は北に向たる夜寒かな

三月三十一日、新聞「日本」掲載句。

嬉し野の若草踏みに二人かな

四月三日、鳴雪宛て子規書簡二通。不折の大阪師団従軍のこと、漱石の松山中学赴任のことを知らせ、また、句評の感想の述べる。別紙一通は評の評で、鳴雪句の子規評、それに対する鳴雪の評、再度付箋にて子規評がなされている。

四月七日、藤野古白、ピストル自殺を図る。十二日逝去。父の藤野漸が来るまで鳴雪は親身に世話をする。

四月十四日、新聞「日本」掲載句。

人恋し朧に月の東山

四月二十三日、新聞「日本」掲載句。

　擔き込む大手の門の桜かな

四月二十六日、新聞「日本」掲載句。

　畦道や蛙飛び込む左右

五月六日、新聞「日本」掲載句。

　雨にあれて八重山吹の道狭し

五月十三日、新聞「日本」掲載句。

　古白が旧寓の早稲田にありければ

　暮の春面影橋を渡りけり

五月十五日、新聞「日本」掲載句。

　村雨のあやめ分け行く田舟かな

五月二十三日から七月二十三日まで、子規は神戸病院に入院。

五月二十六日、子規宛て陸羯南書簡に鳴雪と子規留守宅で会い相談、とある。

六月三日、子規は鳴雪に俳句を送る。

六月七日、子規は鳴雪の返書を碧梧桐に読んでもらう。ほとゝぎす其一声に夜明たり　の句もある。

六月十日、新聞「日本」掲載句。

　夕立の舟湊ひけり日本橋　　「日本付録週報」に、古障子蛍の昼を歩きけり

六月十六日、子規は入院以来初めて筆をとり鳴雪に手紙を書く。

六月十八日、子規（神戸市県立病院）宛て鳴雪書簡。筆をとるほどに回復したことを喜び十句添える。

　大道に銀杏の株の若葉哉

　古沼の蓮の下行清水哉

六月二十一日、新聞「日本」掲載句。

　大沼や蘆を離るゝ五月雲

六月二十七日、新聞「日本」掲載句。

　古沼の蓮の下行く清水かな

六月二十八日、鳴雪宛て子規（神戸病院）書簡。鳴雪に句稿を送り批評を乞う。

六月三十日、鳴雪宛て子規書簡。兼て批評頼んだ「寒山落木抄」を至急返送を願う。

○七月上旬、子規は鳴雪へ従軍土産の大砲の薬莢、矢の根などの贈呈目録を送る。

○七月、句会「はれの日」。

七月二日、子規宛て鳴雪書簡。「寒山落木抄」の返送と「句ハ奨励主義ニテ成ベク揚タル事トス」と

選句することの難しさを吐露する。また、冒頭に書簡は「御代筆可然」と勧める。

七月四日、新聞「日本」掲載句。

更へ更へて我世は古りし衣かな

七月十二日、新聞「日本」掲載句。

堰入るゝ青田の水のめだか哉

七月十九日、新聞「日本」掲載句。

夕顔に温泉ながるゝ小溝かな

七月二十五日、新聞「日本」掲載句。

雲の峰に横雲かゝる入日かな

七月二十七日、鳴雪宛て子規（須磨保養院）書簡。鳴雪句の句評とともに病余の無気力を嘆じる。

七月二十九日、新聞「日本」掲載句。

皐月闇阿保の山越炬もなし

七月三十日、新聞「日本」掲載句。

竹婦人瀧湘の雨お聞く夜かな

八月三日、鳴雪は子規に句会稿「はれの日」を送り、子規は評点評語を加える。

八月　「文庫」創刊　山県悌三郎

八月五日、新聞「日本」掲載句。

夕立や編引く浜の腥き（なまぐさき）

八月九日、新聞「日本」掲載句。

初秋や黄楊の小櫛の歯をあらみ

八月十日、鳴雪宛て子規書簡。俳句批評と源氏物語須磨の巻を読むと記す。

八月十二日、新聞「日本」掲載句。

秋立つや嶋守る蝦夷か丸木弓

〇八月上旬、虚子宅で句会。句会稿「古庵り」。鳴雪、虚子、碧梧桐、五洲、森々。子規は十五日に評点評語を加える。

八月十五日、新聞「日本」掲載句。

初秋の折ふし須磨のたよりかな

八月十六日、新聞「日本」掲載句。

磯畑に千鳥立たる鳴子かな

八月十九日、新聞「日本」掲載句。

引ほどく朝顔の実のがらがらに

八月二十一日、新聞「日本」掲載句。

三日月に女ばかりの端居かな

八月二十三日新聞「日本」掲載句。

宵闇や鹿に行逢ふ奈良の町

八月二十六日、新聞「日本」掲載句。

萱原にねぢけて咲ける桔梗かな

八月二十八日、新聞「日本」掲載句。

片岸の日はつれなくも尾花散る

八月二十九日、鳴雪宛て子規（松山市湊町）書簡。「帰松後とかく頭痛勝」と記し、近況報告をする。

八月三十日、新聞「日本」掲載句。

裾袂京の大路の野分かな

九月二日、新聞「日本」掲載句。

天窓や吹きはづされて天の川

九月四日、子規（松山市二番町上野方）宛て鳴雪書簡。虚子の学識進歩を報告する。

新聞「日本」掲載句。

瘧落ちて文月の夜のともしかな

九月六日、新聞「日本」掲載句。

淵明の牧子のと九月むつかしき

九月十八日、新聞「日本」掲載句。

散もせて古鶏頭の哀れなり

九月二十三日、新聞「日本」掲載句。

朝露や物干竿の手のすべり

九月二十四日、新聞「日本」掲載句。

下京や留守の戸叩く秋の暮

九月二十五日、新聞「日本」掲載句。

秋の空吾に鳥行き鳥返る

九月二十六日、新聞「日本」掲載句。

寝返れば夜寒の簀子音っすなり

九月二十九日、新聞「日本」掲載句。

初汐や心細くもみをつくし

九月三十日、新聞「日本」掲載句。

提て行く燈籠ぬれけり傘の下

十月三日、新聞「日本」掲載句。

名月や橋高らかに踏みならし

十月四日、新聞「日本」掲載句。

百舌鳥鳴くや雑木まばらに蕎麦畑

十月七日、新聞「日本」掲載句。

秋の雲ちきれ〇てなくなりぬ

十月十日　鳴雪宛て子規書簡　碌堂ら松風会会員が連日つめかけて運座や競吟をしていることが毎日新聞に連載された「俳諧風聞記」によって蕪村派と称されていること、東京に帰れば「蕪村論」を書くつもりであることなどを述べる。

十月十八日、新聞「日本」掲載句。

海曇寺にて鳥酔、白雄の墓に詣つ

秋風の隣ありけり墓二つ

十月二十日、新聞「日本」掲載句。

松の木に太鼓打つなり村角力

十月二十四日、新聞「日本」掲載句。

熊笹や岩の凹の秋の水

十月三十一日、鳴雪、虚子、碧梧桐が新橋に子規を出迎える。

十一月九日、子規庵で村上霽月が七日に持参した砥部焼の壺を床に据え牡丹を活けて句会。鳴雪、子規、虚子、碧梧桐、牛伴、爛腸、露月、洒竹、霽月。

十一月十日、新聞「日本」掲載句。

市中や家ひくあとの菊畑

送別

泣く泣くに君も紙子を着せ申せ

十一月十四日、鳴雪は夕方京都着

十一月十五日、昼まで京都に滞在し、午後より神戸へ行く。

十一月十七日、虚子・碧梧桐宛て鳴雪はがき。

十一月十八日、新聞「日本」掲載句。

冬枯の奥の細道馬もなし

十一月二十一日、新聞「日本」掲載句。

衣かけて殿居物憂し桐火桶

十一月三十日、新聞「日本」掲載句。

冬川の轍にくぼむ小石かな

十二月一日、新聞「日本」掲載句。

初冬の穴許なり芋畑

十二月八日、新聞「日本」掲載句。

縦横に枯るゝ野の轍かな

十二月八日、新聞「日本」掲載句。

縦横に草枯るゝ野の轍かな

十二月九日、新聞「日本」掲載句。

撃柝に鴨立つ城の大手かな

十二月十日、新聞「日本」掲載句。

尾花枯れて唯逃水のあと窪し

十二月十七日、新聞「日本」掲載句。

猿に着せて吾に似たりや古頭巾

十二月十九日、新聞「日本」掲載句。

木枯や峠おち来る人の声

十二月二十二日、新聞「日本」掲載句。

門前の口凍てつく小桶かな

十二月二十三日、新聞「日本」掲載句。

古沼の塵も落葉も氷かな

十二月二十四日、新聞「日本」掲載句。

荒川に馬乗り入るゝ霰かな

十二月二十八日、新聞「日本」掲載句。

文机や水仙の芽の一二寸

十二月二十九日、新聞「日本」掲載句。

女一人僧一人雪のわたしかな

明治二十九年（一八九六）五十歳

一月三日、子規庵にて句会。表題「発句始」。子規、鳴雪、虚子、碧梧桐等の他に漱石・鷗外も参加。

一月四日、新聞「日本」掲載句。

行く時雨日影まばらの大路かな

一月十日　子規宛て鳴雪はがき。「四畳」と「五畳」の題で五言律詩を送る。

一月十一日、新聞「日本」掲載句。

袴着や銀杏吹き散る男坂

一月二十日、新聞「日本」掲載句。

井戸端の鍋も盥も吹雪かな

一月二十五日、新聞「日本」掲載句。

二君には仕へ申さぬ紙子かな

一月二十六日、子規宛て鳴雪書簡。子規の句評の感想を述べる。

一月二十七日、新聞「日本」掲載句。

忘れけり四十九年の何とやら

一月三十一日、新聞「日本」掲載句。

大水の砂山残す冬田かな

○一月、子規宛て鳴雪はがき。漢詩の改稿を述べる。

一月三十一日、森鴎外「めさまし草」を創刊する。日本派の俳句が掲載される。

二月三日、新聞「日本」掲載句。

下馬札の奥は銀杏の落葉かな

二月十日、新聞「日本」掲載句。

朧夜や門を出づれば鳰の海

二月十四日、新聞「日本」掲載句。

凩の裏河岸ふけぬ灯の廻り

二月十八日、新聞「日本」掲載句。

春雨や葎の宿の白拍子

二月二十二日、新聞「日本」掲載句。

田の中に口咲く処々かな

二月二十九日、新聞「日本」掲載句。

古寺や昼も灯ともす涅槃像

三月二日、子規庵にて句会。表題「偶然」鳴雪、子規、碧梧桐、紅緑。紅緑が初めて参加する。

三月十日、新聞「日本」掲載句。

鳥啼いて寒食の村静かなり

三月十六日か、子規庵で句会。鳴雪、子規、碧梧桐、紅緑。

三月二十三日、新聞「日本」掲載句。

永き日を鶴の啄む深田かな

三月二十七日、新聞「日本」掲載句。

朝の雨花は一重ぞあはれなる

三月三十日、新聞「日本」掲載句。

山吹の雨に灯ともす隣かな

〇三月、句会。表題「春の夕」鳴雪、子規、碧梧桐、紅録。

四月五日、新聞「日本」掲載句。

塔高し花の梢の音羽山

四月八日、新聞「日本」掲載句。

永き日や常念仏の鉦の声

四月十二日、新聞「日本」掲載句。

両側に都大路の桜かな

四月十三日、新聞「日本」掲載句。

人恋し夕山桜黒本尊

四月十九日　不忍弁天僧坊にて藤野古白一周忌追善俳句会　句は四月三十日付新聞「日本」の文苑欄に掲出。

四月二十日、新聞「日本」掲載句。

柑子剥ぐ妹が爪先春寒し

四月二十八日、新聞「日本」掲載句。

香り一捻君に花落ち雨寒し

四月三十日、新聞「日本」掲載句。

香り一捻君に花落ち雨寒し

五月五日、新聞「日本」掲載句。

猫塚に恋草生ふる小雨かな

五月十日、子規宛て鳴雪はがき。子規句についての質問。

五月十四日、新聞「日本」掲載句。

二日月うら若竹の影もなし

五月十六日、新聞「日本」掲載句。

行けや君さみだれぬ間の大井川

五月十八日、新聞「日本」掲載句。

短夜や口の上の二十日月

五月二十日、新聞「日本」掲載句。

花桐や二條わたりの夕月夜

五月二十五日、新聞「日本」掲載句。

古閼の卯の花吹雪人絶えぬ

六月四日、新聞「日本」掲載句。

子供泣く五軒長屋の蚊遣かな

六月十五日、両側に雑木若葉す野崎道

六月二十九日、新聞「日本」掲載句。

短夜の水干かけし几帳かな

〇六月、「からす十句集」回覧・鳴雪、子規、虚子、碧梧桐、牛伴、紅緑、墨水（行事）等二十三名。

七月四日、新聞「日本」掲載句。

耳塚の上に鳴きけり時鳥

七月十日、新聞「日本」掲載句。

真桑瓜引つ裂いて君を送りけり

〇夏、鳴雪、子規、牛伴、虚子、碧梧桐、瓢亭、肋骨、紅録、墨水、洒竹等十六名。

八月十一日、新聞「日本」掲載句。

夕嵐桐秋近くなりにけり

八月十六日、新聞「日本」掲載句。

秋の空芙蓉の花に定まりぬ

八月二十六日、新聞「日本」掲載句。

稲妻の宵寝の口へこぼれけり

八月三十日、新聞「日本」掲載句。

引馬野や薄吹き暮れて月もなし

九月六日、新聞「日本」掲載句。

御製にも入らで朽ちぬる案山子かな

九月十九日、新聞「日本」掲載句。

鱸提げて酒屋を敲く月夜かな

○九月、「月並十句集」課題「寺」、回覧・鳴雪、子規、碧梧桐、墨水、楽天、肋骨等十四名。

十月十一日、新聞「日本」掲載句。

末枯に真赤な富士を見つけたり

十月十七日、新聞「日本」掲載句。

我庵は菊に二尺の日向かな

十月二十四日、新聞「日本」掲載句。

税苛し莨畠の秋の風

十月二十五日　子規宛て鳴雪書簡　藤井紫影の句等について報告。

十月三十一日、「めさまし草」二句

○十月、「月並十句集」課題「はきもの」、回覧・鳴雪、子規、虚子、碧梧桐、把栗等十五名。

○秋、子規庵で句会。鳴雪、子規、虚子、露月、瓦全等九名。

○秋、子規庵で句会。鳴雪、子規、虚子、碧梧桐、露月、肋骨、秋竹、把栗。

○秋、子規庵で句会。鳴雪、子規、鷗外、露月、秋竹、把栗等八名。

十一月七日　「東北日報」（後の河北新報）入社で仙台へ行く佐藤紅緑の送別会

十一月三十日、新聞「日本」掲載句。

ぬかづきて時雨聞く夜の四人かな

○十一月、「月並十句集」課題「女」回覧・鳴雪、子規、虚子、碧梧桐、墨水、把栗、可全等十八名。

十二月十一日、新聞「日本」掲載句。

五祖堂を中に枯野の嵐かな

十二月十九日、新聞「日本」掲載句。

茶の花に裏門遠き野寺かな

十二月二十八日、「めさまし草」二句

○十二月、「月並十句集」課題「飯」回覧・鳴雪、子規、虚子、碧梧桐、把栗、可全、三川等十七名。

○冬、子規庵にて句会。鳴雪、子規、虚子、碧梧桐、紅緑、牛伴、其村。

○冬、句会。鳴雪、子規、虚子、牛伴、把栗、四方太、極堂、可全、洒竹、愚哉等十四名。

○冬、句会。鳴雪、子規、虚子、碧梧桐、牛伴、把栗、四方太、可全、楽天、愚哉等十四名。

明治三十年（一八九七）五十一歳

一月一日、新聞「日本」掲載句。

水辺の松に時雨るゝ夕日かな

一月二日　獺祭書屋主人による「明治二十九年の俳諧」連載はじまる（三月二十一日まで二十四回）。後、題名を「明治二十九年の俳句界」と改題する。

新聞「日本」に「俳諧雑誌『ほとゝぎす』の発刊を祝す」とある。新聞「日本」掲載句。

時鳥画に鳴け年の新なる

一月三日、新聞「日本」掲載句。

花嫁は小きを引く大根かな

一月四日、新聞「日本」掲載句。

人生の五十一年初日の出

一月十五日　「ほとゝぎす」創刊　巻頭文に鳴雪の「老梅居漫筆」掲載。子規と共に募集俳句選者。

「ほとゝぎす」の発行ありと聞きて

故郷に嬉しきものゝ初音かな

一月二十五日、新聞「日本」掲載句。

煤払や庭に居並ぶ羅漢たち

一月二十九日「めさまし草」二句

二月七日、新聞「日本」掲載句。

曳き上げし鯨の上に五、六人

二月十五日　「ほとゝぎす」二号の巻頭文は鳴雪の「蕭山公遺吟」。淡路町人（虚子）の消息に「鳴雪は俗事蝟集蒼忙の中にも「太陽」「海南新聞」「ほとゝぎす」の句の選抜等には眼鏡を拭ふて苟くもせず、若し人の訪ふものありて十七字詩の談評に移る時は老梅居楼上風生雲起常に髯染むるの余勇を示し候」とある。

二月十八日、句会。鳴雪、子規、虚子、碧梧桐、四方太、露石、愚哉、繞石。大阪より水落露石の歓迎句会　子規と鳴雪激論を交わす。

二月二十五日、「めさまし草」二句

三月十五日　「ほとゝぎす」三号　鳴雪「蕭山公俳事」　高田屋客（碧梧桐）の消息に「内藤鳴雪翁はこの度新に「曙」といへる雑誌を生捕へられ我党の俳句を載すべき出店を得たりと喜ばれ候、翁が新調を排して独り幽玄朦朧説を布き給ふ事、後世迄の語り草に候」と鳴雪の様子を伝える。

『日本人』二十七号に子規は「内藤鳴雪」を掲載。

三月二十一日　「明治二十九年の俳諧」にて子規は二字評をする。「鳴雪　高華」

四月十日、新聞「日本」掲載句。

野の梅や折らんとすれば牛の声

子鴉の母呼ぶ李月夜かな

荷車に柳引きずる埃かな

浅茅生の宿と答へて朧月

爆竹や南京町は正月す

紅梅や司っをたまふ古匠

角力取る当番衆の日永かな

日あたりや江戸をうしろに畠打つ

四月十五日　「ほとゝぎす」四号、鳴雪は「脳部ノ宿疾相勝レズ候ニ付当分俳事ノ評選及贈答ヲ謝シ静養仕候」と告知。消息にも高田屋客が鳴雪のこに言及し「俳壇にとつての一変事と覚え候」と書く。

五月十八日、新聞「日本」掲載句。

家ありて一八咲けり杉木立

短夜の顔洗ひけり高瀬川

五月雨の妙義出没す雲の中

五月三十日　「ほとゝぎす」五号　消息に淡路町人は鳴雪の俳事辞退のことを「老梅居を叩き其異見を窺ひしに別に深意あるに非ず、必竟昨今俳句を弄ぶの趣味薄らぎ却つて俳事に於ける責任多くなりし為めいはゞ嘗て冠を掛けて閑散の詩的天地を撰び玉ひしと同様又暫く五月蝿き俳事の天地を思ひて除（ママ）ろに風月其物を楽まんの希望に出たる趣意に御座候」と記す。

六月六日、新聞「日本」掲載句。

夜涼みや糺すの川辺人白し

六月十三日、新聞「日本」掲載句。

五月雨や赤き灯見ゆる淡路島

郭公遠侍の鼾かな

六月二十二日、新聞「日本」掲載句。

虫糞や本箱叩く土用干

水馬一つところを上りけり

六月二十九日、新聞「日本」掲載句。

夕立や石吹き落す六合目

短夜や飯粒踏みし台所

六月三十日　「ほとゝぎす」六号、駿台隠士「思ふことども」に「この頃詩に興がのりて発句は一向に出ませんと鳴雪翁申さるゝ、蓋し翁の詩眼は俳句によつて開かれたるものなれば十七字は暫く遠からるゝも俳想は更に遠かる事無かるべし」と記す。

七月三日、新聞「日本」掲載句。

夕月や蚊帳の波よる妹が顔

七月六日、新聞「日本」掲載句。

並松や夕立晴るゝ清見寺

七月十日、新聞「日本」掲載句。

青簾有馬細工を並べたり

七月十九日、新聞「日本」掲載句。

山裾や磯辺につゞく夏木立

七月三十日　「ほとゝぎす」七号、淡路町人消息に「鳴雪翁は唐詩選など繙き」とある。

八月十五日、新聞「日本」掲載句。

花木槿弓師が垣根夕日さす

秋の水ある僧は毒と申しけり

暁や仙人掌上の秋の水

八月二十二日、新聞「日本」掲載句。

墓道古りぬ首洗ひたる秋の水

いたいけに嵐の中の三日の月

草深く虫取る人の小雪洞

九月九日、新聞「日本」掲載句。

蟷螂の頭ばかりを禦ぐかな

蟷螂の鎌立てる汽車の響かな

秋の灯人は周易に朱を点ず

十月九日、新聞「日本」掲載句。

目薬に涼しく秋を知る日かな

浅茅生の末枯るゝ中に赤き花

菊に文戸に物申す女の童

十月二十三日、句会。表題「元光院俳会」鳴雪、子規、虚子、碧梧桐、四方太、五城等十三名。

十一月二十日、新聞「日本」掲載句。

黄昏や易者の門の帰り花

枯枝に青き鳥鳴く小春かな

虎と呼んで鰒の背中の斑なる

十二月十一日、新聞「日本」掲載句。

餅つきは竹原在の男かな

水仙や端渓の硯紫檀の卓

頭巾借りて君が姿に似るべうも

十二月二十四日　第一回蕪村忌　鳴雪は「大蕪小蕪扨ては赤蕪我老」の句をだして退席する。

十二月三十日　「ほとゝぎす」、日暮里人（虚子）は「東都通信」に「鳴雪翁は俳句は作られねど我等も時々談論だけは伺ひゐることに候」と記す。

明治三十一年（一八九八）五十二歳

三十年の俳句界で「鳴雪俳壇退き」と書かれたが、子規は「三十一年の俳句界」（「ホトトギス三十二年一月号」で「東京にては先輩鳴雪、再び俳壇に出て後進を誘導す。太だ人意を強うす。其蕪村句集講義に於ける解説の如き其力を籍る者もつとも多し」と書く。

一月㈣日、新聞「日本」掲載句。

俳句の盛運を祝す

百年にして天明二百年にして明治の初日影

一月十五日　子規庵にて蕪村句集講義（冬1）この日より三十六年四月六日まで、六十三回に亘り蕪村句集講義を「ほとゝぎす」十四号から掲載。

二月五日　子規庵にて蕪村句集講義（2）

三月五日　子規庵にて蕪村句集講義（3）

四月五日　子規庵にて蕪村句集講義（4）

五月五日　子規庵にて蕪村句集講義（5）

五月二十日、新聞「日本」掲載句。

白きは山桜蟻の如きは人なんめり

五月二十四日、新聞「日本」掲載句。

青嵐云ふ師は薬を探り去ると

大妓小妓起き出でゝ牡丹日午なり

日は峰に夕立つ杉の谷間かな

六月五日　子規庵にて蕪村句集講義（６）

「ほとゝぎす」十七号、「東都消息」この頃例会は第二土曜日正午より運座とある。

六月三十日　「ほとゝぎす」十八号、森々「東都消息」に「鳴雪翁は輪講の時のみ出られ候が、絶えて御句作ありとは承らず候」と記す。

七月五日　子規庵にて蕪村句集講義（７）

七月二十日　「碧子の俳句評論」（１）「ホトトギス」三十二年七月号

八月五日　子規庵にて蕪村句集講義（８）

八月八日、新聞「日本」掲載句。

かんてらや明け易き夜の道普請

夏草に自転車習ふ空地かな

水吹いて植木涼しき夜店かな

八月十日　「碧子の俳句評論」（２）「ホトトギス」三十二年八月号

八月二十八日　虚子庵例会　鳴雪・虚子・碧梧桐・把栗・墨水・世南

九月五日　子規庵にて蕪村句集講義（９）

九月十日「碧子の俳句評論」（３）「ホトトギス」三十二年九月号

九月二十三日、新聞「日本」掲載句。

暁や鐘撞き居れば初嵐

荻の葉に折々さはる夜舟かな

秋のゆふべ道開く人もなかりけり

九月二十五日　発行所にて句会　鳴雪・虚子・碧梧桐・世南・四方太・牛半他

十月五日　子規庵にて蕪村句集講義（１０）

十月十日「碧子の俳句評論」（４）「ホトトギス」三十二年十月号

十月二十三日　元光院にて句会　子規・鳴雪・虚子・碧梧桐・四方太・露月・白浜・一五坊他

十月二十五日　発行所にて句会　鳴雪・虚子・碧梧桐・牛半・露月・杷栗・墨水・江戸庵

十一月五日　子規庵にて蕪村句集講義（１１）

十一月十日「碧子の俳句評論」（５）「ホトトギス」三十二年十一月号

十一月十三日　子規庵にて句会　子規・鳴雪・虚子・碧梧桐・五城・白浜・秋竹・露月他

十一月二十五日　発行所にて句会　鳴雪・虚子・碧梧桐・修竹

十二月五日　子規庵にて蕪村句集講義（１２）

十二月二十四日　蕪村忌

明治三十二年（一八九九）五十三歳

一月五日　子規庵にて蕪村句集講義（１３）

二月七日　子規庵にて蕪村句集講義（１４）新聞「日本」掲載句。

大雪の山脈越ゆる月夜かな

牡蠣飯の画きたる行燈かな

暁や市の跡なる歯朶の屑

三月九日　子規庵にて蕪村句集講義（春１）

三月十日　「ホトトギス」通信欄に「鳴雪翁自ら曰く、句作の勇気衰へたりと。同人は皆曰、鳴雪翁あらざれば会甚だ寂寥を覚ゆと。談論風生四筵を圧すること些も旧に異ならず候。翁微醺を帯びて来つて曰く、今晩は牛で酒を飲みました。此頃は酒があがりましてな。と蓋し三杯の量が一合に堪ふるに至りしにて候」とある。

三月十二日　子規庵にて句会。鳴雪、子規・虚子・碧梧桐・四方太・把栗・三允・露月等十四名。

三月十六日　夜、虚子庵にて臨時句会「春雨小集」　鳴雪・虚子・碧梧桐・牛半・把栗・修竹他

○春、句会。鳴雪、子規、松宇、猿男、桂山。

五月号「ホトトギス」消息に「三月以来同人の去来頻繁に候。同月中旬京都満月会の虚吼上京。十六日夜虚子庵の臨時会は其を機としてに候。同夜席上「涅槃会」の題あり。鳴雪翁の戯画「姉はん像」及「西洋の姉はん像」は大喝采に候。殊に「西洋の姉はん像」が極端なる曲線の配合は、為山・不折跣足に候」とある。

三月十九日　四谷在十二社にて句会　鳴雪・虚子・碧梧桐・四方太・墨水・露月・三允・左衛門他

三月二十五日　虚子庵にて句会　鳴雪・虚子・碧梧桐・五城・秋竹・球江他

四月六日　子規庵にて蕪村句集講義（２）

四月九日　子規庵例会　子規・鳴雪・碧梧桐・五城・秋竹・修竹・麦人

四月十五日　虚子庵臨時会　鳴雪・虚子・碧梧桐・牛半・把栗・青々・鼠骨

四月二十五日　虚子庵例会　鳴雪・虚子・碧梧桐・三允・波静・格堂・萩郎・左人他

五月五日　子規庵にて蕪村句集講義（３）

五月二十五日　碧梧桐庵にて句会

七月五日　子規庵にて蕪村句集講義（４）

七月二十日　「ホトトギス」巻頭に「碧子の俳句評釈」を掲載。

七月二十五日　虚子庵例会

七月二十九日　子規庵にて蕪村句集講義（5）

八月二十日　子規庵にて蕪村句集講義（6）

八月二十二日　新聞「日本」に虚子「清遊一日」上を掲載。その中に次のような文がある。

鳴雪翁の話に、昔は「樽入れ」といふあり。人の結婚したる時、其朋友等酒を携へて其人の家にうち集ひ、祝するの習ありて、其を「樽入れ」と呼びたり云々。八月十八日、新婚の把栗が許に樽入れせんと、翁・碧梧桐と三人、酒と蕎麦とを携へて朝夙く四谷荒木町に、其が新庵の扉を叩く。庵主石を移すの手を洗ひて、三人を楼上に誘ひ、細君茶菓を携して懇るなり。雲の峰湧きては崩るゝ津の守の森、杉大門の杉、近くは門前の葉柳、把栗庵十勝の内に算へられて庵主喜びの眉を動かせば、蝉鳴く庭木の茂みが中に渋柿の一ツ赤うみたる翁が例の三オンスの酔発して、忽ち戯謔の材料となる。

渋柿も恋の都に入る庵かな　　鳴雪

奈良の友より送り来りたりといふ「山越の弥陀」「土塔」等の古色蒼然たるを席上に安置して、三尺の芭蕉、鶏頭花の僅に赤き秋草の園を瞰下しつゝ「新蕎麦」「新酒」二題の句吟に主客暫く談笑の頤を休む。各十句漸く成りて碧梧桐朗読す。

八月二十五日　虚子庵例会　鳴雪・虚子・碧梧桐・牛半・麦人・活東他

九月十日　子規庵にて句会　子規・鳴雪・虚子・碧梧桐・墨水・秋竹・五城・白浜等十四名。

「ホトトギス」虚子消息に「鳴雪翁も亦た師父に候。多くの点に於て、殊に峻厳なる操守に於て。子規君は動なる点に於て、鳴雪翁は静なる点に於て。子規君は太陽の光の如く、鳴雪翁は月光の如く。日光は活動を与へ、月光は安慰を与へ候。日光は勤労の額の汗を乾かし候。月光は安眠の頬の笑みを照し候。天に月日あるを得る同人の幸福はああ、他の羨望するところに有之候。鳴雪翁は愈健全に被為在候」とある。

九月十五日　虚子・牛半・把栗らと玉川の九品仏へ吟行。

九月十九日　肋骨居にて句会　鳴雪・虚子・碧梧桐・牛半・把栗・五城・秋竹・瓢亭・繞石他

九月二十二日　蕪村句集講義　鳴雪と子規のは解釈についての激論が一時間に及ぶ。散会の後、家族にたしなめられた子規が謝罪の書簡を出す。

九月二十三日　子規庵にて蕪村句集講義（7）

九月二十五日　虚子庵例会　鳴雪・虚子・碧梧桐・五城・麦人・潮音・紫人他

九月二十七日　新聞「日本」掲載句。

魂棚の飯に露置く夕かな

十月十二日　新聞「日本」掲載句。

七草に秋いろいろの妬かな

十月十五日　新聞「日本」掲載句。

新米に娘も売らで取りつきぬ

十月二十日　子規庵にて蕪村句集講義（８）

十月二十一日　句会「やみじる会」　子規・鳴雪・虚子・碧梧桐・牛半・四方太・露月・鼠骨他

十月二十五日　虚子庵例会　鳴雪・虚子・四方太・道三・芋村・寒楼

十一月十二日　子規庵にて句会　子規・鳴雪・虚子・碧梧桐・牛半・四方太・三子

十一月十四日　新聞「日本」掲載句。

暁や溲瓶の中にきりぎりす

入口に下駄堆く秋の雨

十一月十七日　子規庵にて蕪村句集講義（９）

十二月　「ホトトギス」消息に「近日鳴雪翁と碧虚両君との間に文学上の議論あり。後には激昂の余り、多少の失言も有りしかと承候。文学上の議論の盛なる諸氏文学に熱心なる証拠にして君子の争ひ甚だ頼もしく候。鳴雪翁の雅量は、固より多少の失言も大目に見られ候事と存候。時々翁と他の人々との間に議論の起り候は、第一に翁と他の人々との趣味の異なるため、第二は翁の諧謔なる時として後輩を揶揄せらるゝため、第三は翁の議論好きなる一度や二度の頭突位にはビクともせず、却て小俣など掛けらるゝため、互いに負けじと遂には大相撲に相成申候」と記す。

十二月一日　新聞「日本」掲載句。

美しき蒲団干したり十二欄

十二月三日　新聞「日本」掲載句。

出勤にしばし間のあるこたつかな

十二月十日　子規庵にて句会。表題「十二月十日会」鳴雪、子規・虚子・碧梧桐・墨水等十七名。

十二月二十日　子規庵にて蕪村句集講義（１０）蕪村句集講義

十二月二十四日　子規庵にて句会。表題「蕪村忌」鳴雪、子規、碧梧桐、牛伴、月兎等四十四名。

十二月二十七日　新聞「日本」掲載句。

伐りこなす桜の枝や返花

十二月二十九日　新聞「日本」掲載句。

水仙に古画商ふ小店かな

明治三十三年（一九〇〇）五十四歳

一月一日　子規とともに不折の画室開きに参列し、気焔を吐く。新聞「日本」掲載句。

輪飾の低う掛りし切戸かな

輪飾や我は借家の第一号

一月二日　新聞「日本」掲載句。

喰積もなくて酒飲む蜜柑十

一月三日　新聞「日本」掲載句。

はしためも同じ心や水祝

一月十八日　新聞「日本」掲載句。

三千の大衆黠して冬の嶺

一月二十日　子規庵にて蕪村句集講義（１１）

一月二十一日　新聞「日本」掲載句。

寒月に黒船遠きはしけかな

一月二十五日　虚子庵例会　鳴雪・虚子・碧梧桐・五城・香墨他

一月二十六日　新聞「日本」掲載句。

炭焼の顔洗ひ居る流かな

挟み捨てゝくすぶる炭もなくなりぬ

叱られし下女の念や炭を割る

一月三十一日　新聞「日本」掲載句。

尽く窓に吹きこむ落葉かな

銀杏と楓とまじる落葉かな

二月十三日　新聞「日本」掲載句。

大学を孫に教ふる榾火かな

二月十四日　新聞「日本」掲載句。

火を入れて櫓つめたき火燵かな

片隅に蓋掩ひたる火燵かな

床下の風の通ひや古火燵

ずびこんで尻暖むる火燵かな

掃除中火燵荒涼のけしきあり

山妻の寝巻取り出す火燵かな

二月二十二日　子規庵にて蕪村句集講義（１２）

二月二十四日　新聞「日本」掲載句。

夜を急ぐ吹雪の道や二人挽

三月十日、「俳星」創刊　石井露月が島田五空・佐々木北崖とともに。鳴雪は発刊の祝句「よき星や

柳の旦梅の暮」と「春五句」。

三月十六日　新聞「日本」掲載句。

玉とってまだ恋知らぬ子猫かな

三月十九日　新聞「日本」掲載句。

かゞまりしばが夜寒

三月二十日　子規庵にて蕪村句集講義（１３）新聞「日本」掲載句。

下萌や芥取捨てし庭の凹

三月二十五日　虚子庵例会　鳴雪・虚子・碧梧桐・牛半・紅緑・世南他

三月二十七日　新聞「日本」掲載句。

弱手は残雪白き櫓かな

三月二十八日　新聞「日本」掲載句。

桶に浮く丸き氷や水ぬるむ

四月二十日　子規庵にて蕪村句集講義（１４）

四月二十五日　虚子庵例会　鳴雪・虚子・青々・三允・抱琴・紫人他

五月四日　子規庵にて句会。鳴雪、子規・虚子・四方太・牛半・墨水・青々・左千夫等十三名。

五月十日　新聞「日本」掲載句。

若竹の竹の園生の茂るべく

桃の花によそへ申すもかしこかり

五月十三日　子規庵にて句会。鳴雪、子規、露月、抱琴、佐千夫、青々、東洋城、右衛門等十八名。

五月二十日　子規庵にて蕪村句集講義（１５）

五月二十五日　虚子庵例会　鳴雪・虚子・碧梧桐・東洋城・癖三酔他

六月十日、子規庵にて句会。鳴雪、子規、牛半、東洋城、挿雲、格堂、紫人、鳴球等二十名。

六月二十日　子規庵にて蕪村句集講義（１６）六月二十五日　虚子庵例会　鳴雪・虚子・碧梧桐・牛半・五城・格堂他

「ホトトギス」碧梧桐は消息に、「鳴雪翁は相変らず御達者で、又たそろそろ毎朝二十句の課題でもやり始めませうか、などゝ大言せられて、老武者の意気益壮なるものがある。（略）翁は元来性細

な事まで綿密に綿密を重ねて、ちやんと順序立てゝ置かれる性分であるから、そこら他目には取り散らしてある様でも、翁の目からは、少しも散佚して居ないので、紙一枚でも、何は何処に置いてあるというふ事が、判然として居る。決してアノ俳稿はどこへ交つたのか、誰から来た草稿が見へないなどゝ、上から下までひつくりかへす様な騒動は決して無いのである」と記す。

六月二十三日　新聞「日本」掲載句。

月がさす厠の窓や時鳥

六月二十四日　新聞「日本」掲載句。

茶汲女の半襟掛けし袷かな

六月二十五日　新聞「日本」掲載句。

麦秋の仁輪加芝居や若い者

六月二十六日　新聞「日本」掲載句。

車下りてやがて著にけり夏羽織

宗匠の物知顔や夏羽織

夏羽織白き単衣を愛すかな

六月二十八日　新聞「日本」掲載句。

窓掛の羅に吹く夜風かな

羅をひくや天女の天つ風

七月六日　新聞「日本」掲載句。

釘打つて蚊帳つるあるじまうけかな

七月十一日　新聞「日本」掲載句。

臨幸を請ひ奉る牡丹かな

七月十八日　新聞「日本」掲載句。

脱ぎかへて故郷へ返す衣かな

七月二十日　新聞「日本」掲載句。

夏草に屋根切り組みし明池かな

七月二十一日　静岡芙蓉会に臨席

七月二十五日　虚子庵例会　鳴雪・虚子・碧梧桐・　抱琴・紫人・碧童・癖三酔他

七月三十一日　子規庵にて蕪村句集講義（夏１）

八月　「文庫」十五巻三号から鳴雪が俳句欄の選者となる。

八月二十二日　子規庵にて蕪村句集講義（２）

八月二十五日　虚子庵例会　鳴雪・虚子・牛半・癖三酔・烏堂

八月二十六日　左千夫が子規の興津転地療養を提唱する。鳴雪と拓川は反対する。

九月三日　新聞「日本」掲載句。

其愚には及ぶべからず芋かしら

普門品二十六夜の月の僧

乗込の役者の舟や花火散る

井の秋や小石投げこむ村童

九月七日　「ホトトギス」に「昔の旅行」を掲載。同号の子規消息に、「鳴雪先生は我々先輩たる上に、先生初より文学者っを以て自ら任ぜらるゝ者に非ず候」とある。

九月十四日　新聞「日本」掲載句。

野分やんで午の貝吹く小村かな

野分して浪打ちあぐる小池かな

引きおろすフラフ吹かるゝ野分かな

柳舁いて野分の中を通りけり

学校に子供まだ居る野分かな

捨てゝある野分の道の破傘

野分やんで一本杉の夕日かな

二階から野分の藪をながめけり

九月十六日　新聞「日本」掲載句。

庫に入つて物取り出だす夜寒かな

崇ある家に宿りし夜寒かな

提灯で見るや夜寒の句品仏

行燈で翌の餅つく夜寒かな

九月十七日　新聞「日本」掲載句。

七日まで勝ちし角力の負けにけり

車坐にめし喰ふて居る角力取

台ごしで川越す角力見事なり

老角力喝采も無く立ち上る

飛入の角力を聞けば甲府衆

小角力の飯焚いて居る台所

小兵なるが勝ちつゞけたる角力かな

九月二十日　新聞「日本」掲載句。

山越や馬も夜寒の胴ぶるひ

戸の外に折檻の子の夜寒かな

夜寒や風呂屋戻りの立咄

此道に石泣くといふ夜寒かな

物読みて人の灯を借る夜寒かな

旅にして荷物届かぬ夜寒かな

九月二十三日　新聞「日本」掲載句。

長き夜の眼を煩ひし灯かな

長き夜を物喰ひ過ぎて寝苦しき

長き夜や看護婦長の部屋見舞

熱出でゝやがてさめたる長夜かな

異見すんで子の立ち去りし夜長かな

長き夜や僧となるべき物思ひ

長き夜や枕に遠き豆ラムプ

長き夜や新聞挟む門の音

一日の日記しるして夜長かな

九月三十日　新聞「日本」掲載句。

巻きかへて又打ち出だす砧かな

目さむれば猶打つて居る砧かな

左右持ちかへて打つ砧かな

十月四日　子規庵にて蕪村句集講義（3）　この日興津転地療養問題で子規と激しい口論となる。

十月五日　子規宛て鳴雪書簡、興津転居を反対する。十六日に中止と決定する。

十月二十三日　新聞「日本」掲載句。

朝寒や通夜から戻る二人連

朝寒の長寝をまくる蒲団かな

物破れし厨の音や朝寒き

朝寒の水こぼしたる板間かな

朝寒や三井の仁王に日のあたる

十月二十四日　新聞「日本」掲載句。

銃猟を禁ずる村や百舌の声

百舌の鳴く野中の榎枯れにけり

村祭百舌取る人の余所心

十月二十五日　新聞「日本」掲載句。

彗星は見えずなりけり星月夜

下町に縁日の灯や星月夜

星月夜欄干として夜は深し

十月二十九日　新聞「日本」掲載句。

国道の六間幅や稲の花

旅立てゝ成田詣や稲の花

十月三十日　新聞「日本」掲載句。

夜寒さのよく子を泣かす隣かな

夜寒さや人語り行く塀の外

停りて湯気吐く汽車の夜寒かな

寄席の行燈おろす夜寒かな

かけつけて火事の消えたる夜寒かな

売卜の店しまひ居る夜寒かな

十月三十一日　新聞「日本」掲載句。

引き捨てし山車の人形や朝の露

朝霧や離れ座敷へ橋掛り

掃き落す反故の紙や庭の露

十一月三日　新聞「日本」掲載句。

年々に天長節の日和かな

十一月四日　新聞「日本」掲載句。

戸あくれば上らずなりし花火かな

風ありて花火吹かるゝ海の上

往く内にすんでしまひし花火かな

吾庭に物落ち来る昼花火

警官の橋戒むる花火かな

浜殿とおぼしき空や昼花火
屋根越に僅に見ゆる花火かな
玉となつて遂に落ちけり釣花火

十一月五日　老梅居にて蕪村句集講義（4）

十一月十八日　新聞「日本」掲載句。
蓬々と秋の小草や城の屋根
秋祭米百俵の寄進札
家売つて妻伴ふや秋の旅
焼物の鶴の番ひや秋の庭

十一月二十五日　虚子庵例会

十一月二十七日　子規庵にて蕪村句集講義（5）

十二月四日　新聞「日本」掲載句。
書を積みし机二つや冬籠
本箱に背をよせかけて冬籠
おも屋から飯を運ぶや冬籠
耳うとき嫗が雑仕や冬籠
冬籠鉢の白梅咲きにけり
冬籠硯の水の尽き易く
筐底に物を捜すや冬籠

十二月十日　新聞「日本」掲載句。
辻店に物喰ふて居る頭巾かな
頭巾着て眉の隠れし男かな

十二月十五日　「ホトトギス」鳴雪の「隋問隋答」

十二月二十三日　蕪村忌

十二月二十四日　新聞「日本」掲載句。
蕪村忌やされば几董の人となり

明治三十四年（一九〇一）五十五歳

一月六日　新聞「日本」掲載句。
春駒や美人もすなる物貰ひ

一月七日　新聞「日本」掲載句。

山茶花と枳殻と垣の二重かな

山茶花や稲荷を祭る庫裏の陰

一月十日　老梅居にて蕪村句集講義（６）新聞「日本」掲載句。

麦蒔いたあとに尿する小犬かな

一月十九日　新聞「日本」掲載句。

紙衣かへて古きは人に得させけり

一月二十二日　新聞「日本」掲載句。

泥足の子供を叱る蒲団かな

足音に狸寝入の蒲団かな

二月九日　新聞「日本」掲載句。

棚に置いて帯しめなおす懐炉かな

二月十日　老梅居にて蕪村句集講義（７）

二月二十五日　虚子庵例会

三月一日　老梅居にて蕪村句集講義（８）

三月十日　「宝船」創刊。鳴雪・四明は句合の判者

三月二十三日　老梅居にて蕪村句集講義（９）

四月二十日　老梅居にて蕪村句集講義（１０）

四月三十日　新聞「日本」掲載句。

葉がくれに白う肥えたる蚕かな

庭の木に山繭飼ひし葉のこぼれ

蚕棚守る行燈暗し物の本

五月五日　新聞「日本」掲載句。

夕暮をおろさであるや鯉幟

矢車に朝風強き幟かな

六月一日　老梅居にて蕪村句集講義（１１）

六月十一日　新聞「日本」掲載句。

もらひ来る茶碗の中の金魚かな

六月二十一日　「墨汁一滴」に「ある人諸官省の門番の横着なるを説く。鳴雪翁曰く彼をして勝手に驕らしめよ、彼は此場合に於けるより外に人に向つて驕るべき場合を持たざるなり。此心を以て我

は帽を脱いで丁寧に辞誼すれば則ち可なり、と。蓋し有道者の言。」

六月二十二日　老梅居にて蕪村句集講義（１２・１３）

七月二十日　虚子庵にて蕪村句集講義（１４）

八月二十日　老梅居にて蕪村句集講義（１５）

八月二十四日　『俳句選』（内外出版協会）刊

八月二十五日　虚子庵例会

八月二十六日　子規庵にて第一回俳談会

九月二十日　老梅居にて蕪村句集講義（１６）

十月二日　新聞「日本」掲載句。

鳩吹に犬の随ふ小道かな

鳩吹の聞えずなりし小山かな

十月六日　新聞「日本」掲載句。

強く引いて終に切れたる鳴子かな

十月十日　新聞「日本」掲載句。

したゝかに雨だれ落つる芭蕉かな

中門の額見事なる芭蕉かな

十月十二日　子規庵にて把栗の送別会　把栗は日本新聞社を辞して長州へ行く。鳴雪・虚子・碧梧桐・左千夫・鼠骨他

十月十三日　新聞「日本」掲載句。

天の川故郷の空に傾きぬ

天の川峠の芒露を吹く

古城は北に聳えて天の川

十月十七日　新聞「日本」掲載句。

茅葺の与力邸や花木槿

校内の教師が宅や花木槿

木槿咲いて侍町の機の音

さらさ染る亀戸あたりや木槿垣

牛乳の壜掛けてあり木槿垣

いさかひは木槿の垣の裏表

つみ込みて木槿の垣の花一つ

十月二十日　老梅居にて蕪村句集講義（17）
十二月八日　新聞「日本」掲載句。
　人うめし印の笠や枯芒
十二月九日　老梅居にて蕪村句集講義（秋1）
十二月十一日　子規庵にて義太夫会
十二月十五日　新聞「日本」掲載句。
　当番に餅給ひたる亥の子かな
十二月二十一日　新聞「日本」掲載句。
　寒声は女なりけり戻橋
十二月二十二日　蕪村忌（道灌山胞衣神社にて）

明治三十五年（一九〇二）五十六歳

一月七日　新聞「日本」掲載句。
　我庵は上野に近き初烏
一月二十日　老梅居にて蕪村句集講義（2）
一月二十五日　新聞「日本」掲載句。
　名家の雨戸鎖して枯しのぶ
一月二十六日　虚子庵にて句会　鳴雪・虚子・碧梧桐・紅緑・鳴球・碧童他　のち俳談会
二月上旬、子規庵にて句会。鳴雪、子規、虚子、碧梧桐、紅緑、四方太。
二月二十一日　老梅居にて蕪村句集講義（3）
二月二十三日　虚子庵例会　のち俳談会（第六回）
三月二十日　老梅居にて蕪村句集講義（4）
四月二十九日　子規庵にて蕪村句集講義（5）
五月二十日　子規庵にて蕪村句集講義（6）
六月十七日　新聞「日本」掲載句。
　次の葉へ渡らんとする毛虫かな
　絵馬堂の額縁を這ふ毛虫かな
六月二十日　子規庵にて蕪村句集講義（7）
六月二十二日　虚子庵にて句会　鳴雪・虚子・紅緑・東洋城　のち俳談会
六月三十日　「ホトトギス」に「獺祭書屋俳句帖抄に付きて」を掲載。「俳句に於ては、僕は子規子

の徒弟である。子規子は僕の師である。先達である。兎も角も僕が今日俳人、否俳人らしく一部の人に云はるゝやうになつたのは、全く子規子の賜である。（略）故に内藤素行を造つたのは子規子である」と記す。

同号の碧梧桐の消息に「鳴雪翁は其御多用の身を以て、益俳事に心を寄せられ、重に後進誘導に勤め居られ候。「文庫」「萬朝報」「太陽」「白虹」など翁のお引受けに掛り、毎月なかなかの御多忙と聞及び候。其他各地方俳諧雑誌の選者、句合の判者を勤められ、又は個人の俳稿添削を請ふ者も多しとかにて、翁の精励はいつもながら壮者の後に瞠若たる所に有之候」とある。

七月十三日　碧梧桐庵にて例会

八月二日　子規へ病床の慰みにと柴又の帝釈天の掛図を送る。

八月五日　子規庵にて蕪村句集講義（８）

九月十日　子規庵にて蕪村句集講義（９）

九月十九日　子規没

十月三日　老梅居にて蕪村句集講義（１０）

十月二十日　老梅居にて蕪村句集講義（１１）

十月二十五日　「ホトトギス」に「ホトトギス六巻一号のはじめに」を掲載

十一月六日　子規庵にて子規七七日忌　子規庵にて句会

十一月十三日　虚子庵にて「闇汁会」　鳴雪・虚子・碧梧桐・四方太・五城・瓢亭・紅緑他

十一月二十日　老梅居にて蕪村句集講義（１２）

十二月二十日　老梅居にて蕪村句集講義（１３）

十二月二十七日　「ホトトギス子規追悼集」に「追懐雑記」を掲載。

十二月二十八日　子規庵にて蕪村忌　鳴雪・虚子・碧梧桐・楽南・笠雨他

明治三十六年（一九〇三）五十七歳

この年、主として「文庫」「日本人」「ホトトギス」の選者として活躍。長男健行が宮崎農学校赴任の折、松山へ帰郷し二番町の家屋と土地を売却。松山に三日間滞在。大阪内国博覧会を見学して青々や月斗と面会。京都で祇園・清水・知恩院・南禅寺瓢亭へ行く。

一月十一日　不忍弁天境内の岡田亭にて「新年会」　鳴雪・虚子・碧梧桐・碧童・三允他

一月二十日　老梅居にて蕪村句集講義（１４）

二月十日　老梅居にて蕪村句集講義（１５）

二月二十五日　虚子庵にて句会　鳴雪・虚子・碧梧桐・碧童・癖三酔・一転他

三月八日　碧梧桐庵例会

四月六日　老梅居にて蕪村句集講義（１６）蕪村句集講義終了

四月二十五日　虚子庵にて句会　鳴雪・虚子・碧梧桐・癖三酔・寒水・大夢他

五月三日　老梅居にて蕪村遺稿講義

五月　松山に帰郷

五月二十日　老梅居にて蕪村遺稿講義

五月二十五日　「卯杖」五号に「世人は秋声会派、半面派、日本派と分けて申し候へども、近来此三派の間に或る黙契が成り立たんとしつゝあるが如く思はれ候。其は先達て無黄氏宅に開かれたる牡丹の会に、日本派の鳴雪翁、半面派の知十氏が招待を受けられ、知十氏は差支にて欠席されし由なれども、鳴雪翁は其会場にて秋声会の諸氏と面談せられ、特に黄雨氏とは幼馴染にてありしを思出されし由、猶一つは「俳声」時代に於ては全く度外視され居りし日本派の景況が折々「卯杖」紙上に上るやうになりし事にて、是は秋声会が度量の広き所に有之べく候。且つ「半面」が「ホトトギス」の動静に注意し居ること」とある。

六月十四日　碧梧桐庵にて句会　鳴雪・碧梧桐・東洋城・一転・為王他

六月二十五日　老梅居にて蕪村遺稿講義

虚子、碧梧桐らあと共に一高俳句会に出席。愛櫻、浅茅らを指導。

七月十二日　碧梧桐庵例会

七月二十日　「夏五題」（回覧句会）　鳴雪・虚子・碧梧桐・四方太・霽月・古夢・初声

八月九日　碧梧桐庵にて句会

八月二十日　老梅居にて蕪村遺稿講義

八月　「秋五題」（回覧句会）鳴雪・虚子・碧梧桐・四方太・青々・霽月・為王・鼠骨他

九月十三日　碧梧桐庵にて句会

九月二十日　子規忌　鳴雪・虚子・碧梧桐・癖三酔・酔仏・照葉他

九月二十二日　「秋五題」

九月二十三日　老梅居にて蕪村遺稿講義

「ホトトギス」十月号に虚子が「現今の俳句」を掲載し、虚子と碧梧桐の確執が起こる。

十月二十六日　老梅居にて蕪村遺稿講義

十一月三日　碧梧桐は京華日報の小説を担当。

十二月十一日　老梅居にて蕪村遺稿講義

十二月二十七日　「蕪村忌」鳴雪・虚子・一転・六花・愛櫻

十二月三十一日　『俳句独習』（大学館）刊。俳句入門叢書第一篇　鼠骨序

明治三十七年（一九〇四）五十八歳

一月三日　『俳句独習』俳句入門叢書第一編（大学館）刊。

一月九日　「新年会」鳴雪・虚子・泊雲・梅影

一月二十五日　老梅居にて蕪村遺稿講義

二月十日　老梅居にて蕪村遺稿講義

二月十四日　碧梧桐庵例会

二月二十五日　本所区林町弥勒寺内徳上院にて例会（虚子庵から変更）

三月二十日　老梅居にて蕪村遺稿講義

四月二十日　老梅居にて蕪村遺稿講義

四月　京華日報に勤務していた碧梧桐は日本新聞社の日勤となる。

五月十四日　『芭蕉俳句評釈』春夏　俳句入門叢書第四編（大学館）刊。

五月二十日　老梅居にて蕪村遺稿講義

五月二十二日　『新俳句選』（内外出版協会）刊。

五月二十五日　徳上院例会　鳴雪・虚子・三允・碧童・つつじ

六月二十三日　老梅居にて蕪村遺稿講義

六月二十五日　徳上院例会　鳴雪・虚子・一転・三允・王城・湖友

六月二十八日　『芭蕉俳句評釈』秋冬　俳句入門叢書第五編（大学館）刊。

七月二十五日　老梅居にて蕪村遺稿講義

八月九日　老梅居にて蕪村遺稿講義

八月二十七日　徳上院例会を海水浴場例会に

九月十八日　子規庵にて「子規三回忌」会費五銭　散会後、大龍寺墓参。子規遺稿『竹の里歌』刊

九月二十日　老梅居にて蕪村遺稿講義

十月十日　「ホトトギス」に「虚子君の連句論に付いて」を掲載。虚子の『俳句独習』非難に答える。

十月二十二日　芝区札之辻汐湯楼にて例会

十一月四日　老梅居にて蕪村遺稿講義

十一月二十日　老梅居にて蕪村遺稿講義

十二月十二日　老梅居にて蕪村遺稿講義
十二月二十五日　子規庵にて「蕪村忌」

明治三十八年（一九〇五）五十九歳

一月一日　「ホトトギス」に「田舎源氏に付て」を掲載
一月七日　不忍弁天境内岡田亭にて「新年会」鳴雪・虚子・碧梧桐・三允・躑躅
一月二十一日　芝区札之辻汐湯楼にて例会　鳴雪・碧童・不喚楼
一月二十八日　芝区札之辻汐湯楼にて例会　鳴雪・一転・不喚楼他
二月十六日　上野三宜亭にて句会　鳴雪・虚子・碧童・白水・乙字
二月二十日　老梅居にて蕪村遺稿講義
二月二十三日　老梅居にて蕪村遺稿講義
二月二十六日　句会　鳴雪・碧梧桐・不喚楼・乙字・不句他
三月二十六日　上野三宜亭にて句会　鳴雪・虚子・躑躅・桐芽・酔紅
四月二十三日　浅草北清島町白泉寺にて句会　鳴雪・虚子・酔仏・一声・予人
四月二十六日　碧梧桐庵にて蕪村遺稿講義
五月二十八日　浅草北清島町白泉寺にて句会　鳴雪・虚子・躑躅・癖三酔・水巴他
六月十四日　鎌倉翠濤庵にて連句　鳴雪・虚子・王城・翠濤他
六月二十五日　浅草北清島町白泉寺にて句会　鳴雪・碧梧桐・一声・水巴・九品太他
七月一日　「ホトトギス」臨時増刊号　「老梅居雑話」の連載始まる。
七月四日　老梅居にて蕪村遺稿講義
七月二十二日　老梅居にて蕪村遺稿講義
七月二十三日　浅草北清島町白泉寺にて句会　鳴雪・虚子・碧梧桐・碧三酔他
七月二十四日　霽月宛て鳴雪書簡
九月一日　老梅居にて蕪村遺稿講義
九月二十九日　老梅居にて蕪村遺稿講義
十一月二十七日　老梅居にて蕪村遺稿講義
十二月二十日　『大家模範俳句集』春夏　寒川鼠骨共著　俳句入門叢書十編（大学館）刊。
十二月二十四日　「蕪村忌」
『大家模範俳句集』秋冬　寒川鼠骨共著　俳句入門叢書十編（大学館）刊。
『七部集俳句評釈』俳句入門叢書（大学館）刊。

明治三十九年（一九〇六）六十歳

常盤会寄宿舎改築のため、八か月四谷荒木町に妻・三男和行と移転する。

二月七日　老梅居にて蕪村遺稿講義

二月十七日　紅葉館にて文芸協会の発会式に参列。

二月二十日　老梅居にて蕪村遺稿講義

二月二十六日　虚子庵に肋骨・洗耳・霽月の在京を機に集まり、句会。瓢亭最高点により、鳴雪が陳腐党の万歳三呼。

三月八日　『運座必携　俳句会必用全集』（大学館　初学俳句叢書）刊。

三月十日　夜　日本橋区坂本公園内一心亭にて千鳥吟社例会　鳴雪

四月十一日　老梅居にて蕪村遺稿講義

四月二十一日　浅草白泉寺にて例会

五月五日　夜、千鳥吟社発行所にて千鳥吟社例会　鳴雪評　互選結果の上位句の欠点を指摘

「俳諧草紙」創刊　編集兼発行　渡辺義（水巴）発行所　千鳥吟社　全８頁

五月二十七日　浅草白泉寺例会

五月三十一日　星ヶ岡茶寮にて　「麻畑百姓ありて欠びかな」

六月十九日　星ヶ岡茶寮にて碧梧桐送別会。

七月十五日　『蕪村七部集俳句評釈』春夏　初学俳句叢書（大学館）刊

八月六日　碧梧桐は三千里の旅に出発。

八月　『元禄二十家俳句講義』（俳書堂）刊。　二十五銭

八月　四谷荒木町八番地に転居、「ホトトギス」九月号消息にある。

九月十六日　子規庵にて「子規忌」

十二月七日　霽月宛て鳴雪書簡

十二月　『蕪村七部集俳句評釈』秋冬　初学俳句叢書（大学館）刊。

十二月二十五日　子規庵にて「蕪村忌」

明治四十年（一九〇七）六十一歳

常盤会寄宿舎の監督を退任し、弓町一丁目二十八日に転居。後任は秋山好古。

四月一日　『老梅居俳句問答』（俳書堂　俳諧叢書十九・二十篇）刊。「ホトトギス」三十三年十二月から四十年二月までの抜抄。

四月　次男・惟行は日露戦争時に陸軍の通訳官として従軍し、凱旋後支那銀行に就職したが肺病にて逝去。

五月十八日　『老梅居雑著』（俳書堂）刊。鳴雪と子規との関係談をはじめ文学評論、随筆、考証、劇評などを収録。

五月末　星ヶ岡茶寮にて松山同郷文芸会　鳴雪は井上天弦と議論

六月二十三日　牛込赤城元町の清風亭にて例会

十月か　井泉水、雉子郎らと川北奇北の案内で足利学校を見学。

十一月二十八日　『鳴雪俳話』（博文館）刊。二十八銭　近世俳人の句の評釈

十二月二十二日　子規庵にて「蕪村忌」

明治四十一年（一九〇八）六十二歳

三月十五日「猿蓑の客観の句」「文章世界」四十一年三月号

四月十五日「猿蓑の主観の句」「文章世界」四十一年四月号

六月十五日「続猿蓑の俗な句」「文章世界」四十一年六月号

八月十五日「続猿蓑の正風の句」「文章世界」四十一年八月号

九月二十日　子規庵にて「子規七年忌」

十一月三日　九段靖国神社能楽堂にて例会

十一月　本郷の清団にて松山同郷文芸会　松山の俳人・久松粛山の事蹟を発表

十二月六日　『鳴雪句集』の自序を執筆。

十二月二十日　子規庵にて「蕪村忌」

明治四十二年（一九〇九）六十三歳

一月一日　『鳴雪句集』（俳書堂）刊。三十銭　水巴による編纂　口絵は子規の写生帖（芍薬）明治二十五年から三十九年までの詠草から自選したもの。

『萬朝俳句選』（如山堂書店）刊。鳴雪選・其角堂機一選なる三十七年一月から三十九年五月まで萬朝報にて募集した俳句を鳴雪と機一が選抜したものを季題ごとに分類した三千三百句。

一月　「千代田」を角田竹冷が創刊する。

三月二十一日　『俳句作法』（博文館）刊。三十五銭

三月二十二日　神田小川町の南明倶楽部にて松山同郷文芸会

八月　三河岡崎の俳句会（雪腸）に臨席し、帰路浜松に立寄る。

九月三日　老梅居にて第一回子規句集講義
九月十九日　老梅居にて子規句集講義
十月二十日　老梅居にて子規句集講義
十一月十八日　『鳴雪俳話と評釈』（博文館）刊。
十一月十九日　老梅居にて子規句集講義
十二月　「文庫」刷新のため、水巴らと編集一切を監修担当。「ホトトギス」十二月号広告に、月刊文学雑誌「文庫」（毎月十五日発行）は「文壇未曾有の現象！内藤鳴雪翁奮て本誌の編輯に当らる！」とある。
十二月二十日　老梅居にて子規句集講義
十二月二十六日　子規庵にて「蕪村忌」

明治四十三年（一九一〇）六十四歳

一月二十五日　老梅居にて子規句集講義
二月二十五日　老梅居にて子規句集講義
三月二十一日　次男惟行は咽頭結核により逝去。享年三十歳。
五月二十七日　老梅居にて子規句集講義
七月十一日　老梅居にて子規句集講義
七月十八日　霽月宛て鳴雪書簡
八月十五日　「文庫」は第四十巻第十二号で終刊となり、「青年之友」と改題して再出発する。
十月三十日　常盤会寄宿舎監督の辞任挨拶状
十一月十日　『春夏　太祇俳句評釈』（大学館　初学俳句叢書十九）刊。
十二月二十五日　子規庵にて「蕪村忌」

明治四十四年（一九一一）六十五歳

明治四十五年（一九一二）七月三十日、大正に改元。

大正元年（一九一二）六十六歳

十一月十日　俳諧研究会　俳諧七部集講義　小石川区竹早町にて　鳴雪・虚子・四方太・臨風他

大正二年（一九一三）六十七歳

五月十八日　久しぶりにホトトギス発行所にて例会　「ホトトギス」六月号
六月二十日　「吾々の俳句会の変遷」を掲載
十二月　武田鶯塘とともに「南柯」を創刊。

大正三年（一九一四）六十八歳

十月十日　「ホトトギス」子規十三回忌の一環として「俳句六問六答」と、虚子と「子規の句六回講義」を開始。
『中外俳句抄』（求光閣書店）刊。

大正四年（一九一五）六十九歳

二月十五日　第一回俳談会
三月二十六日　子規句輪講
四月十日　『鳴雪俳句鈔』（実業之日本社）刊。明治二十五年から大正三年までの二十四年間を収録。
ホトトギス発行所にて子規の句輪講　鳴雪・虚子・石鼎・零余子・月舟・野鳥・青峰
五月一日　「ホトトギス」に「鎌倉の能を見て」を掲載
五月十四日　ホトトギス発行所にて子規句輪講
六月十六日　ホトトギス発行所にて子規句輪講
七月十日　ホトトギス発行所にて子規句輪講
八月一日　ホトトギス発行所にて子規句輪講
九月一日　「ホトトギス」に「柿二つに就いて」を掲載
九月十日　ホトトギス発行所にて子規句輪講
十月二日　ホトトギス発行所にて子規句輪講
十一月六日　ホトトギス発行所にて子規句輪講
十二月二十六日　ホトトギス発行所にて子規句輪講

大正五年（一九一六）七十歳

二月二十六日　ホトトギス発行所にて子規句輪講
四月五日　府中へ吟行
四月三十日　ホトトギス発行所にて子規句輪講
六月五日　ホトトギス発行所にて月並研究（1）　鳴雪・虚子・石鼎・零余子・月舟・青峰・楽堂

六月十日　『俳句のちかみち』（広文堂）刊。
七月五日　月並研究会（2）鳴雪・虚子・左衛門・迂巷・普羅・楽堂・月舟・石鼎・青峰
八月五日　月並研究会（3）鳴雪・虚子・楽堂・野鳥・石鼎・青峰
八月十日　『子規句集講義』鳴雪・虚子等輪講　（俳書堂）
九月五日　月並研究会（4）鳴雪・虚子・零余子・普羅・楽堂・温亭・石鼎・青峰
十月五日　月並研究会（5）鳴雪・三允・柑子・零余子・徂春・普羅・楽堂・石鼎・青峰（虚子欠席）
十一月六日　月並研究会（6）鳴雪・虚子・左衛門・零余子・徂春・月舟・普羅・石鼎
十一月三十日　月並研究会（7）虚子・左衛門・月舟・零余子・石鼎・青峰（鳴雪は風邪で欠席）
十二月二十二日　月並研究会（8）鳴雪・虚子・三允・月舟・石鼎・青峰
十月二十六日　『句評と俳話』内藤鳴雪・武田鶯塘共著（雲泉堂）刊。

大正六年（一九一七）七十一歳

一月十一日　新年会
一月二十九日　月並研究会（9）鳴雪・虚子・左衛門・三允・楽堂・月舟・零余子・石鼎・青峰
四月　本郷区弓町一丁目二十八から麻布区笄町十七五番地に転居
四月五日　月並研究会（10）　鳴雪・虚子・三允・石鼎・零余子・月舟・青峰・楽堂
四月十四日　古稀祝賀能
五月五日　月並研究会（11）鳴雪・虚子・左衛門・月舟・青峰・楽堂
六月五日　月並研究会（12）鳴雪・虚子・左衛門・三允・石鼎・乙字・青峰
六月十五日　三允編「新緑」一巻八号は内藤鳴雪翁祝賀号
八月六日　月並研究会（13最終回）鳴雪・虚子・左衛門・温亭・乙字・零余子・普羅・月舟・藻舟・瑞光・石鼎・青峰
八月八日　鳴雪撰『秀抜六千句』（南北社）刊。六十五銭　下村為山装丁
十一月二十三日　俳談会（1）に参加

大正七年（一九一八）七十二歳

一月九日　俳談会（2）
一月十三日　史談会
二月六日　俳談会（3）
三月二十八日　霽月宛て鳴雪書簡

八月六日　其角研究会（2）鳴雪は第二回より参加。鼠骨居にて若樹らとともに。
九月十六日　金婚式を迎える婦人と一等汽車に乗り京都へ。東本願寺を粟津水棹の案内で見学。大阪藤井旅館に宿泊。尾道泊。
九月十九日　俳談会
十月九日　其角研究会
十月二十三日～二十七日　東京三越呉服店新館五階にて、ホトトギス同人主催の俳画展。石井柏亭、橋口五葉、小川芋銭、小川千甕、川端龍子、中村不折ら画家に交じり、大谷句仏と鳴雪も参加。
十月二十七日　松山道後公園に「元日や一系の天子不二の山　鳴雪」の句碑除幕に婦人と列席。午後二時半より愛媛県立公会堂にて歓迎会。これが最後の帰郷となる。

大正八年（一九一九）七十三歳

十一月　青山墓園に生前墓「鳴雪内藤素行墓」を建立。墓の隣の句碑「元日や一系の天子不二の山　七十二翁」は、昭和二十九年九月に常盤会寄宿舎生が建立。

大正九年（一九二〇）七十四歳

四月　「俳諧文学」創刊。松浦為王・織田枯山楼とともに「俳諧文学」の主幹として編集に携わる。その後、「文明」と改題して織田枯山楼が主幹。「鳴雪自叙伝」（一）・「俳句に対する私の意見」（一）の連載開始をし、「俳諧文学」第二十号（大正十一年一月一日）二十回で完結する。
『俳句はいかに作りいかに味ふか』（アルス）刊。

大正十年（一九二一）七十五歳

二月五日　『俳句評釈』（大日本俳諧講習会）刊。
四月十四日　霽月宛て鳴雪書簡
十月十一日　「枯野」創刊。「枯野」紙上の「俳諧史の研究」座談会に参加。長谷川零余子・室積徂春・久坂花因・勝峰普風
十一月一日　「俳諧文学」第十八号に霽月が「自叙伝について」を掲載。
十二月一日　「俳諧文学」に仙波花叟が「自叙伝について」を掲載。この中で鳴雪が「蕪村句集」を写したのは明治二十七年七月四日である、とある。
十二月二十五日　久しく絶えていた蕪村忌句会　築地西本願寺にて　鳴雪・零余子・普風・秋櫻子・綾華・「枯野」二月号

大正十一年（一九二二）七十六歳

一月一日　「枯野」に「私と子規居士」を連載。「ホトトギス」に「私の知つてゐる芝居話」

二月十日、「俳諧文学」第二十一号・鳴雪雑話「連句について」

三月二十二日　「破魔弓」主催で能楽堂に於いて七十七歳の祝賀

四月一日　「破魔弓」創刊。題字は鳴雪。巻頭に鳴雪の「破魔弓と私の幼年時代」

六月二十五日　『鳴雪自叙伝』（岡村書店）刊。

十月十四日　零余子とともに東京を発ち関西へ。名古屋・伊賀上野・東大寺・神戸等で句会。

十月十五日　伊賀上野

十月十六日　奈良

十月十七日　奈良を発ち神戸へ

十月十八日　朝、特急にて帰途につく。

十一月十二日　高崎の紫苑会により少林寺達磨寺に鳴雪句碑「秋の空立ち出でゝ見れば何もなし」建立する。

大正十二年（一九二三）七十七歳

二月四日　茅ヶ崎へ

三月二十二日　能楽堂舞台にて喜寿祝賀俳句会

六月二十八日　佐藤紅緑と共著『新らしき俳句と其作法』（南天堂）刊。

七月　講演会

九月一日　関東大震災により次女の夫・陸軍少将小崎正満が圧死。次女は未亡人となったことで少々神経衰弱となり、選句や文章の依頼が減ったことと重なって気弱になる（中村楽天「鳴雪翁の三回忌を前に」「枯野」昭和三年一月号）。

大正十三年（一九二四）七十八歳

三月　「南柯」に六回にわたり「哲学的文学論」を連載。

六月五日　『新しき俳句と其作法』（金鈴社）刊。

九月二十三日　子規二十三回忌

十一月一日　『哲理的文芸論』自費出版。非売品　著者・発行は鳴雪　五島林太郎印刷

大正十四年（一九二五）七十九歳

二月十日　ホトトギス発行所にて「鳴雪翁の俳句閲歴及逸話」の座談会。

夏　東雲神社参道に句碑建立　「東雲のほがらほがらと初桜　　鳴雪」

八月一日　虚子宛て鳴雪書簡

九月九日　虚子宛て鳴雪書簡

十月三日　虚子宛て鳴雪書簡

十一月三十日　夜、横山うさぎが「南柯」新年号用の原稿「鳴雪俳句評釈」の筆記に訪れる。

十二月一日　帝劇鑑賞　最後の外出

十二月二十一日　脳溢血により右半身不随となり、やがて心臓衰弱により肺炎を併発。主治医は真鍋喜一郎。

大正十五年（一九二六）八十歳（十二月二十五日、昭和に改元）

六月十五日　松浦為王編『鳴雪俳句集』（春秋社）刊。

昭和元年（一九二六）

一月一日　「枯野」は鳴雪高齢記念号

二月二十日　午後七時四十分逝去。絶筆は都新聞に掲載された句「病して吟思枯れたり草も木もの」。辞世句は「ただ頼む湯婆一つの寒さかな」であり、自宅は麻布笄町。

二月二十一日　遺言により脳を解剖。長与博士により大学の解剖室にて執刀。脳漿二八二〇グラム

解剖後自宅にて納棺。従六位を贈られる。

二月二十二日　松山から弟が駆けつけ、葬儀方法が決まる。

二月二十四日　通夜。「天真院鳴雪素行居士」虚子・碧梧桐・肋骨・鼠骨・水巴・零余子・為王・瓦全・浅茅

二月二十五日　午後三時より青山斎場にて告別式、一千人以上の会葬者。墓碑は下村為山の書。

五月三十日　芝高輪東禅寺にて百ケ日追悼法要、二百人。

六月十五日　松浦為王編『鳴雪俳句集』（春秋社）刊。一円八十銭　一九〇〇句収録

昭和二年（一九二七）

二月十七日　一周忌　鳴雪翁追懐談話会

昭和十七年

七月二十五日　内藤鳴雪『俳話』（大東出版社）刊。

昭和十八年（一九四三）

九月五日　柴田宵曲「内藤鳴雪」『子規居士の周囲』（六甲書房）刊。

参考文献

内藤鳴雪　『鳴雪自叙伝』（復刻版）愛媛文学叢書　青葉図書　昭和五十一年十二月二十日

内藤鳴雪　『俳句のちかみち』広文堂　大正五年六月十日

渡辺水巴　「内藤鳴雪の追憶」『俳句講座　現代結社編』第八巻　改造社　昭和七年十二月二十日

『子規全集』　第一巻～第二十二巻　別巻一～別巻三　講談社　昭和五十年十二月十八日～昭和五十三年十月三十日

和田克司　『子規の一生』子規選集　第十四巻　増進会出版社

「ホトトギス」大正十四年四月号・五月号　鳴雪・瓢亭・肋骨・碧梧桐・鼠骨・虚子・宰州（二のみ）

「鳴雪翁の俳句閲歴及び逸話（一）・（二）」

「ホトトギス」大正十四年八月号　楽天・三允・浅茅・楽堂・虚子「鳴雪翁の俳句閲歴及び逸話（三）」

俳誌「ホトトギス」「俳諧草紙」「文庫」「南柯」「千代田」「枯野」

「句会稿」公益財団法人　虚子記念文学館所蔵